女子文壇

第壹巻第拾貳號

明治三十八年十二月一日發行（毎月一回）
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

◉歳暮年始の贈答品最好適◉

宮中御歌所寄人　中郁秋香先生新作
華族女學校講師　小野鵞堂先生淨書

新編手紙

（男子用）

木版半紙摺
無類の美本
男女各一册
定價四拾錢
郵稅四錢

女子消息 文のてほどき

本書は中郁秋香先生の新作にして書簡文獨習者の爲に通俗平易なる實用の文題百餘種を總振かな付にせられたるは他に其比を見ざる處特に小野鷲堂先生が大字に書かれたれば習字の手本として此上もなき良書なり

新編書簡文例

（男子用）

木版半紙摺
頗高尚優美
男女各一册
定價六拾錢
郵稅六錢

新編 女子書簡文例

本書の文例は現代の文豪中郁秋香先生の腦漿より迸出せしものなれば、一言一句津々たる趣味あり　繁に流れず簡に失せず、擬古に陥らす流俗に同せずして眞に今日書簡文の好模範たり、加ふるに書は鉄硯界の巨擘小野鷲堂先生の手腕に成りしものなれば父習字の亀鑑として上乘の書なり、特に上欄に類語數千句を揭げ書簡文を作習せんと欲する人をして自由自在に記を遂せしむるの便に供せられたるものなれば、新編書簡文法式と相待て斯道の完璧と稱すべきなり

中郁秋香先生著　增訂五版

文鑑 千草の錦

此書は中郁秋香先生が三十餘年潤涂書の餘暇、古學復興以來諸名家の文中金玉の響あるものを抄録せられしが積んで數十卷と成りしを、中に就て男女學生の模範となるべき美文、記事、紀行、論說、消息、物語體等無慮數百篇を選出せられ、之に加ふるに當代諸名流の文を以てせられ、特に上欄には要語數萬を献せ、作習の模範と應用とに供せられしは、他に其比を見ざる最良の文鑑なり、國文學研究者は是非一本を座右に供すべき也

菊判和裝
定價五拾五錢
郵稅拾錢

新編書簡文法式

書簡文の法式男女に別ちて大成せるものは、古來未だ嘗て有らず、蓋し書簡に法式のなからざるべからざるは、尚人に禮儀の缺くべからざるが如く、苟も人に禮儀なく、書簡に法式なからんか、其人如何に貴しと雖、又いかに富めりと雖、一日も交際場裡に立つこと能はざるべし、御歌所寄人中郁秋香先生深くこゝに感ぜられ、即ち男女に就きて各書簡文法式の撰著ありて之を世に公にせらる

（男子用）

總クロース
金文字入
定價九拾錢
郵稅六錢

新編 女子書簡文法式

◎女子は男子と自ら差別ありて特に散らし文は小野鷲堂先生の書に係るものを挿入せり

此法式は元來封建制度の代　於ける尊卑上下に就きて種々の段階を分つが如き煩を避け、今日の現狀に依り舊新を對照して以て時の宜に從ひ、適當の式を設けられしものなり、故に人間處世には一日も缺くべからざるは勿論、苟も筆を書簡に把る者は瞬時も座右を放つべからざる要書なり

西洋綴美本
定價六拾錢
郵稅六錢

發兌元　東京市京橋區中橋廣小路六　前川文榮閣

●注意＝此目次と熟讀順次内容御閲覽をこふ

第拾貳號 目次

女子文壇

（第一巻）



眞正無毒

クイーン白粉

皮膚艶美

クイーン水

本品は我同盟國より輸入せる最新最優の原料に貴重なる芳香を加へ精製したる他に比類なき化粧料なり

取次販賣は到る處の化粧品小間物店にあり品切れなれば直接に

本舗 東京日本橋新和泉町

三井花陽堂

◎當會社の資本金は壹百萬圓なり

◎保險業法實施後の設立にして組織最も完全なり

◎營業方法は精確嶄新にして取扱は簡易懇切なり

日宗火災保險株式會社

東京日本橋區通二丁目（電話本局二一二〇 一〇三〇）

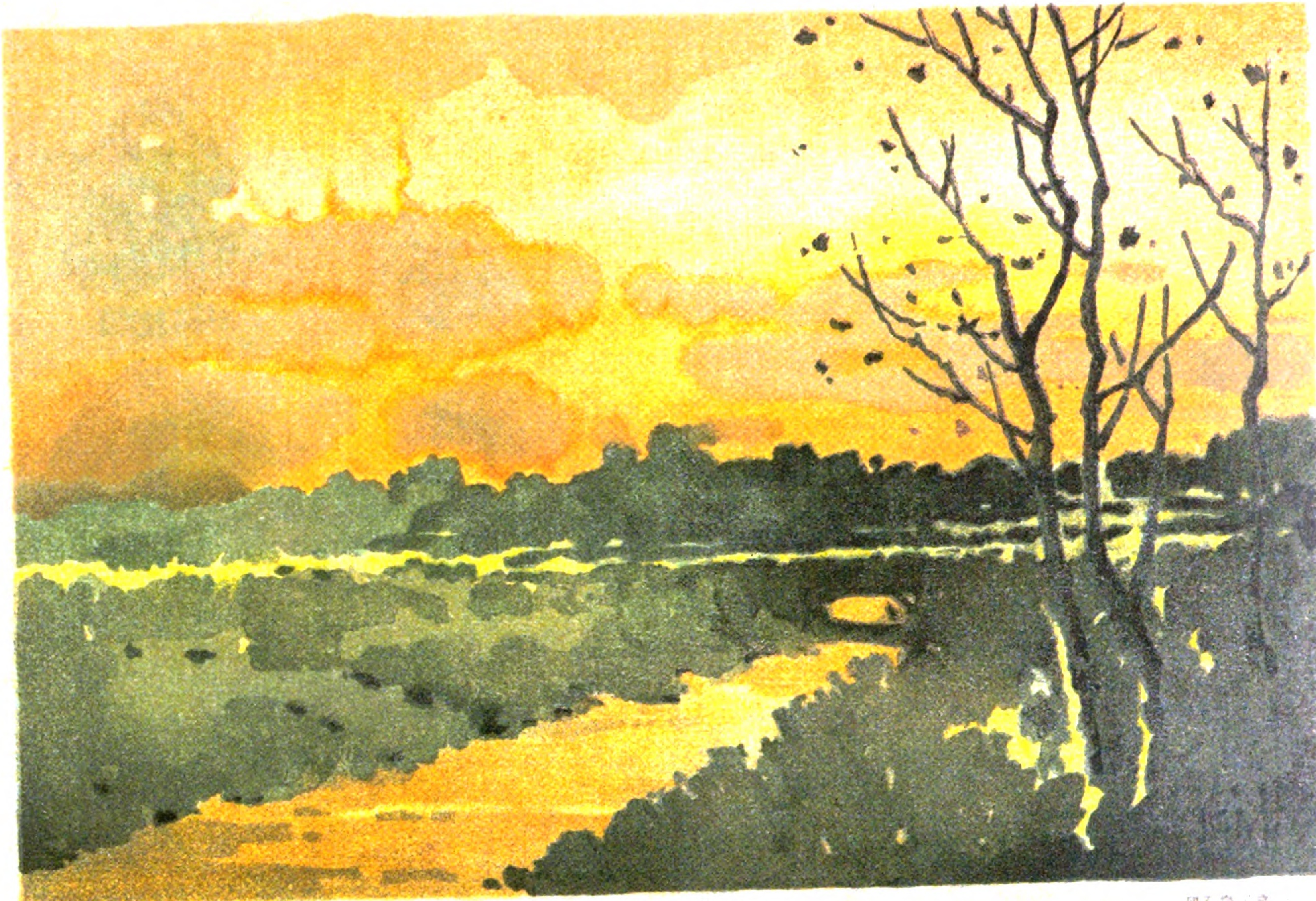
日宗生命保險株式會社

◎當會社は資本金は參拾萬圓なり

◎契約方法は嶄新簡便にして特別の便法あり

◎戰爭の危險を除く外職業又は旅行等に對し何等の條件なし

冬枯



三宅克巳先生筆

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ



（廣告の一）

東京市京橋區桶町二十一番地

菊池量平著（文明家庭の讀物）第三版　洋裝頗美製　全一冊正價金四十錢　郵税六錢

女子の弱點

女子の世に立つや男子と敢て輕重なきに世間多くは女子を男子の從物の如く輕んず女子果して何等の弱點ありや本書は之を研究し社會に於ける地位を高めんが爲め生れ出で天下の女子。良妻を娶らんとする男子。娘を持てる親。圓滿に養成せんとする教育家の讀物なり世の婦人を戒め將來處すべき方針を説く

帝國婦人學會編（婦女子の好家庭教師）洋美製　全一冊　金四十錢　郵税六錢

家事實用 婦女子の本分

本書は從來の家庭書物と異なり學理と實際とを調和し家憲家法職業交際奉仕家政整理育兒諸禮式作法裁縫料理生花結婚前の教訓嫁入先の種類心得婦人小兒病者患者の看護療法婦女子が本分として家庭上必要の事柄一切を詳説教示し一生中日常實際に應用する心得也

林草村著（家を治むるは國を治むるより難し）金二十錢　郵税四錢

家事教育 嫁讀本

嫁女が日常の心得を明細に一家の團欒を教ゆ父兄の婦女子を教育するや多くは嫁となるべき準備を爲す▲嫁と夫▲嫁と舅姑▲嫁と行儀▲仕立物の振合▲一家の經濟▲御世辭と愛嬌▲交際の注意▲日常の衞生▲禮儀と作法▲茶の湯の稽古▲挿花の研究▲料理の心得▲子弟の教育▲育兒法の手本

山崎彌榮著（新來の珍書也　天下の女子は又家庭の參考也）書頗美製本　金四十錢　郵税六錢

洋行土産 珍聞奇觀 ハイカラ婦人

近來流行せるハイカラ婦人界を調査し實に面白お笑く日本ハイカラ婦人と相對照して思ひ半ばに過ぎん

凡そ流行は恐るべきもの近頃は人の上物の上に必ずハイカラなる名稱を冠せざるはなし本書は久く歐米に漫遊中各方面ハイカラ婦人社會の眞相を實見し其表裏を悉く寫出せし無類の讀物也

發行所　東京京橋桶町廿一番地　廣文堂書店

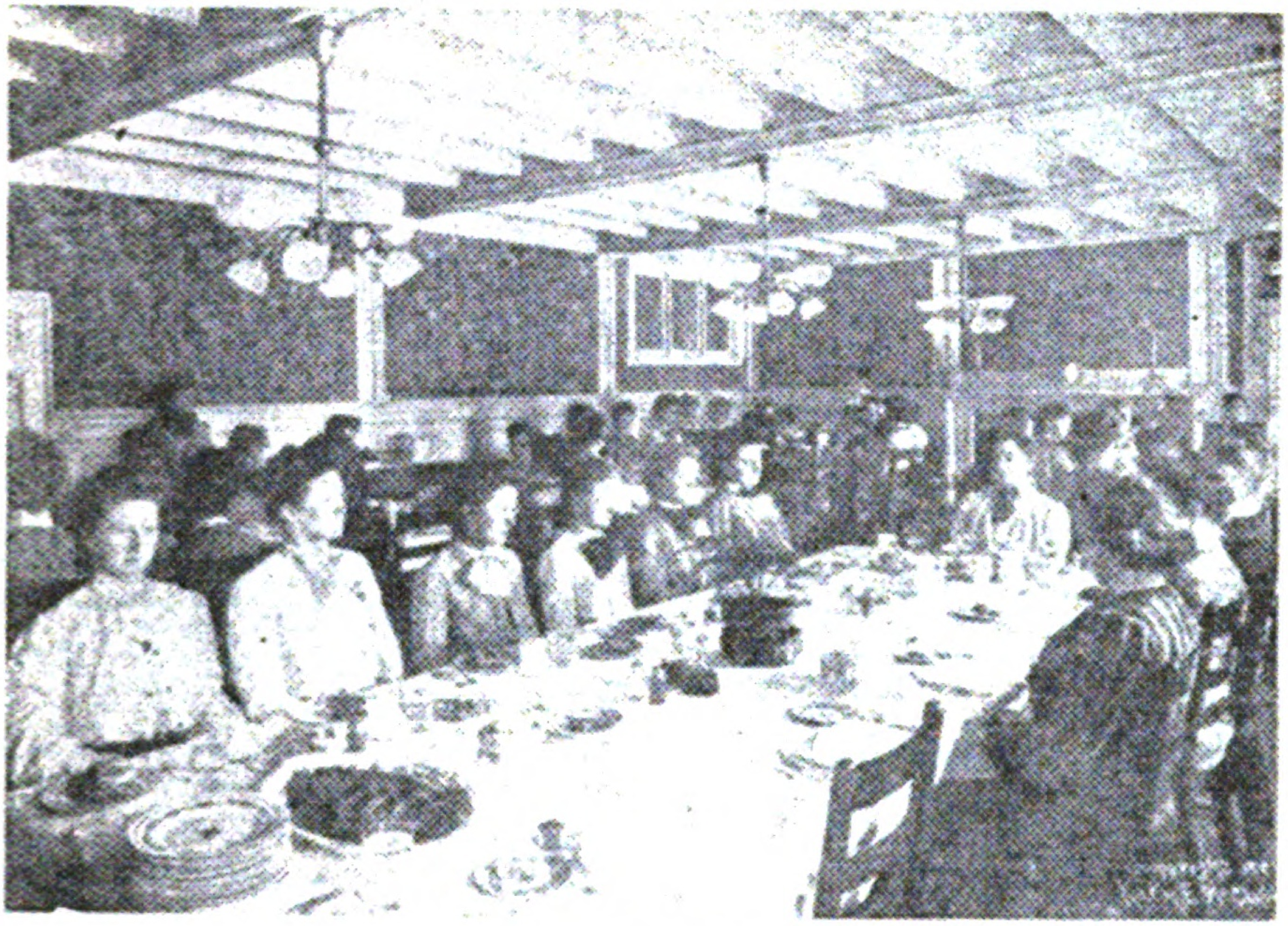
（中付の二）



平和の光

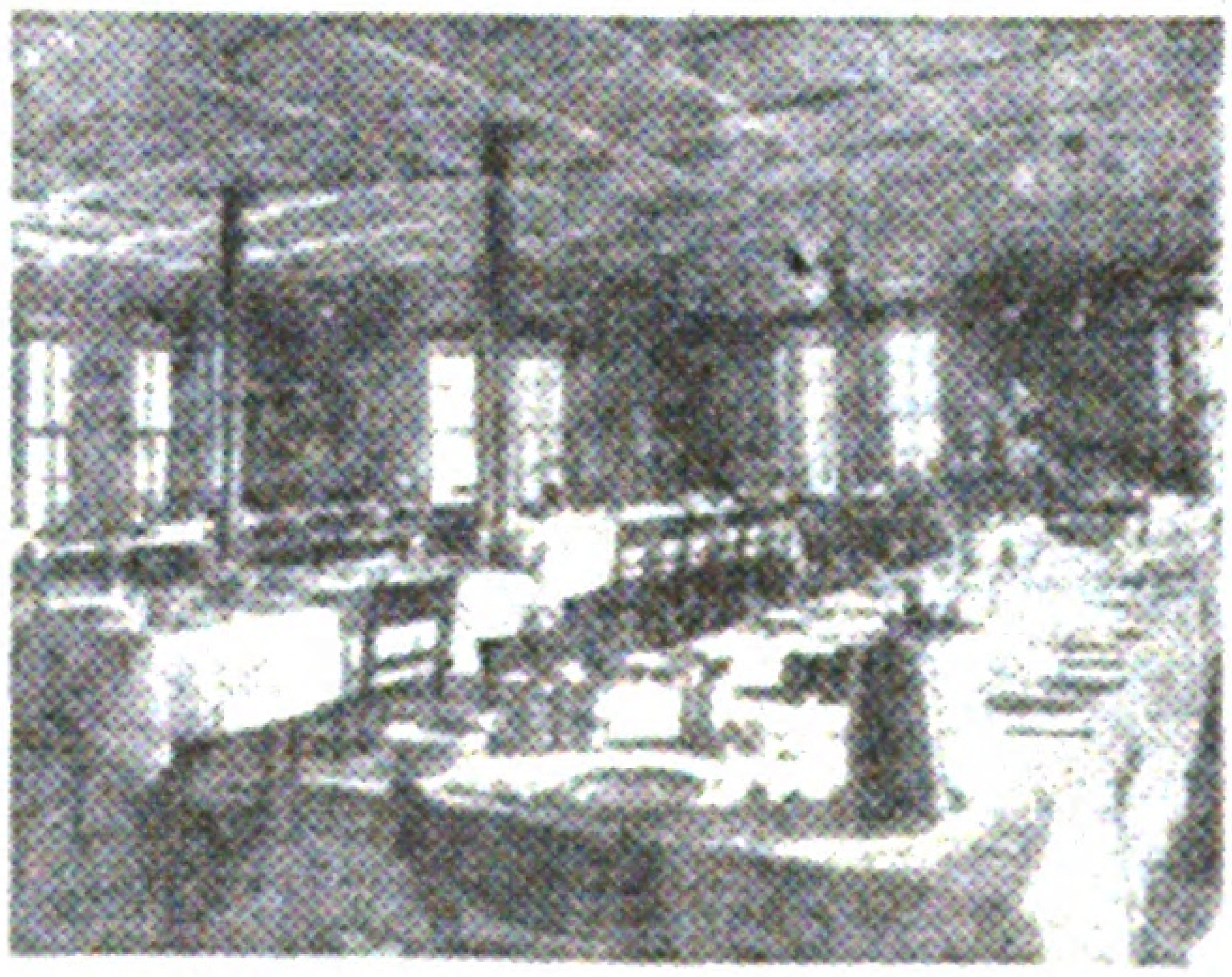
佛國女作術家ヸゼー、ル、ブラン氏筆

米國スミス學院生徒の午餐





米國富豪
ロツクフエラー氏の食堂



米國ノースウエスト大學校
女子部の食堂

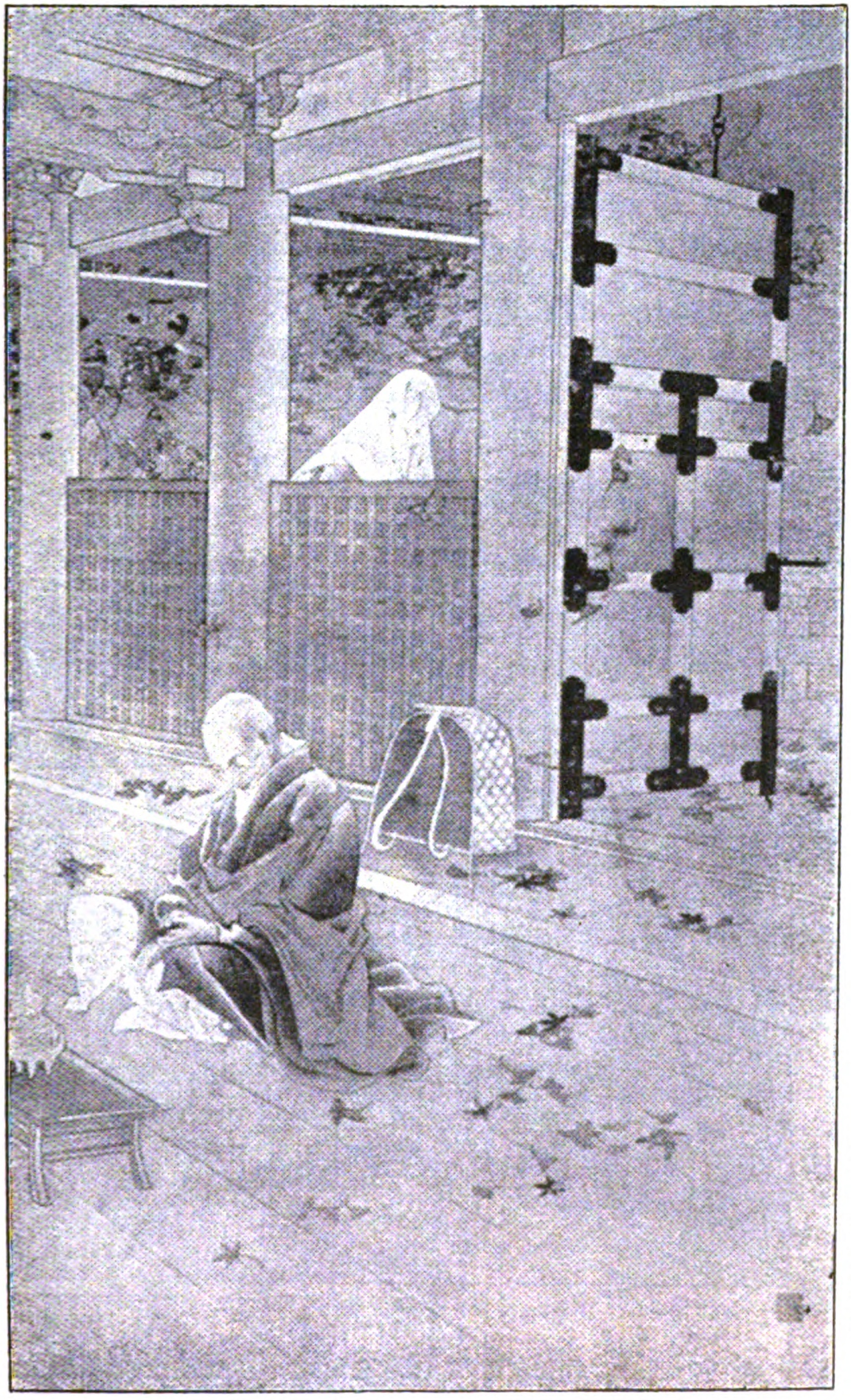




東都の女學生



西行淸水觀音參籠



山中古洞君筆

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

新奇發明
増酒資料

速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄偽銘酒速造法、焼酎倍増法、味醂速造法等以上の醸造家及び請賣藥業者の大有益案内：：右今回披露の爲拾萬部限り無代進呈す酒造家の營業者にして字の方は郵券四錢料添申込次第直に傳習手數摘要錄を送呈す速に見よ藥業上一日も缺くべからざる秘訣なり是ッ非早く利用せよ確實大有益くべき大金儲あることを確證す（注意）本館の隆盛を羨み近時當館廣告に似せて怪しき無効の偽法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝこと勿れ：：（當館は去廿壹年の創立也）

壹斗の清酒は即座に倍増し（即ち貳斗）となる大金儲的醸造化學作用の一大發明新法なり、（附錄）醤油酒直し法、醤油倍増法、味淋酒

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 日本授產館

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても純白色に變化し絶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ服前に峻烈なる特効を發顯し眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も

必ず忽ち快通流下する特効あり本劑壹劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上血塊にても必ず立の月經閉止及び月經不通月經を全臨ろに流産す且つ子宮病血の道を全不順より起る子宮病治し多年滯りの古血及惡血毒血一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓參拾錢特別製分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時種々怪しき無効の類似偽藥顯る深く注意ありて一專賣元日新館藥房一の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが（腋臭症）

根治確證 新發見藥

醫療實藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても誓て根治し決して再發或は他病に變するもの憂なき廿世紀的改良根治新藥なり迷に試み苦惱を免せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢若金即刻送藥す郵券代用必ず二割増の事（電話下谷五四六番）

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

（廣告の二）

女子文壇

第壹巻 第拾貳號
十二月一日發行

書面上の交際

姓名雅號は知つて居ても、未だ一度も會たことの無い者が、雜誌の上などで詩や文章を見て、手紙又は繪葉書の往復を初め交際を結ぶ事がある、之は最も青年の間に多く、就中文學を愛好する人に限るやうです。此書面上の交際と云ふ事を能く利用すれば、智見をひろめ、情味を養ひ、互に爲になるやうな事も多いが、復餘りに濫用すると、人の爲に利用されたり、だまかされたり、無益な時間と金錢を費やしたり、名を汚されたり、さま〳〵の弊害を生じます。文運の盛んな、殊に郵便事業の發達した今日に、山河數百里を隔てゝ、互に胸の溫みを傳へるなどは、單に娯樂としても、高尚で、詩的ですから、强ち書面上の交際を否定するのは、非文明てせうけれど、能く其交はるべき人を撰まねばなりません。交際を結んだ以上は終生渝るまじく、永遠に、懇篤に、美くしく、暖かく交はりたいものです。殊更女性の交際は男子と異ふ點が多いのです、男子のやうに外交的でありませんから、つゝまやかに、内氣に、而して無益な往復をしないやうに、一時に熱つぽくなりて、一時に冷かになるやうな輕薄な態度でなく、眞個に友情の神聖を保ちて、書面上の交際が盛んになれば甚だ結構です。

名家文壇

人生と普通學の効果

文學士　三輪田元道

天下の乙女子が、其最も、敬愛する父母の膝下を離れて、學窓の内に寒暑の苦を忍びつゝ、研學する所以のものは、果して如何なる目的のためなるか。否、父母は巨萬の富を有するため、彼等が安逸の生活を營まんも、敢へて、妨げざるべきに、故ら、一度は、學生々活を送らしむるを、欲するは勿論、たとひ、家貧ならんも、衣食の料を割きて、彼等のため、筆紙を求めんことを欲するは、抑も、如何なる目的のためか。是れ人類の靈長にして、而かも、文明の國民が、未開の國民と相異なる點ならん。

蓋し、父母が子孫のため、他日獨立の生活を、與へしめんとの目的にて、職業的特別教育を施すは、一見、必要の有る處を知り得るも、女子の普通教育に於ては、殆と、容易に目的の有る處を知るに難きか如し。即ち、彼等は、史學者たらんとて、史を修むるにあらず。美術家たらんとて、畫を學ぶにあらず。茲に於て、評者曰く、女子は、必竟一家の主婦となりて、人生を完うすべきものなれば、彼等に必要なるは、四則算のみ、幾何と代數は何の用あらん。足多くは閨門を出てず、歐米の地誌を知りて、何の益やあらん云々。果して、評者の

閑院宮妃殿下



言眞ならば、多くの星霜と、資金及勞苦を費す、普通學の必要は、毫もなかるべし。

或人曰く、女子に高等普通教育の必要を認めずと雖も、今日は、世の流行に從ひ、全く婚嫁の條件となりしため、形式的に彼等を校門へ送るのみ云々。果して然らば、彼等が眞面目に研學せざるは、怪むに足らず。況んや斯る父母及び生徒の思想は、教育を以て物品に代用せんとする賤劣の極なるをや、宜なる哉、今日女學生を輕視せんとする、傾向の盛なるは。嗚呼。



東伏見宮妃殿下

凡そ、女子教育は空名虛飾のため、これを施すべきものにあらず。必ず、大に、期する所なかるべからず。即ち、女子が高等普通を修めざるべからざる理由は、二あり。曰く、直接の目的のため、曰く、間接の目的のため是なり。

思ふに、女子教育に於ける、普通學の直接目的は、家の主婦として、必要なる智德を養ふにあり。先づ、其主なるものは、家政裁縫料理の職能は更なり。育兒法の大要を心得ざれば、到底完全なる家庭を作るに足らざるべし。故に、直接には、實用の才藝を教授し、且つ、熟達せしめざるべからず、而るに、これに適應する智識は、普通學の應用に外ならざるべし。若し、化學衛生學等の智識なくして、看護の妙を得、飲食の改良を企て、衣服の調度を巧にせんとするは、恰かも木に由りて魚を求めんが如し。

若し兒童にして、海濱に立ち、何故、潮に滿干ありやと問へども、母にして答ふる能はず。亦、室内に掲げたるナポレヲンの像を指し、何故、この人を豪傑と呼ふにやと問ふも更らに辨ふる能はず。亦わが校友の

父君は、シャトルにありと聞く、其はいづれの地にありと、尋ねんも、知らずと言はゞ、果して、家庭教育を全うし得べき。否、一家の主婦にして、金利を數ふる能はず。或は、達意の文を綴る能はずとせば、中等以上の社會に立ちて、活動し得べき。思ひて玆に至らば、益、普通學の女子に欠くべからざること、男子に於けるよりも、特に、著しきを覺ゆべし。要するに、普通學なき女子は、共に、語るに足らず。偶、學なく、識なくして、喋々する婦人あらば、所謂牝鷄の晨するものとならん。

今、一歩進みて、普通學の間接目的を考へんか、其直接目的なる、實用上の價値よりも、一層、必要なるを知らん。されど、人の弱點は、目前の利益に重きを置きて間接の影響を感ぜざるにあり。故に女子教育に於ては陰微の裡に、大なる効果を有する、間接目的を慮からざるべからず。即ち、女子教育に於ける普通學の効果は、其修養を全うし、其趣味を多からしめ、及び其含蓄を深からしむるにあり。

第一修養、凡そ、雲に聳ゆる高樓も、石木土瓦の集合より成立するが如く、智情意の圓滿に發達する好人物も、種々の教材より得たる、修養の結果に外ならず。故に、完全なる人格を作らんには、是非とも、普通學の素養なかるべからず。例之ば、幾何學を修めて、三角形の二邊の和は一邊より大なりと言ふ如き、理法も、精神の鍛錬に供するこそ、反りて其目的なれ。亦、總て化學上の元素は、一定の量にあらざれば、化合せずと言ひ、或は、物質及び勢力は不滅なりと敎ふる物理學も、實用のみを目的とせずして、精神の鍛錬を益すること大なり。尙、歷史を學びて、世の興亡盛衰する因果の法則を知り、地理を學びて天然と人類との關係、幷に、社會の形勢を知るが如きも、强ち、旅行及び商業等に關係するのみを以て、目的とせず、大に人物を養成する手段となるものなり。されば、諸の教材は、倫理を中心として、これと相和し、これと相助けて、人格を修養すべきものなり。決して、末藝を收得して、安んずべきものにあらず。

第二趣味、人類の生活と、動物の生活と、相異る所以は、趣味の有無に存すると言はんも、可なり。抑も概ね、動物は飢ゆれば食ひ、渴すれば飲みて、單に肉躰の欲求を滿足せば足らんも、人類は宇內に存する眞善美を、生活に加味せんとするものなり。

今、二三の例を示せば、人類は、松風の響、溪川の音に、自然の韻致を知り、或は、明月に對し、花香に向ひて、造化の妙趣を感ずるのみならず、これを日常の生活に應用せんとするものなり。故に、室內の裝飾、庭園の景躰、若しくは、衣服に於ける色の配合等に至るまで、趣味を尊ばざるはなし。されば、女子の普通敎育に於ける、音樂及び圖畵等は、自ら實技を鍛錬するを以て、目的とするに止まらず、能く、耳の力、及び、眼の力を養成し、少くとも、眞善美を批判する能力を養成せざるべからず。果して然らば、普通學の効果は、殆ど無限の利益を有することを知るに足らん。若し、世に、一片の風情なくして、醉生夢死の生涯を送るものあらば、犬馬の生活と更に擇ぶ所あるを知らず。

第三常識、わが同盟なる英國民の、最も長所は其能く、常識の發達するにあり、蓋し人類の智識欲は、全く、際限なかるべし。故に、逐一、專門的の學術を深く研究せば、五十歲や、百歲の齡を以て、到底企つべきものにあらず。されば、一般の國民に取りては、常識の養成より必要なるものはあらざるべし。特に、女子は感情に馳せ易きを以て、一局部のみの智能、及び、藝術を養成せしめば、おのづから、僻見の人物となりて、幸福なる生活を送ること能はざるに至るべし。

徃々、世人の、批難するが如く、能く机に向ひて、古今の書を讀むを得んとも、立ちて家族を慰むることを知らず、能く、針もて、綴ることを知るも、賓客に應對するを知らず、即ち、一短一長の極端に流るゝ女子は、常識の欠乏せし證なり。是を以て、中等以上の社會にありて、生活を營むべき女子は、普通學を修めて、常識を養成せば、充分、目的を達すべきものと信ず。果して常識だにあらんか、如何なる職業の家庭を治め

んも、將た、また、如何なる境遇に立たんも、臨機應變の活動あること、疑なかるべし。

斯る理由を以て、人生、特に女子のため、普通學は必要にして、且つ、充分なることを知るに足らん。豈に、他を求むに及ばんや。嗚呼、普通學なる哉、普通學なる哉。

女子の文學研究法

近着の米國女學雜誌に、女子の文學研究法や、修養法につきて、種々の方法、注意を載せてありました、これは米國の女學生のみならず、日本今日の女學生方にも非常に有益な事項が澤山あるやうですから、左にこれを翻譯して掲載致します。(水生)

▲文學研究法

女子で文學が好きてある、文章を書かう、詩歌を詠じやう、文學を修めやうと云ふ考の人々が多いやうてありますが、中には往々、一定の規則的、秩序的、修養研鑽を積まずに、只漠然と無方針に、手當り次第、文學書を爛讀し、文章や歌を矢鱈に作れば、モウすぐ女流作家として一家を成す事がてきると思つて居る方がある様てす。しかし、何を申せ、文學も一個の學問であるから、さう〱容易く上達するものてはない。必ず一定の研究法、修養法を踏んて徐々と進むのが必要だと思はれる。

▲詩歌につきて

詩歌は云ふまでもなく感情の流露煥發したものてある。しかし只感情一遍で一氣呵成と云ふ風な詩歌は往々にして朦朧に陷り、散漫に傾く弊があります。一躰、文學的作物は江湖讀者の批判を得て初めて價値が定まるものてありますから、第一、明瞭平易、第二、流暢、これは人をして讀んて惡感倦怠を抱かしめぬ方法てあつて、これに加へて第三、美術的色彩を施したならば、讀者は初めて、こゝに一種云ふべからざる快感に醉ふて、その詩歌に詠つてある思想感情も初めて活きて動くのてあります。

▲詩歌集を讀むこと

いかに文才、詩才があつても文章詩歌はたゞそれだけては作れるものてない。必ずや先づ先進の文豪詩人の作品をよつて熟讀玩味しなければならぬ。必竟、新らしき流れは古き泉より來るものてあります。

▲論文につきて

元來女子の方は總じて性格が感情に傾き易いのてあるから、詩歌の方には極く適して居るやうてありますが、論文、實用文となると少し不適

嘗てあるらしい、かるが故に、婦人て隨分詩人、歌人は東西共に多いやうてありますが、散文の名家は誠に少い、しかし單純な古の社會ではそれで可いにしても、複雜極まる今日の社會てはさうは行かぬ、女子も教育上學術上の諸問題につきてはいろ〳〵自分の主張意見を社會に發表しなければならぬ、それには是非とも論文に熟練する必要があります。而して

▲如何にせば論文を書き得る乎　これには種々方法もありますが、第一には名家の論文をよく熟讀するとてあります。飽くまて熱心に、飽く迄注意深く、初めには一篇の概念（何を書いてあるか、何を表はしてあるか何が主眼てあるか）をよく知り、次に一段〳〵その文章を解剖してその文章の特色、性質（形式）をよく飲み込んて一節、一節、その全篇を明白に自分の腦裏におさめて、自分が文章をかく時の參考とするのが必要てあります。先づ和漢の名家の文集、飜譯ても可いから西洋の近代の散文大家エマルソンや、カーライル、マコーレーの文章等を學ぶのが必要てあります。エマルソンは平明、カーライルは奇拔、マコーレーは流麗、各その特色は學んて可い所が多い。

▲小說美文　ても矢張そうてす、年若き女性の幼稚な頭腦て、淺薄な感情て小說なり、美文なりを作れば、どうもコツ〳〵して小細工になつてしまう。世を動かし、人を動かす、大作名篇を作ろうと思へば、どうしても古今東西の大作を味識するのが、必要てあります、日本のものと云へば、源氏物語時代より近松、馬琴、下りては明治の大家、閨秀作家、支那て云へば、水滸傳、西遊記など、西洋の小說ては、上は希臘ローマの神話から近世の英佛獨等の著名の作家の作品、勿論、飜譯てなりとその書の梗概だけても知つて置く必要がある。

▲修辭學　詩歌文章を書く上にどうしても肝要な事は修辭學の智識てあります。勿論、一通りの文法は心得てをく必要がありますが、さらに一篇の結構、色彩の上には是非とも修辭學が必要てあります。修辭學ばかり一生研究した所で可い文章の出來る譯てはありませんが、修辭學の基礎があれば、どんな凡才でもその人の文には瑕がない、もしそれ文情兼ね具へた才媛て修辭學の心得があればその作や、絕品と云つて可いてせう。又修辭學は技術として方法としてゞなくて、文藝科學のうちの一個の學術としても研究する價値が充分ある、英語て書いたものではヒルの「修辭學」

が最も平易に書いてあるやうてすが、我國でも近頃は大分可い書が出來て居るやうに思はれます。

▲文學史の研究　文學研究者にとりては一作者又は一篇の研究の外に文學史の研究が必要である、こは云ふ迄もなきことながら、一民族の文學思潮の發展の跡、文華の消長、各時代文學者の性格及び作品の比較等てあつて、さらに東西の各文學史を研究して英佛獨の諸文學史、支那日本の文學史を比較討究せば最も興味がある。

▲人格の修養　凡そもろ〳〵の文藝的作品は一つはその人格の流露てあります。高潔なる人格の女性が文を作れば、その作は文情共に崇高、下劣な人が作つたのはその文、どこか野卑てある。てすからもし高潔流麗、八面玲瓏、宛として玉の如き、文を作ろうと思へば、すべからく、女性としての人格の修養につとめなければならぬ、それには道德的名著を繙くのが大切です。拔目の無い緊乎した人格を作るには、絕えず、和漢の賢婦傳、道德書は申すに及ばず、西洋ではエマルソンの道德的論文やスペンサーの論文、ミルの經濟的論文などは一通り修める必要があると思ふ。



スデツセル氏夫人

▲女流作家と其本領　かつて米國でビーチャー、ストウ夫人の小說「アンクル、トムス、カヤビン」と云ふ書物がやがて奴隸解放の南北戰爭をひき起したるに與つて力あるは有名な話してありますが、女性、作家として世に起つ、すべからく其本領がなければならぬ。紅筆的小細工て、蝶や花と詠ふてばかり日を送るのか閨秀作家と云ふものではない。見よ、饑えに迫まつて哭く弱者の聲、僞文明の笞の下に苦む不幸の少女、この世界の半面にはかくれたる、幾多の痛切な同情をそゝぐ可き、不幸、殘忍、無智等の存ずるてはありませんか。！

▲外國文學　世が段々進むにつれて、自國文學以外

に外國文學を研究する事が必要であります。中には語學に熟達しない方も澤山ありませうか、その方々は外國の名著を譯書のあるものは、良好なのを選んで、研究なさるが可い。而して先づ外國文學として第一に知るべきは云はでも知れたシエークスピーアである。

▲シエークスピーアの代表的著作六種　カーライルが其著『英雄論』に「シエクスピアは我英國第一の誇りである、吾々はかの印度の領土はこれを失ふも、シエークスピーアは失ふべからず」と讃えて居りますが、眞にシエークスピーアは世界文學の王であります。彼れは今から三百年程前英國エリサベス女王朝の劇詩家、その作る所の劇曲數十篇ありますが、その中で、代表的名作は六種、それは第一悲劇『ハムレツト』、これは運命人情境遇等の心理的描寫、次に『リーヤ王』悽壯殘忍、性格悲劇として最も躰を得、『ジスリヤス、シーザー』古羅馬の英雄シーザー及びその周圍の人物とゑがける悲劇最も壯大『御意のまゝに』『あらし』は喜劇として牧劇として面白し、『ヘンリー四世』は史劇として感興に富む。

東郷海軍大將夫人



▲英國の女性作家　近世の英文學史では先づエリオツト、『ロモラ』『ミドルマーチ』はその傑作して初めジエーン、オースチン、シヤーロツト、ブロンテ、ブラウニング夫人、クリスチナ、ロセツチ、その他にヘマンズ夫人の作は短篇の詩ばかりでありますが『勇童カサビアンカ』『一家の暮』『春の聲』等は女性の詩として最も巧妙を極むるもの、夫人は才情双絶の麗人、その人格も美はしい人であつたと云ふとです。

▲佛蘭西の短篇作家モウパッサンの作も頗る巧妙に書いてありますが、往々不潔な所もあるやうです。フロウベルの『マダム、ボヷリー』ドデエの『美術家の妻』などは佛國小説中の傑作です。

▲米國の詩人　て先づブア、ピングは流麗を以て勝

る、『スケッチ、ブック』はその短篇集て人の知る所、ブライアントの詩は信念ふかく、ロングフエローは平明流達、ポーの詩は鬼氣悽然、人を襲ふものあり、しかし英米の年若き女性は普通の詩よりも鬼才ポーの怪談を愛するものが多いとの事てあります。

▲獨逸の詩人　て先づ誰れも知つて居るのは、ゲーテ、シルレル、それからケル子ル、ハイ子、ハイ子の詩は御承知の如く戀愛詩が多く、情緒纏綿たる哀歌てあります。その外アイヘンドルフの抒情詩もすてがたき趣きがあります。

▲露國の小説　てはツルゲ子ツフの小説が一番巧妙を極むるものてありませう、哀情の懇切、根むが如く、戀ふるが如く、訴るが如きは、この作者獨特の筆致、その他プツシユキンとか、トルストイ、ゴキイの短篇も研究すべきものてあります。

▲伊太利の文華　諸神のこの世を治めし給ひし昔より文華榮へし國てありますから、詩人文家も多く出てダンテ、ペトラーク、下りて近世に到りてはダンヌンチオの劇詩は非常に名高いものです。ダンテの「神曲」は梗概だけても知つて置く必要があります。

▲希臘羅馬の神話　西洋現代の文藝は凡て希臘ローマの神話に源を發して居るのてありますから、古代神話、梗概は是非とも知らなければならぬ。曙の女神オウロラ、勇者ペルソイスの遠征、ハーキユレモの武勇、天馬ペガソスのこと、月の女神デイアナの戀、其他、トロイ戰爭、貴公子パリス、絶世の麗人ヘレンがことなど誠に面白い物語が多い。

▲細心玉緻の研究　文學の研究法は先づこれだけに致して置きまして、外國文學、神話等の事につきては又隨時御話しすると致しませう、たゞ記者は讀者諸子が右述べました研究法に基きて、細心精緻の研究を積みて、文藝の堂に入られん事を希望致します。

（をはり）

賴山陽十二媛絶句評釋（五）完結

福井學圃

尼將軍（四）

酸鼻はいたましきことをいふ　豚犬は愚かなる兒をいふ、轉じて己れの子をいふに用ゆ。さて賴家の殺さるゝや、政子自から手をこそ下さゞれ、北條氏の爲すが

まゝに任せ、其間一點も母たる愛情は之を認め難き故にかくいひしなり。
大意は政子が頼朝と夫婦となりしは深意ありたりしなれども、後日に至りて源家の血統を屠るとは、其意を得ざる事なりと、政子を責めしなり。政子が鏡を以て妹の夢を買ひたるは、其意殊に深く、頼朝の覇業を起すや、內助の功も多かりき、しかし偕老の契淺からざりし頼朝は、先だちて薨去し、鳳凰雙棲の樂は昔の夢に歸して、今は孤鸞の身となれり、戚夫人が人彘の事は千年の後まで已にいたましき限りなるに、政子が自から其子を殺して源家の長久を圖らず、徒らに北條氏一門の利益のみをなせしは、如何なる心にやとなり、豚犬の字は自然人彘の字と照應の妙あり。

梶原婦

纎手貪攀幾片霞。將軍亦解惜二韶華一。不レ知何事敎二夫壻一。折盡連枝棣萼花。

纎手貪攀　頼朝嘗て物見より往かふ人を眺め心を慰められしをりから、見にくからぬ女、供二三人つれて、櫻の咲亂れたるを女童にもたせて門前を過ぎしかば、頼朝筆を執りて『のこりなく手折りて見ゆる櫻かなまたてん春はなにをながめん』と詠じ、使を以て彼女に賜はりたれば、取敢へずおん返事とて『出づる息の入るをもまたぬ世の中にまた來む春の頼まればこそ』の歌を書してさし出したれば、頼朝はしたなくいひつるものかな、宿を見てまゐれと人をつけたるに、梶原源太が妻なりしかば、感嘆の餘り、ひきて物多く賜はりたりとぞ。

幾片霞は櫻を見立ていひしなり。韶華は春のけしきなり。夫壻は源太景季をいふ。棣萼花は棠棣にてニハウメなり、詩經の小雅に棠棣之華。鄂不二韡韡一。凡今之人。莫レ如二兄弟一。とありて、こは兄弟を燕せし詩なれば、兄弟の事を棠棣といひならはせり、梶原景時父子が範頼義經を讒殺せしを指していふ。

大意は梶原婦が櫻を折りしも風流、また頼朝が春を惜みしも風流なるに、何とて連枝の棠棣花を折盡したるぞと。さて景時景季父子皆歌を能せしかば、婦もまた斯道に達したりと見ゆ、美人の纎手にて幾片の霞に似たる櫻花を折取りたれば、將軍の頼朝も、またてん春は何をながめんと韶華を惜まれき、こは共に風流韻事なるが、知らず、此婦は何事を以て夫壻の景季に敎へて讒言を搆へ、源家の兄弟を

殺さしめしとぞ、三四の句固より疑問を設けたるなれども、山陽の論法あまり深刻には過ぎざるか。

附記　頃ろ片山國倀が著はし、續蒼海一滴集脱漏といふ書を讀みしに梶原の婦が朝頼と應酬の歌を擧げ其後に記して云ふ。

其後仔細ありて景季彼の妻女を離別せんとせしときに頼朝卿きこしめされ彼の歌よみし女こそ其の心たゞ人にあらず必ず去るべからずと命ありしかば其の事に及ばず誠に歌の徳也と古記に載せたり云々。

洵に優美の事といふべし。

勾當内侍

不管關西十六州。春寒繋被領溫柔。君王誤賜蛾眉斧。割弃河山不復收。

關西十六州　足利尊氏の戰敗れて西國に走るや、新田義貞に詔して山陽山陰十六國を管領し西伐せしむ。春寒は時正に延元元年三月なりしを以ていふ。繋被はをしどりのふすま、即ち夫婦同じく寢ぬるふすまの義なり。君王誤賜　義貞嘗て入直のとき、勾當内侍が箏を彈ずるを見て、心窃に之を慕ひき、天皇之を聞こしめして其心を憐まれ、義貞を召されて酒を賜ひ、因て内侍を賜ひて妻とせられたり、されば夫婦中はいと睦しかりしとぞ。蛾眉は前に出づ枚乘の七發に皓齒蛾眉命曰伐性之斧とあるに本づきて、蛾眉斧とは美人は人の性を伐る斧といふことなり。

大意は義貞が内侍の色に溺れて軍機を誤りしを譏り、且つ後醍醐天皇が此美人を賜はりしは誤りなるをいへり。義貞西伐の命を受けたれども、直に往きて關西十六國を管領することをばなさず、戀女房との新婚日尚ほ淺き故に、病と稱して春の寒さに重簾を下だして鴛鴦の被の中に溫き夢を貪りつゝあり、それは天皇が誤りて人の性を伐るべき蛾眉斧、即ち美人を賜ひたりしが爲めに、其斧を以て十六國の河や山を割きすてゝ復た收めず、因て尊氏が再擧大來を招きたり、されば内侍もまた其責を分たざるべからずとなり。

山陽が此詩、語句は妙なれども、意は則ち酷吏が文を舞はして獄を斷ずるが如し、山陽が常盤を咏ずるや、其の失節を擧げずして、單に其の艱苦を忍びて兒を養ひ得たるを賞せしに、獨り内侍に付ては義貞の軍機を誤らせしのみを責めて、その節操の淸きに言ひ及ぼさゞりしは何ぞや、義貞出發の後れしは必ずしも内侍の色に溺れしにはあらず、其の病の爲めに沮せられしは、

山陽も已に之を外史に明言せり、しかも其病癒るや直に出發せしなり、また此時官軍遂に利を失ひたるは、固より獨り義貞の罪にはあらざるなり。

楠母

強收ニ壺哭一涙縱橫。努力鵬雛九萬程。姑奪ニ傳家殉國劍一爲レ君護ニ此小長城一。

楠母は楠正行の母なり。努力はつとめるなり。鵬雛は正行をさしていふ、鵬は大鳥の名なり。九萬程は、莊子に鵬の南冥に徙れるや水に擊つこと三千里、扶搖を搏ちて上る者九萬里とあり、鵬の勢ひ大なるをいふ。家傳殉國劍正成櫻井驛にて正行と訣るゝや、懇ろに遺誡を加へ、嘗て後醍醐帝より賜はりたる寶刀を取出て、之を與へたり。正成湊川にて戰死の報河內國に達するや、正行悲みにたへず、獨り室に入り此刀を執りて將に自殺せんとしけるに、母徑ちに入りて刀を奪ひ泣きて曰く、汝何んぞ惑へるや、乃ちが父の汝を歸へせしは、豈汝に自殺を敎へしならんや、汝遺命を銜み歸り來りてわれに告げしに、汝先づ之を忘る、惡んぞ能く王事に任ぜんと、正行大に悟り、是より日に國賊を討じ父の讐を復するを以て念となしたり。小長城は正行を指す、正成が長城なれば其子正行は小長城なり、長城とはもと秦の始皇帝が匈奴を拒ぐ爲めに築きし城、即ち今尚ほ存する所の萬里の長城にて、之を材幹ある大將に喩へていふ、そは宋（南北朝）の檀道濟てふ大將が、讒言によりて將に誅せられんとせし時、汝が萬里の長城を壞るといひしに本づけり。君の字は天子を指す。

大意は楠母の賢にして能く正行に訓戒を加へしを頌したるなり。楠母は夫正成に訣れし間もなく、また其子が自殺せんとするさまを見て、心中何如ばかり悲しかりしならん、強ひて壺の哭聲を收めても、涙が縱橫に流るゝをとめ得じ、しかし此の鵬雛なる正行をつとめさして、他日九萬里を搏ちて上るほどの功を顯はさせん、姑らく正行が手にする所の、國の爲めに殉死すべき家傳の寶刀を奪ひとりて、自殺を思ひとゞまらしめ、天子が爲めに此の小さき長城を守護して、國賊を討ぜしめんとなり。僅々二十八字を以て、楠母が限りなき心中の事を述べ去り、詞氣いかにも堂々たり。

評釋し了りて後ち、ふと詩思の浮びしかば、聊に倣ふて之を賦しぬ、常盤を抑へ勾當內侍を揚げたるは、山陽とは正反對なり、妓王には新しき詩料を見出した

り、しかし山陽の才と學には固より及ぶべきにあらねば、見る人其の心してよ。

紫式部
一枝彤管動人深。枉寫叢中芍藥音。天上瑤華不容折。石山秋月照斯心。

清少納言
天顔有喜捲簾心。絶世才華筆底深。鏡花淒涼暮容色。誰知神駿骨千金。

妓王
秋風長草悟枯榮。餘惠寧知及庶氓。渺々水田供灌溉。一池長記妓王名。
妓王池は近江野洲郡にありこは妓王が平相國に乞ひて鑿ちたりしなりと

佛
榮華浮世夢茫茫。披得緇衣恩怨忘。秋草嵯峨禪室淨。不妨相伴禮空王。

常盤
孤鬢憔悴淚粧新。兒有英雄亦宿因。陌上春風入楊柳。幾回攀折付行人。

靜
爲君一戰破離愁。皓齒明眸意氣遒。伴此佳人與名馬。沐猴未路亦風流。

千手
琵琶深夜韻玲瓏。憐殺靈犀一點通。風雨牡丹花落日。弔春人老信山中。

靜
煮豆燃萁事可悲。舞衫淚濕鶴岡祠。相思不似兄恩薄。唱斷芳山風雪詞。

尼將軍
牝鷄晨唱紫荊枯。不管夫家覇業孤。地下相逢誇呂武。與儂心計孰精麤。

梶原婦
生死綠來一刹邊。最無聊賴是年華。奉光雖復期明歲。且折紅櫻滿朶花。

楠母
泣留兒死且規箴。何讓阿爺遺訓深。護得鳳雛能殉國。奪刀心是與刀心。

勾當内侍
君作忠臣妾貞婦。鏡邊何所照孤鸞。彈箏聲斷經音靜。霜露西山布衲寒。

豆相漫吟

印東昌綱

二夜われ悲しき夢を見つゞけてそゞろさびしき旅枕かな

引あげし地引の鰺の伴摩にしろ金竹筴網をもれて飛ぶ

紫陽花のうつろひ果し空花にあした寒けく秋の雨ふる

溫泉の里や葡萄賣り歩く少女子が束ねし髪の夏菊の花

あはれ世に弱き我妹を伴ひていで湯の廿日そはいつの夏

おちたぎつ瀧の流を分ち入れし六坪の池に魚むれ遊ぶ

（旭瀧にて）

あはれ此しるしばかりの石文やときめきたりし大まうち君（頼家公墳墓）

夜の色軒端の山にせまりきていよ／＼たかき茅蜩の聲

瀧にゆく杉の小阪の曲り道ま萩玉萩花しだれ咲く

海の雲海に落ちゆき山の雲山におちゆく八日秋の月

ねぶりかね右し左しむきかへてさ夜深くきく鈴虫の聲

夢艶に宰相いまだ聲もなき秋草花壇朝の蝶舞ふ

新版紹介

▲古今集詳解（中村秋香著）　京橋中橋廣小路　前川文榮閣

國學者として中村秋香氏の名は夙に世の知る處なるが本書は氏が精力を傾注して詳細に解釋を加へたるものなり註釋は凡て言文一致を用ゐ單に字義の解に止まらず大意に通曉して當時の風尙をも說明したるは初學者に取りても此上なき便宜なるべし（一卷三十六錢、二卷四十四錢）

▲繪はかき し女倶樂部（清親新案）　日本橋區元大坂町十二　新生堂

此繪葉書は上下各六枚一組にて彩色木版刷日本紙を用ゐたり何れも繪噺しの續きになりて女學生の失敗をポンチ畫にて面白くあらはせり淸新と云ふにはあられど老實なる書きぶり滑稽の趣味ゆたかにして思はず人を笑はしむるものあり（一組三十五錢）

▲教育ポンチ 歴史と今樣（清親筆）　同所發行

淸盛が花電車を招く圖外二枚ありて一組とす同じく木版精彩、をかしき繪はかきなり（一組十五錢）

▲新案家族あはせ　本鄕西片町　內外出版協會

誰にも出來る新遊戯方にて娛樂の間に知らず／＼家庭の平和をも覺らしむると云ふ新工夫、正月の遊びにはかるた以外、新らしき興味を添ゆるものと云ふべし（定價十五錢）

▲白鳩（第一號）　牛込榎町　東京韻文社

詩專門の雜誌にして長短詩の創作と評論を以て充たさる眞面目なる好雜誌なり（十五錢）

▲女學界（一、二號）　四谷簞笥町　金曜社

趣味の啓發と感情の修養を以て目的とし新たに靑年文士の一派によりて出されたる雜誌なり主として文學の評釋に勉む特色は淸新の點にあらん（拾二錢）

▲育兒之栞（羽仁もと子著）　內外出版協會

家庭之友主筆として知られし羽仁もと子氏の著にして小兒の育て方を最も分り易く且實際的に記したる書なり數十の項目ありて皆新しき見地を具へたるも亦本書の特色なるべし（十五錢）

▲東鄕評論（第一號）　府下日暮里　東鄕評論社

家庭

諸禮數則

湖月

貴人へ書狀參らする事

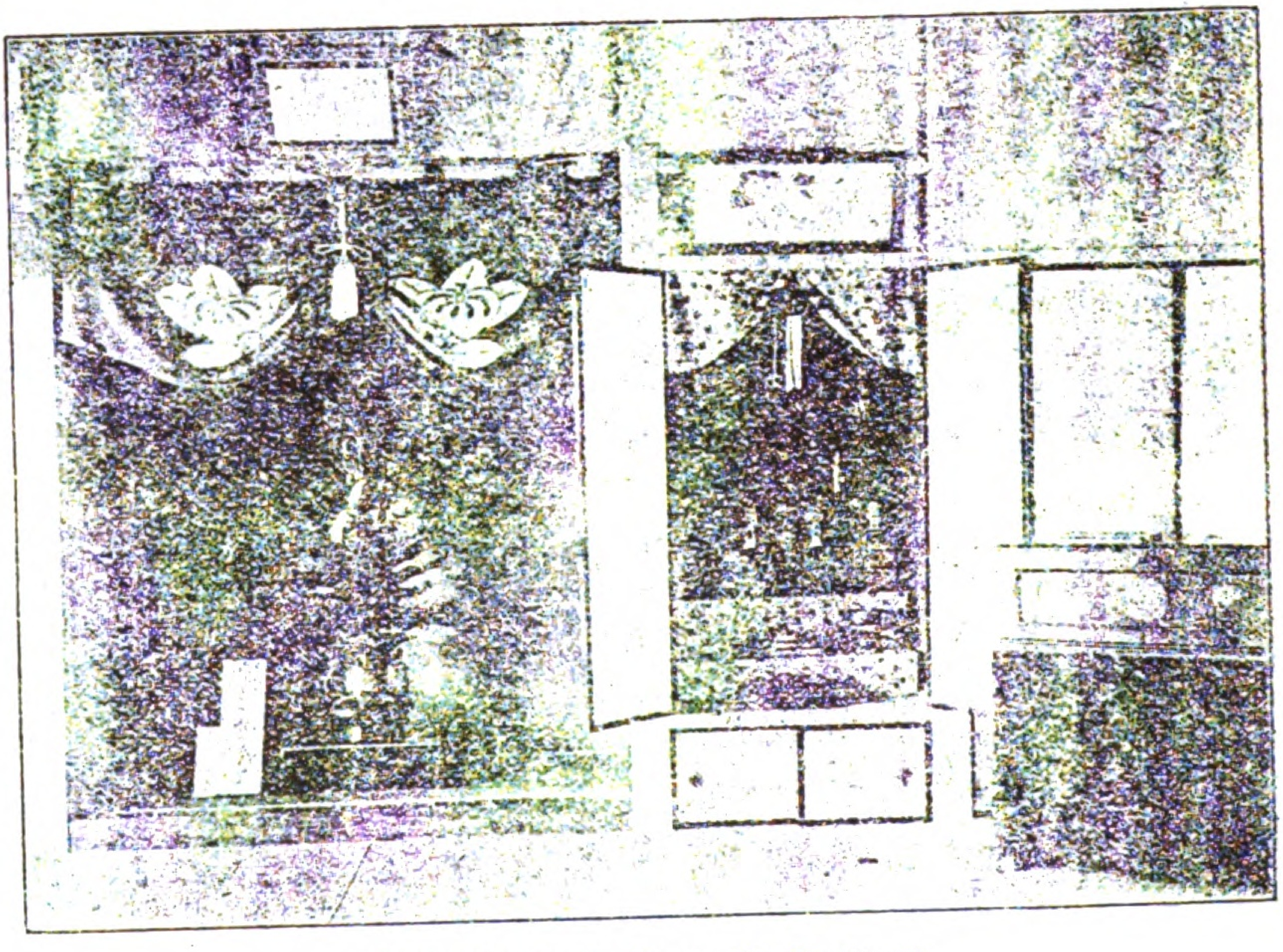
茲に貴人といふのは、われより上の人と見て、よろしうございます、されば一家内にありては、その家の主人は一番貴くある、次に貴いのは奧樣である、次は息子息孃である、これいづれも、その家の最も下に居る召し使の下女下男から見ての事である、かやうな順序て以て若し他より書狀が參着した時にはそをさし上げる時に、左手に狀を持ち字がしらを我が前になし右手をば疊につきて參らすべき事である、これ昔からの正しい禮である、しかし只今はかやうにせずともよからうと思はれる、して現今は左手てさし上げるのは奇妙てある、要は左手右手を搆はず、一方の手を疊に下して字がしらを我が前になしてさへ參らすれば、結搆の事と思ひます。

硯筥の筆數の事

昔からわれ〳〵が平常用ふる硯筥の筆數は幾本でも苦からずといふことが見えてあります、だが何か公儀の御用の時とか、歌の會とか、詩の會とか、また連歌當座などの硯筥には、その數がきまつてあるといつてあります、しかしその數の多寡は、別にとやかういふてもないとあります、ところが右の會などの時に使ふ硯筥に入れ置く筆には、鞘のまゝなるを入れ置くは禮だとしてあります、さすればこの時の筆は多分は新らしいのかさなくば、前會に使用した筆でも鞘の副はつてあるのを用ひたやうに思はれる、只今でもかやうな具合に昔ながらの禮を以て催せられる、歌會や、俳句の會を見ることがあります、それから昔誓文狀卽ち神佛をかけて誓言する狀を認める時は黑軸の筆一對鞘を拔いて入れおき、それて以て認めるといつてあります、黑軸の筆を用ふること、思ふに、黑き色は外の色に變ぜぬもの故、誓言を變ぜぬ心より用ひたものかと古人はいつてあります。

座敷往來の事

日本の男子は勇氣あつて活潑なるを貴ぶとしてあります、女子はなるべく優美に靜かなるを貴いとしてあります、この點から見れば、男はなるべく大足に大跨に歩いても見苦しくはない、寧ろその方は活潑らしくて見えがよいやうに思はれる、だが女はさうは參らぬ、大足に大跨に歩くと甚だ見苦しいのみならずそれは禮に合はぬ、といつてある、それは武雜記補註といふ書に見えてある、同書に諸人召し使はれ候時も又常にも座敷にて靜かにあるべきにて候、大足にあゆみ候事はおどろき足とていにしへよりわらひ候事にて候、小足にあゆみ候へば身なりよき



高輪裁縫女學校禮法教室

由申候とあります、て、おどろき足といふのは大足に大跨に歩けば物におどろいたやうな足つきといふことであります、かやうにすれば禮知らずとして大笑を招いたといふのです、それからまた座敷をありくに兩手をぶらさげて前後にふりてありくのも見ぐるしいことだといつてあります、これは座敷のみならず、外出の時でも、よくあることで、大層立派な婦人で優美で歩く姿は百合の花のやうであつて、しかも兩手を大變前後にふりあるく方も見えます、車中の時はよいが歩行の時は一寸心せられてよかろうと思ひます。

お祝ひのおくり物に遠慮の事

一、元服の祝　昔少年の男兒がはじめて、大人の服を着、冠を加へて大人になる禮式の時、知己の者家來の者どもがおいはひにおくりものをする、武士道の盛なる時代の事とて、必ず弓、矢をおくるのがおきまりになつてをる、その時の矢に切付の羽付たるのは遠慮すべきことになつてをる、さてこの矢を元服の祝に忌みたる譯は、元服は男の祝である、男は腹を切る、頸を切る、などいふことは、いま〳〵しい事であるといふところから、きりふの矢のきりといふ名を忌んで贈るに遠慮したとある、

一、嫁入祝　嫁入の時の乘物は只今の世の中では、大抵馬車か腕車である、昔のやうに馬乘の嫁入行列は見るやうはない、昔は相當に身分あるものは皆馬である、そうてこの馬にいろ〳〵な毛色がある、鹿毛もあれば蘆毛もあり、栗毛もあれば月毛もある、また或は猿毛のもあれば青毛のもある、この中で嫁入の時忌んだのは猿毛の馬である、この馬に乘つて行けば嫁は去るといふことから忌んだのである、それから馬に着する鞍の事である、鞍にもいろ〳〵なのがあるが、尤も忌んだのは、うみなしの鞍といふのである、鞍の前輪後輪ともに、丸のぎを立てたやうに、輪の表に、中筋が、高くある、それをうみといふので、その筋のないのをうみなしといふのである、元來嫁入は子供を生むべき爲めである、しかるにこの鞍はうみなしの鞍であるから、これに乘つて行けば子供をうむ事なしといふやうに聞えるから忌んだものである、それからまた秋ふた毛のむかばきこれも忌んだものである、元來むかばきは鹿の毛で作るものである、鹿の毛は春夏秋冬に段々色が變るもので夏の古毛は長く、秋の新毛は短い、其夏の古毛が除くとそれよりも色の少々濃い白星のやうなのが處々にまばらに生へる、その皮で造つたのを秋のふた毛のむかばきといふのである、これを婚禮にいむ譯は、秋はアキルふた毛はフタ、ビといふ詞と通ふからであるといひてある、嫁入は一旦嫁したらば、アキテは甚だ困る、またそを二度するやうても甚だ困るといふ點から忌んだものである、

一、わたましの馬、わたましはいふまでなく屋うつり又は引越のことである、してこれも昔は馬を用ひたものである、馬に荷物を負はして引越したのである、この時に使ふ馬に火性の馬は使はない、さてどういふの

が火性の馬かといへば、栗毛馬、ひばり毛の馬はさうてある、馬に五つの性があると昔の人がいつてある、青毛、あし毛は木性である、栗毛、ひばり毛は火性である、鹿毛、かす毛は土性である、かはら毛、月毛は金性である、黒毛、ぶち毛は水性である、だからして屋移りに火性の馬即ち栗毛、ひばり毛はきらつたものてこれらをば使用しなんだといひます、その他ヒの字のついたもの赤い色のものはわたましに忌んだといふてある、それは皆家を燒く火の色に似てをるからてあるといつてあります。

御手水可参禮

昔の禮に御手水參らすべきなどいふことが見えてあるこれは申すまでもなく、殿中または諸大名の女中どもの主君に對してとるべき禮である、さて手水道具に如何なるものを要するかといへば、第一はんざうである、恰も飯の時の湯つぎの如きものて、それに直ぐ柄を付けたものてある、それと今一は、みゝだらひといつて耳の付いた盥てある、これ二つは先づ手水の道具てある、してそれに御手巾即ち今日の手拭が副るべきは當然てある、それからそれらを取扱ふには、先づそのはんざうに水を入れ、みゝだらひの中に入れ置いて、その上にその御手巾を疊みおくのである、かやうにしておけば、事済むかといふに、なか〳〵さうは參らぬ、主君の大小の便用遊ばされるを待つて御手水をかけ申さゞるべからざるのである、それをかけ終りて御手巾を要する、その手巾は女中の手から主君へ渡すのは禮でない、されば、そをいかにすべきかといふに、その手巾を女中たるものゝおのが肩上にかけおかなければならぬ、してその肩のまゝ主君に寄り付いて行くのは禮である、さすれば主君その肩上の手巾て手拭はるゝといふことてある、洵に昔の階級制度の甚だしかつた面影が伺はれて面白いことゝぞんじます、

足袋の禮

茲に、足袋の禮といへば、名稱甚だ可笑しいことの如く考へられますが、昔し殿中へ入る時に、主君の御許しなくては、足袋を着くとが出來ないといふとてあつた、その事は條々聞書に詳しく云うてある、て昔の足袋は只今のとは、大變差がつてある、今日のは木綿足袋が通常用ひてをる、してその色も普通は黒か白かの二つてある、昔ののはかゝる木綿足袋てはない、皆革

足袋である、してそれにいろ〳〵の模樣があつたものです、もしその模樣がなくて、無紋の革で、しかも眞黒で無地なのは、着くことが出來なかつたのです。だからこのころの足袋は大抵小紋の黄革製の丶を通例用ひたもの丶やうに見える、それから、その足袋を着く時に禮があるといひます、それは右の足から先きに入れるのを宜しいとしてをり、また人に召さする時も右から先きに參らするといふことです、但しこの着く時の左右說は左は先きにすべきものなることをいうてをる人もあるやうです、いづれが眞か僞かこの事は私にはわかりませぬ。

客送りの禮

昔し、諸大名の內で、わが家に來つた客を送るに、その客の、身分如何によりて、上中下三段の差があつたといふてある、客が貴人であれば、その客を送るに三送の禮をとるといつてをる、三送とは第一座敷で送り、次に椽で送り、その次に庭上に降りて送るといふことてある、しかしこの時に當り、その客人が非常に高位高官のものであれば、その三送の外に猶一送するといふことである、それは門の外まで送るといふことである、それから以下の客人であれば、二送の禮をとるといふてをる、第一座敷で送り、次に椽で送る、といふのです、それから猶その以下の客人であれば一送といつて座敷丈け送つて後は送らぬといふのです、恰も、われ〳〵の親友同志の禮のやうです、われ〳〵がよくこの一送の禮はとるのです、但し親友同志に限りますが、座敷に居つて君失敬また來給へ位で玄關までも往かぬことが、往々あるので、餘り粗末過ぎてよくないこと丶思ひます、けれども親友になればなる程禮が疎漏になるやうです、蓋し自然の道理ではあるまいかとも考へられます。

以上諸件は家庭敎育の任に當る人の多少心得までに申上げたのに過ぎませぬ。



論文

日本女子大學教授　鹽井文學士選

天

○理想

三河西加茂郡石下瀬村　白萩女史

俳氏曰く、「花に埋もれて夢より直に死なんかな。」と、俗謠子曰く、「枝垂れ柳に櫻を咲かせ、梅の香をもたせたい。」と、目して極樂淨土となすもの是なり、黄金世界となすもの是れなり。理想的境遇とするもの是れなり。

理想は人生の趣味なり。人間心靈の生命なり。されば、人は理想に生き、理想に死せざるべからず。花に埋もれて、夢より直に死せんとするも可なり。枝垂れ柳に櫻を咲かせ、梅の香をもたせんとするも可なり。如何とならば、理想なきの人生は、趣味なき人生なればなり、理想なき心靈は、生命なき心靈なればなり。あゝ人は理想あるべし。須く花の如き理想を有すべし、然れども、理想は現實と全く一致するものにあらず、理想は遂せられざるに於て、幾多の趣味あり。「來て見れば左程でもなく富士の山」是れ其の高き姿にあくがれて、多くの趣味と希望とを持して進める者の、一旦理想と現實と一致せる曉に於て、唄へる失望をのべし者にあらずや。戀に於て、また然り、彼は淸き理想の一つなり。されば、是を遂せんとするに於て、花となり、紅葉となり趣味と生命とを賦與すれども、遂するに於て、何物もあるなし。即ち知る、人が希望の總てを遂せる時は、既に苦樂以外のものとなり了れるごとく、戀の總てを遂せる時、人は全く戀愛以外のものとなり了れるなることを。

嗚呼、理想はそれ人生以下の花か、人生以上にありては、彼は竟に無意義に屬せざるを得ざるなり。

（兩評）論旨先づきこえたり。筆も先づ立ちたり天とす。

地

○愛

鹿兒島市易居町　波江野榮子

われらの世界は、愛の世界なり。われらの天地は、愛の天地なり。われらは、愛に生れ、愛に活き、愛に死なんことを希望す。母の愛、兄の愛、姉妹の愛、友の愛、これを廣く云へば、人生の愛！、愛あるが故に人生に光あり。愛あるが故に人間に涙あり。愛するとき、人の心淸く、愛する時、人の心平和なり。平和なれば、罪惡なく、平和なれば、悔恨なし。愛なき敎育は、木偶敎育なり。愛なき家庭は、呼吸せる墳墓なり。愛を解せずして、道義を口にする、果して何ものぞ。愛を索めずして、利を求むる、人生の値何處にか存する。

愛はわれらの權威なり。愛は我等の信仰なり。われら敎へんとするとき、まづ愛し、われら諭さんとするとき、まづ愛す。愛の天地を出でずして、われらは歩まじ。愛の世界を出でずして、われらは語らじ。愛に立ち、愛に行き、愛に息ふ。われらは愛の謳歌者なり。

（雨郊）論旨を愛して佳とす

人

○憂愁論

四谷區忍町四番地戸田方　佐々木俊子

世の人は、たゞ樂天なれと云ひ、快活なれと訓ふ。されど、そは信ある者に云ふべき事なり。信なくして、樂天と云ふは、樂世の事なり。信なくして快活と稱するは、輕薄の事なり。樂世と輕薄と、そは如何ばかり厭ふべき事ぞ。

世の人は、華嚴に投死せし靑年の傾向を以て、社會に最も厭ふべき事の一に數へたり。されど、信なき社會は、更に憂ふべきなり。彼は形骸に於て死せり。是は精神に於て死せるなり。十字架上、慘憺たる基督の死と、慾に追はれて蠢々たりし時代の人と、其の間、果して雲泥の差違なしとするか。形駭に於て死せるもの、必しも價値なきに非ず、されど、精神に於て死せる者は、一毫の價値なきなり。あゝ樂世を樂天と誤り、輕薄を快濶と同一視する彼れ等、果して人生の眞諦を得たりと云ひ得べしや。否々我れ、今にして彼等に與ふるに、一包の藥餌を以てせんとす。即ち憂愁是れなり。人生の意義、之を得る、何ぞ容易ならん。かくて、憂愁は、眞の人たらんとする者の、必ず味ふべき經驗たるなり。人生の信と、眞諦とは、必ず憂愁の裡に得べければなり。愁憂は、消極的なるが如くにして然らず。

事實に於て、そは積極的なるなり。憂愁の人は、信と、眞諦とを得んが爲め、常に向上しつゝあればなり。夜の闇に、榮光なきを嘲る勿れ、そこに曉の光は籠らずや。憂愁の靜なるは、常に眞個の活動を孕めるものあつて、然るのみ。

（圓評）一かどの議論きくべきものなきにあらず。人とす。

秀逸

○自然と詩人

常州　園部りう子

百花爛漫として咲き香ふ春の曙、明月天眞に懸る仲秋の夕、誰か詩趣を胸中に喚起せざるべき。況や花月林泉に濃厚の同情を有するものに於てをや。雪や、山や、川や、海や、皆、是れ詩人の好題目、天地自然に豊かなる詩趣の無盡藏と云ふべし。蘇東坡が、赤壁の賦を唱ふるもの、ウォールヅォルスや、バーンスの詩を繙くもの、誰か、杳然として神韻縹渺の中に放離せざるべき。人類は自然の子にして、自然は人類の父母なり。人類の自然を慕ひ、之を憧憬するは、人の至情にして當然と云ふべし。然れど、自然は吾人に顯はるゝ儘に於て、貴きものにあらず、自然は自然以上の者の表象にして、其中に深遠なる天地の偉靈を示すに於て、貴きなり、而して、天才ある詩人の感じ易き心鏡には、能く其の偉靈の忽焉として、直覺せらるゝものにして、天地人生の批評者なりと言はるゝは、即是れが爲めなり。見よ藤田東湖をして天地正大の氣を歌はしめたるを、彼の秀麗なる富嶽、爛漫たる櫻樹、森漫たる海洋、何れか天地正大の氣の發現にあらざるべき。松平定信が『つく／＼と獨り向へば我身さへ月の中なる心地こそすれ』と歌へる、是れ自然の同情に同感し、神會融知する所の神秘に達したるものに非ずして何ぞ。苟も世の自然を愛し、詩趣を歌ふもの、先づ汝が靈臺を淸めて、自然の偉靈に接せよ。汝が胸中勃然として、崇高の念を生じ、神氣藹然として、吾れ知らず神秘の妙境に達するを得ん。

（圓評）文は先づ整ひたり。



女學生風俗（其廿五）

○成功小觀

周防熊毛郡淺江村山王原　岡部佐保

○人生の目的は活動也。活動の目的は成功也。人安ぞ成功を知らざるべけんや。

○世には、客觀的成功者にして、主觀的不成功者あり、豐公の微賤より起りて、六十餘州を蹂躪したる、此れ偉大なる成功なり。然れども、彼れが落々たる雄心は、以て成功となすに足らざりしなり。

○人格なくして、成功に急ぐものは、終生眞の成功に進む能はず。

○才能あり、智識あり、進んで止まざるものは、終に自ら安んずべき成功の殿樓はあらざる也。されば、始めより一定の目標を立つる者は、自ら其れ以上に進まざる也。

○成功せんには、人生の難關あり、猶旅行するに山河あるが如し。而して其修養の如何によりては、甲の難關も、乙に坦途なることあり。故に成功せんとするものは、常に修養を忘るべからず。

○人生の難關は、外部より來らず。即ち其內部の精神より至る。膽力あり、才氣あるもの、何ぞ人生の難關を叫ばむや。然れども、人に天賦あり、境遇あり、漫に大望を抱くと雖、此れ自暴の吊する所となることあり。

○機先を制するは、成功に必要なり。然れども、これ躁急の意には非るなり。智あり、明あり、加ふるに膽を以てせよ。

○蝮蛇に毒あり、蜂にはりあり。人大に奮はんとせば、大に劍を磨かざるべからず。劍それ何ぞ？

○成功の大小は、其の精力による、大に事を成さんとするものは、夫れ精力を蓄へよ‼。

○世、成功を考ふる者あり。然れども失敗を說くものなし。宜なり、世に空樓の成功多きことや。

○賴朝は、名に成功し、廣元は、實に成功す。人生、名を取るべき乎、實を取るべき乎。名も可也、實も可也。賴朝なくんば、廣元なく、廣元なくんば賴朝なきなり。(終)



女學生風俗(其廿六)

（兩評）論旨は先づきこえたり。

○初秋小言

福岡　筑紫女

○炎暑未だ去らざるに、朝な夕なの風音さびれ、颯々滿庭の露を拂ひて、水の如く机邊に迫る、秋來る！、あゝ秋來る！、雲の形、空の色、風の音に驚かされし身には、何となく秋さびて、喧しき蟬の聲の哀れに、流るゝ如き蜻蛉の影も、いと心細う眺めらる、秋！、秋！、斯くして秋は妾が庵に滿ちぬ。

○人は多く春を好み、春を以て唯一の好時機となせども、妾は寧ろ秋を愛す。春の艶、秋の美、一つは花の如く他は月の如し、燦爛たる綾羅を飾れる美女を以て、春とせば、品性高潔なる貴婦人は、以て秋に譬ふべし。艶なれども、春は俗なり卑なり。寂しけれども、秋は美なり潔なり。しかも、春は心情動き易きの時、人は浮薄輕佻に流れて、妄し易く、狂し易し。斯くてあらゆる罪惡は、茲に其芽を生じ來る、されど、秋は天高く、氣澄みて、山容水態清く神々しく、人の心も自づと引締りて、些の妄念だに起らざるの時、心を清め、想を高むるは、秋を措て他に求むべからず、妾は何處迄も秋を愛す。



女學生風俗（其廿七）

○もの言へば唇寒し秋の風、言はじと思へど言はずに止まれざるは、今の世の狀態なり。見よ、今の社會は、上下滔々僞り多き文明の香に醉ひて、浮薄輕佻に陷り、淫靡醜陋を事とす、僞善、權詐、不德、不義……靜かに其側面を觀來れば、實に百鬼夜行の態をなせり。殊に近時は行末望多き靑年男女の、腐敗墮落の醜聲、頻々として傳へらる、妾は之を聞く毎に、鋭刄もて、胸を刺さるゝ如き心地ぞする。思へ、今は二十世紀の、吾が四千萬の同胞が世界の舞臺に花役者たるべきの時！、殊に婦人は新進帝國の國母として、第二の國民を養育し、そが手によりて、國家有爲の人傑を出さゞるべからざる大任を有す。況や文明の進むにつれて、婦人の爲すべき事業も、益々多きに、末は香らん蕾の花を、あはれ心の迷ひより、あたら慘風悲

雨に傷けんこと、げに遺憾の極みなり。妾は多感熱誠の身、非なる世の様を見て、豈默するに忍びんや。

○思ふに、彼等は、餘りに現時皮相の文明に心醉し、徒らに外面の美を好みて、内面（精神）の修養を忘れたるが如し。名譽、權勢、黄金の前には、そが尊き頭を垂れて欣然微笑するを知れども、公德、他利、益世などのことに至りては、眼を投げ、耳を傾けざるにあらずや。されば、利己的に、本能滿足主義に、惡美的なり。高潔なる思想なく、優雅なる趣味なく、遠大なる抱負なく、社會國家的觀念なし。時に心情發動し、慾望生じ來れば、唯だ眼前の滿足をのみ得んと欲して、以て足れりとなす。故に思想低く、趣味狹く、品性下劣に心情野卑なり。これ黄金、地位、肩書、外貌の慕はれ、菫、百合、薔薇乃至繪葉書の愛せらるゝ所以なり。今や此の忌むべき弊風は、先づ三府を中心として、吾が清らけき婦人界に吹き捲りつゝあるなり。悲しむべき事ならずや。

○あゝ徒らに外貌の美をのみ好みて春の艶麗を愛する者よ、來りて妾が秋の人となれ、以てあらゆる安念を拂ひ、邪氣を去りて、共に思想精神の修養に務めずや。時や秋、金風颯々、梧桐飜へり、叢に喞く虫の音も、これよりいよゝ繁からん。正に燈火親む可きの候、わが壇友諸嬢、勵み給へや、いそしみ給へや。

（雨評）新しき事にはあられど、きかざるべからざるものなるをいかにせむ。

○理想

茨城縣　拾　綠　女　史

財貨地に蔵んで、人の拾ふに任せ、寶珠山に堆くして、人の取るに委す、勞働せずして、自ら美食錦衣を得、學ばずして、能く幽玄を穿つ。これこれを稱して理想と言ふべきか。我れ等は、必ずしも斯る理想を非なりとするものにあらずと雖も、恐らくはこれ理想にあらずして、妄想となり終らんのみ。社會の現狀は、些少だも斯る理想を以て、世に處する人に對して、同情を表せざるなり。勞働するも、尚ほ衣食に窮する者あり。一碗の飯、一纏の衣すら、容易に得難きは、現時社會の現象なり、亦社會將來の狀態たるべきを想像するに餘りあるべし。

既に理想の、單に理想として之を説くの外、是に到達する（幾分なりとも）方法なきものなりとせば、理想は之を説くの要なかるべく、又研究の價値なき者なるべし。所謂妄想にして終らんか、痴人の畫ける空中の樓閣と等しく、個々彼等を驅つて、益々彼等の理想と反對の方向に進ましめ、又愈々社會の彼等の理想に同情を表せざるより、遂に彼等をして世を悲觀せしめ、自暴自棄に陷らしむるに至るべし。是に於て、我れ等は言はんと欲す。之に到達する方法なき理想は、其の如何なるものなるを問はず、之を説くは、却て世を蠱し、人を害し、社會に害悪を流すものなりと。

釋迦は、佛を理想として、人生の無明を説きて、動物的行爲を戒め、以て社會の平和を企つ。基督は、神を理想として、人生の不如意を説きて、其の自暴自棄を戒めて、社會の進步を計れり。孔子は、周公を理想として、人生の蹊徑を示せり。嗚呼我れ等は、先哲の偉烈を追うて理想とすべきか、神を理想とすべきか、周公を理想とすべきか、將た亦世人の所謂理想を理想として、覊束なき生活を送るべきか。

特別第三賞

○はゝのくに

茨城縣那珂郡高濱町　小泉滝子

空かける天の金鳥の、
銀の小枝かたむけ、
翠り野に白雨そゝぎ、
鳩の群、羊の群れと、
玉かざる頸たをやか、
瞳てる男女の、
青海に青潮わきて、
和手まき摺裳をひきて、
地の上の藝術のくに、
葵もて桂の葉もて、

岡によび雲によぶ國、
輝やきて目映ゆかる國。
ぬか星と花咲けるくに、
群れて／＼日を群るゝ國。
玉のくつ、玉のかむむり。
顔白く戀によきくに。
木は桂花は白百合、
戀歌に甕さゝぐ國。
戀の國、詩歌のくにと、
野白合もて額よそふ國。

天

翠光絢爛、眼を奪ふ才華煥發とは此詩の如きを謂ふか

○海人

群馬縣高崎市　秋月女史

君は都のさかしら女、
礒邊の小金のおとづれに
あまが言葉の少なきを、
如何なればとやとひ給ふ
身は海松刈るかつき女の、
浪路のそこに沈み入り
しんじゅさんごの玉しける、
たつの宮居の目馴るれば
海の秘密をもらすとや、
大海神のうたがひに
女の歳をうばはれて、
かくはおろかとなりはてぬ。

奇想、龍の都の玉手函よりや得たる

地

○ひがんばな

肥前松浦　栗原靜子

宿世は月の宮にして、
水欄干に舞衣の、
袖飜へす妓女なりしが、
ふと月姫に妬まれて、
萬里を地球におとされぬ。
戀の地神に愛でられて、
花と咲きつゝソコモンの、
榮華を餘所に装へども、
眞紅に燃ゆる怨恨の、
『毒あり』と誰も手を觸れぬ。

氣格の險幻なる人を魅するものあり、異色

人

○美はしき秘密

出雲　紅子

玉の乳房のあたゝかき。
妙なる鍵にとざゝれて。
深うとざして包めども。
優しう守る汝の胸の。
花綻ぶる春のかぜ。
妙なる鍵のゆるみなば。

くれなゐうすき胸の底。
何の秘密や包むらん。
頰くれなゐに匂ひぬる。
あゝ美はしき秘密かな。
やがて汝の胸ふるる時。
誰に秘密を開くらん。

美はしき秘密、何ぞ美はしき

秀逸

○渡り初め

陸前　鈴木幸子

丹塗の小舟五十並び
紅欄虹の輪をなせば
髮雪なせるあな尊と
媼は白金鶴かしら
橋の齢の擬へと
彩雲溶けて落ちも來よ
踏むに木精の甦へり
清風浪に起り來て
巨匠が頰の笑を吹く

白木の柱百立ちて
木の香ぞ薫ゆれ新しう
翁は黄金龜かしら
珊瑚の枝のあざやかに
神の夫婦の渡りそめ
河波奏づ何の樂
行くに木の香ぞ匂へれば
橋の袂にうつゝなき

絶好の詩題、落筆凡ならず

○秋鳥

駒込　田中潮子

天宮の宴の終へし夜を、
恐ろし風のふき荒れて、
散りたる秋の桔梗野や。
一夜を泣きて明しけむ、
拾ふ御使か秋の野を
今かけりゆく秋の鳥。

秋姫かへる欄干に、
髮にかざせる銀玉の
姫が仰せのよきこゑに
桔梗の花をぬけいでゝ、

冥想幽遠

○冬の夜

長野　安孫子美子

ちさき灯をかいたてゝ、
閨つめたうも流れよる
振ひをかしき手に溶くを
「あら美し——」と君が仰
何をねたみの風の
夢ぬくもりの天地に

夜の化粧の箱とれば
花のやうなる紅脂の香や。
微笑まして扉の陰に
女子十九を消ゆ思ひ。
荒べるまゝに夜は更けぬ
解くる二人の息吹かな。

迢神孤鬼、靈氣、霰の如し

○黄昏

風薫る公孫樹のこかげ、
榮ありや夕日のにほひ、
さむればの果敢な夕雲、
緋袂紗よ何の光彩と、
いたいけに軒の金絲鳥、
逝く春を夫鳥戀ひて、
歌もなき三月のやつれ、
籠ふりぬ紅房あらせぬ。
無花果の木闇の響、
花もなき永久運命に
寂しらの吾世領して
鐘の音冷たう暮るゝ。

給師の黄昏、何等の詩情

神戸　春蝶子

玻璃窓に晒しゝ吾齒、
書筆かみしばし吾醉ふ。
現なの青春のわづらひ、
あゝかくて筆にかくれし、

○水仙花

白妙衣の雪姫が、
みどりのみ髮さとゆれて、
戀の緋房や燃えにけむ、

東京　黑ゆり

玉のみ階の躓きに、
ぬけて落ちたるみ釵の、
下界に草と生ひ出でて、
冬ををごりの廣庭に、
流るゝ匂ひこまやかに、
榮ゆる葩うつくしく、
名さへゆかしき水仙花。

○天のたくみ

想泉深し

青森　加藤美枝子

をかしからずや天地に
かわる百千の朝夕に
止むことなき神のわざ
空の風情をうたひなば
興なからめやはる秋の
花もにほひもまたゝきの
峯のあなたに雲わきて
自由のはねにかけめぐる
雨ふりやみし夕空に
もえてはかるゝ其すがた
颶風のごとくうせてゆく
けぶりの如くたゞよひて
そのまなざしのくしき哉
かゝる虹のおはしまや



（福永耕美君畫）

いでゝ消ゆるいなづまの　うつる眺もおもしろや
雲うるはしきべにいろの　うちよりもるゝ日の光
自然はこれをうたにとて　暗は「あした」を生みなせば
あかきむらさき森の色　光のをちを眺めとて
うたへとてころ詩人に　この「夕ぐれ」をあたふなれ
見よ山高く水淸く　そばだちたたふおもむきを
いかに造化のうるはしく　同じ幾世のすがたかな
ああ世はうつり人老いて　むかしの姿とどめずも
この世をつくる大神に　うたひて謝せようた人よ

調和ありと雖も眞率愛すべし

○友の合歡を祝ひて

讃岐　松永あやめ子

紅に綠に紫に　夕の空を彩りにし
美しき彩雲消え行けば　そが色どりの裳裾つけ
魂も姿もいや高尚き　天津少女の面影も
そゞろに偲ばる佳人は　君すむ翠の里にきて
永久の契を結ばれぬ　嗚呼羨まむ百花の
霞の野邊を越えてきし　春の和の微風は
君が家庭にみちくて　快樂はつきじ永刧に
むれ額たれて祈らん哉

のびやかに愛でたし

○鑿の香

三河　白萩女史

宵雨ほそき破れ窓、　芭蕉の朽葉音寂びて
工匠砥げる鑿の齒に、　ひくそまたたく灯や
鑿の木屑の香も淸う、　半ばなりたる荒彫の
夜叉王のみ像のいかめしく、　忿怒の眉に夜は更くる

技倆、力あり

○海の幸

大阪　たねみ

海には海のはたつ物、　山には山の此のものを
神ははじめに形して、　山と海とへ分け給へり
滿干はあれど汐先に、　漂ひ浮ぶ海草の
あの香をもたらして、　眞珠白珠底に滿らむ

完璧と謂つべし、但し必ずしも作者の創意ならざるを惜む

○秋の七草

長野　島垣永子

八月、雨の晴れゆくや、　紅の七色地に溶けて、
草の蕾はおのづから、　天のめぐみにそだちけり。
されば秋咲く花を見よ、　薄紅の撫子や、
萩も桔梗も淺糸に、　かの敗醬は黄に匂ふ。
大和は昔歌どころ、　狩衣姿あてやかに、
公達あまた駒なめて、　とほちの小野や蹈みけらし。

納言が挑む句を拗ねて
君は几帳を隔てしが、
七草すでに與あれど、
尙侍（ないしのかみ）にまゐらせし、
蒔繪の櫃が世にふりぬ。』

古意掬すべし

○無ゑんの墓

千葉　森　美智子女史

寂しげなる秋の野べに
吊ふ者なき無緣の墓
僞の涙罪の手に
手向られつる華はなけれど
神の恵に菊と桔梗と
美しく咲きぬ其そばに

語短く意長し

○藻の花

碓永　飯塚きみ子

砂川の石を圍みて
ゆらゝに咲ける藻の花
有明、夕、ほの白う

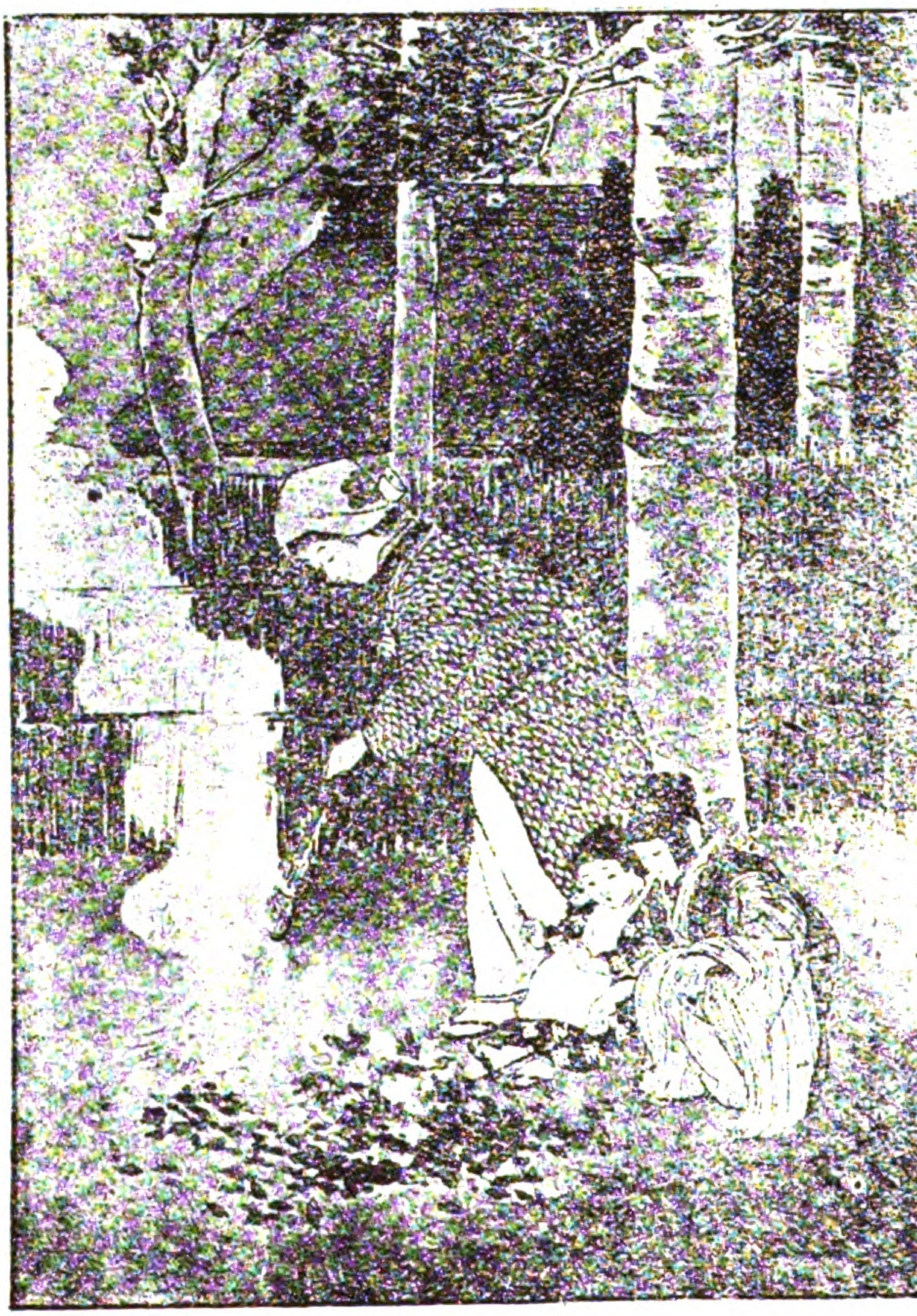
局にこもる宰相の、
花のえらみに召されたり。
寧樂の都は哀へて、

鶺鴒の弱足にゆれて
右と、左に、

せゝらぐは水の情
聞くに情無き短命

波は分けぬ小さき花を

囁きは戀の秘曲、



陽城紫映君筆

ゆらるゝまゝに搖れて　定めなき心のまどひ
やがて老いん水底に
せゝらぎは絶えじな　雲の色漂はしては
藻の花の行方知り顔に

其情一味

○舞ひぶり

静岡　小磯君江

花房ゆらゝ銀のともしび、鹿の子模様の七彩衣や
百媚きそへる可愛い嬌耶、春あけぼののか弱き寵兒
血の氣と共に焦がれて寄れば、眼の前よぎるさくら振袖
雲も湧くらん燭は讃じて、金扇銀扇縺れては散る
百千彩の舞ひぶり豪華よ。

祇園精舍の鐘の聲を想はしむ

○若き愁

神奈川　紅扇子

若き愁ひを包みては、弱き子おぞや闇に怖ぢ、
救ひませよとおほ神の、み手をしてふる朝夕や。
を指にからむ黒髮の、亂れみだるゝ胸をしも、
知らぬか君をつれなしと、恨みて泣きししかはあれど。
とはに知らえず容れられず、斯てぞ我は老いなまし、
悲し愁の戀朽ちんとも、笑みてぞ我は老いゆかむ。

悲緒の綿々たるもの其調子にもあらはる

○岩洞

芝　むらさき

千年寂寥の境にして、冷き香こもりては
靈氣に古りし岩洞、永劫に守の神ありて
汚の影の見えぬかな。
落ちて聲ある滴は　深く秘めたる神の代の
歌小さくも誦すがごと　自然のタイム刻みては
はかな人の世過ぎてゆく、

蒼健の韻致

○羊

埼玉縣　細沼藤子

海の彼方に牧童の、君は愛でにし羊ゆゑ、
ひねもす岸の歎くとか、神よ異郷に死なしめよ。
其の名は戀や失ひし、羊は君が鎖したる、
心の檻をぬけ出てて、他し人手に身を寄せぬ。
哀むなかれ、草花の、榮をよろこぶ性なるを、
飼ひしを悔ひそ、今更に、迷ひぞ彼か生命なる。

巖の上の白鳥の、　妻鳥慕ひて啼くごとく、
浪に嘆息はげしくば、　つひに破るゝよ、君が胸。
破るゝもまゝよ、この深愁、死して礒邊の貝殼の、
思なきをば希ふとき、　かくては惜しき眞珠貝。

韻秀清婉

○古鐘靈あり　　牛込　小島はま子

何時僧、朝早、刻報げはやと、
露坻、萩小路、踏み分け辿り、
卒塔婆を杖つき墓石を過けて、
偶する五更は、夢未だ覺めず。

鐘樓見仰げて階段登り、
低頭、經文、眼を閉ぢて、
聖者に手總の、默拜、禮き、
一杵す——殷々、靜寂は破れぬ。

破れて、天地、また蘇生り、
曉光眩く、古鐘を照らす、
『古鐘靈あり』——其梵韻は、
永劫變らず、世に鳴り響く。

○葡萄　　常州　りう子女

秋風たかきみ國生に　月の光は限なくて
葡萄の房の長々と　たるゝ雫の清きかな。

亂れてかゝる黒髮を　掻き上げながら佇むは
あゝ大理石に刻まれし　詩の女神の俤かそも。
あゝ寂しさの夜々を　栗鼠の子出て食はんとき
靜かにきゝぬその音に　幽情つきぬ詩あるを。

○笛よ　　京　橘　鞠子

深山の奥に根ざしせし、　名もなき竹の一節も、
君が巧のこもりては、　笛よ妾が命なる。
少女の身ゆゑ淡紅色の、　リボンも匂ふ世の春や。
御膝はもたれ笛とりて、　君に强います愛の曲。
やさし息吹の紅唇もれて、　妾が爲すさぶ愛の曲、
笛よやさしき汝が音より、　君が情のこぼれけり。

○雲　　相模　紫女

旦の星の消ゆる時　紅色匂ふ横雲や
夕の月の光るとき　樺色なせる夕陽は
天つ御神の罪しなき　ふかき惠のみ姿が
空のけしきのたゞならで　狂ふが如く飛ぶ雲は
いた矢をおへる猪の　雨横さまに狙たふす
さてはあらゆる鬼神が　天下を探まん心地せり
ゆふべは嵐谿の谷の底　けさは芙蓉の峰の上
萬里の風の行末も　限りきはめん路遊み
無限のあらしわが翼　空の大海わが旅路

○暮の湖　　栃木　きみ子

浮草の花かげしろく、　ひぐゝこめたる夕ぎりの
あなたにひゞく川の音、　棹やさすらむ蘆刈舟
なぎさにひとりたゞずみて、　思ぞ深き我が身かな
夢より淡くきこゆくる、　歌はあまりに擊糊し

○古鄕

花の都に秋立ちて、
古鄕出し母君よ
君は東の空を見て、
愁ひを宿し給はずや
貧しき家に生れては、
君を忍ぶに譏あり
世の荒浪にたゞよひて、
惱み給ふかあゝ母よ
君をば思ふ一すぢに、
燈火暗しあゝ堪へじ

○野菊

神聖なるよおゝ野菊
思ひのまゝに生ひ立ちて
草刈る子等の手に倒る。
奥床しきよおゝ野菊
古びて黒き佛壇に
いと床しげに匂はしむ。
戀至識るよあゝ野菊
無量の思ひ忍びつゝ
折りて手向ける切なさよ。

○新墓

我世の波に漂へと
包むにつらきなみ衣
み柩送くる花野路
新墓訪ぐる香煙の
偲ぶに袖の露もする
心ゆく迄供養せん

大坂　殿　[illegible]子

人目も草もしほるれば
老の眼に涙一つ
玉のうてなは知られども
なほも千舟を碎かじと
枕の紙のしめりては

金澤　越　野　芳子

清き風吹く野山路に
優しき香傳へつゝ
賤が翁の手に折られ
烟も細き線香を
御墓訪つる人々は
眞情こめて一もとを

神戸　吉田　[illegible]江

とり殘されし現身を
慰め得ねど强くして
あはれ添ふるよ片[illegible]
行方も知らぬ遠方や
萩一本を手向にて
大地に印す孤影淋しく、

大地に印す孤影淋しく
末期の歎調胸に浮みて
世を渡る秋の風の

○濱千鳥

かへらぬ父を待わびて、
濱の松風はだ寒く、
うら淋しくも玆かしこ、
ふきしく風に隔てられ、
　やよ濱千鳥聲もまた、
あはれを汝も知るならば、
月なほ殘るあけ方に、
夕の月かげ消え行けど、
次第に夜は近づきて、
　舟はいづこにさまよへる、

○枯尾花

幸なき草と云ひつれど、
永久避らざるみ惠に、
受けにし生は樂しきに、
遠くはなれし山里に、
そと我面をわたるとき、
胸のさゝ響とり出てゝ、
あゝ琴ふかき人の子の、
さすが妙なる音もあるに、

○花あはれ

ふと行きずりに朝顔の
つよき日かげにたへかれて
姿おかしく咲きいてゝ
露にそむいて淋しくも

いとま申して歸る道
涙の挾霧拂ふも惡しや
我れ耳を吹く心地して、

名古屋　野　百合

磯べに近く子はいてぬ。
よせ來る波の音あらし。
千鳥の聲の聞わなる。
呼びも交すか親と子の。
　父まちかねて玆にあり。
父に知らせよ我が心。
漁りするとて出しかど。
舟はいまだに歸りこず。
波音たかく風さむし。
　行きて呼び來よやよ鵆。

神戸　今村せきの

此雄大なる自然の
何れはつべき假の身も
今秋たけて人の世を
袖に冷たき秋風の
その現し世の束の間も
心しづかに案づれば
思ひ知らざる靈妙の
たれか幸なき草と云ふ、

茨城　好　林女

袖にほこれし花あはれ、
いろくや花の碎けたる、
あはれや夕の星も見ず、
地に冷えまさる秋の日や、

○帰帆

沖の小島のほとりより
たゞ満汐の白きかな
朝とく出てし漁夫の
吹くや秋風海の風
今島かげに帰りくる
大漁に勇む夫がこゑ。

岡山 松本露葉女

翠なくせまる夜の色
浜まつ人のほつれ毛を
かに聞ゆるかの歌は、
波に砕けて果つる身か
うれひは同じ幾とせの
我れも侘き旅にして
つらき運命に泣く身哉。

○暁の海

松風ぬるき汀辺に、
雄々しくきこゆ楽の音の、
そは詩の神の囁きか、
女波男波絶間なく、
遠く沙路を漕ぐ海士が、
歓楽謳す瞬間は、
やがてかゞげし真白帆に、
真紅にもゆる天津日の、
狭霧の裡に消えてゆく、

水戸 細金湖子

汐の香迷ふ朝暁や、
奇しき妙なる調こそ、
あらず岸うつ波の音。
碧かゞやく海原の、
うたふふなうた平和て、
小さき舟にみちみてり。
希望の影を孕ませて、
金糸の光輝きて、
千鳥の影も美しや、

○流水

朝たのこんの月のかげ
宿しつ細き音たてゝ
水のこしかた眺むれば
巌間の雫草の露
滴り出てしその日より
今日は事なく過ぐるとも
思へば我れも旅の身の
西に東にさすらひの
岸辺に一人たゞずめば
あゝ流れ行くこの水よ

越中 諏訪芳子

夕べに清きほしの影
流れてやまぬさゝ川や
その源や遠からん。
やがては清き谷間にと
今に幾日を経にけんか
定めがたしや明日の空。
古里遠く出てしより
行くへは似たるいさゝ川
異郷の涙たぎり落つ。
末は戀しき荒海の、

○病院にて

今宵も月はいと清う、
二月たゝぬ此夕、
窓に淋しう眺むなり。
白きカーテンに風ゆるう、
やつれし頬にかゝるなり、
うつろ我影もやせたりな。

長野 山里彩子

愛の光に笑ぬみれど、
病の床に臥ふして、
やさしき菊の香をこめて、
我世の秋もさびしくて、

○樵夫

杣守ります山神の
霊ある森の奥深く
花に来りし春を知り
呼ぶましらや囀ふ鳥
かくて朽ちなむ深山木の
神の心と微笑みて
心向く時は市に出で
酔へば必ず声上げて
寝てはあそぶ華胥の国

上根岸 太田翠子

み許し受けて年月を
冴に誇る斧の主
紅葉に秋をむかへつゝ
昔懐かしき我友と
清く栄なき終生も
死生楽しむ幽境や
斯に代ふろうまし酒
高く謳ふよ太平の歌
さながら太古の民の如。

○白萩

優しき君のみ心に、
恵みの露にうるほひて、
今更ながら夢の世よ、
我身の散り行くそれよりも、
今は淋しや我ひとり、

赤坂 森ふさ子

暴き風にもあたらずに
幸ひ多く生ひにしを
みめぐみあつき我主は
いともはかなく影消えて
こゝにみたまを守るかな

○秋朝

影白みゆく黎明の
霧籠なせる遠山も

越後 三浦美以子

露に希望の色見えて
眠さめたる姿哉、

川面こむる朝霧は　漕ぎゆく舟に晴れゆきて
水上渡る風寒く　畫圖の嶺の頂白し
あゝ畫ならず詩ならず　又寂寥の秋に遊ぶ
想は遥き山川の　自然のたゝみ仰ぐかな

○返り花

金城　なみ子

風あたゝかき小春日の　光にこそは浮かされて
木立さびしき庭の面に　返り咲きたるさくら花。
訪ひくる鳥の影あれと　さしも羞しきその歌や
とびつ移りつさくら花　春を恋みてれふれよと。

○しら露

北海道　森野もゝ子

艶なるよ汝露！。　青葉の風にそよぎつゝ、
世は紅に染ゆる時、　よべの女神のみ情けに、
ふところ深く匂ひつゝ、　けさ葉末をば飾るかな。
妙なるよ汝れ露！。　朝の霞炎の涼風に、
散りゆく花のその姿、　聖き朝日を浴びて、
みどり、葉うるはしく、　まばゆき五彩地に委ずよ。

○菜洗ひ

奈良　文子

梭は高き名なし小川の、　渡しの石になく霜白く、
寒さ肌きる朝いさましく、　夫がぬきくるつけ菜を洗ふ
赤きたすきの花嫁姿、　溯面白くうたふは何か
清き小さき胸に秘めをける、　熱き情のあふるゝうたに
冷たさわするゝ水仕業

○妻戀ふ鹿

仙臺　山縣　桂川女史

たつたの紅葉今もなほ、　ちしほの色に匂へども
大宮人のかげもなし、　昔戀らふん其紅葉。
奈良の都に旅れして、　慰もる月につくづくと
ありし昔を思ひ出て、　しづのをだまきくりかへす
くりかへしつゝ夜もすがら、　たえぬ思ひに沈むとき
妻戀ふ鹿の聲ぞする、　昔ながらのなく音にて

○星と白薔薇

門司　吉田紫峰

悲光輝き受羅の落ちて、　識らず／＼に薔薇は咲きぬ
朝日燦然なる晨たは花に、　希望の光り灼爛消ちぬ
宵月淡き夕べは花に、　理想宿しぬ暗々くも消き
若きうばうも露やゝ深み、　神聖き光りと星など見初む
一夜憧れ二夜ゝ慕ひ、　今し現象煩悶となりぬ
花の天眞天賦も亂れ、　實なも結はで憧れ枯れん
されど幽かに星見下して、　花の命を默して眺む

○友の許へ

しげる

菊のそのふに玉とおく　つゆの光りやいかならん
赤まむらさきとり／＼の　色もそひけんまばゆさな
思ふにつけて思ひやる　都はちりの多しとか
夢な汚しぞ妙高の　山の姿のちゝそばの
は毎に消ゆうむすびてし　心をあはれとこしへに

○野の社

富山縣　大井久子

晝の虫鳴く野の社、　聰かくるゝ拜殿の、
廂に松の芽生へたり。
小春の風冷かに、　吹きて渡ればゆれ／＼て、
み鈴そらなる野の社。

○みどり子

陸奥　野子

あはれよき子よく眠れ、　れむれ／＼といひつゝも
乳房あたへてながむれば、　笑みていつしか眠りけり
こがれも玉も知らぬ身は、　母の乳房ぞ寶なる

○除夜

横濱　山崎京子

霜に凍てたる大路ゆく、　駒下駄の音も遠なりて、
夜なきうどんの鈴の音の、　水わたり來る橋の邊や。
カンテラの灯の搖いて、　身に沁みわたる川風や、
火桶抱ても堪へがたき、　冬の夜さむをほしみせの、

逢ゆく人もとだえたり、
老翁が独に匿く箔の、
寶殘りたる七五三縄や、
束れ集むるうらじろの、
いざやとばかり起上る、
燈もこほりて夜は更けぬ。
ゆづり葉の枝、串柿や、
穂丹切れたるも怨にて。

茨城　小松崎　つき子

○春の小吟

いつしかも、
しら梅ちる日、
天に喩しき鶯きえて、
野には誇らじ若菜草、
柔き春光なてらしめて、
薫る葉がくれ花がくれ、
鼓笛の音になれて、
緋桃さく日、
霞淡づの夢心地、
眞白眞紅の莚に、
紫い燃裂の彩や、
めくる牽あるゝ小流よ、

長野　わかば

○露

さびしき秋の
月かげひとり
天の宮居を
つゆは下界に
葉末にやどりし
くだけてはむすび
うちくだけつゝ
めぐみの光に
あゝ美しの
荒れたる窟の
下りし彼女は
なくれかはれの
見舞のしづく
あゝめぐみふかき
さはれ乙女の
まゆにくだけし
なれらがしげく
彼女のうれひは
いざなぐさめよ
はかなき乙女な
夜はふけて
さゆる時
立ち出てゝ
下りたり
其玉は
むすびては
ヒカ／＼と
よくすなり
白露や
そがにはに
くさむらに
百虫に
たれてけり
白露や
花の面の
其玉よ
そゝぐほど
まさるなり
やよつゆよ
なぐさめよ。

大和　齋藤　靜子

○湖畔の[illegible]夕

日は早や西に沈まんと
曲風そよぐ湖の面は、
紫波碧波と砕け散る
夢影走せ行き置さす
變る形の絶間なく
仙女の衣の其の如
晩鴉鳴いて巣を求め
涼しき風は徐ろに、
愉快清爽極みなく
殘んの光放ちつゝ
金波銀波と彩られ
湖畔の夕栄はしや。
雲の姿の自然さよ、
赤黄紫紅に
湖畔の夕栄はしや。
原野閑然人はなく
袖打ち拂ふ心地よさ、
湖畔の夕栄はしや。

伊豫　曾根　岩子

○愛兒

邪なき吾子の罪もなく、
はらばひ寄りしみどり兒の、
膝に手をのせ乳を乞ふ
留し見とれて居たりしが、
百合の花さく椽端に
愛の光りを輝やかし
其愛らしき吾子をば
思はずキッスをこゝろ見ぬ

和歌山縣　田端　やよひ子

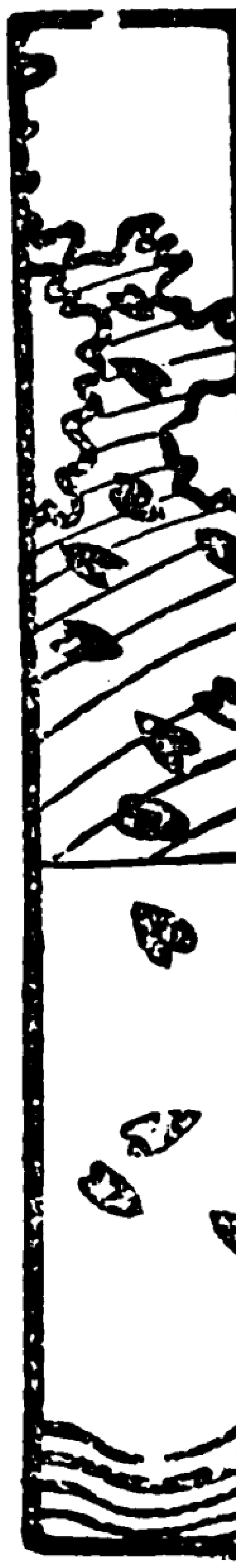
○をさな心

をさな心の一すぢに、
君がみ前に得んとこそ、
悲は迫る夕まぐれ、
あゝ／＼奇しき光ある、
かほばせ雪に紅梅の、
我が喜びは極まりて、
「よしや羽なくもみ独にて、
恍惚とすれば呪ふこと
花見る如き快楽なば
唯それのみを惱むなれ
きみが花園逍遥へば
瞳を送るきみのゐて
一輪匂ふくちびるや
「羽なき天女」と怨みぬ
我れを抱きて飛びませ」と
花下陰にきみが母

大坂　武藤　あい子

○泉

緑の木陰いと涼く
さも楽しげに流れ居る
日中の暑さ知らずして
わが思ふまたすぎて行く
苔むす岩間ぬけ出て
渓の清水は盛夏なる
いつも清けく澄み渡り
泉の身こそ美ましけれ



叙事文

日本女子大學教授　藤井文學士選

天

○花賣り

三重縣阿山郡上野町農人町　奥瀬かすみ

二八にやあらむ。眉目美はしの乙女、血潮あざやかに通へる、白き〳〵玉の腕（かひな）に、大きなる花籠からませつ、實に春姫君が情けの、紅紫燦爛たる、花の香いと高し。水ぬるみし、河邊の柳も煙りて、ふり歸へれば、菜の花道、花にすれ〳〵て舞ふ蝴蝶の、いづれのどかならぬは無き彌生の空、未だ露も老いずして、うすく流れし霞の、花野つゝめるそを破りつ、ほがらかに一節。二節。陽炎燃えて、靑靜かなる繪の眺め、乙女はにこやかにほゝ笑みぬ。そよぐ春風に、髮は綠と波うちつ、しばし小川に寫し見る影の、あまりに見すぼらしとてか、艶なる花の、色紅のばらの一輪、つと髮にかざしつ、何時しか喜びの笑くぼ深く、亦にこやかに笑みぬ。そが花にあこがれてか、黄蝶一羽、ひら〳〵とたはむれつ。かくて亦一羽、交り亂れて舞ひぬ。突如として影は動きぬ。乙女は花籠もて、そを打ち拂へるなりき。されど……拂へども〳〵、蝶はいよ〳〵狂ひ出しぬ。いよ〳〵舞ひ出しぬ。かくて蓮步靜に、乙女の行く處、蝶は輪をゑがき〳〵て、追ひつ狂ひつ、今は乙女も、拂はんともせで、例へば蓮花草の、優しき口元に、歌ふも床しや花賣りの歌。細く艶やかに……。

花召せ花召せ。
菫、たんぽゝ、春菊や
春は紅白とり〳〵の、
艶な姿の散らぬ間に、
召せや床しの蝶つゝじ。
何時かはすさむ夜嵐に、
花、連翹の淋しくも、
散りてはかなのねむの花、
艶な藤姫ほゝ笑めば、
春を名殘りの山吹や。

菜の花路は茲に絶えて、艶やの聲も茲に絶えぬ。桃咲き亂る小さき家の、破れ障子よりかいま見て、

「叔母さん。花買つて？」

「おゝ里ちやん。其の紅のと、白いのと……」

（雨評）優美の文、四條派の畫み見る心地致して候。天とす

地

○美しいわが宿

周防　楓子

十三夜の月が、向ひの山の端をはなれて一間ばかり。その淡い色に包まれて、こんもりと茂つた森の左、白い煙りか棚引いて居る、あゝそれが妾が家である。

「何と美しきわが宿よ」。私は覺えずかく叫んだ。物置小屋に等しい家ではあるけれども、月に包まれたあの美しさ。金の高樓、玉の臺も、どうして及ばう。そして、この美しい家に生れた自分は、何と幸福な者ではあるまいか。



京都二條城

朝星を戴いて家を出て、山の中に日の出を迎へ、入日を送つて、鳥のねぐらに歸るに促されて、家路に就く。家には、妾が終日の勞を慰むべく、風呂まで焚いて待つて居られる。

かくて、父上と母上と、妾と弟が圍ふ夕餉の膳、よし山海の珍味佳肴はなくとも、父上が丹精の野菜のかずかず、あゝその味ひは何に競べう。たとひ今、眼前に千萬金を積まれたとて、妾は決してこの幸福は捨てない。

かくて、樂しく語り更かして、諸共に星漏る臥戸に、へだてない夢を結んで、さて朝はまた、東雲の漸う白み行く頃、弟は昨日妾が集めた柴木を賣るべく市へ、妾は山へと。

あゝけふの仕事も樂しく終つた。――おや、あの口笛は、私が歸りがおそいとての迎へであろう。それにしても、今日は何となくうれしい、我れながら心にほこらるゝよ、擔ふた柴木のいつにない此の重さ。

（雨評）ホンニ美しいお宿、うらやましく存じ候。地とす。

人

○夕の野道

岡山　らくよう女史

二人とも、紺絣の着物。姉は十二三、胸高にしめた幅の廣い帶、髮はお下げにして、無雜作に紫色の紐で結んだまゝ。妹は七つ位、裾短かな、筒袖をきて、帶は薄紅色のしごきをして居る。そして、二人とも色白の、目のぱつちりとした。どうしても田舍の子とは思はれぬ。

「峯ちやん、居ましたよ。」

「こゝにも一つ、おやこゝにも、澤山居ますことね、姉さん！」

二人はしきりに蝗をとつて居るのである。多分可愛らしい鷄にやるのだろう。

「あら逃げた。あれ、こゝに、姉さん、蝗を背負(とんぶ)した蝗が居ますよ、早くきてご覽なさい。」

「あれは蝗の子守てせうか。」

「ホヽヽ、眞にさうてせうよ。」

颯と吹きくる秋風は、稻の葉をさやさやと鳴らすのである。峯ちやんは、立ち上つて、今沈まんとする夕陽に向つて立つた。

「美しい事、眩しくつて……」白い手をかざした其さまは、まるで、天の女神が降りましたかと思はれる、束ねた其の髮が金色に光つて……。千町田の稻も、鎭守の森も、野川の水も、ひとしく夕陽の光りを浴びて、地上の萬物皆燃んとするやうだ。

「峯ちやんも、芳ちやんも、もうお歸り。お湯が沸きましたよ。」見れば、彼方の農家の籬の内から、品のよい、奥さんが、手招きをして居る。

「バーイ」さながら谷の戸を出た鶯の初音のそれのやう。

二人は、「見渡す野べの秋景色——七草千草花咲きみだれ——」歌ひながら家に歸るのである。

風呂の烟はすうと、家の後に立ち登つて居る。

（雨評）多少の情景見えたり、人とす。

秀逸

○秋ぐさ

茨城縣新治郡高濱町東大橋　小泉はま子

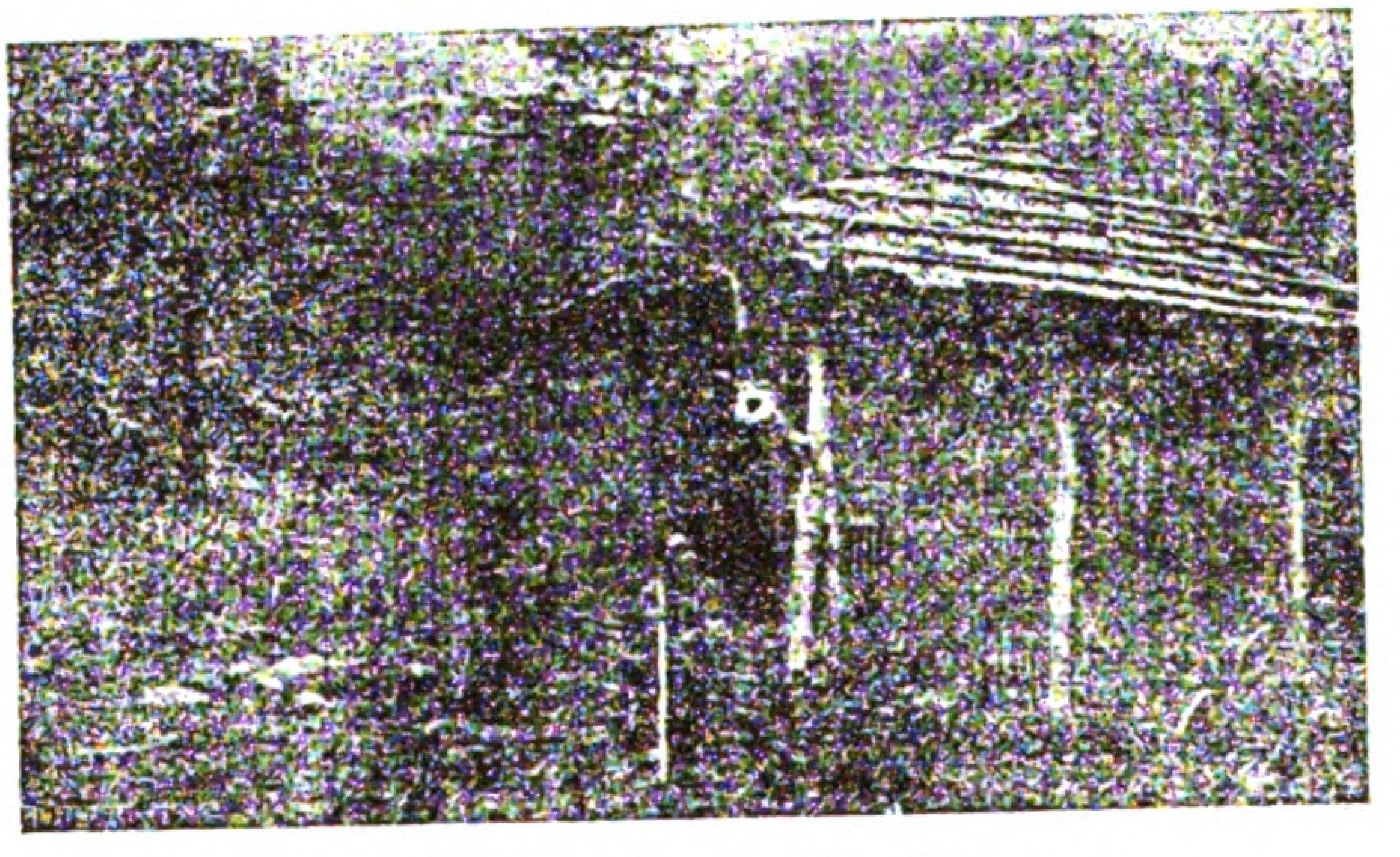
（一）

荻の下風身にしむ秋は來ぬ。

あはれ、今日此の頃都の秋はいかならん。小春日和のうら〻かさに、そゝのかされつ〻、慈愛いや深き母君、いとしきはらからと袂かいつらね、瀧の川のわたり紅葉の錦めでにしてともありたりき。小雨降る夜の長きをも知らで、つゞれさせてふ虫の音も、あはれとは露思はで、老いたまひし父母君の昔語り聞きつ〻。更かし〻夜もありたりき。あ〻か〻る事思ひつゞくれば、すてし浮世の、しのばる〻事、いくたびか。

（二）

淡墨色したる森のあなたより、たえ〲聞えにし、恰も長き恨みをもらすが如き笛の音は、はたとたえ、いづ地ゆくらん、哀れげに鳴き渡る雁金。その數かぞふる間もあらせて、素ねづみ色したる暗き暮雲に影失せつ。折りしも、さつと吹き來る夕風に、時雨はらはらと降り出でぬ。杜のふもとの荒れはてし尼が寺にては、夕べのつとめするらし、木魚叩く音、何となくうち沈みて聞ゆなり。



吉野山四行庵

（三）

枯柳の根株あらひて流る〻小さき溝の畔には、さびしげなる野菊、いさぎよくしかも何となくあはれ深き白萩、うすむらさきに咲き匂へる藤袴、おのがじ〻ほこり顔なるもうれしく、垣に沿ひてうす紅き花をは、青黒き濃くつやゝかなる葉影より出したる山茶花、築土にしげれる龍のひげの實の、るり色の玉つらねたるやうなる、青苔むし蔦かづらまとへる燈籠の傍へなる、南天の實の赤ら熟したる、柿の實さはらば落ちん許り見事なるなど、中々をかしき風情にて、野邊山邊の景色におとるべしやは。

（四）

荒庭の散りしく落葉に、さゝやく夕暮の風、いとさびしく吹きゝて、悲しげなる野寺の鐘は、ひゞき渡りぬ。野菊の白きがわびしげに咲ける破垣に植ゑられし

柿の木の、霜に色どる眞紅の枯葉二つ三つ。鈴なりに實の落ちん許り熟せるを、ついばまむとて、友なき鳥一羽、門にきて鳴くこと一しきり。何におどろきてか、あわたゞしくとびたちて、羽風に、くされたる實一つ落しつゝ、はるか小山の黑く濃き、森をば指して急ぎゆく。影は蒼茫たる夕べの色につゝまれて、見え判ねども、しわがれし聲して鳴くは、暗を縫ひつゝ聞ゆ。椽の下にては、こほろぎの、はや秋の夜の長き調べを、奏て初めつゝ。

（雨評）言の葉の露やさしくあはれににほひたる秋草に候かな。

○胡蝶塚

和歌山市道場町入　奈加谷　とも子

去りぬる年の秋、一羽の胡蝶ありけり。妾が文讀む窓に迷ひきて、やがて机上なる香も失せし白菊にうち休らひぬ。

あはれ花より花に舞ひてし時の麗しの羽衣は、見る影もなく破れたり、オゝあはれの蝶よ、日も暮れかゝるに、なほ去りげもなく、白菊を抱きたるまゝ……。

あくる日起き出でゝ、蝶や如何にとうち見れば、蝶はありけり。されど、アゝされど、白菊を抱きて終に眠れるなりけり。あはれの蝶よ!!　掌にのせて呼吸吹きかけても見しが、甲斐はなかりき。

アゝ蝶は逝きぬ、白菊を抱きて逝きぬ。オゝ眠せよ、蝶!!眠せよ蝶!!しかして、美しき星のみ國に產れ出てよかし。げに此の世は穢れ果てゝぞ。春くるも、再び此の世に出づるなよ。花何かせむ。

かくて、蝶と白菊と共に、妾は紅絹に包みて、庭の片隅に葬りぬ。小さき土饅頭をつきて、胡蝶塚となむ。

今年も秋は父なき淋しき宿に來たりぬ。胡蝶塚は其のまゝ立てり。而も、夜な〳〵あはれ虫の音の、いと悲しき聲して、塚を吊ひ、妾を泣かしむなり。

（雨評）何んとなう可憐にすてがたきは、名の胡蝶塚のみには候はざらむ。

○山遊び

秋田縣平鹿郡那見村字高品　佐々木貞子

仁者をまねぶとにはあらねど、おのがさが、痛く山を樂み、花のあした紅葉の夕、あくがれいでぬ時ぞなき。いにし七月の十日あまり七日の朝まだき、友どち二たり三たりそゝのかして、高寺山にものしぬ。木立いと深く、蔦根の茂れる道を、たどり〳〵てゆくに、いと

廣からなる山のかびに出づ。こゝは、日頃、人の話にきゝし六本松といふ處なめり。一處より六もとの松わかれいでゝ、四方にひろごり、枝さしかはして、日影を遮り、水無月の照る日も、夏の至らぬ處は、こゝならむ、と人毎にいふめるも、うべなりけり。げに木の根に腰うちかけてながめやれば、鏡が沛は、さながら眞澄鏡の如く澄み渡りて、いと淸らかなるに、釣舟の二つ三つ、白き帆かけて浮べるさま、いびしらずをかしきを、鳥海の高ねは、芙蓉の今しも花をひらきたるが如く、遙かなるみ空にうちそゝりて、手をのべなば、とゞかむばかりに見ゆ。西の方、日本海を見やれば、沖つ白波雲井にまがひ、渺茫として更にはてもなし。かゝる景色を見れば、心もおのづから莊大になりぬる心地して、孟子のいはゆる浩然の氣も養はれつべし。花紅葉のをりならば。をちこちさまよひありかんを、今日のてる日をいかゞはせむ、と木蔭さらて、友どちと語りかはせば、日頃の暑さも、うち拂はれたる心地して、凉しさいはん方なきを、まして、けふの如く、風うちそよぐ日は、漢人のいふなる仙境も、かくやとおしはかられて、いと樂しうなむ。あはれ、けふの一日をかくて暮らしたれど、心に得る所は、いぶせき伏屋の内に、扇うち使ひつゝ、一日二日暮さよかんには、まさりぬべし。

(雨評) 餘すなほに文はよく整ひたり。たゞ新しきところなきををしむ。

○朝と晩 (日記の一節)

静岡縣小笠郡河城の里 桂 影 子

朝＝朝毎に市場に通ふ駄馬の嘶き、銅羅聲張り上げて唄ふ馬子の俗曲、それも遙かに幽かになつて行つて、隣の下女が不作法に力任せに汲む車井の音、急しさうに門口に置いて行つた牛乳配達の鈴の音、まさかに寢ても居られず起床すると、東雲の空には、光淡い明星が眠さうに瞬いてゐる。またゝく空は淡紅の繪具を流したやうになつて、うす荷葡色に抹した一片の横雲が、高く搖曳ひて、そして、次第に輝々たる數萬條の光線は、洽く萬象を照射した。實に太陽が下界に勞働を促すべく昇つたのである。隣りの例の朝寢坊、今漸う漸う起きて柴垣の間から覗き見しつゝ、さも早いと云つた樣な得意顏。

晩＝今し西の峰に沒した夕陽は、餘光を山の端に射て、瞬一瞬に、赤に、黄に、紫に變じながら、何とも云は

れぬ綺麗な色彩を呈しつゝ、淡く沈んでしまつた。塒を求むる烏の一群、後になり前になり、向うの眞黒な鎭守の森蔭にかくれてしまつて、後は寂寞。賤が伏屋の夕餉の煙、縷一縷、夕霧の裡に消え失せる、村端れ水清い圯橋を渡り、露深い野徑を辿つて柴の門に歸る農夫の影濛乎。梢を渡る夕風冷やかに葉ずれの音淋しう、遠寺の鐘聲、一杵又一杵。やがて玲瓏たるかげ靑穹に盈ちて、突然躍り出でた玉兎皎々。萬籟寂として靜かな山里、月は愈々澄んで夜は水の様、堀之内發貨物列車の響、只轟々として餘韻長う。

（兩評）しつかりとした筆見るべし。特にとりたてていふべきふしなきををしむ。

○朝顔

神奈川　佐久間芳子

まがきの朝顔、咲く事やう〳〵少なくなりて、花亦ちいさし。朝のけはひに取りし小鏡、そと伏せて、やをら庭下駄かるう、露をしだきて立ちよれば、地にさらばひしてみどりの葉がくれより、黃蝶一羽、わたゞしげに舞ひ立ちぬ。いづこへと見やる彼方、露をたわゝに咲きこぼれたる小萩がもとを去りもかねつゝ、高う低う舞ひめぐるなる。咲き出でたるは五つ、濃紅の色ふかきは足許ちかう、瑠璃色なるも手屆くばかりの處に、うつぶきて咲けり。只一つ、眞白き花の、ひよろ〳〵と上のびしたる蔓の先にかゝりて、誇りかなる、たとへば世をすねたる若法師の、黃に紫に染めば染むべき靑春の身を、我れと我が貶めて、ひたぶるにおのれをば世に高きものと思ひ上れるがごと、色は染ませじ塵にはそまじほこらしげのけしき。憎らしからざるが心憎うて、急ぎ文机のもとに立ち歸り、繪筆とり出て、まがきのほとりにうづくまりて、繪具とく〳〵染めしは紫。人なつかしむ色とかきけど、さにはあらじよ、さにはあらじと心強う。されど、餘りに幼き我が振舞ひに、人もや見るとうら羞かしう、あつうなりし頰おさへて、立ちわづらひし後へに、忍びよる足音ひくう、ひとの手は吾肩におかれぬ。

（兩評）情趣は多少見えたり。何んとなうあだめきてきこゆるものあるをいとふ。

○月の夜

鳥取市西町五七　上山千重子

三十二萬五千石の城の跡、そゞろ偲ばれる物見やぐらに、木の葉をはらふ秋の風たちて、神さびた久松山の傍から、そつと覗いた月の清さ涼しさ。薄綾絹を展べたやうな空には、一點邪雲なく、平和の靈氣がみちみちて、うたゝ我世の光榮を讃する人の子の聲は、月をしてはや輪廓正しい峰の濃みどりを離れしめました。げにさやけき光は凝りて滴りて、下界の露を生み出しさう、秋の月か、月の秋かの言も、こゝにはじめて肯づかれるのです。が、其の刹那、私はいひしらぬ胸ぐるしさを覺えました。そは外ならず、我が兄の上を案じたからで。あゝいとしの兄は――我が最愛の兄の君は、情けなや……先づ頃目を失ひました。この暖かい月光に、世は闇の手から救はれましたが、我が兄は再び光明を仰ぐ事が出來ませぬ、とはに闇に呻吟するはかなの子、あゝ今宵、月にそむいた彼の片頰の笑み、如何に淋しく悲しかつたでせう。よし征路の好紀念、名譽ある負傷とはいへ、前途多望の好士官を、むざむざ廢物にした戰爭のうらめしさ、私は斷腸の思ひがします。皎々たる月影は漸々中天にかゝりました。七坪の庭の秋色は、遺憾なく發揮せられて、秋の譜奏ずる虫の聲々、咲きみだれたる萩のまがきに絶えつ續きつ……。忙然と前庭をながめた時、兄は「笛を持て」と、私に命じました。

（所評）末段少しくもの足らぬ心地す。

○黄昏

松山市三番町九三　山脇幸子

……忽ちあらわるゝ戰場の光影……喇叭の斥騎三々五々……傍台……中隊進め……付ケ劍……突ッ込メ……戰地の兄樣が勇ましくお進みなさる指揮の强音に、目さむれば、身は青葉の下風涼しう吹き渡る裏庭のハンモックに、本を顏に覆ひながら、うたゝねの夢をむさぼつて居たのである。

ゴーンゴーンとひゞき渡る夕暮の鐘の音……「早や暮れるのであろうか？……」と、やをら身を起して口すゝがんと立ち行けば、深江鮮な夕日は、小富士と港山との間に、綱もて引き落すが樣に沈んで行く。今迄氣の付かなかつた裏沼からは、水遊びに飽いたのか、滿艦飾の小舟をさげた二人の子供……「敏ちやん、軍歌でも唱うて歸りましようよ。」……「小砲のひゞき遠ざかる―、あとには虫も聲たてず……これからさきは知らないは……」

川面こむる朝霧は　清ぎゆく舟に晴れゆきて
水上渡る風寒く　蘆岡の鴨の聲白し
あゝ業ならず詩ならず　又寂寥の秋に逝ふ
想は遠き山川の　自然のたゝみ仰ぐかな

○返り花

金城なみ子

風あたゝかき小春日の　光にこそは浮かされて
木立さびしき庭の面に　返り咲きたるさくら花。
訪ひくる鳥の影あれと　さしも寂しきその歌や
とびつ移りつさくら花　春な恋みてれふれよと。

○しら露

北海道　森野もゝ子

艶なるよ汝露！。　斉藥の風にそよぎつゝ、
世は紅に染ゆる時、　よべの女神のみ情けに、
ふところ深く匂ひつゝ、　けさ裳末をば飾るかな。
妙なるよ汝れ露！。　朝の發奕の涼風に、
散りゆく妙のその姿、　砕き明き日を浴びて、
みどり、薬うるはしく、　まばゆき五彩地に委ずよ。

○菜洗ひ

奈良　文子

梭は高き名なし小川の、　渡しの石になく霜白く、
寒さ肌きる朝いさましく、　夫がぬきくるつけ菜を洗ふ
赤きたすきの花嫁姿、　調面白くうたふは何か
清き小さき胸に秘めをける、　熱き情のあふるゝうたに
冷たさわするゝ水仕業

○妻戀ふ鹿

仙臺　山縣　桂川女史

たつたの紅葉今もなほ、　ちしほの色に匂へども
大宮人のかげもなし、　昔戀らふん其紅葉。
奈良の都に旅れして、　窓もる月につく〴〵と
ありし昔を思ひ出て、　しづのをだまきくりかへす
くりかへしつゝ夜もすがら、　たえぬ思ひに沈むとき
妻戀ふ鹿の聲ぞする、　昔ながらのなく音にて

○星と白薔薇

門司　吉田紫峰

慈光輝き愛羅の落ちて、　識らず〳〵に刺薔薇は咲きぬ
朝日燦然なる晨たは花に、　希望の光り灼爛満ちぬ
宵月淡き夕べは花に、　理想宿しぬ燈々くも消き
若きうばうも露やゝ深み、　神秘き光りと星など見初む
一夜憧れ二夜ゝ焦ひ、　今し現象煩悶となりぬ
花の天真天賦も亂れ、　實なも結ばて憧れ枯れん
されど幽かに星見下して、　花の命を默して眺む

○友の許へ

しげる

菊のそのふに玉とおく　つゆの光りやいかならん
赤まむらさきとり〴〵の　色もそひけんまばゆさな
思ふにつけて思ひやる　都はちりの多しとか
妙な汚しぞ妙高の　山の麓のちゝそばの
は毎に清うむすびてし　心をあはれとこしへに

○野の社

富山縣　大井久子

靈の虫鳴く野の社、　跳かくるゝ拜殿の、
扉に松の芽生へたり。
小春の風冷かに、　吹きて渡れはゆれ〳〵て、
み鈴そらなる野の社。

○みどり子

陸奥　野子

あはれよき子よよく眠れ、　れむれ〳〵といひつゝも
乳房あたへてながむれば、　笑みていつしか眠りけり
こがれも玉も知らぬ身は、　母の乳房ぞ寶なる

○除夜

横濱　山崎京子

霜に凍てたる大路ゆく、　駒下駄の音も遠なりて、
夜なきうどんの鈴の音の、　水わたり來る橋の邊や。
カンテラの灯の揺いて、　身に沁みわたる川風や、
火桶抱ても堪へがたき、　冬の夜さむをほしみせの、

途ゆく人もとだえたり、
老爺が袖に匿く猫の、
賣殘りたる七五三繩や、
束れ集むるうらじろの、

○春の小吟

いつしかも、
しら梅ちる日、
天に喩しき與きえて、
野には誇らじ若菜草、
柔き春光なてらしめて、
散る葉がくれ花がくれ、

○露

さびしき秋の
月かげひとり
天の宮居を
つゆは下界に
葉末にやどりし
くだけてはむすび
うちくだけつゝ
めぐみの光に
あゝ美しの
荒れたゝ宣の
下りし彼女は
なくれおはれの
見舞のしづく
あゝめぐみふかき
さはれ乙女の
まゆにくだけし
なれらがしげく
彼女のうれひは
いざなぐさめよ
はかなき乙女な

いざやとばかり起上る、
縫もこはりて夜は更けぬ。
ゆづり葉の枝、串柿や、
栞り切れたるも怨にて。

炎娘　小松崎　つき子

敲鐘の音になれて、
緋桃さく日、
穩淡づの夢心地、
眞白眞紅ゝ冠に、
樂い盛裝の彩や、
めぐる幸あゝ小流よ、

長野　わかば

夜はふけて
さゆる時
立ち出てゝ
下りたり
其玉は
むすびては
ピカ〳〵と
よくすなり
白露や
そがにはに
くさむらに
百虫に
たれてけり
白露や
花の面の
其玉よ
そゝぐほど
まさるなり
やよつゆよ
なぐさめよ。

○湖畔の夕

日は早や西に沈まんと
曲風そよぐ湖の面は、
紫浪碧波と碎け散る
夢燈走せ行き消さす
變る形の絶間なく
仙女の衣の其の如
晩鴉喧いて巣を求め
涼しき風は徐ろに、
愉快消爽極みなく

○愛兒

罪なき吾子の罪もなく、
はらばひ寄りしみどり兒の、
膝に手なのせ乳を乞ふ
暫し見とれて居たりしが、

○をさな心

をさな心の一すぢに、
君がみ前に得んとこそ、
逕は迫る夕まぐれ、
あゝ〳〵奇しき光ある、
かほばせ雪に紅梅の、
我が喜びは極まりて、
「よしや羽なくもみ袖にて、

恍惚とすれば呪ふごと

○泉

緑の木蔭いと涼く
さも樂しげに流れ居る
日中の暑さ知らずして
わが思ふまたすぎて行く

燃んの光放ちつゝ
金波銀波と彩られ
湖畔ゝ夕栄はしや。
雲の姿ゝ自然さよ、
赤黄紫紅に
湖畔ゝ夕栄はしや。
原野閑然人はなく
袖打ち拂ふ心地よさ、
湖畔の夕栄はしや。

大和　野藤郎子

百合の花さく椽端に
愛の光りを輝やかし
其愛らしき吾子をば
思はずキッスをこゝろ見ぬ

和歌山縣　田端やよひ子

花見る如き快樂をば
唯それのみを惱むなれ

きみが花園逍遥へば
瞳を送るきみのゐて

一輪匂ふくちびるや
「羽なき天女」と愁みぬ
いゝいゝいゝいゝいゝ
我れを抱きて飛びませ」と
花下蔭にきみが母

大坂　武藤　あい子

苔むす岩間ぬけ出て
渓の清水は常夏なる
いつも清けく澄み渡り
泉の身こそ樂ましけれ

敍事文

（天）

○花賣り

日本女子大學教授　[illegible]非文學士選

三重縣阿山郡上野町農人町　奥瀬かすみ

二八にやあらむ。眉目美はしの乙女、血潮あざやかに通へる、白き〳〵玉の腕に、大きなる花籠からませつ、實に春姫君が情けの、紅紫爛熳たる、花の香いと高し。水ぬるみし、河邊の柳も煙りて、ふり歸へれば、菜の花道、花にすれ〳〵て舞ふ蝴蝶の、いづれのどかならぬは無き彌生の空、未だ霧も老いずして、うすく流れし霞の、花野つゝめるを破りつ、ほがらかに一節二節。陽炎燃えて、靜かなる緑の眺め、乙女はにこやかにほゝ笑みぬ。

そよぐ春風に、髮は緑と波うちつ、しばし小川に寫し見る影の、あまりに見すぼらしとてか、籠なる花の、色紅のばらの一輪、つと髮にかざしつ、何時しか喜びの笑くぼ深く、亦にこやかに笑みぬ。

そが花にあこがれてか、黄蝶一羽、ひら〳〵とたはむれつ。かくて亦一羽、交り亂れて舞ひぬ。

突如として影は動きぬ。乙女は花籠もて、そを打ち拂へるなりき。されど……拂へども〳〵、蝶はいよ狂ひ出しぬ。いよ〳〵舞ひ出しぬ。

かくて進歩靜に、乙女の行く處、蝶は輪をゑがき〳〵て、追ひつ狂ひつ、今は乙女も、拂はんともせで、例へば蓮花草の、優しき口元に、歌ふも床しや花賣りの歌。細く艶やかに……。

花召せ花召せ。
菫、たんぽゝ、春菊や、
春は紅白とり〳〵の、
艶な姿の散らぬ間に、
召せや床しの姫つゝじ。
何時かはすさむ夜嵐に、
花、連翹の淋しくも、
散りてはかなのねむの花、
艶な藤姫ほゝ笑めば、
春を名殘りの山吹や。

菜の花路は茲に絶えて、艶やの聲も茲に絶えぬ。桃咲き亂る小さき家の、破れ障子よりかいま見て、

「叔母さん。花買つて？」

「おゝ里ちやん。其の紅のと、白いのと……」

（雨評）優美の文、四條派の畫を見る心地致して候。天とす

地

○美しいわが宿

周防　楓子

十三夜の月が、向ひの山の端をはなれて一間ばかり。その淡い色に包まれて、こんもりと茂つた森の左、白い煙りか棚引いて居る、あゝそれが妾が家である。

「何と美しきわが宿よ」。私は覺えずかく叫んだ。物置小屋に等しい家ではあるけれども、月に包まれたあの美しさ。金の高樓、玉の臺も、どうして及ばう。そして、この美しい家に生れた自分は、何と幸福な者ではあるまいか。



京都二條城

朝星を戴いて家を出て、山の中に日の出を迎へ、入日を送つて、鳥のねぐらに歸るに促されて、家路に就く。家には、妾が終日の勞を慰むべく、風呂まで焚いて待つて居られる。かくて、父上と母上と、妾と弟が團ふ夕餉の膳、よし山海の珍味佳肴はなくとも、父上が丹精の野菜のかずかず、あゝその味ひは何に競べう。たとひ今、眼前に千萬金を積まれたとて、妾は決してこの幸福は捨てない。かくて、樂しく語り更かして、諸共に星漏る臥戸に、へだてない夢を結んで、さて朝はまた、東雲の漸う白み行く頃、弟は昨日妾が集めた柴木を賣るべく市へ、妾は山へと。あゝけふの仕事も樂しく終つた。――おや、あの口笛は、私が歸りがおそいとての迎へであろう。それにしても、今日は何となくうれしい、我れながら心にほてらるゝよ、擔ふた柴木のいつにない此の重さ。

（雨評）ホンニ美しいお宿、うらやましく存じ候。地とす。

人

○夕の野道

岡山　らくよう女史

二人とも、紺絣の着物。姉は十二三、胸高にしめた幅の廣い帶、髮はお下げにして、無雜作に紫色の紐で結んだまゝ。妹は七つ位、裾短かな、筒袖をきて、帶は薄紅色のしごきをして居る。そして、二人とも色白の、目のぱつちりとした。どうしても田舎の子とは思はれぬ。

「峯ちゃん、居ましたよ。」

「こゝにも一つ、おやこゝにも、澤山居ますことね、姉さん！」

二人はしきりに蝗をとつて居るのである。多分可愛らしい鷄にやるのだろう。

「あら逃げた。あれ、こゝに、姉さん、蝗を背負した蝗が居ますよ、早くきてご覧なさい。」

「あれは蝗の子守てせうか。」

「ホヽヽ、眞にさうでせうよ。」

頬と吹きくる秋風は、稲の葉をさや／＼と鳴らすのである。峯ちゃんは、立ち上つて、今沈まんとする夕陽に向つて立つた。

「美しい事、眩しくつて……」白い手をかざした其さまは、まるで、天の女神が降りましたかと思はれる、束ねた其の髪が金色に光つて……。

千町田の稲も、鎮守の森も、野川の水も、ひとしく夕陽の光りを浴びて、地上の萬物皆燃んとするやうだ。

「峯ちゃんも、芳ちゃんも、もうお歸り。お湯が沸きましたよ。」見れば、彼方の農家の籬の內から、品のよい、奥さんが、手招きをして居る。

「ハーイ」さながら谷の戸を出た鶯の初音のそれのやう。

二人は、「見渡す野べの秋景色——七草千草花咲きみだれ——」歌ひながら家に歸るのである。

風呂の烟はすうと、家の後に立ち登つて居る。

（評）多少の情景見えたり、人とす。

秀逸

○秋ぐさ

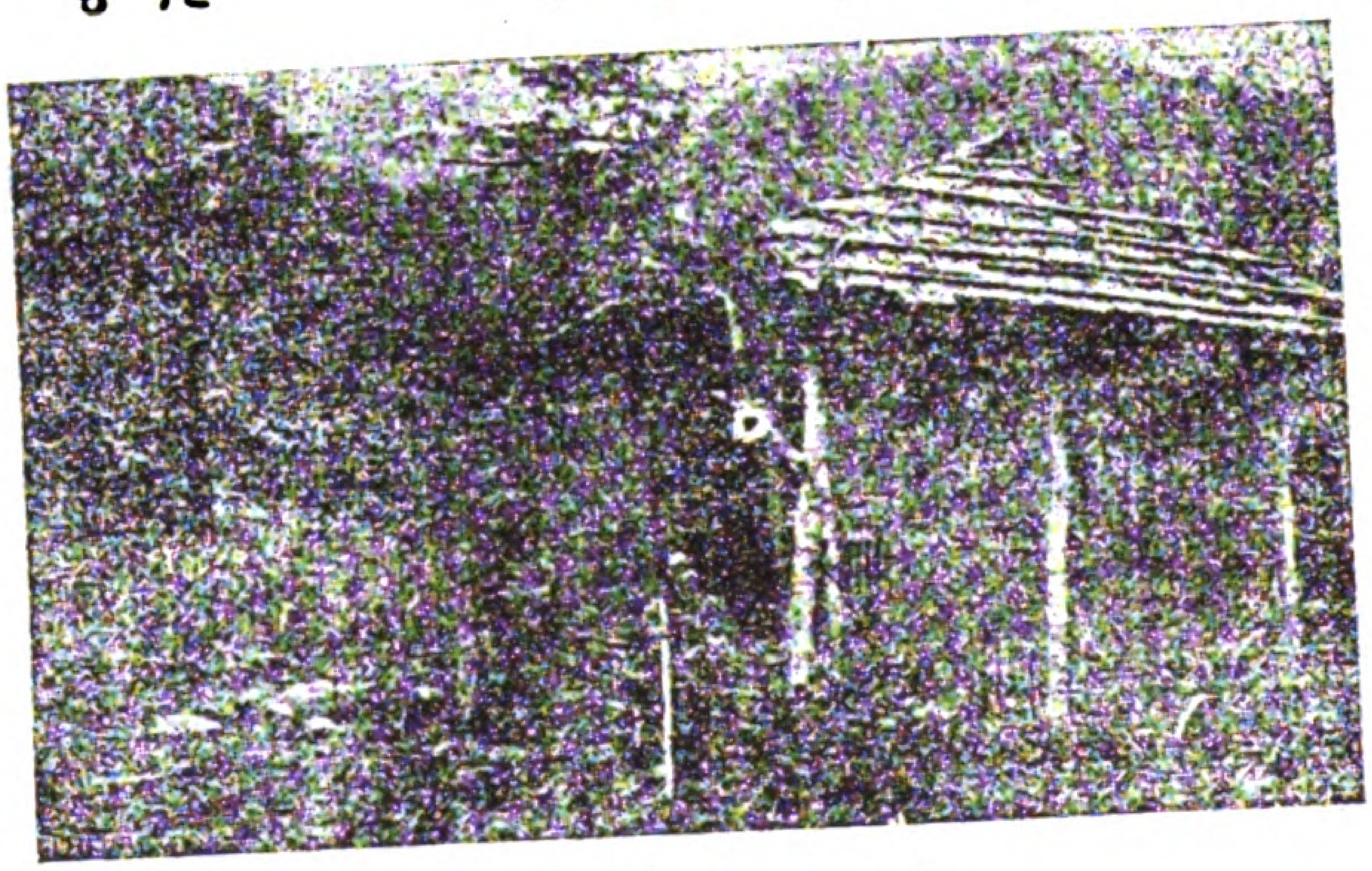
茨城縣新治郡高濱町東大橋　小泉はま子

（一）

荻の下風身にしむ秋は來ぬ。あはれ、今日此の頃都の秋はいかならん。小春日和のうらゝかさに、そゝのかされつゝ、慈愛いや深き母君、いとしきはらからと袂かいつらね、瀧の川のわたり紅葉の錦めでにしこともありたりき。小雨降る夜の長きをも知らで、つゞれさせてふ虫の音も、あはれとは露思はで、老いたまひし父母君の昔語り聞きつゝ。更かしゝ夜もありたりき。あゝかゝる事思ひつゝくれば、すてし浮世の、しのばるゝ事、いくたびか。

（二）

淡墨色したる森のあなたより、たえ〴〵聞えにし、恰も長き恨みをもらすが如き笛の音は、はたとたえ、いづ地ゆくらん、哀れげに鳴き渡る雁金。その數かぞふる間もあらせて、素ねづみ色したる暗き暮雲に影失せつ。折りしも、さつと吹き來る夕風に、時雨はらはらと降り出でぬ。杜のふもとの荒れはてし庵が寺にては、夕べのつとめするらし、木魚叩く音、何となくうち沈みて聞ゆなり。



吉野山西行庵

（三）

枯柳の根株あらひて流るゝ小さき溝の畔には、さびしげなる野菊、いさぎよくしかも何となくあはれ深き白萩、うすむらさきに咲き匂へる藤袴、おのがじゝほこり顔なるもうれしく、垣に沿ひてうす紅き花をは、青黑き濃くつやゝかなる葉影より出したる山茶花、築土にしげれる龍のひげの實の、るり色の玉つらねたるやうなる、青苔むし蔦かづらまとへる燈籠の傍へなる、南天の實の赤ら熟したる、柿の實さはらば落ちん許り見事なるなど、中々をかしき風情にて、野邊山邊の景色におとるべしやは。

（四）

荒庭の散りしく落葉に、さゝやく夕暮の風、いとさびしく吹きゝて、悲しげなる野寺の鐘は、ひゞき渡りぬ。野菊の白きがわびしげに咲ける破垣に植ゑられし

柿の木の、霜に色どる眞紅の枯葉二つ三つ。鈴なりに實の落ちん許り熟せるを、ついばまむとて、友なき鳥一羽、門にきて鳴くこと一しきり。何におどろきてか、あわたゞしくとびたちて、羽風に、くされたる實一つ落しつゝ、はるか小山の黒く澱き、森をば指して急ぎゆく。影は蒼茫たる夕べの色につゝまれて、見え判ねども、しわがれし聲して鳴くは、暗を縫ひつゝ聞ゆ。椽の下にては、こほろぎの、はや秋の夜の長き調べを、奏で初めつゝ。

（雨評）言の葉の露やさしくあはれににほひたる秋草に候かな。

○胡蝶塚

和歌山市道場町入　奈加谷　とも子

去りぬる年の秋、一羽の胡蝶ありけり。妾が文讀む窓に迷ひきて、やがて机上なる香も失せし白菊にうち休らひぬ。

あはれ花より花に舞ひてし時の麗しの羽衣は、見る影もなく破れたり、オヽあはれの蝶よ、日も暮れかゝるに、なほ去りげもなく、白菊を抱きたるまゝ……。

あくる日起き出でゝ、蝶や如何にとうち見れば、蝶はありけり。されど、ア、されど、白菊を抱きて終に眠れるなりけり。あはれの蝶よ!! 掌にのせて呼吸吹きかけても見しが、甲斐はなかりき。

ア、蝶は逝きぬ、白菊を抱きて逝きぬ。オヽ眠せよ、蝶!! 眠せよ蝶!! しかして、美しき星のみ國に産れ出でよかし。げに此の世は穢れ果てしぞ。春くるも、再び此の世に出づるなよ。花何かせむ。

かくて、蝶と白菊と共に、妾は紅絹に包みて、庭の片隅に葬りぬ。小さき土饅頭をつきて、胡蝶塚となむ。

今年も秋は父なき淋しき宿に來たりぬ。胡蝶塚は其のまゝ立てり。而も、夜な〳〵あはれ虫の音の、いと悲しき聲して、塚を弔ひ、妾を泣かしむなり。

（雨評）何んとなう可憐にすてがたきは、名の胡蝶塚のみには候はざらむ。

○山遊び

秋田縣平鹿郡明見村字高山　佐々木貞子

仁者をまねぶとにはあらねど、おのがさが、痛く山を樂み、花のあした紅葉の夕、あくがれいでぬ時ぞなき。いにし七月の十日あまり七日の朝まだき、友どち二たり三たりそゝのかして、高寺山にものしぬ。木立いと深く、蔦根の茂れる道を、たどり〳〵てゆくに、いと

廣からなる山のかびに出づ。こゝは、日頃、人の話にきゝし六本松といふ處なめり。一處より六もとの松わかれいでゝ、四方にひろごり、枝さしかはして、日影を遮り、水無月の照る日も、夏の至らぬ處は、こゝならむ、と人毎にいふめるも、うべなりけり。げに木の根に腰うちかけてながめやれば、鏡が浦は、さながら眞澄鏡の如く澄み渡りて、いと淸らかなるに、釣舟の二つ三つ、白き帆かけて浮べるさま、いひしらずをかしきを、鳥海の高ねは、芙蓉の今しも花をひらきたるが如く、遥かなるみ空にうちそゝりて、手をのべなば、とゞかむばかりに見ゆ。西の方、日本海を見やれば、沖つ白波雲井にまがひ、渺茫として更にはてもなし。かゝる景色を見れば、心もおのづから莊大になりぬる心地して、孟子のいはゆる浩然の氣も養はれつべし。花紅葉のをりならば、をちこちさまよひありかんを、今日のてる日をいかゞはせむ、と木蔭さらて、友どちと語りかはせば、日頃の暑さも、うち拂はれたる心地して、凉しさいはん方なきを、まして、けふの如く、風うちそよぐ日は、漢人のいふなる仙境も、かくやとおしはかられて、いと樂しうなむ。あはれ、けふの一日をかくて暮らしたれど、心に得る所は、いぶせき伏屋の内に、扇うち使ひつゝ、一日二日暮さよせんには、まさりぬべし。

（兩評）筆すなほに文はよく整ひたり。たゞ新しきところなきををしむ。

○朝と晩（日記の一節）

靜岡縣小笠郡河城の里　桂　影子

朝＝朝毎に市場に通ふ駄馬の嘶き、銅羅聲張り上げて唄ふ馬子の俗曲、それも遥かに幽かになつて行つて、隣の下女が不作法に力任せに汲む車井の音、急しさうに門口に置いて行つた牛乳配達の鈴の音、まさかに寝ても居られず起床すると、東雲の空には、光淡い明星が眠さうに瞬いてゐる。またゝく空は淡紅の繪具を流したやうになつて、うす葡萄色に抹した一片の横雲が、高く拖曳ひて、そして、次第に輝々たる數萬條の光線は、洽く萬象を照射した。實に太陽が下界に勞働を促すべく昇つたのである。隣りの例の朝寝坊、今漸う漸う起きて柴垣の間から覗き見しつゝ、さも早いと云つた樣な得意顔。

晩＝今し西の峰に沒した夕陽は、餘光を山の端に射て、瞬一瞬に、赤に、黄に、紫に變じながら、何とも云は

れぬ綺麗な色彩を呈しつゝ、淡く沈んでしまつた。塒を求むる鳥の一群、後になり前になり、向うの眞黒な鎭守の森蔭にかくれてしまつて、後は寂莫。賤が伏屋の夕餉の煙、縷一縷、夕靄の裡に消え失せる、村端れ水淸い圯橋を渡り、露深い野徑を辿つて柴の門に歸る農夫の影漂乎。梢を渡る夕風冷やかに葉ずれの音淋しう、遠寺の鐘聲、一杵又一杵。

やがて玲瓏たるかげ靑穹に盈ちて、突然躍り出でた玉兎皎々。萬籟寂として靜かな山里、月は愈々澄んで夜は水の様、堀之内發貨物列車の響、只轟々として餘韻長う。

（評）しつかりとした筆見るべし。特にとりたてていふべきふしなきををしむ。

〇朝顔

神奈川　佐久間芳子

まがきの朝顔、咲く事やう／＼少なくなりて、花亦ちいさし。朝のけはひに取りし小鋏、そと伏せて、やをら庭下駄かるう、露をしだきて立ちよれば、地にさらばひしてみどりの葉がくれより、黄蝶一羽、わたゞしげに舞ひ立ちぬ。いづこへと見やる彼方、露をたわゝに咲きこぼれたる小萩がもとを去りもかねつゝ、高う低う舞ひめぐるなる。

咲き出でたるは五つ、濃紅の色ふかきは足許ちかう、瑠璃色なるも手屆くばかりの處に、うつぶきて咲けり。只一つ、眞白き花の、ひよろ／＼と上にのびしたる蔓の先にかゝりて、誇りかなる、たとへば世をすねたる若法師の、黄に紫に染めば染むべき靑春の身を、我れと我が責めて、ひたぶるにおのれをば世に高きものと思ひ上れるがごと、色は染ませじ塵にはそまじほこらしげのけしき。憎らしからざるが心憎うて、急ぎ文机のもとに立ち歸り、繪筆とり出て、まがきのほとりにうづくまりて、繪具とく／＼染めしは紫。人なつかしむ色とかきけど、さにはあらじよ、さにはあらじと心強う。されど、餘りに幼き我が振舞ひに、人もや見るとうら羞かしう、あつうなりし頬おさへて、立ちわづらひし後へに、忍びよる足音ひくう、ひとの手は吾肩におかれぬ。

（評）情叙は多少見えたり。何んとなうあだめきてきこゆるものあるをいとふ。

〇月の夜

鳥取市鍛冶町五七　上山千重子

三十一萬九千石の城の跡、そゞろ偲ばれる物見やぐらに、木の葉をはらふ秋の風たちて、神さびた久松山の懐から、そつと覗いた月の清さ涼しさ。薄綾絹を展べたやうな空には、一點邪雲なく、平和の靈氣がみちみちて、うたゝ我世の光榮を讃する人の子の聲は、月をしてはや輪廓正しい峰の濃みどりを離れしめました。げにさやけき光は凝りて滴りて、下界の露を生み出しさう、秋の月か、月の秋かの言も、こゝにはじめて肯づかれるのです。が、其の刹那、私はいひしらぬ胸ぐるしさを覺えました。それは外ならず、我が兄の上を案じたからで。あゝいとしの兄は――我が最愛の兄の君は、情けなや……先づ頃目を失ひました。この暖かい月光に、世は闇の手から救はれましたが、我が兄は再び光明を仰ぐ事が出來ませぬ、とはに闇に呻吟するはかなの子、あゝ今宵、月にそむいた彼の片頰の笑み、如何に淋しく悲しかつたでせう。よし征露の好紀念、名譽ある負傷とはいへ、前途多望の好士官を、むざむざ廢物にした戰爭のうらめしさ、私は斷腸の思ひがします。皎々たる月影は漸々中天にかゝりました。七坪の庭の秋色は、遺憾なく發揮せられて、秋の譜奏ずる虫の聲々、咲きみだれたる萩のまがきに絶えつ續きつ……。忙然と前庭をながめた時、兄は「笛を持て」と、私に命じました。

（雨評）末段少しくもの足らぬ心地す。

〇黄昏

松山市三番町九三　山脇幸子

……忽ちあらわるゝ戰場の光影……喇牧の斥騎三々五々……何分……中隊進め……付ケ劍……突ッ込メ……戰地の兄様が勇ましくお進みなさる指揮の强音に、目さむれば、身は青葉の下風涼しう吹き渡る裏庭のハンモックに、本を顔に覆ひながら、うたゝねの夢をむさぼつて居たのである。

ゴーン／＼とひゞき渡る夕暮の鐘の音……「早や暮れるのであろうか？……」と、やをら身を起して口すゝがんと立ち行けば、深江鮮な夕日は、小富士と港山との間に、綱もて引き落すが樣に沈んで行く。今迄氣の付かなかつた裏沼からは、水遊びに飽いたのか、滿艦飾の小舟をさげた二人の子供……「敏ちやん、軍歌でも唱うて歸りましようよ。」……「小砲のひゞき遠ざかる」、あとには虫も聲たてず……これからさきは知らないは……」

れぬ綺麗な色彩を呈しつゝ、淡く沈んでしまつた。塒を求むる鳥の一群、後になり前になり、向うの眞黒な鎮守の森蔭にかくれてしまつて、後は寂寞。賤が伏屋の夕餉の煙、縷一縷、夕靄の裡に消え失せる、村端れ水清い圯橋を渡り、露深い野徑を辿つて柴の門に歸る農夫の影漂乎。梢を渡る夕風冷やかに葉ずれの音淋しう、遠寺の鐘聲、一杵又一杵。

やがて玲瓏たるかげ青穹に盈ちて、突然躍り出でた玉兎皎々。萬籟寂として靜かな山里、月は愈々澄んで夜は水の様、堀之内發貨物列車の響、只轟々として餘韻長う。

（雨評）しつかりとした筆見るべし。特にとりたてていふべきふしなきをなしむ。

○朝顔

神奈川　佐久間芳子

まがきの朝顔、咲く事やう／＼少なくなりて、花亦ちいさし。朝のけはひに取りし小鏡、そと伏せて、やをら庭下駄かるう、露をしだきて立ちよれば、地にさらばひしてみどりの葉がくれより、黄蝶一羽、わたゞしげに舞ひ立ちぬ。いづこへと見やる彼方、露をたわゝに咲きこぼれたる小萩がもとを去りもかねつゝ、高う低う舞ひめぐるなる。

咲き出でたるは五つ、濃紅の色ふかきは足許ちかう、瑠璃色なるも手屈くばかりの處に、うつぶきて咲けり。只一つ、眞白き花の、ひよろ／＼と上にのびしたる夢の先にかゝりて、誇りかなる、たとへば世をすねたる若法師の、黄に紫に染めば染むべき青春の身を、我れと我が責めて、ひたぶるにおのれをば世に高きものと思ひ上れるがごと、色は染ませじ塵にはそまじほこらしげのけしき。憎らしからざるが心憎うて、急ぎ文机のもとに立ち歸り、繪筆とり出て、まがきのほとりにうづくまりて、繪具とく／＼染めなしは紫。人なつかしむ色とかきけど、さにはあらじよ、さにはあらじと心强う。されど、餘りに幼き我が振舞ひに、人もや見るとうら羞かしう、あつうなりし頰おさへて、立ちわづらひし後へに、忍びよる足音ひくう、ひとの手は吾肩におかれぬ。

（雨評）情趣は多少見えたり。何んとなうあだめきてきこゆるものあるをいとふ。

○月の夜

上山千重子（鳥取市錦町五七）

三十二萬五千石の城の跡、そゞろ偲ばれる物見やぐらに、木の葉をはらふ秋の風たちて、神さびた久松山の懐から、そつと覗いた月の清さ涼しさ。薄綾絹を展べたやうな空には、一點邪雲なく、平和の靈氣がみちみちて、うたゝ我世の光榮を讃する人の子の聲は、月をしてはや輪廓正しい峰の濃みどりを離れしめました。げにさやけき光は凝りて滴りて、下界の露を生み出しさう、秋の月か、月の秋かの言も、こゝにはじめて肯づかれるのです。が、其の刹那、私はいひしらぬ胸ぐるしさを覺えました。それは外ならず、我が兄の上を案じたからで。あゝいとしの兄は——我が最愛の兄の君は、情けなや……先づ頭目を失ひました。この暖かい月光に、世は闇の手から救はれましたが、我が兄は再び光明を仰ぐ事が出來ませぬ、とはに闇に呻吟するはかなの子、あゝ今宵、月にそむいた彼の片頬の笑み、如何に淋しく悲しかつたでせう。よし征路の好紀念、名譽ある負傷とはいへ、前途多望の好士官を、むざむざ廢物にした戰爭のうらめしさ、私は斷腸の思ひがします。皎々たる月影は漸々中天にかゝりました。七坪の庭の秋色は、遺憾なく發揮せられて、秋の譜奏ずる虫の聲々、咲きみだれたる秋のまがきに絶えつ續きつ……。忙然と前庭をながめた時、兄は「笛を持て」と、私に命じました。

（評）末段少しくもの足らぬ心地す。

○黄昏

山脇幸子（松山市三番町九三）

……忽ちあらわるゝ戰場の光影……喇牧の斥騎三々五々……何令……中隊進め……付ケ劍……突ッ込メ……

戰地の兄様が勇ましくお進みなさる指揮の强音に、目さむれば、身は青葉の下風涼しう吹き渡る裏庭のハンモックに、本を顔に覆ひながら、うたゝねの夢をむさぼつて居たのである。

ゴー〳〵とひゞき渡る夕暮の鐘の音……「早や暮れるのであろうか？……」と、やをら身を起して口すゝがん立ち行けば、深江鮮な夕日は、小富士と港山との間に、綱もて引き落すが様に沈んで行く。今迄氣の付かなかつた裏沼からは、水遊びに飽いたのか、満艦飾の小舟をさげた二人の子供……「敏ちゃん、軍歌でも唱うて歸りましようよ。」……「小砲のひゞき遠ざかる！、あとには虫も聲たてず……これからさきは知らないは……」

熱する樣な落日が、荻の小垣に半ばかゝつた頃には、臙脂の雲華かにゆるふ長う、沼の深碧に映ずるのであつたが、黄昏の風が、葦の葉末、沼の面を撫てゝ行く瞬間、失色の雲は蠻神の行列と化して潜山の一角に失せて行く……灰色全く下界の萬象をつゝめば、沼越に燈火二ツ四ツ……ソレが流星の樣に長う〳〵水にゆらいで、葦ふく風に崩るゝあたり、艫の音、欸乃なども聞えて來る。

暗に一聲五位なき渡れば、世をはかなむ虫はなきやむ。折りから、妙に妻翠の響、「天つ乙女」の調べゆるやかに、沼つゞきの森から洩れて來るのである。

かくて跫音蹂躙の巷に叫びし罪惡も、醜態も、皆この暗黒の内に埋りをはつて、希望の光明、平和の聲は、燈影琴瑟と相和して行くのである。

（雨評）一篇の文としては、少しくまとまりの乏しき心地す。

○雪の日

備後國神石郡
妙松村愛宕社　大内安子

下女が雨戸を繰る音に目を覺まし、枕邊の時計を見れば針は八時を過ぎて居る。南無三寢すごしたりと、起き上るや否や、楊子を片手に飛び出せば、これはしたり、われわれが夢を見た間も、天は休まなかつたと見えて、全世界は一面に白布を以て覆はれて居る。つい昨日まで枯葉が風にひらひらと、吹かれて居た芝山も、枯木が立つた樣な林も、つい書齋の前に顯はれて居た赤禿の山も、今朝は一樣に白い。それよりまだ面白いのは、稻株の上に降つて居る雪が、丁度豆の粉をつけた牡丹餅の樣である。牡丹餅と云ふので思ひ出したは馬糞の上に雪の降て居るのも面白いでしようと、一寸道路の方を見まさば、案の如く馬糞が積むだ上に、雪が降つて居る。それが、丁度鉢に梨を盛り白布を覆ふた樣です。

禿山の麓の芋畑に案山子がある、其れに雪が懸つてあるのが、恰も花嫁が夫婦盃のときの服裝そのまゝです。その畑から山へ眞一文字に跡があるのは、未明里の狩人が、犬と山に行たのでしよう。

それはともかくもこれが白粉であるなら、元來色の黒い自分の顏へ塗ても見まほし。若し銀であるとすれば、お錢のないこの頃、銀貨でもこしらへて、洋行でもして見たいもの、などとそれからそれへ、あられもないことのみ思ひ居ると、學校の時鐘が九時を報じました。オヤまあ早や九時とは、今からすぐ登校したつて、とても駄目、そして、今朝は漢文なのよ、妾漢文は大厭ひ。思ふまま雪を賞めましよう。一ツ俳句でも唸りましようかと、ありもせぬ詩囊を絞りましたが、とても駄目、俳句になりさうにはありませぬ。

雪の道眞一文字に犬の跡。

（雨評）女子の文としては、ちと風雅にすぎ申し候。

短歌

佐々木信綱選

天

○

只一たび京にのぼりしものがたり
今もかたるよ沖のしまもり

上總山武郡千代田村　春光女史

〔評〕老ひたる島守のやさしげなる面わ目の前にうかびいづる心地す。

地

○

京へ一里露わけて行く花賣が
小唄すゞしき朝月夜かな

越前武生町蓬來二五　内田きみ子

〔評〕花うりの聲のうつくしき如くうつくしきうた也。

人

○

穗すゝきに秋雨寒き夕野みち
靄に消えゆくとむらひのむれ

在東都　白ゆり

〔評〕さびしき雨　さびしき夕野、さびしき葬送、さびしき歌。

秀逸

○

聲低う涙ながらにのたまはず
みさとし悲し夕ぐれの窓

駿河　かほる子

○

薪うりて買たる酒をいたづきの
父にといそぐ秋の山道

栃木縣　秋山のぶ子

○

君來ませ笛を手にして君來ませ
月影清き若竹の宿

弘前市　佐野光子

○

北に行く雁が音寒き夕まぐれ
心よはくも君おもふかな

京都　田島かほる子

○

白萩に小雨そぼふる宵の窓

越後　宮島薰子

歌思ひつゝ夢に入るかな　　本郷　田中潮子

○

菊挿せど菊は語らず萩にとへど
萩物云はず君はいまさず　　築地　浪子

○

志千里の海をはしれども
身は荒磯に燈火まもる

選者曰、誰かの歌にて見し心地す、此歌のみならず、他の歌集雑誌等にありし歌を、さながら投稿せらるゝ人少なからず、わが心より考へ出でぬ歌を投稿するはいかなる心にかあらむ。

呉市　堀江茂子

○

ほかけさして小萩亂るゝ丸窓に
源氏よむ人ゑうら若き　　岡田　古屋ちか子

○

我袖になびくは君が心かな
み墓の前の糸萩の花　　新潟　大崎秋子

○

白萩の花はすがれし夕野みち
雲にうするゝ鐘の音寒き　　豊後　平山良子

○

佛壇のみあかし細く夜は更けて
夢のまに／＼稚兒なき叫ぶ

おもひあるむねをいたきて天をおふげば
星かゞやきぬ夕やみの窓に　　岡山　三村ます子

○

銀燭の光まはゆき春の宵
舞の扇に花ひるがへる　　澁谷　村田いと子

○

君がめでてし黄菊白菊今日かくて
君が御墓にさゝげてんとは　　麻布　印東叔子

○

火にせんの詩集抱きてたゝずめば
落花の窓に春の日沈む　　府中　徹子

水は明び烟さまよふ水楼の下を流るゝ夕月の彩　　紀伊　花香女史

●

紅葉にはえし夕日のかげきえて燈見ゆるをちの山本　　紫子

●

皿一つながく流れて風涼し白百合ゆらぐ夕ぐれの野路　　丹後　的場すみれ

●

かき根近くすだく蟲の音たえ／＼にふく風さむき秋の夕暮　　大和　小山瓦子

●

しばしまて月影おほふ村雲もはれてさやけき光もるらん　　上毛　露竹

●

今更に泣かじ思はじなげくまじのこれる此子おほしたてまし　　住友　登喜子

虫の音に爽新らしき詩得たり宵逍遙の白萩小道　越後　宮島薫子

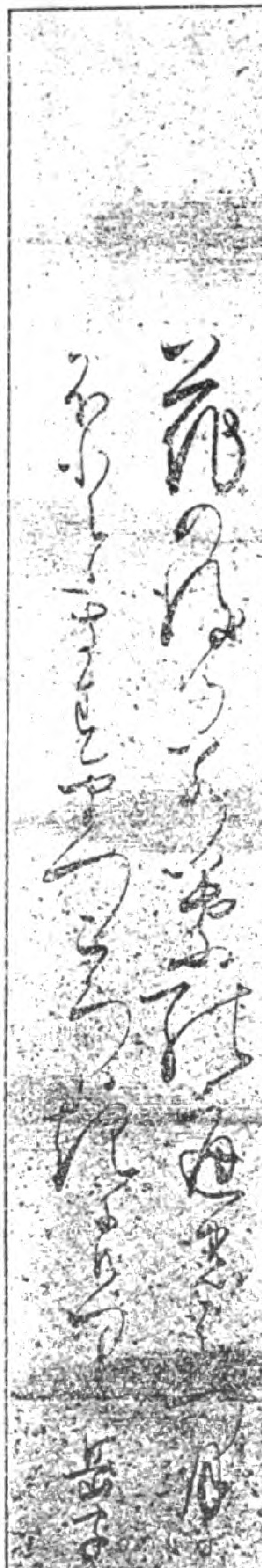
まひる時小鳥とび立ち山茶花の散る小春日の賤が家の庭　岡山縣　おちば女史

つめたうも夕日うするゝ江のほとり人なき舟に鶺鴒のなく　新がた　たむら子

植ゑおきしあるじなくとも咲く菊のはな見るたびに袖ぬれにける　神戸　輝月女

亡き友のやさしうつしゑ見る毎にありし昔の忍ばるゝかな　神戸　百合子

松平子爵夫人
岳子筆



村一村いつしか靄につゝまれて靜かにくるゝ秋の夕ぐれ　熊本　平岡のぶ子

たそがれの小河のすゑに橋みえて楓の紅葉に秋風ぞ吹く　越後　三浦美以子

母は衣我は文讀む秋の夜を燈火近う虫の聲する　美濃　碓井くに子

おくつきにぬかづく秋の夕まぐれ君が靈魂か白き蝶飛ぶ　東京　西野春世

旅僧の野みちを辿る夕まぐれ三ケ月ほそく蟲の音ひくき　越後　前崎照子

友せんの袖をいたきて萩小徑花のやうなる人美しき　德島　城戸富美子

ながれゆく清水の面に三つ二つ落ちてにほへる峯のもみぢ葉　日本橋　栗山霞子

めされたるわがせかへらずこの秋を庭の白菊淋しう咲きぬ　群馬縣　花蓮子

力なき秋のいり日を背にあひて一人まうつろうぶすなのもり　群馬縣　きみ子

夕日さす汀の小舟人なくて鶺鴒一羽秋風になく　茨城　鈴木たつ子

いつの間に牛の牛を過しけんおこたる窓を落葉たゝくも　横濱　江草すゑ

なき人を祭る門の送迎火の烟もきえて更くる夜牛かな

○

さはぎつる世はしづまりて今はたゞ兄の凱旋を待つぞ嬉しき　日光町　若葉子

夕園に若き薇吟の聲もれて白き芙蓉の露に亂るゝ　神戸　たま子

折にふれて

牛ひきて家路にいそく里人のすかたも寒し秋の夕くれ　京都府　松田ゆき

牧の子の笛ほがらかに野は暮れて靄に消ゆく追分の節　神戸　松子

花召せのやさしき聲をつゝみゆく都大路の朝かすみかな　甲斐　なさなご會

かへり行く秋の別れにたへすとや聲ふりたてゝきりぐす鳴く　備中　稻本みどり

短歌

●　　東京郡　こてふ
糸はぎの花ほころびし袖垣につゞれさせてふ虫ぞなくなる
●　　仙臺　山縣幸子
病む母のみとりに秋の夜は更けて小窓にさむき所燕築の月
●　　大阪　板垣重夢
秋の夜を征人憶ふ詩なりて窓にほのめく七日夜の月
●　　丹後國　的場すみれ
高樓に小鼓ならす興そゞろ月影白う欄に流るゝ
●　　薩摩　幸枝
引すてし小田の鳴子のなはの上におく霜白く秋ふけにけり
●　　都々城　しま子
我か宿も兄君います學び屋も同しくてるか窓の夜の月
●　　神奈川　たけ子
ものゝふ身は故郷に歸るとも心は殘る樺太の北
●　　大和　白百合子
おしなべて野は夏草になりに鬼斯く駒の見えわかぬ迄
●　　京都府　かすみ子
君なくば我れさへなくばたえ間なきかゝる思のあらざらましを
●　　埼玉縣　長澤ひで子
うなたるゝ野菊に雨の細うして虫の音やさし野邊の細道
●　　姫路　町田英子
大廣間かなる風さへなつかしく咲きこぼれたり瓶の白菊
●　　福島縣　星ちよ子
秋風に動ぐ川邊の蘆の花花ほのしろし三日月の影
●　　福島縣　天野星子
たづれきて猶ありやとおとなへば月照る園に虫の音しけき
●　　美濃　白井安子
鬱し給を取り出しては嘆く散在りし昔をくりかへしつゝ
秋別　　美濃　宮部俊子
月の夜を君は語らず吾言はず分れの涙たゞ袖ぬらす
夏月　　美濃　村井武子
夕立の晴れし小庭の松が枝に涼しく宿の夏の夜の月
月　　大阪　はな子
手向けたる尾花白萩さながらに机にゑがく月のさやけさ
稲妻　　名古屋　原田こと
秋の田の稲葉における露にさへやどりかれたるいなつまの影
三日月　　磐南　原野女史
吹きおろす嵐はやみて涼しくも木の間をもるゝ三日月の影
●　　山梨縣　ふと
よき人と京に見知りて嵯峨の野に又相見ゆる夕月夜かな
●　　常陸　川並汀柳子
露おひし睫か少女の影きえて萩原一里日は暮れんとす
●　　京都　ゆき子
いたづきに臥す友の上思ふかな群鳥なく秋の夕暮
●　　岐阜　山田はぎ
夕暮の雲うつくしき灘野をひな唄清ふ馬子の過ぎ行
秋夜　　筑後　大島菊子
秋さびし此山里にひとりねの枕に通ふ鈴虫の歌
雁　　鳥取　上山千重子
明日はとく父が御柩送る夜を月より落ちて雁なき渡る
●　　薩摩　吉川よし子
秋風は身にしむ袖に吹かれどもさやかになれる居のかげ哉
●　　伊豆　野澤英子
ともすれば人のうささへ身につみて思いよわるし身にもあるかな
●　　長野　山田くに子
おどりやみし月の古寺鐘消えて森の墓原灯ゆらく
●　　大阪　福子
しと／＼と落葉にあたる雨の音聞くだに淋し秋の山里
●　　津　楢はる子
影まだき菊の小庭のためらひぬ手折らば露のこぼれはてんと
秋の夜　　福島　高松文子
さらでたに悲きことと寒き秋の夜にきぬた打つなり里の賤の女

● 能登 花霞女史

亡き人の柩を送る秋の夕べ月影さむくあしの花ちる

● 藤代 愛河

くだけたる仇のおほふれあらはにて月影すこく夜ぞ更け渡る

● 豊前 田淵かめ子

思ひあまり君がうつしゑとりいでゝひとりながむる秋雨の窓

● 上毛 月岡芳枝

さなきだと淋しき秋の明暮を別れし友のおとづれもなき

◉ 和知 岡子

紅葉の赤くもみづる谷みちにをり〳〵もるゝ山がらの聲

● 廣島 廣子

ますらをのかちどきあげてかへる日を咲き揃ひけりきのゝしらぎく

天長節 新潟縣 中林ひで

外つ國の人もひとしく祝ふらめ我が大君のあれまし日を

◉ 靜岡縣 桂影子

病みませる母慰めんよしもがなと手折りて贈る白菊の花

月 南千住 春子

世のうきも我が身のうきも慰めて月は嬉しき友にぞありける

● 肥後 幽谷樵女

夕ぐれのそゞろあるきに君とあひて言葉もなくて別れける哉

折にふれて 下野 濟子

なやみある胸を抱きて發す身か秋の千草にすだく虫の音

秋月 上毛 尾高女史

八千草の花さま〳〵の秋の野に光りさやけくてらす月影

百波の夏月 千葉縣 石田岩女子

夕立の名ごりも見えて若竹の葉末をてらす月の涼しさ

● 長崎縣 澁江みす子

散り敷ける落葉の上の二ッ三ッ栗の實見ゆる森の下道

● 神戸 木田すみれ

ぶだうばに月影ゆるく南窓ともし火かゝげ秋の賦作る

秋雨 姫路 松下君子

こほろぎのこゑ絶え〳〵に古寺の芭蕉を破る秋雨のおと

● 兵庫 柳田のぶ子

白ぎくを手折りて露のくだけしにいたくも悔ゆる野のあした雲

虫 牛込 遠藤義郎

古寺に亡父思ふ夕まぐれ物淋しくも松虫のなく

● 周防 鶴子

諸共に眺むるうれしもろともにかたるぞ樂し十五夜の月

● 長門 花都豆

たまはりし君がうつしゑ手になしてひとり物思ふ秋の夕ぐれ

折にふれて 京都府 かすみ

露とのみまがふ櫻の盛りには心も空になりにけるかな

● 千葉縣 白菊

露かへる夕べの空に星見えてさ庭に消し白菊の花

蛙 小倉 石井青柳

影うつる池の柳の下かげにふし面白くなく蛙かな

木枯 京都 渡部愛子

きつれなく聲ものすごき奥山に枝ふきしほる夜半の木枯

● 備前 小木あさひ

よき人に會はずばとはに香を秘めよまだ若なる深澗白百合

紅葉滿山 群馬 富田ユリ子

下葉まで時雨にもれし木々もなしみねもふもとも色をつくして

立秋 島根縣 千代廼千歳

いつの間に夏やゆきけん草むらにつゞれさせよと告ぐる虫の音

朝の庭 周防 岡部佐保

靈光ある朝の庭に下り立ちて百合の白綾綺の肌にうけぬ

● 岐阜縣 千秋

浮びてはかくろふ鯉の影見えてひともとゆらぐ河骨の花

菊 宇都宮 金澤保子

八千草の枯れしま垣にほゝゑみてあるじかほにも匂ふ白菊

● 土佐 秋月廣江子

ふりかへり又ふりかへり三度まで讀みてもし見よ奥津城の御名

● 南そう　森靜緒女史
筑波嶺の嶺吹きおろす風さえて千鳥なくなり刀根の川つら
● 向島　千惠子
枯尾花夜風にそよぐ荒野より月かげ細く虫なきしきる
● 新潟　小林國子
夕暮れや物思はしうなだれし秋海棠に雨細うふる
◉ 福岡縣　末木すみ
月みれば去年の今夜の忍ばれてこの世にまさぬ人戀ひまする
● 茨城縣　秋山隆子
三とせぶり君が奥都城今日訪へは好みましつる紫陽花のさく
● 常陸　酒樂つれ子
ふるさとの亡き母思ふ夜もすがら心ありげに雁鳴き渡る
● 能登　池野白百合子
野分やみて折れたる花に破垣に秋の日うすう虫の音もせぬ
萩　下野　かほる子
破がきをつくろふ人もなき宿に花の香ゆかし白菊の花
暮れゆく秋　近江　始子
夕日さす秋野いそぐ旅僧の袂とゞめて白萩こぼるゝ
◉ 愛媛縣　斯波入千草
雁の夕べの森に消ゆる見えて三日月あわく産土の森
● 長門　梅田禾子
故郷の母病みますの夢さめて物思ふ夜をかり低うなく
● 和歌山　奈加谷とも子
庭の隅にくれ殘りたる白菊をなほ去りかねて舞ふ胡蝶かな
● 香川縣　吉田益子
さながらに雲とは見へしみ吉野の山の櫻の花吹雪する
秋の山　靜岡　淺野悠子
山に攀ぢて秋を興がる里の子の歌面白し木靈返しに
螢　神戸　上田輝子
夕やみにかへるさいそぐ少女子をみちしるべしてゆく螢
秋　富山　河上すみれ子
ほろ〳〵と袖にこぼるゝ萩の露夕かなしき淺ぢふのやど
● 淡路　日向春子
さらばとて別れを告ぐる門の邊の袖にみだるゝ白萩の花
● 東京　石井百悦子
露深き野末にすだく蟲の音は月より外にきく人もなき
◉ 大分縣　白石拾松子
飢に泣く兒をすかしつゝ乳貰ふと急ぐ夜道にあられたばしる
秋海棠　山口縣　村田みさを
尺八の音のきこゆる庭に火影さして秋海棠に雨ふりそゝぐ
● 信州　岩岡花子
秋の虫淋しき門邊君戀へはかすかにひゞく山寺の鐘
● 大阪　田中常子
天降ませし秋の女神は野にませり一日仕へて歌授からむ
● 上毛　綠女子
夜もすがらすさぶ嵐もきゝなれて夢圓なる山かげの庵
● 上總　紅樹女
四比利亞に仇と戰ふ夢さめて起床喇叭の聲さへ渡る
● 上サ　齋藤武子
大刀根の流のおとも冴ゆる夜を胸にしみ入る船唄の聲
● 千葉縣　小川梅江子
やむ母の藥もとめてかへる夕べ霧ひやゝかにしらぬ鳥なく
● 南總　小川芳枝子
夕ぐれを鐘の音ゆるう流れきて紅葉ほろ〳〵風なきに散る
● 中西歌子
白糸の瀧も實にそめなして峯のもみぢ葉夕日たゝさす
秋かぜ　神奈川　黒川まき
巨刹やこゝに大杉もの古りて餘なき欄に秋のかぜ吹く
◎ 越後　三浦榮子
病癒えてそゞろをりたつ庭の面に露の香たかし白菊の花
● 陸前　鈴木幸子
戸に凭りて何とはしらず寂しらの涙を吹くよ秋の夕かぜ

鳴子

大阪 小西奈良枝

鳴子引く音も悲しく身にしみて秋風渡る小田の夕ぐれ

上毛 千代子

●

小鹿なく聲もしめりて村雨に淋しさそふる秋の山里

近江 栗原蔦子

●

去年の今朝君と別れし板橋に霜白うおきて鶺鴒のとぶ

備中 稲本みどり

菊

野にさけヽ千草の花の色あせて籬の菊に秋は殘りぬ

靜岡 樹雅女史

●

おく露に朝日の影のさしそひて咲き亂れたる夏菊の花

澁谷 牧遊

山口日本派行理事

今関淑子筆



曉鐘

そよ々と吹く秋風にひゝくなりあるやなしやのあかつきの鐘

奈良縣 衆迎女史

●

初風にもろくもやれし蝶の羽を今宵寂しく月のてらせる

磐城 佐久間[illegible]子

初霜

白梅の咲やとばかり冬枯の木々の梢にふれる初霜

奈良縣 瑞坂しげ子

●

仰き見れば千里も見ゆる月の影が兄が面影しのばるゝかな

松山 山脇幸子

●

泣かばやの胸をおさへあつき々々情の言葉きくぞ切なき

下總 中村よしえ

折りにふれて

寒菊の花に氷れる露うけてさびしき窓に歌筆とりぬ

小石川 宮本幸子

古戦場

武士のはかなく消えし跡とへば夕べ悲しくくつわ虫なく

飯田 栞[illegible]子

折にふれて

秋風にうるむ瞳をそと投げて人のうつしゑ手にとりて見る

伊豆 加藤多米子

●

ゆけど々々まはぎ白萩女郎花尾花の末に夕月の影

金澤市 大塚なみ子

●

露ふみてよべ虫聞し草小路倒れ乍らに撫子のさく

大阪 かすみ子

秋の夕

さびしさやなき母しのぶ此夕べ衣手寒き秋風ぞふく

美作 竹内みどり女

●

月見れば昔の今宵偲ばれて又かへらぬ昔戀しさ

千葉縣 長谷川みち子

●

萩の花ほろ々々ちりて母君のみ墓を蝶の舞ひめぐる哉

上總 植竹春霞

●

秋風も心して吹け咲く萩のはなのかさしの露やちらなん

靜岡縣 早苗女史

●

船頭の調みごゑ高う唄ひ行きぬ松葉こぼるゝ月の眞砂路

豊後 平山真子

●

星一つ北に流れて消へ失せぬ筑紫大野は風寒うして

大阪 富永才子

●

鶴井よりみなぎりおつる大瀧ににしきをあらふ秋の山ひめ

下野 さたゐ子

白菊

一枝は父のみ墓に一枝は病みます姉に白菊の花

短歌

●
來はぎの花ほころびし籬垣につゞれさせてふ虫ぞなくなる　東京　郭こてふ

●
病む母のみとりに秋の夜は更けて小窓にさむき芭蕉葉の月　仙臺　山縣幸子

●
秋の夜を征人憶ふ詩なりて窓にほのめく七日夜の月　大阪　板橋靈夢

●
高樓に小鼓ならす興そゞろ月影白う欄に流るゝ　丹後國　的場すみれ

●
引すてし小田の鳴子のなはの上におく霜白く秋ふけにけり　薩摩　中枝

●
我か宿も兄君います學び屋も同しくてるか望の夜の月　都々城　しま子

●
ものゝふ身は故郷に歸るとも心は殘る樺太の北　神奈川　たけ子

●
おしなべて野は夏草になりに鬼斷く陶の見えわかぬ迄　大和　白百合子

●
君なくば我れさへなくばたえ間なきかゝる思のあらさらましな　京都府　かすみ子

●
うなたるゝ野菊に雨の細うして虫の音やさし野路の細道　埼玉縣　長澤ひて子

●
大廣間かなる風さへなつかしく咲きこほれたり瓶の白菊　姫路　町田英子

●
秋風に動ぐ川邊の蘆の花花ほのしろし三日月の影　福島縣　星ちよ子

●
たづねきて露ありやとおとなへば月照る園に虫の音しげき　廣島縣　天野星子

●
送し給を取り出しては嘆く哉在りし昔をくりかへしつゝ　美濃　白井安子

秋部　美濃　宮部俊子

月の夜を君は語らず吾言はず分れの涙たゞ袖ぬらす

夏月　美濃　村井貞子

夕立の晴れし小庭の松が枝に涼しく宿の夏の夜の月

月　大阪　はな子

手向けたる尾花白萩さながらに机にゑがく月のさやけさ

稻妻　名古屋　原田こと

秋の田の稻葉における露にさへやどりかれたるいなつまの影

三日月　碧南　原野女史

●
吹きおろす嵐はやみて涼しくも木の間をもるゝ三日月の影　山梨縣　ふと

●
よき人と京に見知りて嵯峨の野に又相見ゆる夕月夜かな　常陸　川並汀柳子

●
籠おひし賤か少女の影きえて秋原一里日は暮れんとす　京都　ゆき子

●
いたづきに臥す友の上思ふかな群鳥なく秋の夕暮　岐阜　山田はぎ

●
夕暮の榮うつくしき那須野をひな唄消ふ馬子の過き行

秋夜　筑後　大島菊子

秋さびし此山里にひとりねの枕に通ふ鈴虫の歌

雁　鳥取　上山千重子

●
明日はとく父が御柩送る夜を月より落ちて雁なき渡る　薩摩　吉川よし子

●
秋風は身にしむ稲に吹かれどもさやかになれる星のかげ哉　伊豆　野澤英子

●
ともすれば人のうささへ身につみて思いよわるし身にもあるかな　長野　山田くに子

●
おどりやみし月の古寺鐘消えて森の裏原灯ゆらく　大阪　稻子

●
しと／＼と落葉にあたる雨の音聞くだに淋し秋の山里　津　橋はる子

影まだき菊の小庭のためらひぬ手折らば露のこぼれはてんと

秋の夜　福島　高松文子

さらでたに悲きこと繁き秋の夜にきぬた打つなり里の賤の女

● 能登　石萱女史
亡き人の柩を送る秋の夕べ月影さむくあしの花ちる
● 藤代　愛河
くだけたる仇のおほふれあらはにて月影すごく夜ぞ更け渡る
● 登　前田潤かめ子
思ひあまり君がうつしゑとりいでゝひとりながむる秋雨の窓
● 上毛　月岡芳枝
さなきだに淋しき秋の明暮を別れし友のおとづれもなき
● 和知露子
紅葉の赤くもみづる谷みちになり〳〵もるゝ山がらの聲
● 廣島　露子
ますらをのかちどきあげてかへる日を咲き揃ひけりさのゝしらぎく
天長節　新潟縣　中林ひで
外つ國の人もひとしく祝ふらめ我が大君のあれましゝ日を
● 静岡縣　桂影子
病みませる母慰めんよしもがなこ手折りて贈る白菊の花
月　南千住　春子
世のうきも我が身のうきも慰めて月は嬉しき友にぞありける
● 肥後　幽谷櫻女
夕ぐれのそゞろあるきに君とあひて言葉もなくて別れける哉
折にふれて　下野　濟子
なやみある胸を抱きて發す身か秋の千草にすだく虫の音
秋月　上毛　尾高女史
八千草の花さま〴〵の秋の野に光りさやけくてらす月影
百波の夏月　千葉縣　石田岩女子
夕立の名ごりも見えて若竹の葉末をてらす月の涼しさ
● 長崎縣　盛江みす子
散り敷ける落葉の上の二ッ三ッ栗の實見ゆる森の下道
● 神戸　水田すみれ
ふだうばに月影ゆるく南窓ともし火かゝげ秋の賦作る
秋雨　姫路　松下花子
こほろぎのこゑ絶え〳〵に古寺の芭蕉を破る秋雨のおと
● 兵庫　柳田のぶ子
白ぎくを手折りて露のくだけしにいたくも悔ゆる野のあした哉
虫　牛込　遠藤義郎
古寺に亡父思ふ夕まぐれ物淋しくも松虫のなく
● 周防　節子
誰共に眺むるうれしもろともにかたるぞ樂し十五夜の月
● 長門　花都　瓦
たまはりし君がうつしゑ手になしてひとり物思ふ秋の夕ぐれ
折にふれて　京都府　かすみ
露とのみまがふ櫻の盛りには心も空になりにけるかな
● 千葉縣　白菊
雲かへる夕べの空に星見えてさ庭に消し白菊の花
蛙　小倉　石井青柳
影うつる池の柳の下かげにふし面白くなく蛙かな
木枯　京都　渡部愛子
きつれなく聲ものすごき奥山に枝ふきしほる夜半の木枯
● 備前　小木あさひ
よき人に會はずばとはに香を秘めよまだ蕾なる深山白百合
紅葉滿山　群馬　富田ユリ子
下葉まで時雨にもれし木々もなしみねもふもとも色をつくして
立秋　島根縣　千代延千歳
いつの間に夏やゆきけん草むらにつゞれさせよと告ぐる虫の音
朝の庭　周防　岡部佐保
靈光ある朝の庭に下り立ちて百合の白綾綸の肌にうけぬ
● 岐阜縣　千秋
浮びてはかくるゝ鯉の影見えてひともとゆらぐ河骨の花
菊　宇都宮　金澤保子
八千草の枯れしま垣にほゝゑみてあるじかほにも匂ふ白菊
● 土佐　秋月廣江子
ふりかへり又ふりかへり三度まで讀みてもし見よ奥津城の御名

●筑波嶺の雪吹きおろす風さえて千鳥なくなり刀根の川つら　南そう　森野諸女史

●枯尾花夜風にそよぐ荒野より月かげ細く虫なきしきる　向島　千惠子

●夕暮れや物思はしううなだれし秋海棠に雨細うふる　新潟　小林國子

◉月みれば去年の今夜の忍ばれてこの世にまさぬ人戀ひまする　福岡縣　末木すみ

●三とせぶり君が鬼怒城今日訪へは好みましつる紫陽花のさく　茨城縣　秋山匯子

●ふるさとの亡き母思ふ夜もすがら心ありげに雁鳴き渡る　常陸　酒樂つれ子

●野分やみて折れたる花に礎垠に秋の日うすう虫の音もせぬ　下野　かほる子
菊

蚊がさをつくろふ人もなき宿に花の香ゆかし白菊の花　近江　紬子
暮れゆく秋

◉夕日さす秋野いそぐ旅僧の秋とゞめて白萩こぼるゝ　愛媛縣　斯波入千草

●雁の夕べの雲に消ゆる見えて三日月あわく鹿土の森　長門　梅田秀子

●故郷の母病みますの夢さめて物思ふ夜をかり低うなく　和歌山　奈加谷とも子

●庭の隅にくれ殘りたる白菊をなほ去りかれて舞ふ胡蝶かな　香川縣　吉田益子

◉さなからに雲とは見へしみ吉野の山の櫻の花吹雪する　武岡　淺野椰子
秋の山

山に響ぢて秋を興がる里の子の歌面白し木靈返しに　神戸　上田輝子
萩

夕やみにかへるさいそぐ少女子をみちしるべしてゆく螢　富山　河上すみれ子
秋

●ほろ〳〵と袖にこぼるゝ萩の露夕かなしき護ぢふのやど　淡路　日向春子

●さらばとて別れを告ぐる門の邊の袖にみだるゝ白萩の花　東京　石井百悦子

●露深き野末にすだく蟲の音は月より外にきく人もなき　大分縣　白石拾松子

◉肌に泣く兒をすかしつゝ乳貰ふと急ぐ夜道にあられたばしる　山口縣　村田みさを
秋海棠

●尺八の音のきこゆる庭に火影さして秋海棠に雨ふりそゝぐ　信州　岩岡花子

●秋の虫淋しき門邊君戀へはかすかにひゞく山寺の鐘　大阪　田中常子

●天降ませし秋の女神は野にませり一日仕へて歌授からむ　上毛　綠女子

●夜もすがらすさぶ嵐もきゝなれて夢圓なる山かげの庵　上總　紅梅女

●四比利亞に仇と戰ふ夢さめて起床喇叭の聲さへ渡る　上サ　齋藤武子

●大刀根の流のおとも冴ゆる夜を胸にしみ入る船唄の聲　千葉縣　小川梅江子

●やむ母の藥もとめてかへる夕べ雲ひやゝかにしらぬ鳥なく　南總　小川芳枝子

●夕ぐれを鐘の音ゆるう流れきて紅葉ほろ〳〵風なきに散る　中四歌子

白糸の瀧も實にそめなして峰のもみぢ葉夕日たゝさす　神奈川　黒川まき
秋かぜ

◉巨刹やこゝに大杉もの古りて餘なき樓に秋のかぜ吹く　越後　三浦榮子

病癒えてそゞろをりたつ庭の面に霜の香たかし白菊の花　陸前　鈴木幸子

◉戸に凭りて何とはしらす寂しらの涙を吹くよ秋の夕かせ

鳴子

鳴子引く音も悲しく身にしみて秋風渡る小田の夕ぐれ　大阪　小西奈良枝

●

小鹿なく聲もしめりて村雨に淋しさそふる秋の山里　上毛　千代子

●

去年の今朝君と別れし板橋に霜白うおきて鶺鴒のとぶ　近江　柴原茂子

菊

野にさけゝ千草の花の色あせて籬の菊に秋は殘りぬ　備中　稻本みどり

●

おく露に朝日の影のさしそひて咲き亂れたる夏菊の花　靜岡　梅雅女史

曉鐘

そよ/\と吹く秋風にひゝくなりあるやなしやのあかつきの鐘　澁谷　牧逍

●

初風にもろくもやれし蝶の羽を今宵寂しく月のてらせる　奈良縣　翠逕女史

初雪

白梅の咲やとばかり冬枯の木々の梢にふれる初雪　磐城　佐久間廣子

●

仰き見れは千里も見ゆる月の影が兄が面影しのばるゝかな　奈良縣　堀坂しげ子

●

泣かばやの胸をおさへあつき/\情の言葉きくぞ切なき　松山　山脇幸子

折りにふれて

寒菊の花に氷れる露うけてさびしき窓に歌筆とりぬ　下總　中村よしえ

古戰場

武士のはかなく消えし跡とへば夕べ悲しくくつわ虫なく　小石川　宮本幸子

折にふれて

秋風にうるむ瞳をそと投げて人のうつしゑ手にとりて見る　飯田　菜流子

●

ゆけど/\まはぎ白萩女郎花尾花の末に夕月の影　伊豆　加藤多米子

●

露ふみてよべ虫開し草小路倒れ乍らに撫子のさく　金澤市　大地なみ子

秋の夕

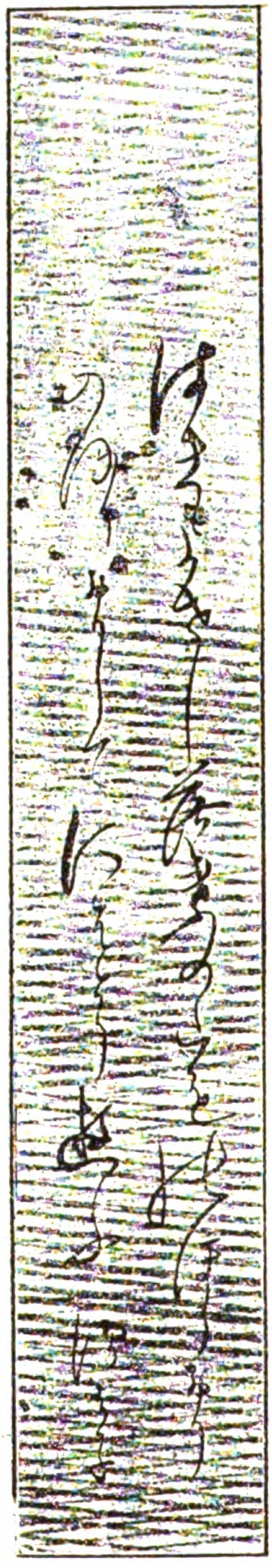
さびしさやなき母しのぶ此夕べ衣手寒き秋風ぞふく　大阪　かすみ子

●

月見れば昔の今宵偲ばれて又も歸らぬ昔戀しさ　美作　竹内みどり女

山口日本銀行理事

令閨[illegible]波子筆



●

萩の花ほろ/\ちりて母君のみ墓を蝶の舞ひめぐる哉　千葉縣　長谷川みち子

●

秋風も心して吹け咲く萩のはなのかさしの露やちらなん　上總　植竹春霞

●

船頭の漕みこゑ高う唄ひ行きぬ松葉こぼるゝ月の眞砂路　靜岡縣　早苗女史

●

星一つ北に流れて消へ失せぬ筑紫大野は風寒うして　豐後　平山眞子

●

雲井よりみなぎりおつる大瀧ににしきをあらふ秋の山ひめ　大阪　富永才子

白菊

一枝は父のみ墓に一枝は病みます姉に白菊の花　下野　さなゑ子

短歌

● 豐後 森民子
母やみてくすしに急ぐ夕野原路に秋に萩のみだるゝ

● 在東都 千秋子
故國出でてこゝに十日を島見えず波ぢはてなう雨にくれゆく

● 東京 藤の花
寂寞と悲愁と綴りしくろ髮のもの思ふ暮を北へ流るゝ

● 柳子
うもれ木のそのかひなさに人しれず花をうらやむときもありけり

● 小倉 米村すみれ
三百の石段ながう苔むして所々に椿花咲く

● 豐後 平山紫泉女史
霜白き桔梗が原の朝月夜芒に寒く狐なくなり

● 津 松尾花子
母と二人詩がたりする小窓先秋雨はそう白菊の咲く

● 德島 佐藤きん子
妹が小さき蝶うめて卒塔婆たてゝ庭の萩が根あはれそひけり

● 岐阜 日比野子
あやふくも踏み行く詩の子憐みて聖き纎手にわれ導き玉へ

戀の曲　備後 池田蕾子
姫君のふり袖琴の音にゆれて戀の曲の今をへんとす

● 石狩 五井歌字子
君と別れ旅のやかたに雲を見る我身悲しき秋の夕暮

● 上毛 樋口女史
おもしろう虫はなくものを人はたゞさびしとのみぞ灯による

● 奈良 文子
くれなゐの色あやどりて夕空はうらむにあまり靈うつくしき

みまかりし兄の寫眞　越後 みや子
見れは又独うるほすと知りつゝも見ればなつかし人のうつしゑ

● 新潟 小林翠子
花にゑひて女神がもらすささやきと星をうかべて水のせゝらぐ

● 美濃 加藤蝶子
夕暮の空の雲間に星見へて聲も淋しく雁啼きわたる

浦の秋　伊勢 伊豐子
もしほやくけむりも末に秋の來て波もあはれに風もさむしき

● 常陸 秋山ほとゝぎす
我が戀は秋風すさぶやれ垣にゑみて淋しう咲ける花の香

紅葉　神戸 楓子
小牡鹿の聲あはれなる秋の野に誰が爲にとてにしき織らむ

● 常陸 酒葉零女史
庭つゞき塵土の森秋長けて夕日斜めに紅葉ちるなり

● 越前 志田芳子
さやかなる秋の山路の月かげに木こりの歌のすみてきこゆる

● 神戸 吉田霞江
こゝに三年いたつきの母逝きましして詩歌背しの春をうたはず

● 神田 小磯君江
菩提樹の陰に羽繕ふ極樂鳥瑠璃金色の彩羽美し

海　横濱 顧澤よし子
果しなき八重の汐路を眺むれば心細くも思はるゝ哉

述懷　紀伊 孤星女
今更に浮世の樣もうらみじなせめて涙を友と思へば

● 神戸 美代子
奥深う綠色こき森の影斧の響に興そあふるゝ

● 鹿兒島 山口しま子
吹雪く夜をさらに北する尼とめてほだ火燃ゆらす野のわび住居

夕陽　甲斐 撫子
鳴る鐘の一つ〳〵に琵琶の湖のあしにうするゝ夕づく日かな

● 埼玉縣 武島たま子
なき君の形見のうつし繪見まもれば何とはなしに心みだるる

折にふれて　栃木縣 秀子
秋はきぬ稻はみのりぬふるさとのちゝ母いかにせはしかるらん

● 越後 紫夕
世を厭ひ小女子ゆきし沼の水にきよくましろくさくや蓮の花

ほたるがりして　　東都　母とほき子
ふく風にきえやもするとそてにしてなりなりおほふかごのほたるひ

●　新潟　大嶋チタサ
山一つかなたに鹿の聲はしてもみぢちるなり谷かげの庵

●　橫濱　敷島花子
とふ人も今はあらしの音絶えてまつとも見えず露のつもれる

○　岡山　すみれ子
花曇る吉備のふる里立つもすがりて泣きし友を忘れな

病床　　栃木縣　きみ子
病み臥して我世さびしく思ふ時くりかへしても見る君が玉章

●　埼玉縣　井上なか子
尋こし友はかへりてなく蟲の聲も淋しき蓬生の宿

●　太田川　森　靜鶴
殘りなく峰の紅葉はちりはてゝ松にのみ咲木枯の風

◎　長野　內山靜枝女
亡き師の御墓もうでに日は暮れて月影さむく虫なきしきる

●　岐阜縣　柴田文子
機の手をとめて障子の綱ひけば夕ばえ田の面雀むれたつ

●　橫濱　寺田光子
おくつきに一人詣でゝありし世の君が戀しき宿世をぞ思ふ

●　岡山　松本落葉女史
うらぶれてやせしわが身に秋の風あまりに寒し野べの夕ぐれ

古戰場　　日本橋　すゞき　やす子
はたすゝき今尙風になびくなりあた野が原の秋の夕暮

月をみて　　伊賀　奥谷とみ子
すみわたる月みるごとに思ふかな共にかたりてあかしゝその夜

●　佐世保　花園清子
病みませる母の枕に夜もすがられむる灯かゝげ文をよむかな

●　本所　井口以槇子
靜やかに枕にすだく虫の音にふるさと戀ふる秋の夜中かな

秋夜　　廣島　吉崎ゆき子
すみわたる月にむせぶかすゞ虫のなくねさみしく秋の夜ふけぬ

友の結婚を祝して　　攝津　和久兼子
男神女神ほゝえみまして結びけんゑにしの糸の色うつくしき

水邊菊　　函館　村上媛
草も木も枯にし庭の池の邊ににほひのこれる白菊の花

●　越後　富田薰子
萩すゝき桔梗かるかや藤袴秋の花野の慕はしき哉

●　上毛　眞砂薰子
垂乳根の母にも告げぬわが胸の秘め言今宵君に語りぬ

暮秋　　信濃　浪美子
ひとり居の行く秋のさびしさに落ちし一葉を又とりて見つ

●　常州　白銀女子
君をのせてゆく船遠く見えずなりてしもかぜ寒く居いよゝ冴えぬ

菊　　富山　河上すみれ子
庭の面に星かと見えて咲きにけり露の玉しく白菊の花

◎　上毛　赤心子
母君のいかに御在すと思ひねの枕べ近くかりなき渡る

●　福井　高栗小靜
鳥なく柳さびしき山本の花店の庭の白萩の花

●　深川　內海なみ子
月澄みて虫の音さえて閨にわれのみ獨悲想みだるゝ

●　和歌山　鈴木くま
草も木も枯れたる野邊を只獨り母の御墓にいそぐ夕ぐれ

●　千葉　鈴木しづ子
國のため君のためとて勇むせなを見送る門に村雨のふる

送征　　茨城　青柳愛子
たま〳〵に逢みる事のうれしさをつゝまん袖のせまくもある哉

●　上毛　汀柳女子
暮けだつ樵夫のうたの遠くなりて枯木にかゝる夕月のかげ

●　上毛　河內とめ子
さやかなる月の光もなり〳〵は落つる木の葉にくもる哀れさ

霧夜　茨城　小泉浪子
満洲の野辺のしもよを敵もると夜すがら君が立ちあかすらん

●　千葉　小川静興子
浪しろく礒の松原風ふけてうつみ火恋う風のふく

●　麹町　長田花枝
鶏なきてゆふへせまれる山寺の庭ひやゝかに萩の花ちる

●　千葉　土屋重子
わかき霊栄のあやうすれゆきて恐き帳の天地をこめぬ

●　弘前　佐野重子
水清き野川にかけし水車くみてはこぼす糸萩の花

秋風　北海　英佐雄子
かなたよりこす糸つたひに育つれてくりの實落すよはの秋風

師の恩　京都　竹村こま子
めぐみふかき教の庭に咲く花は風にも散らぬやまとなでしこ

●　陸中　毅子
へつらはす媚ひすまれはす己が歌をおのが言葉によみてくらさむ

●　神奈川　西山せい子
はら／＼と窓うつ雨の身にしみて草葉にすだく虫の音あはれ

秋雑　越後　渡邊かれ子
さゝ川の畔十歩の菊の畑に残月白夕こほろぎのなく

●　神戸　守屋千代
ほまれ得て歸ると言ひし兄君の魂のまつりに菊の花咲く

秋の山道　佐賀　武富梅子
苔の露ふみわけつゝも行道の山のあなたに馬子の歌遠き

●　弘前　佐野花子
水にうつる青葉色濃き山の湖とだえ／＼に魚はぬる音

●　本郷　こてふ
恐しきはなし師はる兄弟のふちのあたりに水鶏なくなり

秋の月　神戸　とみ子
小夜更けて月は野末をてらしつゝ秋風さむうこほろぎの鳴く

亡き友を偲びて　大阪　島田ひろ子
去年共に眺めし友の影はなく一人淋しく澄める月かな

●　上総　はる女
道問へど答へて笑ふ少女等がかざしの菊に蝶したひよる

●　群馬　田中早苗
秋の野の風の小すゝき伏す毎にしばしは遠きすゞむしの聲

●　京都　竹村こま子
松風はふきわたれどもはし立の沖しづかなる與謝の海原

●　常州　岡部りう子
朝な夕なころや眞栄の重みにもやかて我身の老をこそしれ

●　水戸　渕金潮子
落葉のせて行くやいつちへ秋の水野は寂として黄昏にけり

●　弘前　佐野みどり子
天地は新たになりし心地して四方清らけき露の朝かな

●　小倉　米村すみれ
秋の窓に秋の蝶飛ぶ秋の日を長者が庭に鑿の音する

●　長崎　波江みす子
なかば刈りし小田のかゞ子の笠の上にあきつとまりて日は斜なり

●　長崎　波江みす子
つく／＼と我こし方の忍ばれて夕の雲に思みだるゝ

●　常陸　渕金潮子
白菊の清き香漂うみちみちて風薫るなり夕月の庭

紫苑　逗子　涙の子
つくられどおのづからなる隠介家の庭の垣根にしをん花咲く

●　千葉　恭興女子
行きあひし昔の人のうしろ影見かへる袖に夕風寒き

●　上毛　関口翠子
夕映の色うすれゆく破窓にひとりさびしき秋の霧みる

●　上毛　〇井須江
天地を一つにこめし夕まぐれ鐘なり響く奈良の寺々

戰地の様を思ふて　近江　みどり
ますらをの露と消えにし跡訪ひてまづこぼるゝは涙なりけり

上毛　ゆふ霞
友の柩
なき友の柩を送る田舎道日ははやくれて小雨そぼ降る
●
群馬　萩原かす江
風の音もいつしかしづまりて月さえ渡る星まばらなり
●
新潟　小島ゆき子
山寺の老僧病み失せましして痩せたる菊に雨しつかなり
●
三重　奥瀬かすみ
磯寺や梅雨の十日の旅衣何時か覺へし海人の歌かな
宴
神田　小磯君江
三千の舞衣ゆらゝ盤渦さて燭に謡じて始皇ほゝえむ
秋夕
大阪　小西奈巳枝

池谷朝子筆



稍すゝめかへる末野の小笹原入日淋しく秋風ぞ吹く
●
神奈川　中津川よう子
問ふ人の跡さえたえし一つ家のまどに音のふ秋の雨かな
擣衣
岡山　おかめ
きぬた打つ音折々にとたゆるは物おもふ手の挽むなるらん
●
福島　五十嵐ゑい子
訪ふ人もなき我庵と知らずして枕に近き松蟲の聲
月前の虫
伊勢　加藤倭文子
あぢきなきしつか伏家に月もりてこゑもさやかにこふろぎのなく
●
南品川　町田則子
おもかげはま垣のはぎの月にきえて虫のなく音のたゞにせまれる
冬の歌
東京　ゆり

旅の子をあはれと母の送りこし小袖うれしき冬の朝かな
月
大阪　濱田だん子
くもりなき月の光りに照らされて文見る夜こそ楽しかりけれ
十五夜
廣島　看聴婦
くもりなき月の光をながむれは心の雲もはれ渡りけれ
菊
和歌山　岩崎榮
ひかりなき谷ともいはじ白菊のあまつほしかとまがふさかりは
菊
熊本　林美智子
咲き匂ふ籬の菊のやさしさよ清き香りを人におくりて
●
陸中　綾子
月しろきみ寐抱さて名を呼べは谷をへだてゝ猿なくなり
●
伊豫　かすみ女史
秋くれば千々の草花しづかやの庭もせきまで咲きそめにけり
山
長野　小林栢枝
うき身にはなとて哀れに聞ゆらむなけよとてなく虫ならなくに
●
新潟　大崎秋韻
秋雨の袂につめたき夕まどに物思ひ居れば虫なき出てぬ
述懐
はな子
谷川のきよきながれをそのまゝにうつすやま家のひとこゝろかな
別れ
荏原　春子
よしや身は千里の波をへたつともへだてぬものは心なりけり
落葉
埼玉　石田季子
秋風によたゝふかれてはら〳〵とまきの板屋に散る木の葉かな

秋風

奥津城の前に佇む少女子のやつれし姿に秋の風吹く　　福岡　坂栗芳子

●

秋の夜の更け行く鐘の聲すみてみ空を渡る雁の一つら　　常北　竹　枝

◎

ふるさと文よむ窓の灯はやがて身にそふ光なるらん　　常陸　大部たか子

●

折りにふれて

詩に笑み薔薇に笑む子よ戀の子よあらず悄の子涙もろき子　　筑前　沖　水子

秋の里

あかぬいろよそに見めやとかきそへて病みふす友に野菊一枝　　山口縣　永地菊枝

秋の夜

人も許れし我も樂しき稻のはに群れ飛ぶ鳥も千代祝ふなり　　駿河　伴野とも系

●

歸るべきほども忘れて遊ぶ野は月と我との世となりにけり　　越後　中村なを子

◎

背の君はこゝの邊りに居ますらむと地圖の一すみ朱にそめぬる　　和歌山　釘貫さゆり

◎

古郷の空を仰げば三日月の影うすうして雁なきわたる　　紀伊　靜　女史

●

秋ふかき木曾のやどりの十日雨目しい法師が琵琶にし泣きぬ　　陸中　及川しん子

●

すみ渡る軒端の月をながめつゝ絲竹しらぶ今宵たのしも　　愛知縣　かれはら女史

●

しら玉の萩の下葉にやどりては落ちてみだるゝ秋の月影　　秋田　白妙女史

◎

立秋

璣館萩亂れ咲く門の邊に初汐滿つる宵涼月夜　　福井縣　高栄小靜

夜伽

空もはや秋のけしきにたちかはり萩の葉風の音さやぐなり　　山口縣　瓊　紋子

ある漁村に遊べるとき

逝きし母の夜伽する夜のいとながく鉦の音淋びて絲子泣かず　　豊後　田仲保子

一村にひゞきし法螺の靜まりて百舟出づる朝なぎの海　　和歌山　奈加谷とも子

●

月

さえ渡る月にしばしはあこがれて君ます鄕の星ぞこひしき　　上毛　美津多満

雨もれど身に實なきさすらひの今宵も蚊帳に月を見し哉　　秋田市　庄司錦子

●

君ゐます都の空をながめつゝ歸る燕に歌ことづてぬ　　群馬縣　上原芳子

●

燈火は今消えなむと夜の室我が妹病みて今日十三日　　群馬縣　田中福子

●

栗すてし鞦韆は風にまかせおきて萩さく庭にひとり月見る　　大坂市　中野ゆかり

●

母君の昔語りに夜は更けて留守の燈しろうさえたる　　群馬縣　横田糸子

●

秋風

平和の野に彩雲ふとたちて流るゝ方は父出征ける里　　靜岡縣　渡邊しん子

●

ならはじと思へどたえぬゆふべかな峰の秋風ふくにつけても　　京都　木村滿子

●

尋くもまた淋しくも見つるかな木の間に澄める秋の夜の月　　奈良縣　犹城しづ子

●

ふきすさむ笛の音淸き野分け路里の童駒曳きて行く　　小石川　奈美木翠子

●

ま垣やれいともさびしき荒庭や梧桐の落葉に鳴く蟲哀れ　　茨城　滑川止米子

●

海人小舟霞がくれにかへるなり袖しヶ浦の春のゆふ宵　　麴町　長田花枝

●

彩雲の磨ごる夕べ野に立ちて歌詠し居れば月は出にけり　　岐阜市　橋みき子

●

憶に散る紅葉を抱きて野に立たす人繪に似たる夕まぐれかな　　信濃　安孫子美子

●

雨晴れて松の雫に夕日かげきらめく色のうるはしきかな　　岐阜市　千葉鈴子

抒情文

日本女子大學教授　櫻井文學士選評

天

○寢られぬ夜

靜岡　野　菊子

「オヤ、十二時、靜さん寢ませう」との母樣のお言葉。早速床についたが、どうして寢られやう、この樂しい夜に。

目を閉づれば閉づる程、猶々心はさえて、とても寢られない。夜着に首をつつこんで、また考へ出した。明日は八時三十分の御着、父樣はまあどんな御樣子におなりなされたであらう。お顏は一層黑く、お髭もきつと澤山になられただらう。いつも御手紙に「旅順の話は己がしてやるぞ」との事、それも伺はう。我が兵の勇ましき樣、露助の逃げる樣子、大砲の破裂する音、小銃の雨と降る景色、オーまだ〳〵手紙の事、慰問袋の事、まづ、明日一日に伺はれるかしら。こちらでは、さう〳〵、學校の樣子、提灯行列の賑かさ、まだ私の歌・繪・編物・細工物、まあ御話しする事、御目にかける物、澤山あること。父樣が戰死なされた夢を見て一日泣いた事、母樣と苦しい時の神頼み、月毎にお參りに行つた事、申上げたら、さぞお笑ひなさるだらう……ホヽヽヽヽヽ。思はず笑ひ出した聲に、母樣はびつくりなされて、「靜子さん、何ですねー、まだ寢ないの」と仰せられたが、母樣もさつきからお寢なさらなかつたやうなお聲。「母樣だつて起きて居らつしやるではありませぬか。」から申し上げながらも、自分は情がせまつて、母樣のお手をかたく握つた。其の時、母樣はキユッと私の手を握りかへしなされて、涙にむせびながらも、ニッコリお笑ひなされた。私も同じやうに。

何處かで、かすかな鷄の聲。「オヤ」と二人は期せずして起きあがつた。近所の靜なのに氣がついて、時計を見れば、まだやつと三時。嗚呼お歸りまでには……四五六七八、未だ五時間餘ある。

（雨評）其の心情げにと、描き得たるものあり。筆もよくまとまりたり。天とす。

地

○花賣女

佐賀縣東松浦郡濱崎村字東山田　栗原靜子

假令襤褸の袵は濕るとも、草葉の露はこぼさじと、心して例の細道を通り越せば、平和の天使を乘せた紫雲が、薄う東天を彩つて、眞紅の御日樣がにつこり、柔かな光線を、そつと射かけなさる。露は星屑と輝いて、彼處の森から、小鳥が三つ四つ二つ。其處の叢から、羽重げに飛び出た一羽は、直ぐその栗の枝に、緩な日光に包まれて、切りに囀いてゐる。毎朝見馴れたる妾に、早馴染んだのであらう。

幾萬犧牲の死屍に、衣を飾つて、莞爾と笑ふ宰相や、人を斬り人に斬られて、生血に醉ふ惡魔の子、さては、功名利達に隣人排擠して飽く事知らぬ都人を、一度此處に立たせて、此の自然の啓示と洗禮とを與へたいとは、毎朝新に起る妾の希望。

噫、妾は鋭々しい利鎌を揮つて、此の優しい麗しい草花を刈るのではないか。さても毒々しい妖女よと、嘲妾を怨んでゐやう。此の鎌を呪うてゐやう。でも、醜けき村男に雜草交りに薙ぎ立てられて、貪慾な牛馬に食まれるよりは、同じくは險に涙隱せる、名さへゆかりの女に刈られて、亡き人々の靈を慰むるぞ、せめてもの榮えと許してはゐまいか。まゝよ、後れてはお母樣がと、やをら鎌取り直して、露こぼさじと刈つたる一本〳〵を、そと接吻くる妾を、鳥滸やと笑はむ人は笑へ、妾が花賣と蔑れし經歷を知る人は知るであらうに！

旭を背に、籠の花に迷ひ來し秋の蝶に慕はれつゝ、家路に急げば、苦しげなる咳の枯聲。さてはと伺へば、今年十一の弟は、昨夜の獲物、鰹の八九尾を、桶ながら据ゑての介抱。世に神てふものおはせば、千代もと祈る姉弟が心盡の看護より、などお母樣を奪はんとはし給はうぞ。浮世の風に疲れに疲れし妾等を、何とて此の上泣かせ給はうぞ、噫早く癒やしまつりて、來む春は母子三人の安けき樂しき風に歌はむものと、今朝の草花を擇りつゝ祈禱すれば、弟は早や[illegible][illegible]さげて、鰕賣にと草鞋を引きしめてゐる。かくて、妾は其の最美しいのを、先づ亡き父のみ墓に手向けて、さて三里の市へ花賣女と……之が日毎の日記なので……

（雨評）情可憐に辭優美、愛すべき文と申すべし。雄とす。

人

○病床の夕

遠江　涼子

ふとまどろみし夢より覺むれば、秋雨しほ〳〵と窓に通ひて、となりの老媼がをさ打つ音はたと絕えつ、うつらうつらと今日も暮れゆく庭の面に、筧の水の音さびて、むせび鳴くなる虫の音、そゞろ涙ぐましき夕暮なれや。萩の下葉の露けきに、今宵の宿を失ひてか。夕の空にさまよふ蝴蝶二つ……。あはれ明けなん朝は、露霜深き草野原は、そがむくろ橫へんつらき運命の汝が身にも、尙、死なば諸共にと双ひはなれぬ友はあるものを、ある甲斐もなき身は、夜每〳〵を夜寒の床に、なやみあかせど、優しう慰めてたまはらん君もなき身なるぞや。苦き藥の香は靜に室內にたゞよひて、燈火置きて人の去りし後は、一しきりの夕風身を襲ひて、なやみ持つむねの遣瀨なう。



泉岳寺

悶えもなく、憂ひも知らず、涙もなかりし三年かみの我が身は、實に樂しかりしよ。櫻花咲く春のみ園に思ふ事なく歌誦したりし時、萩咲く野邊に、さやけき月の光をあびつゝ、むねにあふるゝ理想の影に、そゞろほゝゑみたりし我が小さき心は、まこと淸きものなりけりな。さるを〳〵、世の荒波は、乙女十五の榮ある身の抱きしこの美しき希望を、家や畑と共に奪ひ去りぬ。廣き庭をも美しき衣までも。

怨みは深き春の花は三度散りて、薄衣かへす風の常ならぬに、それと驚きし今年の秋のはじめより、思ひはつのりて、われは遂に、病の床に橫はる身となり果てしなりけり。はかなき露の命を、今日も尙ながらへて、草深きおどろが宿にかくてかくして、やがては果てなん身を、露あれと思す人はあらじな……更けし夜を、ばせうの枯葉、共ずれになりて、筧の水音絕えぬは、未だ秋雨の晴れぬにや、軒のしのぶ雨戶を打

ちて、かりそめの手づさみに捕へし籠の虫の、野邊慈しらに鳴く聲も、わきて身にしむ夕かな。

（雨評）病床の夕べの心情げにとおぼえ候。辭も自から其の趣に伴ひて、何んとなうしめやかなるも、よし。人とす。

秀逸

○遺愛の兒

麴町區飯田町六丁目十番地　重田菜流子

夕月がほんのりと天にかゝつて、かうもりが地をひくくかすめて、とんで行つては又飛んでくる田の畷道を、私は田鶴子を腕に、一人逍遥した。田鶴子は、抱かれたまゝ、空をあふいで、足をピン〳〵さして笑つてゐる。私は、その可愛い面影に、思はずひしと抱きしめて、さて眠をつぶつて、我が頰をそのふくよかな肌にすりつけたのである。田鶴子、!!!あゝわが只一人の姉上の遺愛の兒!!!。除りに美しい、細つそりとしたおからだの、今小町とさへ評判せられた傑を、そのまゝにうけついだ、まだ幼い、漸うに笑ふ田鶴子を、近く枕元に、眠るが如く姉上は、病床に逝かれたのである。しかも、世は猶この幼い美しい者に、慘たる浪をあびせて、姉上の野邊の送りさへすまぬ中に、兄上は征途にのぼられたので、……母の懐に笑みし、わづかに年の半ば、かくて猶、父は異郷に敵と戰ふの身、無心に笑ふ田鶴子の頭を、軍刀にぎる御手に撫でゝ、「丈夫でゐてくれよ」とばかり、兄上の御聲はさすがにふるへた。

ふと氣がつくと、いつしか田鶴子は、我が腕の中に、スヤ〳〵と眠つてゐる。空がくら〳〵なつて來たので、明るくなつた月の光、その光をうけた、清く安らかな寢顔に、私は暫しみとれてゐたが、ホッといきをつくと、はら〳〵と涙がこぼれた。この若い〳〵叔母の手に、果して田鶴子は立派な人に成れるだろうか、いや必らず私は「これ見よ」とばかり、育てなければならないと、かたく決心して、すみ渡つた月をあふいだ。天には星、地には花、人には愛、この三つを併せ持つた、宇宙間の最も幸福なる身となるべく、田鶴子を守らせたまへと、ひそかに念じて、さて、うつむいて、この打ちふるふ、わかき心の息の香りに、美しい、無邪氣な天使のやうな寢顔に、つと接吻したのであつた。

（雨評）趣向一寸面白く、情も可憐なるまことのきこゆるものなきに

あらず。

○あはれ妹

大阪高津十番町十八番地谷澤方 竹中春江

あはれ、愛らしき我親しき妹は、昨日逝きぬ。

おゝ、汝が美しき笑顔‥‥ばらの如き唇、櫻花の色にも似たる頬‥‥牡丹の如き立姿、今も‥‥‥今もなほ、まのあたりに髣髴たるなり。おゝ汝がすゞしき聲は、なほ我耳にひゞくよ。

秋風いとも淋しく尾花を吹いて、物しづけく物あはれなる野末に、濃き淡き紅葉しげれる杜の下、百草千草かれなむとして露の命をかなしむなる蟲の聲そゞろあはれに聞ゆる所、新しく積立てられたる土饅頭の下に汝が美しき肉體は、いとも色さめていとも冷えて、靜に永へにねむるなり。今日汝をそこにふりすて、歸るさ、我はげに心苦しかりしよ。父や母が、あたゝかき情深き膝の下に、可愛や美しやと、はやされて暮し、間は露だにもいとひし身なるに、さても、さびしき野原、人の世はなれたる所に、ねむる汝の夢やいかに淋しきぞ。冷かなる露汝を侵さゞるか。まして時雨やいかに。秋月すごく冴へて、枯尾花が破れ袖吹く冷風にまひどよみつ、散る木葉憂き囁言を語る時、汝が心やいかに。汝が想もちやいかに。あはれいとしき妹よ。

おゝ汝は、かくも悲しむ此の姉が心を知りてか。そのばらの如き唇もて‥‥鶯の如き聲もて、只一言なり



都筑貞季君往

と語りてよ。おゝ、やつれたる其の姿は……あゝ汝は我が幻とよ。さても、さても。

おゝ今しも散る落葉、あはれに我窓をうちぬ。微に、いん／＼とひゞき來る遠山寺の鐘の音……わが心には諸行無常とひゞきてよ。さても汝にはいかに。

（兩評）其の情はやさしくきこえたり。

○あはれ妹

周防　楓子

苦しい算術の問題に、逆上した胸を靜めやうとひとり運動場の群を放れて、裏庭へ來て見れば、桐の木に倚つて、淋しげに唯一人讀書の少女。あゝ、それは妹の露子である。

「露ちやん、なぜ皆と遊ばないの」と、からかひ乍ら近寄つた妾を、振り向いて淋しさう。

「だつて、遊はれないんですもの——」と俯向いたその時、妾は覺えず涙含まずには居られなかつた。あゝ、出來得るならば、妾と代つてやりたい。妹を幸福に過さすことが出來得るならば、妾はどんな苦しみも悲しみも堪へるであろう。けれども、是非もない、手術も藥も詮もない、あゝ天性の不具者、——片足の短い——。あゝ可憐の妹、今年初めて汝は高等小學に。同じ校に學んで、初めて知つた、今まで四とせ、雨の日風の日不自由な足に休まず通つた汝は、あはれ學問にこそ趣味を持て、他に唯の一つも汝が學校に於いての樂しみのないことを。

縄飛びに樂しげな友を避けて唯一人、茫然と寂しげな時、テニスに餘念のない群を放れて、ひとり佗しく編物に遊歩の時間を發しかねて居るその姿、——姉の身にどうして堪へられり。妾もまた自ら友人間の除物となつて、六時間の課業より苦しい長い遊歩時間を、此の頃二人が唯一の樂園とするはこの裏庭。

併し妹は、テニス以外に、友が知らない一つの樂しみを得て居る。あゝそれは——十二才の少女としては、餘りに陰氣に過ぎはしまいか。手にした少女界を示して、

「姉さん、妾の和歌が載つてますから見て——」

（兩評）趣向一寸面白くあはれなるを得たり。今一層筆に調に苦心せられなば、はじめて泣かするものある文と存じ候。

○峯の夜嵐

加賀　庵子

あゝ從兄さん、忘れ給ふまじ。すぎし明治卅六年の今

日は、思へば悲しや、世に二人ない父上が、永劫の門出をなさつた月で御ざいます。草の葉よりもまだ青い面をもたげて、母上や私や弟の顔を見、はやも廻り兼ねるやうな唇を動かして、ぶる〳〵震へた聲で、二言三言いひもあへず、深く落ちくぼんだ御眼に、銀粒の涙を浮べてゐらつしやつたのは、丁度今頃でした。殘りの母子、きつと抱いついて「おとーさん、なぜ……あゝなんと短いお命でしたらう、おあきらめなさいませよ、後の事などは、少しも御心にお殘し下さいますな、やがて今明い淨土へいらしやるのですよ」と人心地も絶える程、泣きあかしたのも、正しく今頃です。甚作が、東京の從兄さん、お國の叔父さん、と電報に走り廻つて居たのも、今頃でした。外山おろしの木枯しはひゆ〳〵窓を鳴らし、袖も涙も凍る計りの彼の夕ぐれ、今も身にしみこんでゐます。あなたや叔父さんが、車を飛ばしてお出で下すつたあの時、悲しい乍らも、どんなに悦んだでせう、どんなに嬉れし涙にむせんだでせう。あゝ思へば思ふ程、世はなんとはかないもの。父上が屍に取りついて「早やあなたは此の世をおしまひでございますか」と咽び泣した甚作も、あはれ去年の秋、旅順背面攻撃軍に參加して、遂に雞冠山の露と消えました。あゝ從兄さん、私は今更昔の事などが思はれて、涙か出てなりませぬ。父上があの北越に、山地開墾の業にお掛りになつたのは、はや五年前の事で御座いますねー。あの二百十日の大風に、家の半分がつぶれて、倒れかゝつた板戸の下からにじり出て、一夜を牛小屋にあかした時は、あなたも父上も甚作も御揃で壯健でしたねー。一月も二月も降り續いた雪の重みに、柱は歪み、且つは後の山の鳴りが烈しいので、雪なだれの恐れがあるからといつて、皚々たる雪の夜、假におばさんの里まで逃げのびた事もございましたねー。秋の大好きだつた蕎の畑林檎の林、整然とした桑畑、二度も三度も私を苦めた漆の森、今まのあたり見る樣な氣が致しますに、今やあそこには昔の面影だに無く、唯大きい葡萄の根と、奇麗に並んでゐた茶の株とだけか、僅に跡を留めて居る計ださうでございますよ。まだ四十路の坂も越えぬ盛なお年に、改良の前途も見ないでお出でになつた、あの夕の父上が御胸の内、あー思へば私は胸がせまつて、思ふ事も書きされませぬ。

（兩評）御尤に存じ候。筆は今一層の錬熟を要し候。

○嘆の聲

廣島縣　隈水女史

もう嘆くまいか。でも、此の田の樣を見ると、どうしても嘆かずに居られない。此れが、黄金の花は咲き亂れとでも言ふ樣なら宜いのだけども、稲の穗は皆直立不動の姿勢て、山々の木の葉が色づき初めても、田面一躰まだ眞靑。風が一陣吹いて來ると、黄金の波にはあらなくて、唯カサ〳〵と、誠悲しい音ばかり、あゝ此れが泣かずに居られうか。もう私は死んだ方が宜いと思ふ位だ、嗚呼、天の神樣、何故國民にかうつらく當るてあらう、日露戰爭が始まつて以來、幾多の靑人草を血汐に染めたが爲めてあらうか。それは、餘り天の神樣無理だわ。決して、日本が只わけなしに進んで戰さを求めたのではなく、暴惡極まる露國を懲さむために、正義の師を起したのだもの、スラブの奴等に、此樣憂目を見するなら、當り前だけども。だから、神樣が御怒りなすつたのではないわ。それでは、我がますらをの手に掛つて倒れた露助の怨みが凝つてゞあらうか。それも、有る筈はないわ。彼れ等は正義の刃に倒れたのだ。そして、又サアーの爲めに、然も名譽の戰死を遂げたのだもの。彼れ等何怨む事あるべき。だから、彼等の怨靈の祟でもないわ。では、何物が吾々を惱ましむるのであらう。あゝ、わからない。やつばり天の神樣をうらまねばならないのか。憶へば、戰地に行つて居られた兄樣等と、樂しく〳〵、田植歌賑やかに、早稲を挿んだのは、今の涙の種となつたのだ、頼みと思ふ兄樣はあの世の人、田の稲は少しも實らず。これからどうして暮さうか。あゝ、此の小さい胸は張りさけるやうだ。いつそ兄樣の御許に急がうか。いや〳〵、それは早い了簡だ。死んで何になる。死ぬなら、いつでも死なれる。かう泣いて許り居たつても、稲が實るでもなし、お金が天から降つても來やしないから、此れよりは、何か手仕事でも見付けて、一心に自分の職務に勉めて見やう。そうしたならば、まさか天の神樣も、さう情なくは當らぬてあらう、

（雨評）御尤なる愚痴と存じ候。

○亡友を忍ぶ

下野　松の舍　みどり

「花には嵐月に雲、世はあやにくのならひかも、」

今しも自分は、一度奏て終つて、もう一度と思ふては

じめたのであるが、胸がふさがつてしまつて、どうしても弓持つ手が動かなくなつてしまつた。

思へば、我が親友露子様と、度い〳〵あの寄宿舍の庭で、君が亡き母上のこと、我が身の不幸なることなど語り合ひ、互に手をとつて泣いて居たら、擔當の先生、散歩にいらしつたとやらで、いろ〳〵に慰めて下すつたが、先生もお父様に、早くお別れなすつたとか。はては、三人、ハンカチーフを絞つたのも、今晩のやうな月夜！。おゝたしかに去年の今夜！、月影淸き夕べ、例の庭で露子様が、あはれの曲をと敎へていたゞいた「逝去の友」の歌。あゝ夢、君がなき後うたへとて敎へて下すつたのではあるまいものを……。君と語り合つた時は、めぐり〳〵つて、又來ました。其時の如き月も出ました。けれども、けれども、もう君と語ることも出來なくなりました。

卒業後、君と別れてから間もなく、あゝ露子様はしふねくつきまとふ病魔の爲めに、あはれ其の御名の如……。折りしも、母屋より聞ゆる笑聲に、我れにかへり、ふと仰げば、今迄大空にすみのぼつて居た月は、今しも出てきた村雲のためにおぼはれてしまつた。されど、月は又照らすことができる。花は散つても、時來れば又咲くことができる。されど、我れはなつかしい友に、永久逢ふことは出來ないのである

夜もはや更けたやう。さらば、今宵の名殘りに、今一度彼の曲を。おゝ、亡き君よ、拙き手にて奏づるヴアイオリン、さらばきゝませ、天國より。

（西評）すべて今一層の文にて候。

○入院せる友を思ひて

伊勢　加藤倭文子

君が御影の見えずなるまで見送りて、悄然として停立めば、心なき風に二ひら三ひら、散る紅葉葉の、さてもあはれ深しや。永しとにもあらぬ別れの、などてかく己にはかなしきぞ。あはれ過ぎにし夏期の別れよ、かくはあらざりしものを、と文なく思ひ亂るゝ心の苦さよ。今日君を音づれて、いかに嬉かりしよ。日頃にさまでかはりなき君が面わに、さては心安じたりし。あゝ、されど、君は病の床に打ち臥し給ふ御身なり、入院せさせ給ふを如何にせん。共に手を携へて、運動場にそゞろ歩きせんは、そも幾日の後かと、思ひ迫りて、そと顔をそむけたりし己れ、數行の涙は袖を濕しぬ。さても、分ち難かりしよ、君を殘して。されど、

かくては君が身をやそこねまゐらせんと、進まぬ足にいつしか病院を出でぬ。吹く風清き秋の野に、夕日かげ落ちて、友にや後れし、高く鳴き行く雁の一聲。思ひある身は、たゞ夢路を辿る心地して、舍に歸りしが。夢心地に君が室音づれて、御名呼ばはれど、答はなくて、主なき文机の淋しげなるに、ふと胸をうたれて怅然たり。

今宵自習を終へて、友はなくたゞ獨り運動場をさまよひぬ。今しも松の梢そがれたる月影の、砥もて磨きし玉の、それにも似たるよな。あゝ、この月、君はそも病の床に、如何に見たまふらめ。さても、君なき夜半は、餘りにさびしきよ。

寒さはとみに加はりぬ。熱など出で、苦しくはおぼさずや、君。まゝなる身ならましかば、おのが掌に冷き水たゝへて、君が頭をも冷しまゐらせんものを、心細くおぼさずや、君。叶ふ事ならば、君が枕に侍らひて、面白き雜誌よみて、せめて御心なぐさめんものを、と思ひ出でゝは堪へざりしよ。おのが心せめてはと、思ひのまゝを文に認めて、君居ます病院にとは送りぬ。今頃は、おのが心からなる文、開きてやおはする、世にもすぐれて戀しき君の、そも何とかお思召らんか。

（圍評）情はあはれにきくべきものあれど、前後の連絡また筆のまはらぬところあるををしむ。

○故郷の別れ

伊豆　かすみ女

あな、われは此の美しき山川、戀しき父母姉妹も、親しき友も、今日を限りに別れざるべからざる身とはなりぬ。

あゝ思へば、われ生れてより此の高き山、清き流れ、或は狹くとも此の野邊を友として、斯くは年を重ねき。みどり萠えたる春の野に、友と語りつゝ花を折り蝶と戯れ、時には節面白き一曲も友にせしこともありき。火雲身をやく夏の日、綠の影に書を繙き、夜は凉みを追うて妹と共に螢を狩り、砂白く松青き磯邊に貝拾ひせしこともありき。天高く氣澄む秋の日、小鳥を友に紅葉の山に茸を狩り栗を拾ひ、淋しい秋の夜にも、虫の音月の影に、あこがれては、歌を詠み詩をものしたることもありき。寒さ身を切るばかりの冬の日、雪の中を面白げに飛び廻り、或は雪だるまなど作り、登校の道すがら、雪の深さに困りて、叔母に連れ歸られたることもありき。われは斯くあどけなく面白くをかしく月日を送りぬ。

さるを、今や此のなつかしき故郷を去りて、白雲千里の異郷に、再びなつかしき山水を作らんとするか。何時かまた此の親しき友と語らはん。あゝ果敢なき別れなるよ。如何に他郷の山は高くとも、水は清くとも、などて此の山此の川に勝るべき。なつかしき父母は此處にまし／＼、愛らしき弟妹は此處に住み、親しき友は此處にあるを。あゝ……われは今滿腔のうらみを此處にしぼり、涙の泉のつきるまで泣かむ。いかに無情なるとも、察してよ、山よ川よ、わがやるせなき心の内を。

あゝ思へば、十有餘年は餘りに短かかりしよ。黄昏の色は早や襲ひ來りて、冷やかな夕風一陣身にしみて、遠く聞ゆる鐘の音がボーン……ボーン……二つ又二つ哀れに淋しく……。さらば、別れん、山よ川よ。

月影朧にまたゝきて、淡青き影は悄然と、清き流れの面に寫つて、わが前途を伺ふかの樣。

（評）しつかりとしたる筆は見えたり。情熱の足らざらむ心地するををしむ。

○お月樣

三重縣　奥瀬かすみ

あゝお月樣！

其の青白い光り、庭の葉櫻越しにもるゝ時、妾は小さな手を合して泣いて居ります。

何故でしよう。妾自身にも解りませぬ。只、何となく身にしみ渡る光りの、何うしても泣かずに居られません。して、其の涙の内には、光明てふ影が宿つて居ります。つまり悲しくて泣くのでなくて、喜んで泣く其の涙、はら／＼と落つ其の雫に、罪の影が何處に流さるゝのやら、其の間！一瞬！！全く私はお月樣と合躰したやうな、清々とした心地になります。

父も母も、友達もない妾の身の、父として母として、亦お友達として、妾はお月樣をしたうて居ります。如何に悲し事、切なき事でも、此の優しい友に、それとなく打ち開けまするど、無限の慰籍を得らるゝのです。

あゝ／＼お月樣！

高いも低いも、貴いも賤いも、一ツの區別もなくて、其の清い光りを與へ、世にしひたげられた、弱い者の友として、永久にほゝ笑み給ふ其の姿、其處に道德も法律も影をひそめて、闇の寬の子が姿もなく、情なき朝顏も、しほらしや細きつる以て、夜每／＼おろがみつ、小さき虫は讃美の歌を擧る。眞に平和の光りの、嚴しい神樣、と妾は思つて居ります。

銀ときらめく天の河に、從者なる星を右左にして、闇なる衆生照らし給ふべく、金砂の道をいそがせ給ふ。其の時よ。實に其の時、地には人の子の、パンを求むる矢叫びの聲も絕え、萬籟寂と眠つて、各々天國に遊ぶ。あゝ小さき類は、玆にしばしの平和の夢結んで、やがて鷄鳴に醒めては元の罪の子、血潮を流し、同類をしひたげ、かくてはかなや五十の命、身は仇し野の露と、細き息絕え、骸氷りて、亦お月樣の、優しい光りに慰めらるゝ奥津城、其處に初めて、永い／＼浮世の夢が醒め果てるので御座いましよう。

お月樣！

十三七ツはしめて二十、思へば二ツのお年上、姉さまながら、妾は神樣と……。

俳句

巖谷小波選

特別第一賞

豐後竹田町　平山紫泉女

花の門御歌つかいの叩きけり

【評】古き給從見る心地す、何等の優美

特別第二賞

越後中蒲原郡蔣瀨村　五十嵐富美子

朝寒や柳にからむ船けぶり

【評】俳諧としての好題目

特別第三賞

越後中頸城郡寺野村　藤原豐子

朝月を馬借りに來る隣かな

【評】寫實寫眞にても必ず選に入らむ

天

越後中頸城郡寺野村　藤原春子

萩の月歌盜人のひそみけり

【評】何の月でもよさゝうなれど萩なるに一入興なり

地

靜岡縣小笠郡河城の里　桂影子

草の戶や障子を叩く秋の蝶

【評】草の戶なればこそ秋の蝶もたゝく力はありけめ

人

福井縣立福井高等女學校　高柴小靜

櫨紅葉石切る山の小家かな

【評】實景見るが如し

六佳選

水汲みに萩の中行く女哉　美濃　宮部俊子

萩暮れて酒借りに來る隣哉　越後　藤原雪子

飛込んでいなご流るゝ野川哉　上毛　千代子

秋の水稲を起せば流れけり　下總　小島よし

七夕や兄も手傳ふ小短冊　千葉　森美智子

山陰や石冷かに夕紅葉　德島　住友時子

足洗ふ三國太夫や秋の水　神戸　吉田寶江
五月雨や花のこぼるゝ貝細工　新潟　小島ゆき子
鷹狩て勝手淋しう時雨けり　下總　小泉つや子
萩の露孔雀の羽にこぼれけり　安藝　中村東雲
神の井戸覗けば暗き青葉哉　豐後　後藤波子
風の日や木の葉交りに渡り鳥　羽前　鈴木重子
みめのよき狂女に逢いぬ芒原　越後　かをる
夕鳥くびかしげたる熟柿哉　本郷　まこと
曇空や繪馬など掛けし古板　武藏　岩田たか子
樓井戸に朝寒の顔寫りけり　越後　野菊子
奉納の釣鐘通る花野哉　豐後　平山龍子
月清し星賜の棧足穿ちみん　靜岡　すま子
落武者の二三騎通る芒哉　大分　溪の月
紙子着て頰骨高き翁かな　越前　内田きみ子
山茶花に律院の晝閑かなり　岡山　中島幸子
山茶花に狩衣干すや日は斜　美作　高畑美智子
寺町に片荷賣りきる納豆哉　横濱　靜枝女史
拾ひ子の親は何處ぞ夕時雨　土佐　秋月廣江子
明け殘る月しつかなり城の上　常陸國　汀柳女子
蟲の音に燈火細る夜寒哉　大阪　つゆ子
木枯や山靜まれば瀧の音　岐阜　山田はぎ
刈りし荻のしほるゝ夜總哉　大和　秋荻女史
山を出る旭に氣の付し冬至哉　伊豆　尾崎あい子
朝霧の晴れゆくあとや屋一つ　丹波　石井しゅん子
浮島の後つきまはる落葉かな　磐城　佐川雲子
長き夜を二度來る郵の便哉　陸中　及川なつ子
草刈つた跡にこぼるゝ菊野かな　大阪　島居雲子
とれ見ても男姿の案山子かな　仙臺　光子
淋しさや七堂伽藍秋の雨　備前　おちば女史
白菊やかほる書院の襖繪　伊豆　加藤多米子
竹千代のもの待つ庭の時雨かな　神田　小崎秀出子

冬木立鎭守の鳥居寒い曇　下野　宮岡春江
椽近く水櫨の垣の迫りけり　岐阜　日比舒子
稻戰ぐ風の新し今朝の秋　德島　川和眞佐子
木枯やからびつきたる吊し柿　埼玉　井上なか子
みぞるゝや番所にひかるゝ裸牛　大宮　紫女史
酒酌みて講和の秋を弔しけり　佐世保　汎愛子
雪の日の混沌として暮れにけり　上總　巧笑女史
黄昏るゝ音の澄けり落し水　鹿兒島　波江野紫子
秋の雨刈り干す稻をぬらしけり　安藝　山吹
夕榮や麥播いて居る若夫婦　靜岡縣　福井道子
雛の客乳母車にて來たりけり　仙臺　山縣幸子
川蟬や小舟を繋ぐ竿の先　千葉　紅葉女
麥蒔や霧にくもれる赤磯　廣島　曾川秀子
虫の音にさはらぬ草の嵐かな　大分縣　工藤鈴子
バイブルに挾んでも見る野菊かな　金澤　豐野豐子
慈恩尺疎竹せまりて初嵐　松山　山脇幸子
名月や何時か辿りて江のほとり　埼玉　武島たま子
楓落ちる名なし小川や鮎落る　神戸　たま子
秋風や堂に人なし鳥の聲　京都　石田ちほ子
川沿に舟つなぎけり萩の花　淡路　伊藤敏
落ちかゝる瀧の白さよ山紅葉　美濃　千秋子
月今宵心に何も無りけり　出雲　紅子
さら／＼と降るや鎭守の夕しぐれ　德島　田中佳子
道祐只さへくらき夜なりけり　伯耆　牧野滋枝子
日暮れて野の道白し草の花　越後　鳳川潤子
潮の水どくよりと天の川　加賀　松原みつ枝
馳せ違ふ雲脚早し稻の花　伊勢　柴田紫芳子
小狐の僧にも化けて宵の萩　本郷　安子
凱旋の勇士ねぎらふ秋の山　小石川　宮本幸子
大利根の櫓拍子高き夜寒かな　千葉　人見百合子
秋淋し山僧一人鐘をつく　大阪　杉田孤泉

消息文

日本女子大學教授　豐井文學士選

天

在京の友によす

越後長岡町　前崎照子

今を盛と匂へる籬の菊に、名殘も惜みあへず、病をえてこゝ古里に立ち歸り候ひしより、早くも歸らぬ年は逝きて、病床に思出多かりし京都の花も、いつしか根に歸り、日毎に繁くなりゆきし木々の梢も、色づきそむる此の頃、いかゞ御覽ぜられ候か、いよゝ淸々しう入らせられ候よし、こよなき御事と喜ばしうも、御羨ましうも存ぜられ候。御手づから摘みとりはさませ給ひし紅葉、今も其のまゝにて、かの書繙く折々は、いつも思出の糸繰り返へされ、はてはかひなき今の身をかこつのみにて候ひしが、この頃は病もやうやく怠りゆき候へば、御許樣と手を連ねて、花も實も豐けき歎の庭を、辿り候はむ事、やがての程と、心嬉しく、お土産には何よけむなど、たゞ〳〵樂しき想像に包まれて、これかれの用意も大方調ひ候ひしに、思ひがけなくも醫師より修學を止められ候悲しさ。さ程迄に我が身の弱り果てしかと、餘りに情なく、其の夜はげに、涙の種も盡きよと斗り泣き候ひぬ、五年の命、よしや三年となるとも、好める業學ばでやはと思ひつめし事、一度二度ならず候ひしが、兄逝き、弟さへも去年失せにし今、唯一人子とて、父母のいたはり給ふ事大方ならず、生きてだに在らばと、口くせの樣に云はれ居り候ものを、このまゝ呉竹の世に出づべき節なく、埋木と朽ち果て候とも、いかで身を養ひ一日も長うながらへて、年老いたる父母を見送らでは、子としての罪のさこそ深からめと存じ、遂に廢學と決心致し、昨日學校へ退學願差出し申候。心中御察し賜はりたく候、然し、何も定まれる運命とあきらめ、平和なる田園の家庭に、自然の風景を友となしつゝ、折々は父が謠に心慰め居り候へば、何卒案じ給はぬ樣願ひ上げ參らせ候。唯病斗り無情なるはなしと思ひしられ候へば、御許樣にも、日頃の御丈夫にまかせ給はず、目出度素志を貫かせ給はん樣、蔭ながら祈り居り申し候。同窓の君た

ちへは、別に文を参らせず候へば、よしなに聞えたまはりたく候。都にてもはや初鴈きかせ給ひしか、否か。今しもかなたの空に、あはれなるわが思にそへて、其の一聲をも封じてめ申し候。かへすがへすも、これよりは寒さにむかひ候へば、お風などめさぬやう、御身いたはらせ給へや、かしこ。

（兩評）情も辭もやさしくすなほなる文、其の人がらも見えてゆかしう候。天とす。

地

○望の夜都の妹に

長崎市　粟田すが子

去年まではともに眺めし、一年の明月、やう〳〵鎭守の森をはなれ候。今し御身は何をかものしたまふ。靜けき學びやの窓に、晝どもひもときたまふか、さらずば、校庭のそゞろありきに、故山をや偲びたまふ。げに今宵は思ひ出多き夕に候かな。去年の今宵よ、御身と二人欄によりて、空うちながめつゝ、あのさやけき月をば、わらはは鏡といひ、御身は玉とぞ申されしが、思へば、玉も鏡もいとめでたきものに候。されば、御身も夜半の明鏡に、己が心をうつし見て、かどかど、思ふふしも候はゞつとめて打ち砕き、玉の光りそふまで、いやみがきに、みがきたまひて、卒業の日は、あはれまどかなる人となり、美しき光りをこの故郷に輝したまへとは、わらはがあけくれのねぎごとに候、たひすらいそしみませ、わが妹よ。そりから、月はいと高うなりて、窓のくれ竹は墨畫の影を、壁に投げ候。御隣の千代さんにや「御月様若いな、いつも年はとらないで」と歌ひ候。げに月は去年も今宵も同じ影ながら、袂をわかちて、早一年、御身が黑髮の丈のさてこそ、のびつらんと、わけても今宵はなつかしう候。

（兩評）つゞまやかにまとまりたる辭、先づ見るべし。姉の情も自からこもりてきこゆる、また愛すべし。地とす。

人

○スケッチ旅行せる兄の許へ

神戸市元町五丁目　高井菊江

兄樣ひどいよ、自分一人で行くなんて、決して寫生の邪魔はしないからと、あれほど僕が言つてるのに。ヨシ〳〵、連れて行つてやらうとの言葉に、安心して

それでも、若しよく寐て、夜の明けたのも知らないまに、抜けて出られると、いけないと思つて、兄樣のねまきの据をしつかり、僕の帯でくゝつといたの[illegible]、丁度僕が而白い……もう兄樣と一所に行つて遊んでる……夢を見てる最中には、もう置てきのぼりにされてたのだつた。けれども、もう仕方がない故、僕は大人しくして待つてますから、御土産を澤山ね。弟より

今頃は何處に被入るの。たゞ「本日天の橋立の絶景に接し申候」では餘りあつけなさ過ぎますわ。御たよりばかりを、何よりの樂みにして居るのですもの。けれども、あの繪葉書は美う御座いますのね、きつと二三組は、兄樣のカバンの中に入つてるに違ひないと、小踊して弟は喜んで居りますのよ。

又しても通りすがりの里の子を捕へて、其處に立つとれ彼處に坐つとれなどゝ、二三時間も引き止めて困らして居なさるのではありませぬの、時には中途で逃げ出されて、馬鹿つと後姿に一睨。した所で後へ引きもどす術もなく、結局はあゝ一雄を連れて來ればよかつたにと歎息なさるのでしやう。これは弟に代つて陳ずるのです。

さて、此次は、靜かな御山の方へだらうと思ひますが、如何？これはと驚歎の餘り繪筆抛ちなさる樣な所も、少く無いでしやう。御自慢の横笛、御得意の寫生、繪を書かうか、笛を吹かうかと、聞なれぬ鳥の聲に耳澄しながら、迷つて被入るのではありませぬの。人遠く水草清き所は、嘸かし物の音も澄みまさるでしやう。何卒その繪の中にその笛の音をも、吹き入れて持ら歸つて下さいましな。

而白い詩味溢るゝ樣な畫材を御集めなさる爲めには、御ゆつくりと遊んで被入いましと云ひたいのですが、ですが兄樣、御隣の御兄妹の例の花やかな合奏を聞ますと……。ほんとに兄樣、私つく／＼淋しくなりましたよ。とにかくゆつくりしてそして早く歸つて下さいまし。

妹芳子

（雨評）才情の見ゆるもののあるを以て、人とす。

秀逸

○茶の湯に招かれたる返し

鳥取市鍛冶町五七　上山千重子

秋さびて落葉朽葉にすだく虫の聲、物おもふ身には一

しゝ悲しう聞きなされて候。さても、母にわかれ妹に別れて、わびしとのみ知りそめし此の世の秋、うらがれの庭に、ひとりつめたき運命にもだえ居候。折柄、なつかしの、御許樣が水莖のみあとに接し候ふうれしさ。封目に小さう蕾と候は、げにてれにて愁の眉も開けとや、とまれ卷きかへし拜し參らせ候。珍らしやな緋桃の花三つ二つ、枯れし梢におもはぬ春を示し候よし、あはれ一つ御庭に、春秋を收め給ふ御許樣の幸多き、今更羨しうて〳〵、我のみ何の罪の子ぞ、のろはしの世やと、ゆるしませ、又も愚痴にかへり申し候。あはれ、如何にもして馳せ參ずべく、せめて一夜をだに光榮ある御許樣と松風淸き御離れに茶汲まむは、我が唯一の樂しみに候。幸ひ明日は後の月、月に不足も候はねば、御庭の好景にあてがるゝには、折りよしと存じ候へ。此の茸誠に香低く候へども、田舎の乳母より唯今送りてこし候まゝ、輕少ながら御目にかけ候。御笑味給はらば、如何に嬉しう候はん、末毫ながら明日の宵の、いやが上に晴れよかしと念じ申し候、あなかしこ。

(雨評)　優美に器用に作り得たる文と申すべし。

秋〔天賞〕　肥後八代郡高田村高下池田方　本田道子



○菊の花にそへて友のもとに

大阪市西區新町通五丁目　富永才子

秋の千草はかれはてゝ、露霜しげき園の中に、匂ひいでたる菊の花、あまりにしをらしうおぼえ候まゝ、妙なる色をとりまぜて、二本三本まゐらせ候。あはれちりもとゞめぬ御床のほとり、君が御手にてさしはさみ玉はゞ、いかに榮ある事に候はむ。白きとうすみは、御髮をかざらせ玉へとの心にて候。高きかをり淸き姿の、御心にめし候はゞ、一度てゝの花畑へ入らせ玉はずや、御得意の和歌一首、菊への御土產に賜はらば、

殊によろこび申すべく、御禮には吃度まゐらすべきもの、候ほどに、御さしつかへだにあらせられずば、あすとものたまはて、とく〳〵入らせ玉ひてよ、待ち奉り候。まづはあら〳〵、菊の露を硯にうけて、かくなむ。

（雨評）優美にすなほにまとまりたる文とこそ申すべけれ。

○遠足に誘ふ文

備前御津郡石井村島田　松本もと子

秋風そよ〳〵と稲の葉なびかせて、鳴子の音も豊かに聞えますこの頃、運動家の貴孃、内に許り居るわけにはゆきますまい。山は紅葉の錦を飾り、野は千草の花を咲かせて、我れ等を待つて居るではありませぬか、桔梗刈萱女郎花など、春の菫やたんぽゝに比して高潔ではありませぬか。雪とちる花の山よりも、紅葉ふみわけ鳴く鹿の聲きく方が、高尚ではありませぬか、日はうらゝかに風心地よく、芒の穂までが出てよと招いて居ますよ。私一度遠足にと思つて居た矢先、昨日ゆくりなくも、露子の君から、ほら去年まで學校へいらつしやつた野村さんよ、あの方から今故郷の宮内に居るから、是非お友達と、遊びにきてくれ、紅葉が盛りですとの、なつかしい玉章を下すつたの。私もうぢつとはして居られませぬ。運動家の貴孃、健脚自慢の貴孃、賛成して下さるでせう。外に文章家の松子さんと三人てね、朝早くから出かけようと思ひます。二里の道、遠足にはあつらへ向てすよ、十三か二十日かの日曜にしませう。お返事待つて居ますよ、さよなら。

（雨評）快活氣なる筆愛すべし。

○友の許へ

神戸　ひで子

何れ近き内に、との御事なりしが、如何遊ばししにや、そよとの御便りも、あらさるは。花野もやがて、霜枯れて、埋火床しき頃と、成り申すべきを、御意に入りし、きりぎりすも、今は早や、野菊が下を、おくつきの身と成り果て候ひしはや。されど〳〵、山に岡に野に川に、好み玉へる晩秋の、興は至らぬ隅も候はて、日毎眺むる、我身さへ、いとゞ飽かぬ心の、まさるゝを、いかで一度は、訪ひ來ませ、なつかしと宣ふ野邊にては候はずや。御ほめに預かりし、黄菊白菊、人まち顔に、にほひ出

で候、まきこめしも、そが花びらにて、せめては、君が御案內ともならばとて。

あはれ、妾のみかは、君まつものは。

（兩評）言ひまはしに一かどの味ひあるところ、殊に愛すべし。

○茸狩より歸りて其友の許へ

岩代須賀川本町　服部貞子

氣をつけてのお言葉を後に、とぼ〳〵歸りくる草野路は淡き晝の月と諸共に候ひき。行き違ふ同じ茸狩の人、一人二人、互にのぞき込む籠のうち、満てるは私のゝみの樣見受られ、思はずもほゝ笑まれ候。君がみ手傳ひのいと喜しさまゝによ。

結びつけたる藁草履ぬぎたるは、四時頃にて候ひし。

（兩評）才氣の見ゆるものあるを愛す。

一ぱい頂戴　〔地賞〕

宇都宮市大工町　小島深雪子



昨夜の月は淸うも候ひしかな。月下にたうべたる枝豆のからには、我れながら驚かれしよ。つめたくも心地よかりしは、今朝の朝露にて候。恐くも面白かりしは小麥藁うづ高う積みたる馬車の上、ともすれば落ちさうにて、さても、忘られ難きは、彼の握り飯の味ひにて候よ。二日づゝきの山あるきに、黒うもなれる我が頬のあたり、今猶去らぬほゝ笑みは、それよ、人よりも大なる眼もちたる私の、見つからぬ〳〵とて、茸蹈みあるき居たる一事に候。つかれや出てし、兩のまぶたのいと重う候へば、えにて…父母君に宜しう。かしこ。

○夏歸らざりし都の友へ

東京市小石川區小日向臺町三丁目五十二番地　櫻井美代子

來む夏の休みは必ずよと、草と草との露を分けて、美はしの夜の空に、美はしの空の星に、名殘り惜みしより、明けては暮るゝ久方の月日は、早一とせにもあまりぬる哉。其の後は忘れ玉ひてや、年を送り年を迎へ、花咲き花散れど、待ち詫びし君の歸り來まさねば、緣に注ぐ夕立を、獨り籠り居の窓に聽きて、夕雲遠き思ひに、幾度か淋びしさをかこちけん。あゝ月の光りや鳥の音や、何れか忍ぶの種ならぬやは。唯都の君のつれなくして、秋いつしか寒く、筧を流れ落つる柿の病葉の日に添ひて增すに、打絕えて消息だになきは、何の祈願の斷物にてか、けさ慰めもなき心に堪へかねて、思出多き彼の岸のべをさまよひぬ。靡く尾花の裾にして、鳴く音止めし蟋蟀は、こぼるゝ露を怪みてか、まと怪しの露のこぼれもせん、思へば〳〵行へも知らず流れ行く水に涙の落つる哉。明暮都の空を眺めつゝ、訪ふ人もなき草の宿を、空しく朝霧夕霧の迷ひ所となせば、兎角あぢきなさとの數々に、先づ消えなんとこそ思はるれ、あはれ〳〵八重葎の亂れに、そこともわかぬ萩の袖垣を、せめて音づる風の便りもがな。

（雨評）優美にして洒落れたる所見るべし。

○ふる里の妹へ（旅行先より）

三河川鴫郡石下瀨村　澤田忠三郎方　澤田つま子

靜ちやん、今やつと須磨の宿に着いてよ。明日はゆつくり敦盛の墓や、須磨寺の寶物などを見物して、明後日京都に向ふつもりなのよ。でも、此處に來たら、何だか他處に行くのが否になつて……だつて、まー本統に濱の景色が奇麗だもの。波がさら〳〵と、白銀のやうな眞砂地を洗つて、畫いたやうな松の古樹が並んだ間から、廣々した蒼海原を、鷗のやうな白帆が往來する樣つたら、靜ちやんも一處に連れて來て見せたかつたわ、宿でさつと鹽風呂を浴びて、青藻の匂ひがする濱風に、鬢のほつれ毛を弄らせながら、二楷の欄に凭つて眺めると、海は一面に靑毛布を布ひたかのやう。其れに、桔梗色の幕を張りつめた空か、一つになつて、水や空、空や水と見まがふ細い糸一筋の處に、淡路島が夢のやうに浮び出して、淸い十五夜樣の光りを受けた磯の松原が、眉黛を引いたやうに連なつた姿に見惚れて居ると、魂が身躰から拔けて行くやうなのよ。お

父樣は繪のやうだと仰るけれど、繪には此んな奇麗なのはないわ。夫れにつけても、可笑しいは芳雄よ。今も濟て、車から下りて貝を探しながら、前を白帆が通るのを見て、あゝあの舟は外國へ行くだと言ふの。芳ちやん、外國つて何處なのと聞ひたら、あら姉樣、外國知らなくつて。外國つて、外國なのよ。姉樣本統に可笑しいわと、さも面白さうに楓のやうな手を叩いて笑ふだもの。お母樣とお腹を抱へて笑つたわ。帆立貝を二つ拾つて、一つは御留守居の靜ちやんに御土産にするつて、宿につひてからも大喜びなのよ。でも、小供だわ。晝の疲れに、夕飯も食べずに、貝を枕元にするたまゝ、最前寢て仕舞つたのよ。あれ、千鳥が鳴くよ。私初めて聽いてよ。ほら又一聲二聲。

芳雄は今夢でも見たのか、靜ちやんと一聲、またすやすや。

（雨評）作者の文いつも綺麗なる繪の如きものある、實に見るべきところなるべし。



鐘聞き〔人賞〕　埼玉縣實珠花在目沼五　伊東香子

○友の許に

筑後國八女郡黒木町上味
大島菊子

吁、わが懐かしの戀しの君には、あけくれ深き物思ひに沈まるるとや。萬々御察し申し候。哀れさ悲しさに泣は、君一人には候はず、こゝにも果敢なき孤兒の候よ。身に積る悶々の情は消えやらで、思ひは更け行く秋とみだれて候。それにつけても、去年の秋、憂き悲しさの思ひ出でられ候ては、とても浮世は夢にて候よ。胸にくるしき情を秘めて、強ひておもてに平靜を裝ふ妾が衷心、御察し下され度く候。

悶えの時、惱みの時、暖き君が情のみ手とらむにはと想へども、雲や隔つる故郷を遠き旅より旅に漂泊ひの身には、胸に限りなき寂しさを覺えて、空行く雲にも

涙はさしぐまれ候。

實に思ひ出多きは、故郷の名なし小川の水の音、君と泣きしも別れしも、皆その小川の去年の秋。あゝ君よ、半宵夢結び得で枕を欹てゝ聞く流水の音奈何に、あはれ思ひを雁音に傳へてよ。

さらばよ君よ健在なれ。

（評）しつかりとしたる筆見るべし。

○遊學せる弟の許へ

大阪南區　つゆ子

願はくば、おん身の上に幸多かれと祈れる故にや、其許の姿の、折々わが夢路に通ひ來て、なか〳〵にこひしさにたへざるを、恙もなくて、學びの道にいそしみ給へる由、殊に去る月の試驗に、其許の成蹟は、人々に勝れ居たりしとの事、なつかしき文にて知りたる時のわが喜びは、如何なりしぞ。思はず落しし嬉し涙にても思ひ知られ候ふ。これも其許が、如何にもしてと、勵む心の表はれしならんと、お友達にも話してほめ稱へ居り候。されど、勝つて兜の緒をしめよとかや、ひと度獲たる今の榮も、心に驕りの生ずる時は、遂にそを失ふに至るものなる事を、よく〳〵心に銘じ、尙ほこの上に勉め勵みて、素志を達せんとなされん事を祈りに祈り候。こは姉なる妾が言にはあらで、亡きふた親の誡めのお言葉と思ひて、つゆおろそかに思ひたまひそ。

妾とて、身の貧しきを悲しむたびに、何につけても學びの資の足らぬ勝ちなる其許の、人に增したる憂き苦勞を忠ひやりては、腸を斷たるゝの思ひあれど、皆運命とて致し方なく、これらの苦しみも、たゞ〳〵ひと度崩れしわが家の名を擧げん爲めとてなれば、其許にも、艱難を壁にすのたとへを心に繰り返して、他そ事には意もかけて、一時も早く業を終へ、身を立てゝ、父母のみ靈を安めまつらんと心がけられ度く、一重に願ひ申し候ふ。さはいへど、いかに勵めばとて、萬一その身に恙のありては、今のわれ等の、歎きの上の歎きなれば、朝夕の起き臥しにも、よく意を配り、身をいたはりて、よみぢなるふた親や、妾が願を仇になし給ひぞ。

まだ〳〵いひ送りたき事は多けれど、時節柄其許の綿入縫ふ手の急がるゝまゝ、先づはこれにて筆止め申し候。かこし。

（評）姉の情、げにとやさしくきこえ申して候。



短篇小說

廣津柳浪選

特別第三賞

○霜夜

岩代須賀川本町　服部すいせん子

（一）

「馬鹿ッそんなことゝて離られると思ふかッ、妾が何だ、酒を呑むが何だ！お霜貴樣はな己公の娘で無いか己公はな痩せても枯れても元は武士だぞッ武士の娘が夫が身持が惡るいからとて、それで出る……」

元之進は殊の外の立腹である。眞白なチョン髷は傾むいて、魚網の破れをつくろつて居た手を、ブル〳〵顫はしながら握り占めて居る。

障子の破れ目を、吹き入つた風に、手ランプの煙り亂れて、上り端に固くなつて居るお霜が髮の亂れ、青白い顏にハラリとかゝる。

「源藏はな己公の目鏡ぢやぞ、年取つても此元之進が見立ぢやぞッ妾を持つて酒を呑むも源藏の勝手ぢや、貴樣が知つたことぢや無いわ！それ丈の働きがあるんぢや」

圍爐の鐵瓶はうなり出した。四疊半の破れ疊、たゞ元之進が怒氣の聲のみ。

「お霜ッよいから歸れ、己公は貴樣が嫁く時に、貧乏になつたら歸れとは言はなかッた筈ぢや、亭主の身持の惡い時には出て來と言はなかッた筈ぢや、」

元之進が大聲に驚いてか、背なる源一は泣き出した。お霜はたゞ涙。

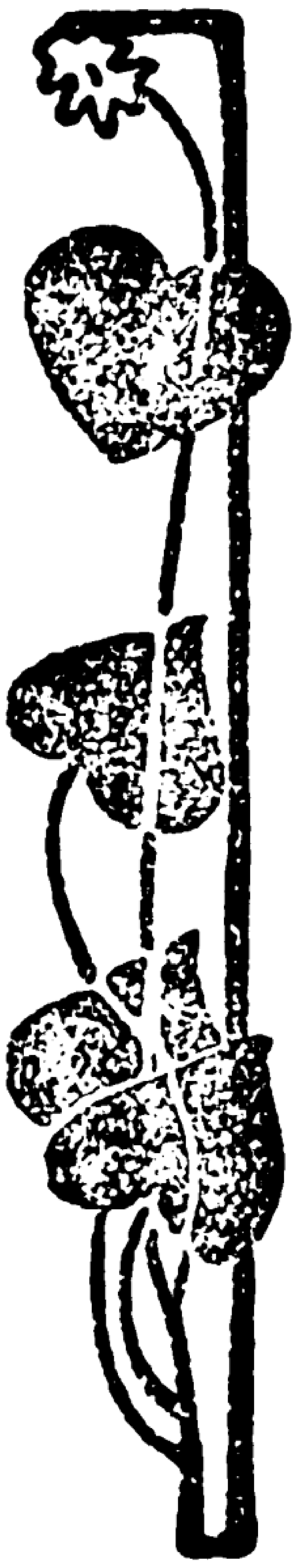
「其妾の女と一緒に住め、な、お霜！たゞ負けるなよ、貧乏と戰つて……」

「さア歸れ、夢の間に歸れ！」

悄々と立上れるお霜、廿五の女盛りを、あはれ誰が爲の苦勞ぞ。やつれたる其後姿、長く細く破れ砂壁に影を寫した其樣、さすが老の身のつと面を外らしたのである。

（二）

背の源一はまたすや〳〵と寢入つた。再び戻らじと渡つた土橋の上に立つて、お霜は我知らず振り向く彼方、



消息文

日本女子大學教授　藤井文學士選

天

在京の友によす

越後長岡町　前崎照子

今を盛と匂へる籬の菊に、名殘も惜みあへず、病をえてこゝ古里に立ち歸り候ひしより、早くも歸らぬ年は逝きて、病床に思出多かりし京都の花も、いつしか根に歸り、日毎に繁くなりゆきし木々の梢も、色づきそむる此の頃、いかゞ御覽ぜられ候か、いよゝ清々しう入らせられ候よし、こよなき御事と喜ばしうも、御羨ましうも存ぜられ候。御手づから摘みとりはさませ給ひし紅葉、今も其のまゝにて、かの皺縮く折々は、いつも思出の糸繰り返へされ、はてはかひなき今の身をかこつのみにて候ひしが、この頃は病もやうやく怠りゆき候へば、御許樣と手を連ねて、花も實も豊けき敎の庭を、廻り候はむ事、やがての程と、心嬉しく、お土産には何よけむなど、たゞ〳〵樂しき想像に包まれて、これかれの用意も大方調ひ候ひしに、思ひがけなくも醫師より修學を止められ候悲しさ。さ程迄に我が身の弱り果てしかと、餘りに情なく、其の夜はげに、涙の種も盡きよと斗り泣き候ひぬ、五年の命、よしや三年となるとも、好める業學ばでやはと思ひつめし事、一度二度ならず候ひしが、兄逝き、弟さへも去年失せにし今、唯一人子とて、父母のいたはり給ふ事大方ならず、生きてだに在らばと、口ぐせの樣に云はれ居り候ものを、このまゝ吳竹の世に出づべき節なく、埋木と朽ち果て候とも、いかで身を養ひ一日も長らながらへて、年老いたる父母を見送らでは、子としての罪のさこそ深からめと存じ、遂に廢學と決心致し、昨日學校へ退學願差出し申候。心中御察し賜はりたく候、然し、何も定まれる運命とあきらめ、平和なる田園の家庭に、自然の風景を友となしつゝ、折々は父が謡に心慰め居り候へば、何卒案じ給はぬ樣願ひ上げ參らせ候。唯病斗り無情なるはなしと思ひしられ候へば、御許樣にも、日頃の御丈夫にまかせ給はず、目出度素志を貫かせ給はん樣、陰ながら祈り居り申し候。同窓の君た

ちへは、別に文を參らせず候へば、よしなに聞えたまはりたく候。都にてもはや初鴈きかせ給ひしか、否か。今しもかなたの空に、あはれなるわが思にそへて、其の一聲をも封じてめ申し候。かへすがへすも、これよりは寒さにむかひ候へば、お風などめさぬやう、御身いたはらせ給へや、かしこ。

（兩評）情も辭もやさしくすなほなる文、其の人がらも見えてゆかしう候。天とす。

地

○望の夜都の妹に

長崎市　粟田すが子

去年まではともに眺めし、一年の明月、やう／＼鎮守の森をはなれ候。今し御身は何をかものしたまふ。静けき學びやの窓に、書どもひもときたまふか、さらずば、校庭のそゞろありきに、故山をや偲びたまふ。げに今宵は思ひ出多き夕に候かな。去年の今宵よ、御身と二人欄によりて、空うちながめつゝ、あのさやけき月をば、わらはは鏡といひ、御身は玉とぞ申されしが、思へば、玉も鏡もいとめでたきものに候。されば、御身も夜半の明鏡に、己が心をうつし見て、かどゝ思ふふしも候はゞつとめて打ち碎き、玉の光りそふまで、いやみがきに、みがきたまひて、卒業の日は、あはれまどかなる人となり、美しき光りをこの故郷に輝したまへとは、わらはがあけくれのねぎごとに候、たひすらいそしみませ、わが妹よ。をりから、月はいと高うなりて、窓のくれ竹は墨畫の影を、疊に投げ候。御隣の千代さんにや「御月様若いな、いつも年はとらないで」と歌ひ候。げに月は去年も今宵も同じ影ながら、袂をわかちて、早一年、御身が黒髪の丈のさてこそ、のびつらんと、わけても今宵はなつかしう候。

（兩評）つゝまやかにまとまりたる歟、先づ見るべし。妹の情も自からこもりてきこゆる、また愛すべし。地とす。

人

○スケッチ旅行せる兄の許へ

神戸市元町五丁目　高井菊江

兄様ひどいよ、自分一人で行くなんて、決して寫生の邪魔はしないからと、あれほど僕が言つてるのに。ヨシ／＼、連れて行つてやらうとの言葉に、安心して

それでも、若しよく寐て、夜の明けたのも知らないまに、抜けて出られると、いけないと思つて、兄樣のねまきの裾をしつかり、僕の帶でくゝつといたの[illegible]、丁度僕が面白い……もう兄樣と一所に行つて遊んでる：……夢を見てる最中には、もう置てきのぼりにされてたのだつた。けれども、もう仕方がない故、僕は大人しくして待つてますから、御土產を澤山ね。弟より

今頃は何處に被入るの。たゞ「本日天の橋立の絶景に接し申候」では餘りあつけなさ過ぎますわ。御たよりばかりを、何よりの樂みにして居るのですもの。けれども、あの繪葉書は美う御座いますのね、きつと二三組は、兄樣のカバンの中に入つてるに違ひないと、小躍して弟は喜んで居りますのよ。

又しても通りすがりの里の子を捕へて、其處に立つとれ彼處に坐つとれなどゝ、二三時間も引き止めて困らして居なさるのではありませぬの、時には中途で逃げ出されて、馬鹿つと後姿に一睨。した所で後へ引きもどす術もなく、結局はあゝ一雄を連れて來ればよかつたにと歎息なさるのでしやう。これは弟に代つて陳ずるのです。

さて、此次は、靜かな御山の方へだらうと思ひますが、如何？これはと驚歎の餘り繪筆拋ちなさる樣な所も、少く無いでしやう。御自慢の橫笛、御得意の寫生、繪を書かうか、笛を吹かうかと、聞なれぬ鳥の聲に耳澄しながら、迷つて被入るのではありませぬの。人遠く水草淸き所は、嘸かし物の音も澄みまさるでしやう。何卒その繪の中にその笛の音をも、吹き入れて持ち歸つて下さいましな。

面白い詩味溢るゝ樣な畫材を御集めなさる爲めには、御ゆつくりと遊んで被入いましと云ひたいのですが、ですが兄樣、御隣の御兄妹の例の花やかな合奏を聞ますと……。ほんとに兄樣、私つくづく淋しくなりましたよ。

とにかくゆつくりしてそして早く歸つて下さいまし。

妹芳子

（雨評）才情の見ゆるものあるを以て、入とす。

秀逸

○茶の湯に招かれたる返し

鳥取市鍛冶町五七　上山千重子

秋さびて落葉朽葉にすだく虫の聲、物おもふ身には一

しょ悲しう聞きなされて候。さても、母にわかれ妹に別れて、わびしとのみ知りそめし此の世の秋、うらがれの庭に、ひとりつめたき運命にもだえ居候。折柄、なつかしの、御許樣が水茎のみあとに接し候ふうれしさ。封目に小さう蕾と候は、げにこれにて愁の眉も開けとや、とまれ卷きかへし拜し參らせ候。珍らしやな緋桃の花三つ二つ、枯れし梢におもはぬ春を示し候よし、あはれ一つ御庭に、春秋を收め給ふ御許樣の幸多き、今更羨しうて〳〵、我のみ何の罪の子ぞ、のろはしの世やと、ゆるしませ、又も愚痴にかへり申し候。あはれ、如何にもして馳せ參ずべく、せめて一夜をだに光榮ある御許樣と松風清き御離れに茶汲まむは、我が唯一の樂しみに候。幸ひ明日は後の月、月に不足も候はねば、御庭の好景にあこがるゝには、折りよしと存じ候へ。此の茸誠に香低く候へども、田舎の乳母より唯今送りこし候まゝ、輕少ながら御目にかけ候。御笑味給はらば、如何に嬉しう候はん、末毫ながら明日の宵の、いやが上に晴れよかしと念じ申し候、あなかしこ。

（雨評）　優美に器用に作り得たる文と申すべし。

秋〔天賞〕　肥後八代郡高田村高下池田方　本田道子



○菊の花にそへて友のもとに

大阪市西區新町通五丁目　富永才子

秋の千草はかれはてゝ、露霜しげき園の中に、匂ひいでたる菊の花、あまりにしをらしうおぼえ候まゝ、妙なる色をとりまぜて、二本三本まゐらせ候。あはれちりもとゞめぬ御床のほとり、君が御手にてさしはさみ玉はゞ、いかに榮ある事に候はむ。白きとうすみは、御髮をかざらせ玉へとの心にて候。高きかをり清き姿の、御心にめし候はゞ、一度こゝの花畑へ入らせ玉はずや、御得意の和歌一首、菊への御土産に賜はらば、

殊によろこび申すべく、御禮には吃度まゐらすべきもの、候ほどに、御さしつかへだにあらせられずば、あすともたまはて、とく／＼入らせ玉ひてよ、待ち奉り候。まづはあらく／＼、菊の露を硯にうけて、かくなむ。

（評）優美にすなほにまとまりたる文とこそ申すべけれ。

○遠足に誘ふ文

備前御津郡石井村島田　松本もと子

秋風そよ／＼と稲の葉なびかせて、鳴子の音も豊かに聞えますこの頃、運動家の貴孃、内に許り居るわけにはゆきますまい。山は紅葉の錦を飾り、野は千草の花を咲かせて、我れ等を待つて居るではありませぬか、桔梗刈萱女郎花など、春の菫やたんぽゝに比して高潔ではありませぬか。雪とちる花の山よりも、紅葉ふみわけ鳴く鹿の聲きく方が、高尚ではありませぬか、日はうらゝかに風心地よく、芒の穂までが出てよと招いて居ますよ。私一度遠足にと思つて居た矢先、昨日ゆくりなくも、露子の君から、ほら去年まで學校へいらつしやつた野村さんよ、あの方から今故郷の宮内に居るから、是非お友達と、遊びにきてくれ、紅葉が盛りてすとの、なつかしい玉章を下すつたの。私もうぢつとはして居られませぬ。運動家の貴孃、健脚自慢の貴孃、賛成して下さるでせう。外に文章家の松子さんと三人てね、朝早くから出かけようと思ひます。二里の道、遠足にはあつらへ向てすよ、十三か二十日かの日曜にしませう。

お返事待つて居ますよ、さよなら。

（評）快活氣なる筆愛すべし。

○友の許へ

神戸ひて子

何れ近き内に、との御事なりしが、如何遊ばししにや、そよとの御便りも、あらさるは。

花野もやがて、霜枯れて、埋火床しき頃と、成り申すべきを、御意に入りし、きりぎりすも、今は早や、野菊が下を、おくつきの身と成り果て候ひしはや。

されど／＼、山に岡に野に川に、好み玉へる晩秋の、興は至らぬ隅も候はで、日毎眺むる、我身さへ、いとゞ飽かぬ心の、まさるゝを、いかで一度は、訪ひ來ませ、なつかしと宣ふ野邊にては候はずや。

御ほめに預かりし、黄菊白菊、人まち顔に、にほひ出

で候、まきてめしも、そが花びらにて、せめては、君が御案内ともならばとて。あはれ、妾のみかは、君まつものは。

（雨評）言ひまはしに一かどの味ひあるところ、殊に愛すべし。

一ぱい頂戴【地賞】

宇都宮市大工町　小島深雪子



昨夜の月は清うも候ひしかな。月下にたうべたる枝豆のからには、我れながら驚かれしよ。つめたくも心地よかりしは、今朝の朝露にて候。恐くも面白かりしは小麥藁うづ高う積みたる馬車の上、ともすれば落ちさうにて、さても、忘られ難きは、彼の握り飯の味ひにて候よ。二日づゝきの山あるきに、黒うもなれる我が頰のあたり、今猶去らぬほゝ笑みは、それよ、人よりも大なる眼もちたる私の、見つからぬ〳〵とて、茸蹈みあるき居たる一事に候。つかれや出でし、雨のまぶたのいと重う候へば、えにて…父母君に宜しう。かしこ。

○茸狩より歸りて其友の許へ

岩代須賀川本町　服部貞子

氣をつけてのお言葉を後に、とほ〳〵歸りくる草野路は淡き晝の月と諸共に候ひき。行き違ふ同じ茸狩の人、一人二人、互にのぞき込む籠のうち、滿てるは私のゝみの樣見受られ、思はずもほゝ笑まれ候。君がみ手傳ひのいと嬉しさまゝによ。結びつけたる藁草履ぬぎたるは、四時頃にて候ひし。

（雨評）才氣の見ゆるものあるを愛す。

○夏歸らざりし都の友へ

東京市小石川區小日向臺町三丁目五十二番地　櫻井美代子

來む夏の休みは必ずよと、草と草との露を分けて、美はしの夜の空に、美はしの空の星に、名殘り惜みしより、明けては暮るゝ久方の月日は、早一とせにもあまりぬる哉。其の後は忘れ玉ひてや、年を送り年を迎へ、花咲き花散れど、待ち詫びし君の歸り來まさねば、緣に注ぐ夕立を、獨り籠り居の窓に聽きて、夕雲遠き思ひに、幾度か淋びしさをかこちけん。あゝ月の光りや鳥の音や、何れか忍ぶの種ならぬやは。唯都の君のつれなくして、秋いつしか寒く、筧を流れ落つる柿の病葉の日に添ひて增すに、打絕えて消息だになきは、何の祈願の斷物にてか、けさ慰めもなき心に堪へかねて、思出多き彼の岸のべをさまよひぬ。靡く尾花の裾にして、鳴く音止めし蟋蟀は、こぼるゝ露を怪みてか、まと怪しの露のこぼれもせん、思へば〳〵行へも知らず流れ行く水に涙の落つる哉。明暮都の空を眺めつゝ、訪ふ人もなき草の宿を、空しく朝霧夕霧の迷ひ所となせば、兎角あぢきなさとの數々に、先づ消えなんとこそ思はるれ、あはれ〳〵八重葎の亂れに、そこともわかぬ萩の袖垣を、せめて音づる風の便りもがな。

（兩評）優美にして洒落れたる點見るべし。

○ふる里の妹へ　（旅行先より）

三河四鴨郡石下瀨村　澤田忠三郎方　澤田つま子

靜ちやん、今やつと須磨の宿に着いてよ。明日はゆつくり敦盛の墓や、須磨寺の寶物などを見物して、明後日京都に向ふつもりなのよ。でも、此處に來たら、何だか他處に行くのが否になつて……だつて、ま一本統に濱の景色が奇麗だもの。波がさら〳〵と、白銀のやうな眞砂地を洗つて、苔いたやうな松の古樹が並んだ間から、廣々した蒼海原を、鷗のやうな白帆が往來する樣つたら、靜ちやんも一處に連れて來て見せたかつたわ、宿でさつと鹽風呂を浴びて、青藻の匂ひがする濱風に、鬢のほつれ毛を弄らせながら、二階の欄に凭つて眺めると、海は一面に青毛布を布ひたかのやう。其れに、桔梗色の幕を張りつめた空が、一つになつて、水や空、空や水と見まがふ細い糸一筋の處に、淡路島が夢のやうに浮び出して、清い十五夜樣の光りを受けた磯の松原が、眉黛を引いたやうに連なつた姿に見惚れて居ると、魂が身躰から拔けて行くやうなのよ。お

父様は鉛のやうだと仰るけれど、鉛には此んな奇麗なのはないわ。夫れにつけても、可笑しいは芳雄よ。今も濱て、車から下りて貝を探しながら、前を白帆が通るのを見て、あゝあの舟は外國へ行くだと言ふの。芳ちやん、外國つて何處なのと聞ひたら、あら姉様、外國知らなくつて。外國つて、外國なのよ。姉様本統に可笑しいわと、さも面白さうに楓のやうな手を叩いて笑ふだもの。お母様とお腹を抱へて笑つたわ。帆立貝を二つ拾つて、一つは御留守居の静ちやんに御土産にするつて、宿につひてからも大喜びなのよ。でも、小供だわ。晝の疲れに、夕飯も食べずに、貝を枕元にすゑたまゝ、最前寢て仕舞つたのよ。あれ、千鳥が鳴くよ。私初めて聽いてよ。ほら又一聲二聲。芳雄は今夢でも見たのか、静ちやんと一聲、またすやすや。

（兩評）作者の文いつも綺麗なる繪の如きものある、實に見るべきところなるべし。



蟲聞き〔入賞〕　埼玉縣實珠花在日沼五　伊東香子

○友の許に

筑後國八女郡黒木町上峠　大島菊子

吁、わが懐かしの戀しの君には、あけくれ深き物思ひに沈まるるとや。萬々御察し申し候。哀れさ悲しさに泣は、君一人には候はず、こゝにも果敢なき孤兒の候よ。身に積る悶々の情は消えやらで、思ひは更け行く秋とみだれて候。それにつけても、去年の秋、憂き悲しさの思ひ出でられ候ては、とても浮世は夢にて候よ。胸にくるしき情を秘めて、強ひておもてに平静を装ふ妾が衷心、御察し下され度く候。

悶えの時、悩みの時、暖き君が情のみ手とらむにはと想へども、雲や隔つる故郷を遠き旅より旅に漂泊ひの身には、胸に限りなき寂しさを覺えて、空行く雲にも

涙はさしぐまれ候。

實に思ひ出多きは、故郷の名なし小川の水の音、君と泣きしも別れしも、皆その小川の去年の秋。

あゝ君よ、半宵夢結び得で枕を欹てゝ聞く流水の音奈何に、あはれ思ひを雁音に傳へてよ。

さらばよ君よ健在なれ。

（兩評）しつかりとしたる筆見るべし。

○遊學せる弟の許へ

大阪南區　つゆ子

願はくば、おん身の上に幸多かれと祈れる故にや、其許の姿の、折々わが夢路に通ひ來て、なか〳〵にこひしさにたへざるを、恙もなくて、學びの道にいそしみ給へる由、殊に去る月の試驗に、其許の成蹟は、人々に勝れ居たりしとの事、なつかしき文にて知りたる時のわが喜びは、如何なりしぞ。思はず落しし嬉し涙にても思ひ知られ候ふ。これも其許が、如何にもしてと、勵む心の表はれしならんと、お友達にも話してほめ稱へ居り候。されど、勝つて兜の緒をしめよとかや、ひと度獲たる今の榮も、心に驕りの生ずる時は、遂にそを失ふに至るものなる事を、よく〳〵心に銘じ、尙ほこの上に勉め勵みて、素志を達せんとなされん事を祈りに祈り候。こは姉なる妾が言にはあらで、亡きふた親の誡めのお言葉と思ひて、つゆおろそかにな思ひたまひそ。

妾とて、身の貧しきを悲しむたびに、何につけても學びの資の足らぬ勝ちなる其許の、人に增したる憂き苦勞を忠ひやりては、腸を斷たるゝの思ひあれど、皆運命とて致し方なく、これらの苦しみも、たゞ〳〵ひと度崩れしわが家の名を擧げん爲めとてなれば、其許にも、艱難を璧にすのたとへを心に繰り返して、他そ事には意もかけで、一時も早く業を終へ、身を立てゝ、父母のみ靈を安めまつらんと心がけられ度く、一重に願ひ申し候ふ。

さはいへど、いかに勵めばとて、萬一その身に恙のありては、今のわれ等の、歎きの上の歎きなれば、朝夕の起き臥しにも、よく意を配り、身をいたはりて、よみぢなるふた親や、妾が願を仇になし給ひぞ。

まだ〳〵いひ送りたき事は多けれど、時節柄其許の綿入縫ふ手の急がるゝまゝ、先づはこれにて筆止め申し候。かこし。

（兩評）姉の情、げにとやさしくきこえ申して候。



短篇小説

廣津柳浪選

特別第三賞

○霜夜

岩代須賀川本町　服部すいせん子

（一）

「馬鹿ッそんなことて離られると思ふかッ、妾が何だ、酒を呑むが何だ！お霜貴様はな己公の娘で無いか己公はな痩せても枯れても元は武士だぞッ武士の娘が夫が身持が悪るいからとて、それて出る……」

元之進は殊の外の立腹てある。眞白なチョン髷は傾むいて、魚網の破れをつくろつて居た手を、プル／＼顫はしながら握り占めて居る。

障子の破れ目を、吹き入つた風に、手ランプの煙り亂れて、上り端に固くなつて居るお霜が髮の亂れ、青白い顔にハラリとかゝる。

「源藏はな己公の目鏡ぢやぞ、年取つても此元之進が見立ぢやぞッ妾を持つて酒を呑むも源藏の勝手ぢや、貴様が知つたことぢや無いわ！それ丈の働きがあるんぢや」

圍爐の鐵瓶はうなり出した。四疊半の破れ疊、たゞ元之進が怒氣の聲のみ。

「お霜ッよいから歸れ、己公は貴様が嫁く時に、貧乏になつたら歸れとは言はなかッた筈ぢや、亭主の身持の悪い時には出て來と言はなかッた筈ぢや、」

元之進が大聲に驚いてか、背なる源一は泣き出した。

お霜はたゞ涙。

「其妾の女と一緒に住め、な、お霜！たゞ負けるなよ、貧乏と戰つて……」

「さア歸れ、夢の間に歸れ！」

悄々と立上れるお霜、廿五の女盛りを、あはれ誰が爲の苦勞ぞ。やつれたる其後姿、長く細く破れ砂壁に影を寫した其様、さすが老の身のつと面を外らしたのである。

（二）

背の源一はまたすや／＼と寢入つた。再び戻らじと渡つた土橋の上に立つて、お霜は我知らず振り向く彼方、

一もとの大松月に冴えて、稍々傾むける小家の燈、微にく\またゝいて居る。

あゝ父の言葉は無理であるまいか、妾を持つも酒を呑むも何で彼之申そうぞ、それ丈の餘裕があるならば。たゞあゝあれては……近頃はさつぱり齋筆も取らない様子、たゞ寢てたゞ呑んで…………それでも働きがあると言ふものかあれでも、いえ寧そ妾と一緒に住んで見やうか？それては益々……

いつしかと立どまれる我家の前、こほろぎの啼く音はひたと止んで落ちかゝつた壁に、かゝつて居る蜘蛛の巣に夜露を置いて月光にキラ\と。



家の中はたゞいびきの聲のみ聞える。

やがて寢返りの音して

「水！お霜っ」

「ハイ」

お霜は決然答へて家には入つたのである。

定めし明朝は霜てあろう、月の光りはいよ\冴えて。

洗錬の痕は十分に見えて居る、所謂書き流しの作とは同日の談ではない、元之進の背恩負、お霜の温柔、數語の間に其人活きて躍る、而かも叙景の筆に最も妙を得て能く急所を衝く、敬服（選者評）

天

○島の女教師

靜田撫子

一

日も大分傾いて何と無く物悲しい樣な秋の校庭を、唯一人紫の包を抱へて「いつくしみ深き……」と、讃美歌を小聲に歌ひ乍ら、寄宿舍の方へ歸つて行つた海老茶式部の後からドャ〳〵と四五人の連中。手々に添削物やら書物の包やらを持つて、附屬小學校の方から、話しながら歸つて行くのである。「一寸々々今日發表せられたつて眞實？」「何が？」「例の撰拔！」「えゝ眞實ですよ「あの槇山さんは入つて居ないてねえ「何？槇山樣が？」「えゝ「まあどうしたのでせう！「先生はなすつたけどお斷になつたのですつて「どうして？「小學教師が目的だとかつて「マアそう……「流石槇山樣だわ「だけど惜しいのねえ……」女が三人寄ると雀の樣だとか。ほんにやかましいと！寄宿舍に入つて居乍未だ喑つて居る。女はえて人の噂をしたがる。

何でも例年の通り女高師受驗者の撰拔生が發表せられたとか。所が望を屬して居た優等生の槇山英子が見えなかつたのてよるとさはるとその噂で持ち切つて居る。

二

盛大な卒業式を擧られた中で首席を占めた優等生彼の評判の、槇山英子は多の貴賓の前で披露せられ賞贊の辭を受た多の友から羨しがられた。而し彼女はさほど嬉いとも思はなかつたのである。それよりも辭令書を手にした時は滿面に笑を浮べて悦だ、彼れは人の嫌ふ最も不便な最も片田舍なる某小學校の訓導を命ぜられたのであつた。彼は急々とした任地に赴いた。そして彼れは婦人天性の熱心と綿密とを以て敎育の任に當り誠實を以て兒童を敎育した。實に見上げた人間である。而し彼は其出所を明にしないのだ。幾度か籍を移した、是が爲其何の人て如何なる血統の人かを知る事は出來なかつた。父母は現に遠方の某都會に住居して中〳〵の富家だとか、して他家とは交際しないと、否他人からせられないとか。そして英子は何れに缺點があるとは認められないが其内氣なといふ所はたれしも惜む所であつた而し彼は是以上快活にする事は出來ない

のである。彼の女が奉職してからと云ふもの、其土地の風儀も改つたといふ位。學校の良くなつたことは甚しいものであつた。殊に新平民と云ふ者の地位は稍々高めらるゝ樣になつた。英子は常に之れに力を盡したとか。英子の尊敬せらるゝ事は非常であつた。實にえらい先生樣だつた。然るに三年を經て突然彼の姿は見えなくなつた。村民の悲しみは一通りで無いと。のみか彼れの母校にも非常に惜んだといふ事だ。

三

其年の秋の始めに東京府大島に一人の容姿美しい女教師があらはれた。

元來良教師を得るに困難であつた所へ、此妙齡の女教師が顯れ日々熱心に教育の道に盡して居るので、當局者の喜は大したものである。彼は即ち横山英子其人である。彼は何故に彼の田舍を去つて、あたら花の盛を此孤島に投じたのか？彼は實に彼の地に於て富家某より婚を申込まれ、己が身の卑しき血統を思つて苦しさに堪へかね遂に茲に至つたのであつた。而し此理を知るものはなかつた。

其後折々此島の小學校から淸い美しい聲て、いつくしみ深き……………といふ歌ひごゑがもれて來る。

新平民の血統であると云ふことを、あらはに書かない處が、此小說を面白く讀ませる手段で、又此篇の生命でもあらう、横山英子其人の行爲は純潔仰ぐべきもので、殊に宗教的信仰心あることをほのめかしたのは、わざとならずして最も佳（選者評）

地

○姉と弟

神田　大澤隆子

『信ちやん、貴方小母さんのお家から、お錢を持つて入らしッて？え、何うなの、早く仰有い。姉さんは叱りもどうもしなくッてよ。』とクリ〳〵泣いてゐる弟を氣遣しげに見据えた。

まだ十七八だらうに、大そう窶れて、幾度か水に入つたらしい紺飛白の單衣に、稍色は褪せ赤勝友禪メリンスの帶といふみすぼらしい服裝。艶やかな束髮にも花一ツ飾つて居らぬが、自ら品格の立勝つた、裏家住には相應はぬ少女。

『僕あそんな事知らないや。盗つたりなんぞしやしないんだもの。』とうるみ聲。『然うてせうとも……異逆他人樣の錢をね。』姉はホッと太息。

『フンお美枝さん、おとぼけでないよ。現在此子が今這入ッて來る迄、其所に置いてあつたお錢が出て行くと無くなつた。是が何よりの證據じやないか。錢は高が知れてらあね、遂弟が出來心で持つた來た勘忍してやつて下さいッて云やあ其て濟むんだよ。其を白きつてる所を見りや、お前さんが敎へて盜らしたとしきや思へないじやないか。』と隣家の老婆は意地の惡い眼で姉弟をヂロリと眺め、冷笑ひながら。『眞實にお前さんは顏に似合ぬ恐ない人だね。以前はさうとも知らず——兄さんは軍に行ッてるし其留守に、お袋に死なれたと云ふから——可哀さうだと思つて散々目を掛けてやればいゝ氣に成つて……もう以後は裁縫の世話なんか眞平だ。誰がしてやるものか。お前達が居る間は、私初めお長屋の人達だつて、安心して寢る事も出來やあしない。』『まあ小母さん何を證據に其樣な事を、仰有るんです。如何に子供ばかりだッて、是は外の事とは違ひますは。身躰に疵の附く事です。いくら困つて居ましたッて其樣な他人樣の金子を盜る樣な、卑劣しいことを、何てするものですか。』



讀者〔賞外〕淺草八幡町　松浦あや子

美枝子は聲震はして、湧き來る口惜し涙に咽びつゝ、詰め寄つた。『立派な口をお利きてない。身躰に疵のつくもないもんだ。人が折角内々で濟してやらうと思ッてりや、いゝ氣になつて……いゝよ。其方でさう剛情をお張りなら……おい信ちやんどうしても、盜らないとお言ひかい。』と姉の後方に泣いて、居る信雄の肩を手荒く掴んだ。『アレ何をなさるんです。知らないといふものを。』『口頭で知らないといふのが、何で當になるもんか。おい信ちやん、帶を解いて御覧。解かないかよ——解かなきや、私が解いてやる。』『小母さん、知らないんだから御免なさい。』とおろ〳〵聲。『知らないもないもんだ。』猿臂を延して解かうとすると。『御免よー』と信雄は逃げ出しかけてワッと泣いた。『逃げるッたて……。』と周章てゝ掴へたが、信雄は倒れさうになつて、僅に姉の袖にすがつた途端。兵古帶の結び目とけて。コロ〳〵と音して落ちたは白銅貨三枚!!!

* * * * * * *

『信ちやん貴方は何と云ふ情けない事をなすつたの。

如何少しても他人の錢を盜れば泥棒よ、例へ餓えて死んでも其樣な事をするものじやないは。穢い家へ住んで、ぼろ着て居たつて、心さへ清ければ、立派じやありませんか。ね、分つて？以後決して、しちやいけなくつてよ。」と姉は涙を拂つて弟を戒めた。「僕は惡かッたから勘忍して‥‥。」と尙泣く。「其りや、信ちやんが翫具なんか買ひたがるのは尤だは。まだ少さいんですもの。これから欲いものがあつたら姉さんに仰有い。姉さんは他家の裁縫を、一生懸命して、きつと買ッて上げるは。」「姉さん僕あ翫具なんか欲かあないの。昨夜姉さん僕が寢てから泣いて居たらう明日はお家主さんのお老爺さんが來るし、何したらよからう。あゝお金子さへあれば‥‥ッて——僕はもう姉さんが可哀さうで〳〵。」と後は云ひえず、泣き伏した。

「あま信ちやん、年の幼かない貴方に、此樣な苦勞させて‥‥。」美枝子は堪らなく成つて、弟の手を堅く握りしめたまゝ、熱い涙をホロ〳〵とこぼすのであつた。

本誌の小說欄に孃の名はしば〳〵見る處であるが、いつも筆に力が籠つて、一際目に立つやうである、殊に此篇も人物は皆能くあらはれて居る、それから對話の上手なことゝ、東京語のあぶな氣ないのは孃を推して第一とす、地方の投稿家などは往々にして東京語を使ひ損ふ者がある、一つは作者が東京の人であるからでもあらう
（選者評）

人

○准教員

下總取手町秋山院　中村よしゑ

（一）

「桃から生れた桃太郎、氣は優しくて力もち、
鬼ケ島をば討たんとて、勇んで家を出かけたり。」

此所は田舍の小學校、今第一學年は遊戲の時間で、四五十人の生徒が一同に此唱歌を歌つて、餘念なく樂しんで居る、其中に別段聲よく節を上手に歌つて居るのは受持教員笹川八重子と云ふ。

通りがけの町場の奧樣方、アレお上手だことよと褒めて行く。

（二）

午後三時、課業が終つて、笹川は下宿屋に歸るべく、吉田土堤を通つて居る、其後先に七八人の兒女がからみついて。

「先生、妾の母君、繼母で、妾惡いこと致ないのに澤山叱つたの」顏が曇つて。

「妾は父君も母君もない、今朝は隣のお婆樣に五厘貰つたの」切なさうに。

「僕は大將になるんだ、大將になつて、彼の學校へ來て演説するよ、其迄先生あの學校に居て下さいね」
「僕は父樣が貧乏だから、取手の關根へ小僧に行くんです」と聲淋しく。
「先生聞いておくれ、妾の宅へ昨夜ね、何所の者だかヒゲの生えてる男が來て宿つてね、母君は、他の者に知しちや不可と妾に云つた、先生にばかり知すの」
斯く續いて云ふので、笹川は答ふる暇なく、否、最後の女兒の話で無言であつた。

(三)

其夜笹川は、獨り木の葉散りくる窓に倚つて、己が身の上など、くりかへし／＼考ふるのであつた。
「ア、妾、妾は幸福の樣で幸福でない、世間の人々は何と思つてるだろう、世間に惡評判は無かろうか、尤も妾は惡事を致たてとはない、有難いてとには、町長や校長が、よい敎師だ、女でありながらよく熱心に行つてくれる、とお譽に預る、又生徒はよく妾の言ふことを聞く、先づ安心だが、ア、世間の人は何と噂してるだろう」

(四)

「思へば一葉の准敎員免許狀を得て、小學校に奉職してから玆に三年餘、僅かの俸給で暮して居る、是では到底先きの望がない、如何しても師範學校へ入學らなけりやならない、だが、妾は、あの學校を辭し、否、可愛生徒を捨てゝ入學れ樣か、親に別れるより未だ悲しい、世間の人も信用してる樣子、別れる時は生徒は泣くだろう、世間の人は惜むかしら、ア、生徒、秘密な事迄妾には知す、叱つても妾の言ふことなら少とも不立腹、先生／＼と慕ふて居る、ア、此平和な社會を辭し、數多の人々と別れ、可愛生徒と如何して袖を分つことが出來よう、妾は師範學校へ入學れなかろうか、否入學るまい、入學らないで、早く親に分れた兒や、繼母を持つて居る兒や、貧民の子の慰藉者となり、立派に兒女を敎育して、立派な、善美な社會を作ろう」
笹川八重子は斯く志を定めて、思はず涙を落したのである。

小學校に於ける女敎員などは實際斯ふもあらうかと思はしめる、殊に生徒がいろ／＼の事を告げ口ゝる處など最も面白い。但し小學敎師が師範へはいらないのは學力や境遇の點が多くの場合に於て其原因であらうけれど、作者は之を美化した、又一個の手腕である

（選者評）

秀逸

○一つ家

周防　香烟子

鮒泳ぐ小川を隔てゝ、薮端の一つ家。立登る夕餉の烟が色錆た竹むらに亂れて、牛飼ふ老婆の手拭の仄白う納屋の片影に動いて居るのを見るとお玉は「まアお母樣が。」一皮の小さい眼には最う情の色が仄めく。秋の日光を輕くさゝへて居た傘洋の黑いのを疊んでサッサと土橋に足音をたてゝ行くので。

合歡の樹のある門邊に來ると急に立止まつた。胸を押へて如何にも這入り憎さうに老婆の影を逐ふたが、ぬかだらけの手を手拭で拭きながら此所へ來るのを見ると耐へられぬ如く、

「まアお母樣!。」

向ふも驚いて「やアお前嫁女ぢやねヱか。」とはらくして

「えら久しかつたのう、まアお這入んなよ。」

「ハイ有難うムいます。あの此門までは來ましたけども急に氣がさしますので。」

「何のお前。」と手を取りながら「那麽氣雜が入るもんだかね、さ這入なよ。えら涼しうなつたッね。」

「本統に然うてムいます、私の樣な血氣の者は可うムいますけども、お母樣やお父樣、朝晩はさぞお寒くてお難儀でムいましやう。」とほろり。莚ろ疊の上に包みを解いて、

「之はあの誠にお耻かしうムいますが……お團子を一つ。」

「まアお前這麽事を仕なけりや可いに。お母樣お內だかね。」

「否、今朝から靜岡の方へ行きましたので其留守に一寸伺いました樣な譯で……。」

「まア親切にのう、お前ならこそ這麽事も仕て呉れるだ。爺どんも孫めも大方歸らうけん、」と立上つて「お茶の一つも呑んで行つて呉んなよ。」と下り懸るを、

「お母樣、ま可うムいますよ、今喰べて來ました計りてムいますから……、

「夫も然うだがのう、種々お話しもムいますから。

「緩しますから何卒お搆ひ下さいますな。」と押止めて「何からお詫申して可しいやら……あのお母樣はさぞ薄情な奴だと私をお恨み遊ばしたてムいましやうね。」

「何のお前と。」聲を靜める。

「太一樣が戰死なさると直ぐ飛んで歸つたんですもの。」

「何を云ひなさるやら」と眼を濡まして「夫やはア亭主が死んだら……お前も若い年仕てる事だから。」

「否々什う致しまして、私は最う毎々までも優しいお母様のお側で可愛い太助に此乳を呑ませたいと思ふて居ましたけれど……お母様、お赦し下さいまし、里の親が彼麼一徹物でムいますので、つい最う還麼窶てもしまひましたが、夫れに付ても醒めても悲しい身の上になりました、忘れやうと思ひましてもお母様やお父様太助の事などが、忘れやうと思ひまして も忘れる事が出來ません、否忘れやうと思ひましても此胸の中は、お優しいお情が離れませんもの……。」

毎か聲も曇つて袖を顔にあてゝ居る。

老母は先刻から泣いて居たので「まア嫁女や、お前那麼に私等を思ふて居て呉れたのだかね、本統嬉しいよ、嬉しいだよ、まア何ちう可い嫁づか、お前と一所に居られるものならのう、いや之は私が愚痴ぢやが……、お前の氣性が常が常だから些恨んでは居ねえだつたが済まねえ事だが里の親御様を、内々餘酷いと時折は……涙が出てのう……。」

「……お母様すみません、堪忍なすつて……。」

「……何よ……お前……。」いと細な情と情。かたみに涙の眸の映じ合て聲もない。處へ、

「婆やん、お飯飲べねえかい。」と飛んで這入つた六つの太助。老婆は枯れた聲に力を入れて「太や、汝が逢ひてえ〳〵と云ひ居つたお母アが……。」と胸一杯、トンと床を鳴らして上つた顔は何所やら淋しさう、眼の黒いのが目立て下豊の優しい頰。老婆の膝へすりよりながら

「母ちやん。」と計り口を噤んだが、やがて莚に置いた小さい手には涙がホロリ落ちた。

「まア大きうなつて……あ……逢いたかつたろうね!。」

老母は氣が付た樣立つて台所に音さするので、

「母ちやん、をいら淋しくて……」と涙を見せて「父ちやんの佛樣拜みに來たのかい。」と、お玉はピリツと顫へて、

「太や堪忍して……堪忍してお呉れよね、母樣か惡いの……だから……。」と思はず襟を緩めて抱きしめると、冷たい太助の頰には愛に燃ゆる乳房が觸るゝので。

「母ちやん。」

「あゝ太アや……」

「父ちやの佛樣拜みに來たのかい」の一語、思はず涙を催ふさせる、一銖に沁りてお玉と云ふ女も優しく、姑も好人間、趣向は悲劇的であつても、一種の光明を持つた小說で頗過心持が好い(選者評)

○わかれ

横濱　寺田光子

けたゝましい鈴の音新橋發午前八時三十分東海道行は今正に出やうとして居る。乘客はがや〳〵とプラットホームに波を打つたやう、西洋人あり子供あり大人あり皆忙はしさうに急ぐのである

今改札口から人に追はれながら入つてきた情の深そうな女教師、其生徒ともいふやうな十八九の若々しい女學生の一行は殊に目に立つたのである。女教師は早くも二等室の隅に座を取つた。

プラットホームは漸く靜まり返つて遲れたかと遽てゝ飛び乘る人の殊更らしい下駄の音を殘して後には前の女學生の一行のみ。折からの寒い風が絶えず吹き通して居る。

女教師は柔順な笑顏をして窓から送つて來た女學生に別れを告げるのである。

「皆さん何うか私が居ない後でも學校の模範になつて下さい其からお手紙は必らずね」

十五六人の女生徒は一樣に首をたれて了つた。

「先生！」と一人がいふかと思ふと後は急に沈んで其中又一人が

「何うぞ御身躰御大切に」これも涙のうちに云ふのである。此女教師と云ふのは府下の有名な女學校の四年の受持教師で在つたが今度已むをえない故郷の父母の促して遠い鹿兒島に歸るのである。て自分は其學校の舍監でもあつたので寄宿生とは親子のやうな仲其最愛の女生徒に別れるのは如何にもつらい。けれども唯一人慰める人もない年老いた父母を見すてると云ふ事は何うしても忍びない事なので自分は一人西に旅立つのである。父母の許は戀しひに違ひない。けれども多年居なれた學校の生徒等に別れるのは又何とも云はれない悲しみなので、女生徒も慈母にても離れるやうに悲しんだ。

女教師の溫和な風姿はよく此生徒等に感化を及ぼして皆柔順な、髮こそ束髮ではあるけれど少しも生意氣らしい樣子が見えない。これてこそ女學生の好模範だと思はれた。

「柏林さん谷田さん皆さん何うか勉强して下さい、もう一年其間に惡い風に染まないやう」

忽ち汽笛の音。女生徒はもうこれが別れと思つて皆揃つて

「先生御機嫌よう！」

「皆さん、では左様なら」
今迄こらへて居た女教師の眼はうるんだ。
汽車は容赦なく動き出した。
美しいやさしい教師は、最愛の生徒を殘して遠く〳〵。最愛の先生を失つて生徒等は、せめてもと窓にハンカチーフふる人の見えなくなる迄見送くつて居た
中にはハンカチーフを顔から離さかつた女學生もあつた。

發車の五分間、談話にしても一いきに言へさうな事であるが、是だけ精密な雅致と、委曲な觀察は一寸駈出しの文章作るものには出來ない、確かに文事にたしなみの深い女性の筆と思ばれる（選者評）

○留守宅

小石川　奈美木翠子

「マア佳景ワ子エ」
直ぐ眼の下は黄金色の、さして廣くもないが一面の氷川田圃、中間に些かな流れを挾んで、左右に延び、右に低い水車の藁屋根を越へて、黒く鬱然とした森に種々の鳥の聲が絶へず騒いでゐる、左は直ぐ植物園に接して、折々けたゝましい百舌の聲が聞えるのである。空には一點の雲もなく、青空高く晴れて、ソヨとの風もなく太陽は暖かに流れて穏かな好日和である。



田家［賞外］相州菱沼　池田まさ子

此所は小石川の片邊り、至つて閑靜な氷川の高台に建てられた、現今、陸軍は青年士官中に嘖々の聞へある陸軍中尉春山秀一の住居である。
「あなた其麽に佳くつて？斯麽田舍みたいな所仕様がないワ」憑う謂つたのは先年某女學校を卒業して、燃るが如き相互の想ひ、目出度も婦人となつた彌生子である。
「アラあんなこと仰有て、あなたのお好みで此所に新築たのではありませんか」是れは同窓の友、今は某省に勤めるさる人の妻となつてゐる初子である。
「アラマア、彼所に柿がなつて、只つた一つ」

「エ、秀一が出征前に植へたのですけれども、今年始めてなッたのよ只ッた一ッ」小さな柿の木に眺入つた彌生子は眸を地に落して、ホロリと一雫

「ソウ、今年始めて？」初子と其儘無言で是れも思ひに沈むのである。

實に彌生子の涙ぐむのも至當である、樂しい夢を現實みたのも眞の束の間、彼女は嫁いて間もなく、北の雲行穩かならず、去年櫻の葉蔭に郭公血に啼く比、秀一は遠く滿州に渡つて、此處彼處に拔軍の功を樹てたが、某所の戰に敵壘深く跳り込んだ爲め遂に俘虜の身となつて遠く戰場を去つたのである。

暫くして初子は「あちらから、お消息があつて？」

彌生子はハンケチに涙を拭つて「イヽエ、些つとも、唯つた一度無事だと許りて、私からは度々遣しましたけれども例も返書は下さらないのよ、先日は亦久し振りて届いたと思ひましたら、度々尋ねて吳れるは實に嬉しいが、己れの爲めを思つたら、もう手紙は吳れるな、……己れの心情を察して吳れつて……」後は謂ひ得ずホロ〳〵と涙を落すのである。

初子は何と慰の言葉も出ず、不知誘はれて共に打ち濕めるのである。

庭の櫻の梢からは、ハラ〳〵と黄ばんだ葉が散つて水車の音が淋しく聞へて來る。

彌生子は憂ひに沈む面を上げて

「世間からは、余りよくは謂れないし……秀一の心情の中は其麽でせうと思ふと……私もうそれからと云ふもの些しも屋外へは出ないのよ」

「よく謂はれないつてあなた、其麽ことはないワ。けれども、春山樣やあなたのお心情は、さぞチエ、私お察しするワ」

「そう謂つて下さるのは眞んとにあなた許りよ、私淋しくつて毎日姫と二人限りですもの、お願ひですから、あなた是れから度々いらしつて下さいな」

「エヽ、お邪魔に參つてよ、けれどもあなた、餘りくよくよ思はない方がいヽワ、身躰にでも障るといけなくつてよ」

靜かであつた野面に一陣り風が起つて、木の葉はバラ〳〵と座敷に迄舞ひ込み、向ふの森に、鳥の聲が一時に騷ぎ出した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

數日の後、都下の新聞は倫敦新聞の傳ふる所として悉う云ふ記事が掲載た、

在露國日本青年將校の中有名の士官として、名譽ある春山中尉は多額もない所持金悉皆を擧げて、露國赤十字社へ寄附したと云ふ事てある。

伴聲と云ふだけが小説としては稍新しいので、先づ聲明として當選は普通、但だ此君も小説を書かうと思へば優に前途に光明がある
（選者評）

○薄命

津市　松尾花子

「綾雄さん」

用に出た歸り路ふと通り合はしたので、垣間見ると綾雄さんは裏庭に立つた儘美くしい榮ある夕空に見恍れて居るらしいので吾れ知らず呼むだのであつた。

「エツ、やあ花さんか吃驚した、何の御用？」

綾雄さんは吃驚した樣に少し顔を赤らめて振向ひて斯う云はれた。

「いゑ別に、私もう歸りますわ」

「一寸花さん」

「知りませんよオホ」

私は恥かしくなつたので逃げるが樣に家へ歸つて、直に書齋へと入つた。而て火も點さず机の前に座つて徐かに胸の鼓動を抑へ乍ら深い〳〵默想に耽つた。

思へば私は嬉しい身てある、幼馴染の氣立も宜く知つた彼綾雄さんとは愈々數日を出てずして華燭の典を擧げるのてある、綾雄さんは溫順な而して何處かに重々しい所があつて大變な勉强家、今年法科大學を卒業されて此地に試補として來られたのてある。嬉さに打震ふ身をじつて抑へて尙色々と思に耽つて居る時、忽然として暗中に神の聲あり。

「汝は姉を忘れたるや哀れなる姉を忘れたるや」

私は思はず身慄ひするを禁じ得なむだ。

然うだ、私は彼哀れなる姉上をおいて何處に行かうとする、誰の妻にならうとするのか。あゝ思へば姉上は悲しい目に遇はれたのてあつた、私は姉上と綾雄さんとは振分髮の昔しから人の噂に上る迄親しくせられて居る事を知つて居た、而し世の事情は漸く物心知り初めた御二人の中を美事裂ひて了つた、相戀して居られた中は割かれて綾雄さんは其後東都に上つて只管亡くなられた父上の爲勉强して居られたが、其間に姉上の身には大變な事が湧ひて來た、其れは他でもないが父上の關つて居られる或銀行がふとした事から破產するに迄になつたのを、彼强慾な高利貸の下村の御蔭て其れだけは稍く免れたが而し下村は此れを恩に被せて己

れが子の鋼一の嫁にと姉上ヶ所望して來たのであつた、勿論父上も初めは承諾もせられなかつたが金の爲には勝つ事も出來ず、遂に涙を以て姉上に頼まれると姉上は溫順に不承知は口にも出さず恨を呑むで下村へと嫁がれたのであつた、而し嫁入の前夜泣き乍ら私に話された事は未だに忘れない。

其後春秋幾回、姉上は如何に苦勞をせられた事であらう、聞けば此頃は鋼一さんは、放蕩に身を持ちくずして姉上は日に〳〵虐待されて居られるとか、而も私と綾雄さんとの婚禮を聞いて如何に思はれるてあらうかあゝ私は如何しても哀れなる姉上に濟まない、あゝ姉上は實に不運な薄命の佳人である、姉上よ許し給へ」と祈つてふと氣が付くと袖は重ひ計り、しとゞに濡れて居るのてあつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

愈明夕は私の婚禮であると云ふ其日の未明、先づ私一家を驚かした一大凶報は何事!! 三渡橋畔に水死せられた姉上の事てあつた。

あゝ私は此れ以上は書けぬ書く事を得せぬ、只書置の文中「花さん末永く綾雄樣と添ひ遂げて下さい一生の頼みてす」との一句と父上が姉上の冷たい死屍に男泣きに泣かれて「絹、早まつた事をしてくれたのう」と、肺腑を抉つて出た一語とのみ私は記臆して居る。其れにしても明夕の婚禮、あゝ其れが私に何の嬉しい事があらうぞ。

讀者に書かれてある、書きなれた人てある事は爭はれない、只趣向は他にも類似の點があつたやうに思はれる、然かし短篇を成すには此位の處が最も適當てあらう（選者評）

○敎へ子

愛知　小紫

「お母さん銀行の御金はまだ七拾圓許有りませうね」と斯く問ひながら靜子は簞笥の引出より己が通帳を取り出しぬ。「アラッ」!! 思ひきや七拾圓は二ヶ月程前の殘高に記されて、哀れ僅其二分の一、此は不審議と暫しの間は考へ居りしが、如何にも身に覺なき事なれば、「いつの間にお母さん此樣に」「いつの間にか知らん」すげなき返事、靜子は猶言葉を續けて「秋さんお前いつも使役だが知らないの」母と向合つて冬物を縫ひゐたる妹に問ひぬ。「知つてゐるさ私が行つたのだ物……」「それ出した事はよいが何に使つたの？」「私の衣服を買ふたのよ」憎らしき虚言、「お母さん信てすか」母は針の運びをやめて無言の儘脊戸の方にと立ち出てけり、母と秋子は彼方と此方にて折々顔見合せつゝせゝ

ら笑をなしぬ、靜子は思はず納戸の隅に引籠り、シカと蒲團に抱き付きて齒切しつゝ聲をもらして泣き出せり。吁我を生み給ひし慕はしの母上は何處?、我二才の秋散り敷木の葉と爭ひて情なく彼世の人となり給ひ今は何處の空に迷ひ給ふか吁されども〳〵世の中に愛もなく情もなきは繼母なるよ、女學校卒業以來家にぶら〳〵してゐるよりはと沈思の末今の尋常小學校に奉職し其後は父上の言を守りて極めて節儉にして、漸くにして貯へたる僅の金子、何時の間にやら此減り方、母上の使ひ給ふ事なれば是非は云はねど異母妹迄か斯くまで母に媚びて、我を蔑視せしかと思へば、眞に腸も裂けなん許り、せめては思ひ切りて家出せんと思ひし事はそも幾そ度、されど中等敎育迄受けたる身にて……と堪へ〳〵て今日迄過しぬ、されど〳〵時何迄ぶら〳〵と永らふも此身の幸は巡り來らず、よしや憎まれて憚らんよりは今一思に……南無阿彌陀佛〳〵母君よ、願はくば秒時も早く我が袖を引かせ給へ、思はず合掌して佛壇に向ひぬ。稍ゝありて一通の書を認め、佛壇の引出より取出したる一挺の剃刀をもて、己が喉に差當て亡き母の寫眞を伏し拜み、千行の熱血涙をそゝぎ、あはや胸かき切らんとしたりき。折しも門の方にて「先生〳〵」!!! てふやさしき聲、ホッと手をやむれば再び呼びぬ、こはまがひもなき我が敎へ子、いかで此の儘死すべきや、一度はあのあどけなき顏をも眺めて、と腫れ上りたる瞼を押し拭ひつゝ出て來りしに、敎へ子は「先生今日は御祭りに行つて參りまして門前を通りましたから、御寄りしました、これは三人がおもやいて買つて來まししたから、此のピンを明日から、先生さして來て下さいよ」とボール箱を差出して、なつかしげに言ひぬ、眞に無邪氣なる言葉、あどけなき心ばえ、靜子は思はずしやくり泣して、敎子のため再び此の世に立ち歸つたる如く、兒童の歸りし跡に直に書を繙き、敎授法の研究にとりかゝりぬ。



晩秋〔賞外〕　石見國大内村　後藤かつ子

何人も自己の職業に興味を持たれば發達は出來ない、殊に敎育家の如きは最も然り、此主人公は興味を持つとよりも、其れによりて一身の慰藉をも得るのである、あゝ貴きかな汝の職業（選者評）

○洋行

土屋琴子

「露子お前は。まだ解りませんか。此妾は、お前の出世を、思ばこそ、こおも、心配するのです。お前は。だゝ健夫さんを思て居るので。妾の言ふ事が、解らないのだ」「お母様お免し遊ばせ。妾の心に。任せて下さいまし。お母様も御存じて御座いましよう。妾も夢の様に覺て居ります。あの少い時、お父様の膝にもたれますと、柔さしいお父様は、いつも妾の顔を、御覽の度、露子、お前には健夫が未來の夫であるぞ、早く大きく成て、此父を喜ばせて呉とは、いつものお言葉で御座いました。丁度妾が、九ッの時日清戰爭が起りました、お父様が戰地へお立ちの日船塲迄、兄様と健夫様と妾とお送りしました時お父様には、登。露子父は之て別れと成るかも知ぬぞ、其の後は一人の母上をよく養なわねばならぬぞ。又健夫君共に助てやッて、呉給へと。おッしやいました事が今に耳に殘て居りますわ、お母様」と後は言葉も、とぎれ涼き目には、早涙の露を宿ししばし下うつむきしが暫して、「お母様妾は華族ても金持ても行きませぬ。お父様があゝも思はれた健夫様と云ふ未來の夫が御座います」「露子、お前の思うのも無理は有りません。けれど今そんな事を言て居たとて仕方が有りません其れよりか早く安心させてお呉れ」

其二

いつしか、日は西へかたむき、庭の植木は、やッたばかりの、水にきら〳〵と夕日が輝き一しほの風情露子はじッと涙に、曇る目を、ふきもせず、眺め居る、兄の登は、「露さん僕の言ふ事解らんと言ふのか僕は、決して惡い事は言ない、只露さんの幸福を、祈るからだよ、又露さん華族へ嫁を、此家の名譽にも成るし、又、新しく、父の名も分る様に成る何も心配する事はない、健夫君に無言て行くてはなし先から他へ行て呉と言て寄したのは、健夫君に大なる望が有るからて、其望を遂げて、歸る迄露さんを待して置のは氣の毒て有るから、若い中を早く他へ嫁いて、幸福な世を送れとの健夫君の手紙てはないかえ。露さん」露子は今は堪へ兼ね、ヨヨとばかりに兄の前に、泣き臥ぬ、

「兄様よく解てよ、けれど妾の心を察て下さえな兄様今日が今日迄も兄様を便りに此苦い心をこらへてお歸を一日千秋の思で待て居ましたのに兄様、無理だワ、妾は〳〵死ても、立花へ行きません、離別されても、終生健夫の妻てすワ。兄様妾は決心し

ました」――と露子はあふれ落る涙を袖にてはらい、
「兄様やッて下さい米國へ今頃は定めし、健夫さんは苦勞して居らッしやるでしよふ、妾も早くお側へ行き共に勞働致しましよう、兄様健夫さんは、妾の今の思う心を御存じないでしよう、又妾が行きましたら定めし驚きなさるは、あゝ早く行きたい、兄様どうぞ、やッて下さいな」
「露さん米國へ迄行と言ふのか、未僕の言ふ事が解らんのだ、僕は、知らん勝手にするがいゝさ」
日は早くも暮れて、室内は、薄暗く只悄然と考に沈む二人の兄妹

其三

今日しも秋の空、麗かに晴渡り、横濱の港はＡ――丸の出發せんとて、押つもまれつ船へ押寄るのである。此の多くの人々の中に、年なほ若き一人の美人緑の長き毛を飾りなき、束髪にし、美い其顔へ、喜の、色を浮べ見送人に禮を述べて今しも船へ乗り移ッたは、之正しく露子である、彼は戀のため、懐い古里も。一人の、母一人の兄をも後に殘して波のまに〳〵、ゆられ〳〵て外國へ、行くのである。あゝ遠きに在る健夫の心、波の上なる、露子の心如何に。

女子の洋行も今は有り得べき事として少くも不思議にも不自然にも聞えない、露子の熱誠にして一徹なる性情は能く描かれて居る、兎に角洋行と云ふ大膽な點に着目したのが此小說作者の手柄である（選者評）

○亡き父

櫻室　石田波津子

今日は亡き父の三年忌なので、臺所の方では、ガタ〳〵と膳や茶碗の音がして居ます。枕頭の佛壇には黒の位牌の前に、昨日私が手折つて來た草花が綺麗に挿され心づくしの團子、素麵などの三くさ四くさは整然と供へられてある、線香の匂ひ室中にこもつて俗腸も洗ひ去られる樣です。

新聞記者といふ天職の爲めに、社會の風俗矯正の爲めに、身を犠牲に供して聞くもいまはしい暴徒の爲に四十三歳を一期として殺された父上！今は何處の空をさまよつて居られるでしようか、嘸や天國に天つ御神達と樂しく暮してお出てしよう！私の胸には悲しいやら悼ましいやら種々の追憶が、宛ら潮の樣に止め度もなく湧いて來るのであります。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「波津！」

父に呼ばれて私は其室に入つて行きました。

「一寸座つてお呉れ」

父は私の顔を見まして

「お父ッ様はこれから新聞社の用事で一寸出て來ますからね、病氣のお母様を能くいたはつて上げなさいよ」

あゝこれが父上の最後の御言葉であらうとは、神ならぬ身の如何して知つて居る筈もありませんでした。がこれが所謂虫の知らせとでもいふものでせう、何となく父上の他行を止めたい樣な氣がして、父の足音の聞えるまで見送つたのでした。

十二日の月は黒雲を出たり入たり薄絹に包まれた樣、鈴虫の聲もきれ〴〵に聞えて何となく恐ろしい樣な晩でした。

私はその晩十一時過までも待つ甲斐もなく、父上はお歸りになりませんでした、多分お友達の家にでもお泊りになつた事と思つて床に就きました。

翌朝未明に起きまして火を焚きつけて居りますと、齋藤といふ刑事巡査がお出になりまして、

「實はその……驚いてはいけませんよ……高柳さんが昨夕何者にか殺害されたのです、松並木の道で……」

私は殆んど氣絶する程吃驚しました。そして涙も能く出ませんでしたが、私の此小さい胸は驚きと怖れとがやゝ薄らいで來ますと共に、病みし母上に話したならどれ位驚かれるであらうか、一層病氣がまさるではなからうかといふ事が胸に浮んで來ました。あゝ父上よ！私は聲を立てゝ泣きました、が泣けども叫べども逝かれた父上は歸られる筈もありません。私は思ひきつて母上に話しました、そして善後策を相談しました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其日の中に犯人は見付かりました。

翌日の根室新報には次の樣な意味で、父上の殺害された概畧を記してありました。

「讀者も記憶せらるゝ通り、根室毎日新聞記者高柳芙蓉氏は、頃日頻りに我根室町に於ける縛徒を嚴罰すべしと紙上を以て攻撃し、殆んど空日なかりしに、悼ましい哉、昨夕社の用務の爲め社長宅を訪問しての歸るさ、松並木まで來かゝりし何物にとも知れず殺害されたり、依て撿事巡査立合臨撿せしに、傷は胸部に二ケ所頸に一ケ所あり。犯人は當日直ちに捕へられしが未だ豫審の秘密に屬する事とて詳記する事を得ざれども、縛徒の二三が近來頗る彼を憎みしと聞けば讀者は大抵想像されしなるべし、兎に角氏は社會の爲めに殉

ぜられしもの、吾人は滿腔の誠意を以て彼れの靈を弔はんとす」

都會の新聞記者には斯かる事もあるまいが、地方の新聞記者にありさうな映て、別に詩的なこともないが、沈痛なる文體で書かれたるだけに、讀く人を感動せしめる（選者評）

○友情

下野　新井翠子

秋姫が黄金の櫛で梳づたかと疑はる丶ばかり、秋風にそよいて居る稻田數十町歩を右にして、左は夢の樣に悠々と流て行く坂東太郎、其間の防水堤兼道路を一人の青年藥瓶片手にやつれた面を俯向に歩いて來る。陽は沒れて終つて一面に薄靄をこめ、遠山、森、人家皆蔽はれて、今僅に渡船場の灯火が水の面に映るのが見ゆるばかり。今宵八日の月は朧に中空に懸つて居る。

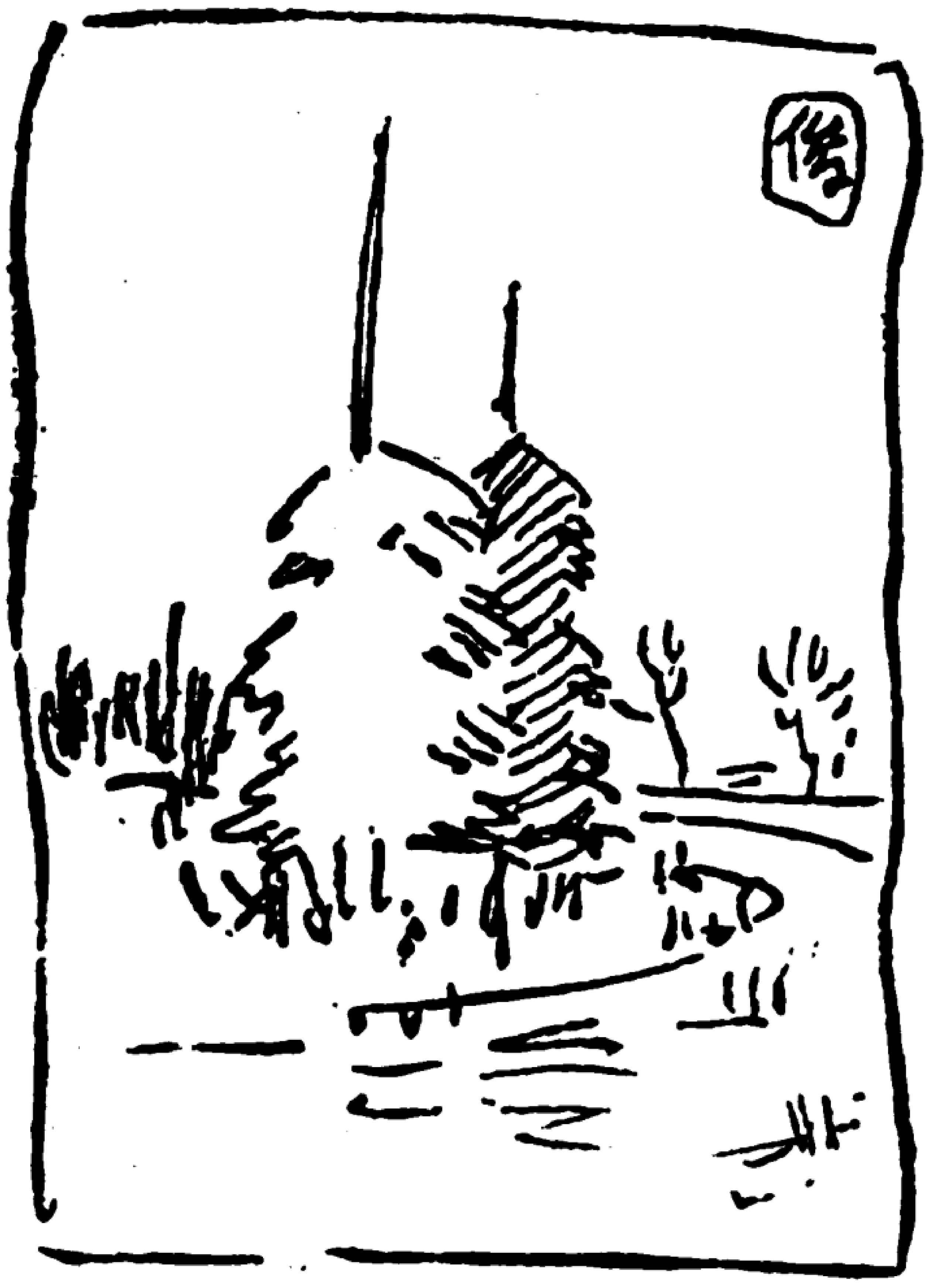
「やア山崎君ぢやないか、暫くだつたネ、什麽かしたかね藥瓶を持つて？」山崎と反對の方面から來た廿四五の色白な、華奢な姿にセルの單衣にオリーブ色の絹兵兒をしめ伊勢崎カスリの袷羽織にステッキ一本、湯上りの散歩であろう、髮を七分三分に別け香水の薫りがプーンとして山崎の鼻を撲つて來る。山崎は厭はしき氣に側を向いたまゝ無言て足早に通り過ぎ樣とするのを青年は狼狽しく引き止めて

「まあ君待ち給へ、そりや僕の樣な悖德漢に言葉を交すも汚しいと思ふだろうが、今までの事について大に辨解せにやならん、どーか立腹もして居るだろうが僕の一言だけ聞いて呉れ給へ、それでも君が立腹して居るならば打れ樣と毆られ樣と厭はぬ、否本懷だ君僅かの時間を貸して呉れ給へ、懇願する」山崎は冷かなる笑みを以て向ひながら、何所かに怒氣を含んで

「僕の妹が病氣で寢てるから早く歸らねばならない」

青年は風に堪へ兼ねた調子て

「五六才の頃から遂ぞ口論さへせず、僕が東上してからも互に歸省を待ち暮し水魚の交をして居た君と僕、



冬野〔賞外〕　麹町區平河町　合田俊子

それが先々月限り交を絶つて且一方では綾さんとの情交を割いて杉田家へ養子となつて行つた僕、さぞ悖德漢と思つて居るだらうが、これには理由の有る事、一通りつまんで話せば、君の知つての通り僕の家は杉田家に對し一方ならぬ恩を負ふて居るのみか、僕の遊學の資まで供して呉れて僕の希望を遂げさせて呉れた大恩人、所が今の妻の千枝子が僕に戀慕して病に臥していや惚語ぢやない。子に甘い今の父は早速人を以て僕の家へ養子の談判、兩親は大喜で殊に次男の身であるし異議なき旨を答へて遣た後僕に對して命令的の仰せ、綾さんが無かつたら僕も快諾したろうが、綾さんと云ふ意中の人の爲めにあらゆる抗議を申込んだがそれは無効となつて着々婚緣の準備をする、煩悶に煩悶えた僕は一夜この河畔に思ひあかしたが理性は情に克つた、恩人——犧牲、犇々と胸に迫つて涙と共に運命に身を委ねた、其前に一度君等兄妹に情實を明してとも思つたがそこは凡夫の悲しさ、さすがに斯麼とも云ひ兼ねて……君さぞ腹も立つだらうが決して利欲の爲めではない、身は一日でも幸福を感じた事はない、綾さんを忘れぬ證據はこれ………」懷中から出したは一葉の寫眞、山崎は中途より立膝の腰も折れて聞いて居たが玆に至つて涙もろひ彼は、舊友の雪雄が手を執つて涙に暮れながら

「君然う云ふ事情か、僕の恨んだのは惡かつた、そ、それ程までに妹を思つて呉れたのか、感謝するそれで充分だこれを聞かしたら妹もさぞ、さぞ悟ぶだらう、今あらためてもと通り親友だ」抱き合つた二人は月影に清い友情をあらはして

「そんなら僕を許すか、辱けない山崎君、そうして綾さんはどうした病だ?」山崎は涙に咽せんだまゝ、しばし云ひ得なかつた舌を唾で霑して

「君、妹を哀れだと思つて呉れ給へ、病氣は君故、まだ己を忘れて君の幸福を祈つて居るよ………」



山崎の沈默に對し雪雄の述懷が續けさまに述べさせたのは稍雪雄の懺悔の實なるや否やを疑はしめる恐もあるが、寧ろ作者は雪雄の口を藉りて、一篇の梗概を言はしめやうとしたので、又巳むを得ない
（選者評）

無類廉價　豫約出版（申込期限十二月中）

女子文壇編輯局校訂（一月上旬製本出來）

女子文壇懸賞文集

定價廿五錢
豫約二拾錢
郵税不要

附錄　大家文集

目次（短篇小説、論文、叙事文、抒情文、消息文、新体詩、短歌、俳句、はがき文、圖畫、）

詳細は本誌の廣告「中付の第三頁」に就て御覧を願ます、空前の安直出しなり

謹告……見落す勿れ

▲郵送料全廢

本社は、熱心なる諸嬢が、如何なる不便の地に居らるゝとも、餘計な郵税を拂込まずして、愛讀せらるゝの、便宜を謀り大に奮發心を起しまして、本月より、直接に本社へ、注文に限り、規定の、定價の、外に申受け來りし**郵送料**は、一切**申受けぬ**とに、致しましたから、其のお積で、續々御愛讀を願ます、實に出版界、例外の廉賣、勉强の親玉に背かざるは、**女子文壇**をお手に受つて御評判の程を願ひたいです……左様なら……（小僧識す）

はがき文

編輯局選

特別第三賞

○梨

讃岐國大川郡三本松町　松永あやめ子

妾の家に一本の梨の木があります、何年も花ばかりで實はなりません、所が不思議にも今年は三個なつた、是は定めて滿洲の兄樣が凱旋するからであらうと毎日妹と共に梨の熟するのと兄樣の歸るのを待つて居ます。

梨よ落ちされ

天

○花選み

北海道小樽區稻穗町十四小松方　梶　水仙子

三軒長家の端れは朝顏を植ゑ中は晝顏を植ゑ終りは夕顏を植ゑたるに妾にもあらず、興を催して其の家を覗きしに、端れは豆腐屋、中は夜店の古道具屋終りは傘の張り換へやにてありけるこそ能く花を撰みたりけれ。

天賞は何の花に與へんか

地

○ハッと思ふた事

大阪府　刀禰春子

昨日は先生に出した手紙に印紙はるのを忘れてハッと思ひ、夕べは就寢中顏へ鼠が落ちてハッと思ひ、今朝はまたあけぬ先に戸があいて居たので、ハッと吃驚。

只さへ女の心臓は鼓動しやすきに

人

○里の秋

眞岡町　淺野撫子

百舌が梢に高鳴した、サア、七十五日過つて霜が降るまご〳〵しちやあ居られないと瀬戸のお爺どんの肝高聲も　果哉！　二十幾日目に霜は眞白、背ろの山も前の

田圃も一夜に酔つて了つた。

活ける測候所

秀逸

○秋氣　南多摩　眞野とう子

霜柱を踏み崩して井戸端に行き、一瓶をくみ上げて冷水摩擦、白い呼吸をふき掛け、小さい手に力を入れて、膚をげ漸く入れやうとする刹那背に一滴冷い雫が、ふと見上ぐると紅葉に凝つた赤い露と、木蓮に凝つた白い露とが、日に映えてキラ〳〵。

明治の爽垢離は生理的なり

○遠く遊ばず　伊豫　高橋かめよ

女と云ふものはそんなにあるくものではありませんと父母のとめるのもかまはずに春子さむ方へ行き面白く遊んだけれどもちつともおちつかないもう〳〵決して父母のゆるさないときにはどこへも行きますまい。

孃は必ず優しき性質を持ち給はむ



冬の月〔賞外〕　神奈川新田村　中村みゑ子

○嬉しいこと　王子きかえ

過ぎし日曜でした。此二三年は風や水の爲にお米が不出來ですから今年はと思て行つて見ると水田は一面に稻の花。

東北は凶作なりと云ふに

○いやなもの　根岸　太田らく子

此方から美しい繪葉書を出したのに返事は只の端書だつた事、稻妻のきらめき、いやにじろ〳〵風采を見られるのと、人見知りして泣出す子、水溜りに毛虫など浮いて居るのと、盗賊が這入つた夢見た後の心持。

稻妻を除いては選者も皆いやなもの

○紅梅　武藏　伊東祥子

丁度妹が亡なつた前年だ、此苗木を植る時に妾が白梅だと言つたら、妹は否紅梅よ屹度！と言つて爭つた事がある、今年初めて花が開いて見れば果して紅で妾の負となつた吁併し妹は居ない。

此紅梅に必ず魂あらむ

○篝狩　飛驒すゞ子

處々に松の緑を交へて美しう紅葉した山の中で、妾達は今蕈狩りをして居る、アラ繊蕈！と喜ぶ千代さん、アラ玆にも！と男の樣な聲を出すのは秋さん、折しも少し前に居た小夜さんが、アラ蛇。

紅葉の間に五人女の蕈狩、浮世繪師の筆にしたい

○木犀　　栃木きよ子

木犀の花か咲きましたから、戰地の兄上に送つて上げ樣と思ひ、手紙を認め、封じ込む枝を折りに庭に下りたら、木犀はさも嬉相に美しき匂ひて、妾の身躰をとりまいた。

海を越えて木犀かをる

○撮影の瞬間　　姫路岩見乙枝

あれほどやんちやの良坊でさへ、寫眞師が今寫しますと器械をもつたときは、其瞬間眞面目になる、妾は眞寫を撮るときにいつもかう思ふ「一人の心は常に撮影の瞬間の如くでありたい」と。

精神的には仰せの通り、顔はいつも然うよそ行きの顔ばかりもして居られません

○伊達眼鏡　　本郷　並河志満子

女の眼鏡は近眼なら方法ないが伊達に掛ける位い嫌の者はない隣の娘さんは外に出る時は乾度掛けて出るから近眼と計り思て居ましたが内へ行くと眼鏡なして編物してました。

金緣か銀緣か

○朝の海際　　湘南白萩女

朝風に潮の香のする袂をなぶらせ乍ら、人影の黒い霧の中を分けて波へ近づくと、今し引上げた網に日輪樣が現はれて網の目に幾千の鱗が青く光つてバッタ〳〵と躍つてゐた。

奇蹟忽ちにして紅鱗

○秋の日　　大阪小山とよ子

小春日和のいと暖かなる日、僅許りの水溜りに、交る交る水あびては行く雀の、何に驚いてか、羽音高くとび立ち、後には昨日今日かへり咲きせし櫻の花に秋の蝶。

どちらが早く散るやら

○昔と今　　上毛　雪竹

私の御母樣は、私の年に、私を、御生みなさつたそうですが、私は、まだ、人形をほしがると笑はれます。

子供で居るうちが花

○平和の夜　　千葉　森美智子

立ち並んだ杭柱の上に朧の月がかゝつて、利根の川面

は暖い霧がたちこめて居る、靜かに私語く水音、實に平和な晩てある、こんな夜に石が育つのであらう。

石の育つ事は初めて聞く

○秘めたる戀　信濃　みどり子

去年の夏逝きませし姉君の愛でし、紀念の小箱ひそかに、開けば中より現はれし一葉のうつしゑ。そは容貌よき海軍士官の雄々しき肖像、うらうらかへせば『俊子さまへ、出征の途にてＳＫより』とのみ。

妹は未だ戀をしらず

○蛾　小石川　黄菊

私と仲善の文子さんと水道の處で遊てたら大きい蛾が小さい蛾を引きずつて來た何をするかと見て居たら小さい蛾が大きい蛾に殺されそうになつたから急て助けてやつたけれども最殺されたあとてあつた。

蛾の社會にも人殺しあり

○秋の夜　京橋　鞠子

ひよいと氣が付いて見ると美坊は最早ぐつすりと寢付いた樣子「さー一仕事を」と繕つと乳房を拔うとした途端、坊は狼狽て丶又チウ〳〵と吸ひ初めた、肱枕、再び歌ふ添乳の唄。

好い女房

○五月帶　神奈川　中村みゑ子

昨年お嫁にいつた姉樣が久々てお出てになつて、今お召換をして入らつしやる。妹の光ちやんはしきりに傍て眺めて居たが「あらッ大姉樣は何したの、お腹へ繃帶を卷いて」

光ちやんを男の子とすれば文情更に與あらむ

○郵便屋さん　岩代　服部貞子

「姉ちやん郵便屋さんが來てよ」と門の方に千枝ちやんの聲。ほうづきの種を出して居た私、すぐ飛び出そうとした時、「マア郵便屋さん姉ちやんの忘れてよ」、出て見ましたら一寸振りかへつた脚夫。「今日はありません」

『今日は』の三字點睛

○指輪　陸中　小枝子

今し方製糸場の汽笛が鳴つた辨當包を携げてゾロ〳〵と川畑道を夕霧に追はれてくる工女達が嘲笑ふ樣に妾を凝視てゆくので母樣に強んて買つて頂いた指輪を塡めていた右手を袴の下に隠した。

之れ女の缺點

○田舍の風呂　能登　花蓮女史

夕餉をすまして庭に沸した風呂の中に這入て、首だけ

出してゐると、涼風がさつと吹てきてヒヤリと身顫ひするとたん、バサツと梧桐の葉が頭に被さつた。

風ひきたまふな

○嬉しかつた　羽生村　森田宗満子

今日は思ひの外に早敢どつたと父様の喜びを聞きながら麥蒔き終つて歸つて來ると妹の愛子が姉様々々と慌だしく姉ちやんの待つて居らつしやつた御本が來てよと言ふので私は直に手に取て見ました。

女子文壇ならずして何ぞ

○收穫の夕　福岡　すま子

姉さん冠りの四五人の女が何やら唄つて刈取る稻を頭のてら〳〵光る爺がセツセと束ねるのを暫し見て居ると、「貴女のやうに閑がありあ嘸ぞ長生するだあねえ」と爺が言ふた。

否、暇のあるものは常に閑し

○夕　神奈川　森川まき

朧に暮つた秋の夕、夕闇の中に匂ふ木犀の香を懐しみ、庭のあちこち徐ろ歩いた折、不意に「十三七つ十三七つ」と叫び出した狆の兒に驚かされて、ふり仰ぐと五日頃の金色の淡月がふわりと樅の梢の上にかゝつて居た。

餘裕ある筆ぶり

○凱旋　麹町　伊藤百美子

凱旋あゝ凱旋と聞て胸は早鐘打つよう、新橋へ迎へるべく紋付着て車に乘つたがどこを通つたかまるで夢中耳も聞えず目も見えず心にはたゞ今正に逢ふべきカーキー色の軍服つけし許婚の君の面影のみちらつきて。

○ふた葉會　飛驒　秋子

千代さん、鈴さん、綠さん、小夜さん、夫から妾の五人は大の仲よしで皆同じ樣に女子文壇を購讀して居ます、近頃「二葉會」と云ふのを組織して文や歌の稽古を始めました。

○凱旋　飛驒　千代子

お隣の武さんや、靜子さんの兄さんは皆勇しい萬歲の聲に迎へられて御凱旋になつた、だけれ共妾の兄さんは――ト曇る目許に床に飾つた片身の寫眞を見詰ると心做か唇が動く樣に思はれて並べられた金鵄勳章の光が鋭く妾の顏を射た。

○即興　讃岐　清香子

十月一日私は障子張しようとて、お緣に居ますと、イ便に「女子文壇」が付きました直ぐ開けて見ますとそれ〳〵美しい絵葉書しばし見とれて、秋の冷たい風が袖に吹き入るのも知らずに居ました。

○姉君　埼玉　渡部花子

赤十字看護婦長として海上勤務中の姉君に手製の繪はがき送らんと繪筆手にしつ、さて何を畫かんあれか是かと考へつゝふと目を庭に移せば父上丹精の菊の幾株、中に尤も美しく氣高き白菊の花、オヽそれよ寫し得べくば。

○日記の一節　下總　岩瀬千鳥子

午後三時、兄さんは水彩畫で机に向つた儘、姉さんはＡＢＣを一生懸命、末雄はと思つて奥の間へ行くと、洋刀を握つたまゝ快く眠つて居る、今しも裏口で、進め……進め……是は五ツの芳坊の聲。

○秋風　越後　庭野りう子

日は暮れた、月が出た、風がふく、松原の中にたつた一軒の我家、妹がなく、淋しい。

小倉　安藤なか子

○馬士唄

　ほれたほれたと何を見てほれた
　　馬が小便して地がほれた

森の小道を歸り行く馬追の聲に秋の日は暮れてゆく。

越後　野　菊　子

○鳴く虫

手枕寒う思に沈む夜中、虫の音の常に無く身に沁みければそと燭をかざし見たに譯もなく菊の落ちしに驚きて夢さめし刹、菊ハ露を吸ひながら亡き數に入りし妹に遺物なる緋袴の裾にすがりてぞ鳴き居ける。

京都　岩淵　國子

○表紙を見て

あゝ書をよむ、女學生私もこんなにして學べるならばと思つた然し此汚ない着物を昔古びた机て務の餘暇に淸い美しい女子文壇を見るのがこれにも増したる私の樂しい學て有とも思ふ。

茨城　竹田よし子

○驚き

御祭の仕度に裁縫數に忙しく縫縫しつる折柄惚手の手にて鐵砲の如き音、驚いて馳付くれば火の中へ埋め置し栗のはれしなりき。

南足立　白　百　合

○夜

紅の雲が西の空に動いたアレばら色にアレ紫にと云ふまに大きい夜の神は黑い繪筆をとつて天地のすべてをぬり初めた。

靜岡　入木美津子

○薔薇

手折らふか、止めやうか、道傍の野らばらの花。しかし折るのは罪だ、それでも自分一人て見るのは惜しい、せめて一枝病の床にある妹に見せたいものだ、自分の手は無意識にその一枝を手折つた。

紀伊　増田白百合女史

○旅僧

數珠を手に纒ふた、鶴髮の旅僧もしたのむたのむと、古寺の山門を叩いた、内には木魚の聲のみ聞えて、何んの音もない、時に落つる桐葉の五六枚。

湖畔の夕暮　〔賞外〕　越後新發寺村　山中孝子



山梨　廣内小蝶

○芋堀

眞珠の玉の如き白露は青い葉の上に、太陽樣は今出たぞと云ふ顔て美しく照らしてゐる私は母の命により、里芋を掘る爲に來たが餘りに露が美くしいので芋は暫く忘れて居た。

相摸　紫　女

○墨滴

二週間の宿題て丹精に丹精をしてやうやう仕上げた水彩畫に、何も知らない妹が何日か妾の留守に、ぽたりと計り其の上に墨滴を、あら妾しどうしたらいゝでしよ、展覽會に。

肥後　幽谷　樵女

○夕景

稻の穗の靡く鹽梅、其中から頬冠した人の頭、姿が現るゝと、後から鈴の音が聞え出して馬の脊が見え出す暮れかゝつた空にはもう研澄した樣な眉月が懸つて、雲がふわりわりと搖ぎ出す。

石見　後藤かつ子

○寄宿舍の鐘打

ほの暗い廊下を廻つて舍監室の前へ出た妾は皆さんがよく臥ておいてるのを驚かしてあげよーと時計を見ると丁度午前五時！鐘持つ手に力をこめて妾は鐘の前に立つた。

神奈川　原　あさ子

○妾が宿

南は湘南大磯海岸を控へ、北を望めば天に聳ゆる大山を仰ぎ得らるゝ茅葺の田舍家、之れ妾が宿、大山嵐の吹き來る事もなく鹽風の身にしむ事もなく、初秋に心安う稍の穗を椽先にながめて居る。

下野　淸　子

○里の童

一村落の小學校に奉職せる教師朝夕の往復に未だ學齡にも達せぬ童三四人、それ先生が來たとて、畑の中より舞ひ來り遙か向ふの道側に、再三再四敬禮しつゝ待ち居る姿の無邪氣さよ。

○古鐘　早稻田　小島濱子

今朝も妾は寺の鐘を聞きに参りまして頓て段々と曉の靜寂を破つて、遥かに破れた本堂の方へ消えて行く其時、天地はこれ太古の如、妾は人知れず囁きました、『古鐘靈あり』と。

○朝起　能登　清子

妾は妹と朝早く起き競をして直ぐ湖の田前の籾種を露の内に見るのが一番好きです近頃は妹が早くて油斷が出來ず昨日もうつかり起きて行くと南無三……妹は笑顏で「姉さまお早よー」。

○間違　本郷　失名

歡呼の聲に送られて「只今ッと學校から歸つて來た行ちやんが、姉様〳〵原に鈴虫が澤山居ますよ、よもやとは思つたが、此間主人を失なつた哀れな鈴虫籠を持つて行つて見たら、マーいやだこうろぎなのですもの。

○田舍の秋　下總　秋山よし子

渺々たる田圃、空晴れて風清し、少女は稻を刈つて居る、馬は稻を運んで居る、老母は幼兒を連れて辨當を持つて行く、鎌を枕にして畦に眠つて居る人もある、雀は案山子に驚ろいて飛んで居る、鄙歌も聞える。

○お庭　廣島　中村東雲

今年五歳になる妹の雨子は、かた言まじりに歌ひ乍ら、黄葉の交つた小さな、栗の木々搖かして居る、輕るそうな葉が二つ三つ、頂に落ちた、足元に遊んで居る雛の、愛らしい事。

○白百合　埼玉　栗原いね子

嗚呼賤の翁の狩りのこした此の白百合、汝の清き姿、馥郁たる香り、物知らぬ翁もそゞろに哀れ思ひてか、清く草取りはてし此の野に唯一もと。

○朝顏　長府　紫花子

オヤマーと昇り籬の朝顏や！やつぱり白が好よ、一人、こち乍ら一輪とつて其柔かな瓣を拂はうとしたらつい紅さし指の先が觸て綻びた。

○梟　上毛　柳月子

或る日私は、梟が卵をいだいて居るを見つけまして、あまり、にげないから、笠の柄をその前に出したら、それをつゝいて、飛び出ません、かくも子が可愛いものでしやうか、たぶん私共の親たちも其通りでしやう。

○可愛言ひ振り　越後　中島康

我家の裏に、今年五才で、左手の小指のない小女子が在まして、時々妾家へ遊ぃ來ますと、「どれ芳ちやん御手を御見せ」、と云ますと、一寸後へ匿してしまつて、あたい、御手々がないから、里に行んで、お母ちやんと、一所に家に居のと云のです。

○萩　三河　紫淸女史

あゝ何たか、心細い夕方たは、病む母様の、ねるまを、忍んで、そと窓をあけたらは、秋の夕日うすれて、庭の白萩、風も誘はぬのに、はら〳〵と散つた。

○暮秋　陸前　山縣幸子

鎭守の森の秋深く落葉庭を埋めて虫の音もかれ〳〵なる折しも古りたる神木の梢に影うすくかゝりたる月を一列の雁の横ぎりたるこそいひしらず哀れなりしか。

○花賣少女　王子　朴蝶子

小鳥の歌に明けて鐘の淋しい聲に暮れる御嶽山の淸水で磨き上げた色白の花賣少女、御嶽山獨特のキリリッとしまりある聲を聞くと崎踊者の日が待たれる。

○松魚漁　茨城　滑川止米子

沖より歸りくる松魚船、聲のかけ聲いと勇ましい。やがて眞砂になげ出す松魚の生々しさ、其の數千にも近からふ、まー奇麗なこと！、深山に住んで居る人にみせたいと思つた。

○扇の詩　小石川　さゆり女

紅地に銀の波をあしろふた妹の扇に春の夜の床與に書いた夏の詩の一節其詩の靈やぬけにけん秋散るころにところ〳〵虫に食まれし跡ありと妹のつれ〳〵日誌に記してある。

○人位の高下　桑名　山崎初子

私方のお隣の御娘様は今年大學の二年そして同じ町内で一丁と隔たぬ所に住つて居る實吉の息子は此春やうやく義務教育を終へるや直に或る入

百屋へ小僧に行きましたマア何と云ふ差異てせう。

○田舎の夕　尾張　入重子

夕陽の影が漸らいで農夫が各々家に歸ると彼方此方には藁打つ音がする。やがて鎭守の森には今年の豊作を喜んで村の若うどが吹く笛の音がし前の畔道からは郷唄が聞える。

○菊の花　越後　吉田影子

秋の女神の冬の男神來ますを待ちて下界を消め給ふに萬物皆拂ひつくされて犠牲にさるゝを、ひとり菊花の紅白あざやかに咲きて霜露の迫害を受けざるこそうれしけれ。

○夜の雨　安藤山吹

夕方には晴れて居た空が、夜に入り俄に雨が降り出し、田には稲が干してある、サア取り入れねばならぬと家内殘らず田に出て入れる、松明も消へそうになる、すみて家に歸れば雨は止んだ。

○少女　下野　さなゑ子

凡そ世の中で何が一番好きかと問ふ人があれば、私は花ならば今にも其蕾が綻びそうな時と同じ一點の邪氣もない然も生々とした樂の權化とも云ふ可き、清い少女程愛すべきものはないと答へるでしやう。

○午砲　金澤市　大塩なみ子

本丸の松の間から烟が見えると續いてズドン、兵營の彼所此所には食事喇叭が鳴る、小學校に午砲を打つ、工場は汽笛を鳴らす、公會堂の時鐘はゴーンと撞き出す、是等が止むと寂寥の聲が次第に淡くなる。

○夕空　靜岡　野菊子

大空を眞二つにして、右に惡魔のやうな黒雲が乘り覆つて物凄く睨んで居る、左は天もこげるばかりの夕燒が薄れた時に女神の眼のやうな星が一つ笑み出た。

○犬の子　磐城　佐川繁子

此の間我しの家の物置へ六匹の犬子が生れました親は主無で惡いけれども其の子の愛らしい事マル〳〵と肥つて居て、其の中でも白いのが一番好き、それを抱いて御座敷へ上つて行くと父様と姉様から御目玉。



虫とり　〔賞外〕　茨城縣下大野村　好林女

○浪さん　三河　澤田つま子

病氣の爲に嫁入先から寮生にお歸りなさつた姉様の、徒然を慰めるよすがにと不如歸をさし上げたら、暫く讀んで「あゝ浪さん」と本を膝にお伏せなさつた、其のお顏の色の悪かつたこと。

○鳶　上毛　むらさき

空に高く輪を畫いて居た鳶が、ヒラリ落ち來て水を切つた、鏡碎けて花を吐く、花か霰か、白沫が散き湖面に消えた時、尺餘の魚を引掴み日を望んで翔る鳥の、ピーヒロ〳〵霧に響けて鳴いた、勝鬨であらう。

○人形　三重　奧瀨かすみ

可愛い人形、名は お園さん。寐るに、起くるに、必ず妾と共々の、母ちやんに次いて大好き。今日は叔母さんの家へ、遊びに行くのよ、しばしのお別れ、さあ接吻して。

○時雨　芝　細川とき子

時雨がバラ〳〵と降つて來た、下女は手拭で頰狂聲、大根さゝげた女中は前掛を被むり其跡からいかけ屋の小僧はお釜を目の下まで被つて落付て步行いく來た。

○紅葉　名古屋　世幾子

小春日和の一日、遠征の君に返書したゝめんとて、丸窓の内文机に向へば、風靜かに吹き來りて鉢植の紅葉のはさり一葉！今しひろげし卷紙の上に落ちぬ。

○反省錄の一節　熊本　本嶋とよみ

自炊して居る俗の、しづかな二階で、しきりに代數の難問題を考へ込んで、夢か現かの境に迷ひ入つて居りましたら、不意と下の方で、「どたーん」と、けげしい物音が致しましたので、びつくりして、我にかへりました。

○紅葉　熊本　平岡とし子

珍しくも碓氷峠の色濃き紅葉送り給ひし君のいかに嬉しきかよ。嬉しき君よ、山路遙かにしら露多き稍に去りにし君よ、君が赤き心をわれは謝す。

〇秋　　鹿兒島　園田勾秀子

萌葱色の稍長き衣を着て緑の野邊をしづかに北へ行く裝うすき萩は誰れ？彼れが行く野末の草は緑より黄となり樺となりつひに灰色となる。回して彼は霜・鐵錆所に狩犬つれて山野を跋涉す。

〇好きな鳥　　富山　長瀬敏子

私、鳥の中で鶯ほど好きな鳥はない、鳴聲から姿まで愛らしい。春の山故郷の事を考へて居る時などに、鶯の聲を聞くと追懐の念か何時しか閙切て、妾を慰めて吳れます。

〇せゝらぎ　　信濃　柴とり

大空蔽ふ雲の色黒う、瞬く星の影疎らなる夕を、ひとり瀬戸の小川の畔に彷徨へば、岩にむせび草葉にさゝやく水のせゝらぎ。さながら死せるが如き、宇宙の萬象を通じての脉搏。

〇父樣の言葉　　秋田　中村靜子

今年五つの妹、母ちやん！私と金やは秋田著梁でお祖母さんと母ちやんと姉ちやんは東京著梁ネ、と云ひますので母は、ぢや父様は？ておきゝなさると、私しらない。

〇お人形　　高知　吉良夕霧

嫁ぐ宵、亡き母様の忘れ形見のお人形、殘し兼れて、そつと乳母に「お人形連つて行つてよ」と、さゝやけば「旦那様と、お雛ごと遊はしますの」と、聲高に

〇蝶の運命　　能登　池野白百石子

昨夜の野分に惱まさせたのであろう、秋海棠が地にペッたり倒されて居るので、可愛想だと思ッて、起してやると一羽の蝶が片々と飛びてた。

〇秋の夕べ　　岩代　岡柴郁子

勤めて好き聲を出し「峯の嵐か松風か尋ねる人の琴の音か」と歌ひ出せし一刹那チクリと頭に食付た物が有るあつと急ぎ兩手で取つて見たら恐せこけたきりぎりす

〇藤の葉　　伊豆　一木きん

前には藤の葉をもてる敎師、「それでは、なぜ、これは小い葉片が、いくつかで出來てゐるでせう」「すこしは人につまれてもよいよーに」あゝ、少女の愛くるしい口もとは、いかにも眞面目なので、

〇女子文壇　　山口　くに子

女子文壇がきましたよと父上のお聲おう嬉しい試に投稿せよを讀みて盛つて投稿しましたが早く版になつて文壇紙上で皆さんにお目にかゝりたい

〇蕈狩　　常陸　酒葉琴子

松山の中を獨てぶら〳〵と歩いて居ますと立派な洋服を着た色の白いお美しい方に行合ました、妾はきまりわるくて通拔け様とすると「澤山とれましたか」と問はれました。妾は何だか顔がほてつて答へる事が出來ませんでした。

〇水の御飯　　岡山　露女

やつと高等二年の濟ちやん、今年は母さんも入院なすつたので私と御祖父さんと三人きり、今日はオ彼岸なので朝から大そうじ、濟ちやんに御飯をたかせると間もなく姉さん御飯出來てよー行て見ると釜には水が一ぱい

〇盤水練　　岡山　野きく

政夫様は今年四つ、大く成たら何に成のと問へば日本海軍だと、そして又川泳が大好で然し一人で川に行と叱られるもんだから、常も御座敷でドブアン〳〵と泳の御稽古。

〇弟　　中西歌子

今まで裏の竹山の中で「雁々渡れ」と可愛い聲で唱て遊て居ると思ふた弟もう庭の方へ來て「ヤーイ提灯行列萬歳」と叫んで居るヘテナ「秀チヤン何」と聞くと「姉チヤン來てごらん」行て見ると木に登て居る眞赤な柿を見て



讀友俱樂部

○諸孃と記者

○記者樣妾何が嬉しいつて女子文壇を見る程樂しい事よりませんわ記者樣の御心切な御言葉や諸孃方の御話も伺へますので妾學校の樣に思つてよ拙いものばかりですがこれから投書致しますから向後ゑろしく御願ひ申上ます（井上ゆたか子）（記者曰、女子文壇を學校と思つて下さるなどま誠に嬉しいです、實に一つの學校で、而かも階級なく全國の諸孃が一つの講堂へ集つて樂むと云ふのは興味の深い咄です）○記者樣拾號の繪葉書は大層立派でした私は嬉しくつて直に故郷の〃母樣の許へ送りましたら祖母樣も返事に見事に出來てゐれとお言ひでした私の學校で女子文壇を購讀してゐる人は二十三人です。（記者樣、どうか當撰者の肖像を載せて下さい（名古屋玉溜かう）（記者曰、祖母樣のお若い時には繪葉書など云ふものは想像にも及ばなかつたでせう）○繪端書は付く表紙は毎號取りかへて頁け多くなるもう妾は記者先生に御禮を申すて言葉を！りません此上はたゞ一生懸命筆を磨いて報ゆるばかりです（秀子）（記者曰、御禮を仰つて痛み入ります誠に本社の微衷をお察し下さつて諸孃が文學上に技倆を進め詩文に堪能な方々が本誌から多くあらはれるやうになりましたら記者も望外の喜び、且編輯員の理想とするのも其處にあるのです）○來年のお正月には親愛なる記者樣に何か切命のお年玉を差上げたいですが何がよろしうござゐますか知らせて下さい（下野久保やか子）（記者曰、イヤモウ何ても結構です）○記者さん私は文字の書き方の巧拙が、その人の人格の上に及ぶと聞いてから一心に字を習ふて居りますが、どうしても思ふやうにいかぬので困つて居ります、どうすれば上達するのでせう、何か宜しい手本でもあればご教示を願ひます（大阪つゆ子）（記者曰、原稿を拜見しました處ではなか／＼美しく書いてございますこれなら決してはづかしい事はありません只上手に書くだけでなく能く分るやうに書くのが第一です必ずしも能書になつた處で人格が高くなると云ふ理由もありません）○記者樣私の記事が一つも今月のに出ませんが原稿が不着なのでせうかそれ共後にまわされましたのでせうかあまり心配ですからおたづねいたします（淺野撫子）（記者曰、御心配はごもつともですが原稿不着ではありますまい紙面の都合か何かで後へ廻つたのでせう今に出ますから御安心遊ばせ）○記者さん、つくり話でもなく實際見聞したことで笑ひ種ともなり、また教へ草ともなる話なら家庭笑話として妾等も投書してよいのでせうか（信濃なる德富小式部）（記者曰、家庭笑話でなくもはがき文なり抒情文なりに作つてお出しなさい）○はがき文ははがきに書かねばならないですか、半紙に書いては惡うございますか（加賀津幡町松原みつゑ）（記者曰、半紙でもよろしい）○記者樣毎月幾日の日原稿を送れば翌月の雜誌へ載せてくださいますか（和歌山橘清子）（記者曰、何日とはツきりお答なしても都合で翌月に出ない事もありますが先づ大抵は一ヶ月前です）○記者樣に一寸申上ておきます妾は傍島美遊喜さんと親戚ですが一しよに投書しますからどうか御承知の程一人が名をかへて出すのではありませんから一寸念のため申上ます（美濃賀傍島成子）（記者曰、拜承）○記者さん初號からの秀逸以上の文を一冊の本にしていたゞかれますまいか（岩代愛讀者）（記者曰、お返事は迫つての事）**○記者先生私は皆樣のやうに學校へも行かれないで唯此女子文壇を師と思つて愛讀して居ます文才も詩才もない物ですが御はづかしさを忍びて此度初めて投書いたしました（北總嶺月子）**（記者曰、又更に篤志家の加はつた事を欣びます）○記者先生私は肥前の國なる島原の里の片舍田に生れし者でやう／＼高等小學を卒へ熊本の尚絅女學校に入學し貳ヶ年の御世話になり今に家にありて家事のひま／＼に色々の書物を讀みつゝある者ですが先頃親類の内に行きましたら女子文壇と云ふ雜誌を見ました第拾壹號から本誌を愛讀して居ます是よりはおい／＼文の一章も御世話樣にあづかりたく思ひます以後宜しく御願ひ申ます文章は毎號何卒てら出してよろしきものでありますか次號にて御知せ下さいませ（まつ子）（記者曰、文章は毎月一つの種類に一章宛なる事は別項の投稿規則の通りです、家事のおひまにはがき文でもお作りになれば如何ですか作らうと思へば出來ます）○記者樣普通友達に出す手紙を開封で二錢でもかまいませんのですか、お答願ひます。（問つ子）（記者曰、いけません不足稅を取られます）○記者樣文體の種類別は一々しなくてもようござんすか、それとも何處かへしるしてもしておくのですか。（多根子）記者曰、種類別は是非、原稿の初めへ書いて頂きたい）○記者先生よ私は、姉妹て投書致すので、二人分の同封に入れて投書しましたが、いけないでせうか、何卒教へて下さい又二人以上のを同封ではいけませんか（群馬縣暖が家）（記者曰、差支ありません）○河井醉茗先生に一寸申上ます私は女子文壇第一號から引つゞき投稿致して居りましたが此頃二三ヶ月思ふ事あつて休んで居りましたが亦々ふるつて投稿致します何とぞ以前にかはらず御引立のほどを御願ひ申ます（月光）（私か女子文壇の編輯を監督して居る事を御存知と見えます、何うか斯道の爲に眞面目なる修養をなさいませ、醉茗）○記者樣に伺ひ上げます十月に投書致しました原稿は何月發行の壇文に揭げなさる御都合ですか（南千住すみれ）記者曰、十一月です）○端書文の書き方は如何致すのですかお**敎へをねがひます（畏多しま）記者曰、別に書き方にむつかしい事はありません一十四字詰四行以内で振假名をつけて下さればよろし）○記者樣私は二度投書しましたけれど、文拙き爲か一度も揭載の榮を賜ひませんので大に落膽し**

て一時よして居ましたけれど、又々勇氣を出して、投稿しましたからどーか、御訂正遊ばして下さい(芝の白菊)(記者曰、二度や三度で御落膽なすつてはいけません)○記者先生にお尋ね申しますが投書する時は論文は論文消息文は消息文と原稿紙の題の上に記すのですか封筒に記したら沒書になりますか、誌友倶樂部への通信や投書と共に封ずる時は通信の記してある紙に誌友倶樂部と記しておくのですか次號でお答を願ひます(宮崎縣常盤)(記者曰、左樣ですが只封筒に書すより原稿紙の端に各種類分をして下さい)○記者樣私、俳句もはがき文一つ投書致しましたがあれで規定に反いて居りますか何うですか次號の誌上で御答へ下され度御願ひ申上候(佐野滿子)記者曰、俳句は一句づゝ願ひます)○敬愛なる記者先生私しは一孤島の浮世はなれし片田舍に詫しく暮して居る無學の一少女ですが唯此女子文壇から多大の慰藉を受けつゝ有るのですよ文壇の長く榮えん事を祈ります尙記者先生の御健康を祈る(佐渡、渡邊ちか子)(記者曰、佐渡は四十九里波の上と歌にも申しますが我文壇が容易く海を渡りて篤志の貴孃を慰めるのも愛讀者や投稿者のおかげです)○記者さん、私つまらない歌や、誌友倶樂部へ通信など、投書しましたが、此の十一號には出て居りません、若し書き方がわるいのなら、きびしく、おつしやつて下さい、決して失望しないで投書しますからどうぞ〳〵御願です(水戶市杉田なほ子)(記者曰、別に書き方云々に依つてゞはありますまい、後れてるのではありませんか)○記者樣私二三度も投書して居りますが一度も紙上に御示し下さいませぬが投稿に何か不都合な事でもありましたか私は文壇を師と思つて學んで居ますから何卒御敎示下さいませ(韓國與田學子)(記者曰　必ず投稿に不都合があつて出ないと限りません、ある場合には御作が他より優れて居ないとか云ふ事もありませうから能く御自修なさい)

○諸孃の交際

○一女學生樣。どんな御方かは存じませんが、

御親切の程、なつかしうございます、不肖ながら女子高等師範入學志望の一人で、來る十二月五日より當校にて受驗の都合になつて居ますが何かと不分明で困つて居ます、御芳志にあまへ奉り御敎導の程偏に希ひます(奈良縣生駒郡郡山町南郡山八四早田梅野)○妾は草深い片田舍に住む淺學無才の者ですが地方の諸姉樣御交際御交通して下さい(紀州日高郡稻田村吉田阪本六右衞門樣方澄江子)○私は手跡の美はしい方と書道研究の爲め繪葉書や書状の交換が致したう御座い升御望みの方は何卒下名へ(美濃國安八郡牧村大字馬瀨木村花香)○皆さん妾は田舍のつまらぬ者ですが御交際を願ひます、また繪葉書の交かんも致しますに依つてどし〳〵送つて下さい(香川縣大川郡三本松町松永あまめ子)○皆さま妾は此度初めてお目にかゝりますが賢明な諸孃と交際が致したうございますどふか繪端書や所の新聞、雜誌を御交換してください(石見國邑智郡出羽村森脇百合子)○十號で亡姉のかたみとして各種書物を進呈する事を申上げて置きました處其後今廿五日までに愛讀の御方より百六十四名の御申込がありました其御方へ抽籤で山口の堀龍子さん外八十三名丈けへ書物を差上げました何分豫想外の多數の御申込でありました數書物の數が足りませんでした處からつまらぬ書物や。御注文通りの書物かあたりませなかつた。事と抽籤に外れた方へは折りの御希望を空しく致しました事は實に〳〵遺憾に堪へませんでした抽籤外れの御方へは初めは一、一、端書はかきて御返事を差上げて居りましたかあまり多數の御方故中には御返事も差上げませなかつた御方も澤山御座いました故に謹しんで不行屆きの段を御斷り申上げます諸姉さま、此上ながら御交際を(備中玉島町筒井八重子)○妾しの思想に同情を寄せて被下さつて三十四名御申込になりました其内一つ二つ御返信は申しましたが途中で宿が變りましたから郵便物の間違ひや消印のため住所がわからぬがありましたので返信のないお人にまで御ことはり申します(坂梨よし子)○親愛なる當文壇愛讀諸孃樣妾は片田舍に住む淺學の者でありますが何卒文通の交際等して下さいな(埼玉縣秩父郡槻川村大字坂本字根岩占方秩女)○韓國京城の方と聞きますと何にか懸しいですが御交際するにも御願も存じません韓國京城の(賀木苑樣)何卒御交際下さいませよ私も女子文壇の愛讀者ですから(韓國京城旭町上奥田榮子)○妾交通と詩歌の交換が好きです妾等五人でをさなご會と云ふのが出來てますから會員の外の方にも御交際を願ひます、をさな子會は島山すゐ、淺尾喜久子、若林八重、元木なみ子(山梨縣勝沼町一九七方揚羽若江子)○妾は一月前、なるべく美くしい繪はがきを、送りましたのに、お返事を下さらない御人の御芳名を記します、(韓國釜山地田藤子下野河内郡松本ふくの、福井市高松ひでよ、鹿島郡中立山貫岡ちと子)それから、書物交換の事で通信したのに御返事下さらない人の御芳名は(備中玉島町筒井八重子、伊豫土居ゆかり子、横濱岩田星子)等の諸姉でした(京都かほる子)○男子の愛讀者諸姉に申します御親切にも御手紙下さつてあつく御禮申上ます然し私は非常に迷惑致しますから以後は固く御ことわり申します熊本縣弓削えい子)○私は埼玉縣の所澤に住んで居りましたが今回都合で當地へ移轉しましたから東京の方は御遊びに入らつしやい家には妹の里子や敷島花子も居ります(四谷區尾張町二山下宮子)○消印で御住所不明のお方に金澤保子樣山城バイオレット樣橫澤さつ子樣袖田とし子樣澤々つゑ樣藤本はな子樣東海林英子樣の七名です誌上で厚く御禮申上ます(茨城石崎秀子)○北海道の初子さま、東京の江口春子さま、越後の長島はつ子さま、十月の初めにさし上げた繪はがきは着きましたか、はやく御返事下さいな、外の方もすぐ御返事下さる方でなければ絶交いたします(京都南禪寺町田島かほる子)○親愛なる諸姉君等よ私は草深き田舍に語り合ふ友もなく淋しく暮す女子文壇愛讀者の一人です何卒以後御心安くし、又御手紙やしをりなどの交かんなども願ひます(府下北多摩郡拜島村青木たま子)○皆さんどうかお交際を願ひますそして繪はがき手紙編物寫眞の交換をして頂きたいのです(大阪東區南久寶寺町佐

皆屋橋西入堅田きく）

○秀才なる諸君よ繪葉書、寫眞、不用の〃雜誌の交換は如何ですか、御贊成なら送つて下さい、少女もよろこんで屹度粗末の御禮及び優美なる繪葉書を差上申可く候（秋田縣由利郡平澤町松田山六方齋藤恒子）

○皆様私は自分で作りました縮緬細工の鶴、かめ、鯉、たぬき、寳、人形、桃、ざくろ、ぶどう、柿、びは、等を持つて居ります御望の方は品物と交換致しましよう（岡山市下ノ町立岡房野）

○皆様御交際の程願ひます葉交換お望みの方は何卒どし〳〵お送り下さい早速其に相當したのを御送りいたします先着の方には葉の外に梅形の巾着もさしあげます（大阪南區御藏跡町一万吹本きく子）

○愛讀者の皆様妾も第十號より御仲間入りをいたしましたから何卒御交通の程お願ひ申ます（群馬縣多野郡吉井町白倉子）

○皆様私今度「深山」と云ふ名を姉からもらひました何卒此の後御目をかけて下さい（磐城伊具郡丹倉山深山女史）

○北海道春谷若草花の種子を澤山ありがたう、親愛なる諸姉よ繪葉書や御手紙をドシ〳〵御送り下さい必ず御返事申ます（伊豫喜多郡山島飯村字庭の川和紙小琴）

○昇汰しよ様今日は誠に難有うよ、貴女何うぞ、御住所をお教へ下さいましよ、屹度（北海道七飯の果松井長子）

○妾が諸姉と文通の交際を望む旨を本誌に出してから文書を下すつた方は筑前の安部御子さくし来た城の小幡倭文子さん愛知の佐竹清子さん等て来ましたお後で家の人に聞くと妾へ名宛て文書が来ましたが本人不明て戻したと云ひます實は妾は當地の信曉館と云ふ醫學習所に居るのですから文通を下さつた方にお知らせ申します何卒諸姉と文通を願ひます（長野縣小縣郡中川村信濃國内矢嶋嘉子）

○私は女子文壇第一號からの愛讀者です何とぞ皆さま親しく御交際を願ひます（横須賀天町四人○水仙その枝）

○入院中は諸姉より繪葉書や御手紙や寫眞を賜り有難く存じます。最早退院いたしましたから御禮かた〴〵紙上を以て御禮まで（和歌山縣谷芳）

○どうぞ御交際下さい繪はがき交換を御願ひ申します（横須賀市元濱町四丁目四三谷本春江）

○私は高等科だけしか卒業しません自分は御勉强したいので及ばずながら上京せうと思ひます何卒諸姉の方て田舎から遊學なさつた方か又はもとから都て學んて居られる方の中てもしもお情に富んて居られるならばしらぬ他國へ上る妾をあはれみ玉ふてよく都のあしき風もよき習慣も委しく御しらせ給へよや（三重縣鈴鹿郡神邊村布氣仲野貞子）

○皆さん御不用の寫眞がありましたら送つて下さい御寫眞を拝したいので其御禮に道成寺古刹の名所古跡の圖と鐘巻安珍清姫の由緒書一冊を添へて送呈致します皆さん繪はがきも交換して頂戴（紀州日高郡藤田村吉田阪本六右衛門方澄江子）

○賢明なる諸嬢わたくしは、故郷はなれて勉強して居ますから、つて友とするお方も少なうて淋りて居ます御交際下さるやうお願ひ致します地方新聞の交換もお願ひ申します（名古屋市旅籠町六番方玉置書〻子）

○東京さだ子様、佐賀うめ子様、早速「紅葉の錦」お贈り下さいまして誠に有難う存じます。心ばかりのお禮致したうございますから失禮ながらお二人様御住所をぜひ〳〵お知らせ下さい（大阪田中靜子）

○備中の筒井八重子様征露寫眞繪一部御惠み下され有難う御座いました私から地方の新聞九日間だけ差上げましたが届きましたでせうか（陸前松島村高城古河松江）

○私は未だ幼稚で物を編む事を知りません諸姉の御こしらへなすつたものを手本として練習致し度う御座いますから何卒系製栞を御送り下さい其御返禮には美術繪はがき差上げますよ（越後高田御馬出し吉田影子）

○諸姉上様どうか御交際して下さい淺學の妾てすが以後御見捨なく御交際して下さいよ（京都後小路松町東井上ゆたか子）

○上毛の今井やゑ子様近頃は文壇を御見かぎりてすね少々ぐらいの事を御氣にかけないでどし〳〵御發表遊ばせな（上毛野の花）

○富山縣敏さまあなたの郡村姓名が消印墨の爲めわかりませんどうか御姓名を私にも一度しらして下さい（廣島縣高田郡甲立村深瀨箕嶋ちと子）

○誌友の皆様誠に恐縮な物て御座いますが此後は親しく御交際を願ひます、御手紙下さいますならばどうか下名へ願ます（岐阜市矣關町壹田中悦子）

○妾は佐々木定子の妹です第十一號から愛讀者の一人に加はりました宜しくお見知り置きを、又繪葉書交換して下さい（但し自筆）姉さんとも（備後國雙三郡酒河村背河佐々木元三郎方鶴子）

○淺野しげる子様誠になつかしう御ざいます何卒同姓の好みで御交通下さい其れから外の誌友諸姉へも御交際願います（長野市石堂町植原方淺野曉星）

○私が本誌へ認めらるまでに樂を御望み遊ばした方一四十三名で御座いまして御不公平の無い様に北海露子清子芳山女史三名東海琴音民子文子あや子四名關西秀子蔭子隆子菊子露子滿女史の人其外撫百合子花子三名仙の方には一々御斷り致す筈で御座いますが失禮ながら本誌で御報告致して置ます（辰井琴子）

○妾が一度本欄で御寫眞や御地方の寫眞などお交換を願ひまして以來長崎の河野すみれ樣伊勢四日市の神野政子樣始め四十名ばかりの姉樣方から早速お送りして頂戴したと自家からの知せですら妾は今神經痛で大分の病院へ入つて居ますので出院し歸宅次第それ〳〵御返事致しますから惡しからず（大分病院にて甲斐ふい子）

○申すも恥しい次第てすか編物を能く知らないので誠に困つて居りますから普通編物の見本を作つて御惠み下さる方はありませんか（埼玉縣北足立郡大砂土村大字大知田見富方細沼藤子）

○愛讀者の皆様妾は姫路の片田舎にうづくまつて居る者なんです何卒繪葉書又は御文通を願ひます（姫路郵便局區内八代村五十六番地二木喜代子）

○水戸市の山田千代子様信州の伊藤ろく子様九州の浦部久子様、私も先頃から淺野しげる子様と御交際して居ります、不束者ですけれども淺野様同様親密なる御交際を願ひます（陸前松島村高城古河松江）

○誌友諸姉様妾も本誌の愛讀者よ御交際下さい私は姉さんに編物少し習つてよ、何か細工ものと雛形と交換して頂戴交通も（出雲國飯石郡赤名町倉富子）

○伊勢國内山しげ子様出雲の福田美子様先日は捌き巾着御送り差上ましたが御手許へ着きましたか否ですか御返事を（島根倉橋小鶴）

○皆さん田舎生れの私もおなかま入り致します、どーぞ御面倒なが見て下さい私の向の村には茨城縣第一の櫻がありますから花の三月には御遊びに御出なさい御案内致しま

す（茨城縣新高治濱町大字東大橋喝町四子）○臥は前ないもとて有ますどうぞ捨なく御面倒を見て下さい（喝町智賀子）○高濱の小川はま子樣あなたは妾樣の御妹てはありませんか妾は妾樣をよく知つて居りますどうか以後御交通ねがひます（土浦町本川大澤方磯瀨淺子）○おなつかしき誌友諸姉樣方の御内に編物なかして下さる方はありませんか切に願上ますよ（長崎縣北松浦郡佐々村辻信子）○博學多才の諸姉樣よ私は本誌第一卷第十一號から加はりましたどうか寡學無才なりともお見捨なく御交際なし願ひます（愛知縣東春日井郡羅石村寺本須惠子）○女子文壇の讀者の諸嬢姉方よ妾も是れから御交際を願ひます、して妾にあみもの乘へ送つて下さい、御送りなされました御方へは成田山不動の名所繪はがき一組を上げますよ（千葉縣印旛郡遠山村取香藤咲さみ子）○川華義子さん先日は御言葉有がたう、これから小泉はま子さんと川華美子さん御肉筆の繪葉書の御美しい事よこれからもよろしくそれに石崎霞洲さん水戸の梅萩繪贈り下すつて妾ほんとに嬉しい厚く御禮致しますよ（萩の舍雫子）○妾繪端書交換を望んだら誌友諸嬢八十二人から美い繪端書を送てくれまして妾お禮の仕樣ないわ「春夜の月」は先着者埼玉の小河原花子樣に上げましたその外け皆な返事をあげました橫濱の鈴木はる樣京都の小島かよ子樣岡山の岡本繁子樣下樂の山丘政子樣京都の田中ふじ子樣廣島の旭爪靜子樣外字のはんぜんしない方二名あります右のお方は消印の爲や草書の爲住所不明て御返事をあげることが出來ません一寸本欄てお禮いたします（常陸高濱町東大橋酒葉つね子）○廣島縣の磯野みき子樣北海道松井長子樣私の所よりは餘程遠く何もか、皆遊つてる事と存じますから失禮てすれど御住所か明記して御手紙下さいますなら私もつきしだい上げる事よ。（宮城縣伊具郡角田小學校内星りつ）○村上節枝子樣松井長子樣木郷直枝子樣細沼藤子樣岩田なか子樣今立いま子樣其他諸々誌友姉樣其後御變りなくつて？妾大丈夫よ相變らず御交際なれえそれから相模の小藤樣御親切有がたう妾も上げますから御住所をくわしく知らせて頂戴な（宮城縣伊具郡角田小學校内加藤よしの）○誌友の諸姉樣よ妾も一號からの愛讀者てすどうか交際して下さい又御手紙も繪葉書も寫眞も送つて下さい、妾も必ず返りますわ（美濃關町加藤幾經舍内修島英遊喜）○繪葉書お玉章御寫眞御送り下さい、妾も早速御禮は致しますから（山形縣南置賜郡窪田村大字窪田高橋玉吉方淺月女史）○誌友の皆樣寫眞お贈り下さい御地方の景色寫眞お持合なれば是も一しよに願ひます私もみにくき顏ながら御贈りします（伊豫喜多郡大洲町將小路尾崎巡平樣方斯波八千草）○皆樣本號から女子文壇の御仲間入りをしましたからドーゾ交際をして被下いそして先着申込者二十名及御玉章を被下た御方には失禮てすが短冊を差上ますから御申込被下さい（松前市三番町九三武智内山脇幸子）○小泉はま子樣一二年ゞ昔藤田とき子樣と土浦高等女學校に通學せし事が醫裡にあつて消えませんおつかしくてたまりません（何ふか懷舊の情を以て以後長く御交際を願ひます（茨城縣新治郡高濱町中津川川島かく子）○誌友の方々妾は淡路島の浦人て候が淋しく暮す者てすから何卒千島に御玉章御言傳け下さい喜んて御返し致します（淡路津名郡洲本町之内細工町奥井汀女）○妾も第拾號から女子文壇の愛讀者となりました以後親密に御交際を御願ひします御文通して下さればわたしはよろこんて御返事します（大阪市北區信保町二丁目一一〇番地越村方越田喜美子）○明治三十九年一月一日にハカキ交換致したい其他エハかキ交換して頂戴な先着十名へ耶馬溪寫眞差し上げます又秀才文壇三卷一號より五卷十號迄おもちの諸姉は私の所のハカキ文學、少女界少年文集と交換して頂戴（大分縣中津京町宮田秋子）○皆樣私も十一號から女子文壇の愛讀者になりましたから淺學文盲のものと憐思召してどうか御交際下さい（長野縣北安曇郡大町櫻井操）○景色か少女の寫眞をお持ちの方は惠み下さい私は詰らないんてすが編物てお禮しますそれからシオリの交換もねがひます（北海道龜田郡七飯村字鳴川松井長子）○栞を交換して頂戴妾もいろ／＼持つて居ます（大阪府下池田本町北平北田菊子）

○剽窃詩文の注意

○取消。第十號はがき文特別三賞鞠子孃の『自炊』と題する一文は『秀才文壇』十三號の剽窃のやうに前號て發表しましたが題は同じく『自炊』ても本文は全然別種のもので剽竊でないことが多數の讀者から注意せられましたから此文に限り剽窃と云事は取消し且當選有効とします。

○抒情文。第十一號抒情文秀逸河州ひろ子の『新涙』は『中學世界』定期增刊六卷八號山紫水明抒情文第一賞岐阜縣加茂郡伊深村柴田清一君の作を剽窃せしものと判明す。

○小說。これは剽窃てはありませんが十一號の小說秀逸松尾潮花子作『この身』は『ハガキ文學』一週紀念號十五頁にある『この身』と同じ作で作者も同じ人らしい同じ作を方々へ出すのは賤劣なしかたです。

○新体詩。十一號新体詩秀逸下野芝關女の『谷の若草』は『中學世界』三卷三號にあるとの事てすがそれ以上詳細の知らせがありませんから疑を存して置きます。

○俳句。十一號俳句秀逸長尾文子作『鬼灯の盜人抱いて届けいり』は『秀才文壇』五卷十七號人賞增田仙人郎作と些少の相違あるだけて剽窃なりと注意が來ました此句は外にも類似がありさうです。

○はがき文。特別第三賞愛知縣中島郡豐田村顯明作の『小包』は剽窃なりとの注意がありましたけれど只○○雜誌とばかり誌名が分りませんから疑を存して置きます又人賞の刀根の河邊清月の『雲』は『小學唱歌集』第三編六頁の雲の唱歌を燒直したものだと云ふ事てす。

○十號の俳句。十號の剽窃詩文の注意は前號に皆發表しましたが只俳句秀逸の部程ヶ谷中村せい子作の『貫風呂の北斗に……』の句は『ハガキ文學』二卷二號伊豫河本佳月氏の『外風呂の北

外に……」と一字違ふだけであるとの注意がありました。

○注意者。例に依つて剽竊詩文を注意された諸孃の芳名を左に列記して謝辭に代へます。

○神戸、池田ぬい子○備後、松月女史○下總、美奈子○政子○池田蕗子○牛込、翠竹女史○周防、楓子○備後濱本隆子○麻布、坪野麻葉○千葉、森久子○越後、野菊女○牛込、夕マ子○讃岐、あやめ子○千葉一小女○尾張、野菊女史○廣島、鶯岡ちと子○紫水女史

○繪葉書交換

○愛讀者の皆樣方とゑはかきの交換致し度存じます風景葉書お送り下さる方には肉筆の面白いのを御返事申します（大阪東區東清水町一番地杉田すみれ）○諸孃樣の中で繪はがき申し込てもお返しないのもあります三十枚計り出してあつたが半分しか返信が來ませんです妾が新しく百余枚用意して居ましたから屹度返信します（秋田縣大曲町高畑四二五富樫りつ子）○妾繪葉書大好きなのよ、美しいのなどし〳〵送つて下さいな同等の者を直ぐに御返し致します、自筆のしたを送つて下すつた方には、下手なんだけど自筆で御返し致します（越後北蒲原郡紫雲寺村山中弘子）○なつかしの諸孃よだうぞ美しな繪葉書の交換お願ひ申します（羽後國角館町川大浦町松田方松田せい子）○繪葉書御用の御方は御申込あれあげますよ（茨城縣多賀郡南中口村松井鈴木友次郎方紫水）○皆樣繪葉書と寫眞の交換を願ひます（東京麴町九丁目澁谷内吉田のぶ子）○私は開けない田舍女ですが又繪葉書狂なくてすよ、此正月には花々しい新年の繪葉書交換したいのよ何卒皆樣美しいのゝ交換して下さいな又私は四十二枚揃のアルベミ二册持つて居るのですが何かと交換致したいのです（越後北蒲原郡紫雲寺村山中孝）○誌友の皆樣何卒文通して下さいそして繪葉書交換も御願ひいたし升（茨城縣石岡町栗栖信子）○皆さま又繪はがきを送つて下さいなるべく上等なれ妾もきつと上等なのでお返し申しますよ（京都南禪寺町田島かほる子）○妾は繪端書交換大賛成ですどうぞ仲間入さして下さい（横濱市長者八幡澤方やす子）○御心安く繪葉書の交換を願ひます（神奈川縣愛甲郡南毛利村恩名佐藤利）○私は皆さんと繪葉書で御交際がして戴きたいです、どうか皆さんの御手てなつた繪葉書や又は皆さん地方の美術繪葉書おたくさん御惠送下さい、私も不束ながら自筆で御交換致します（名古屋市旅籠町松浦方玉置廣子）○繪はがき交換お望みの諸孃よどし〳〵御送り下さい短歌俳句川柳などを書いて（京橋區南傳馬町三丁目二中川のぶ方小枝月華）○繪はがき交換お申込の方二十人はかりございました、確かに皆樣に御返事差上げました但し男子の方には斷然お返事申しませんでした本郷弓町こじま花子）○繪葉書交換を乞ふ（福岡縣福岡市外警固村大字下警固三木方竹內須勝子）○本誌の繪葉書を紀念の爲に保存致したう御座いますから同感の御方は交換して下さいまし（滋賀縣甲賀郡柏木村泉百廿五邸紅薔薇）○戀しき壇友諸姉樣よとうか繪葉書の交換御願申上ます（淡路國洲本高等女學校寄宿舍船越ちえの）○繪葉書の交換致します（兵庫縣津名郡洲本高等女學校寄宿舍菊川しか子）○自筆の繪葉書の交換か御願ひます（廣島縣雙三郡酒河青河佐々木元三郎方定子）○皆樣御存じの通り小田原は歷史に關係の深ひ土地てすついては大人の方に昔の小田原城今の御用邸の繪端書を差上たく御望の方はなるべく繪端書か封筒で（相州小田原唐人町弘道會內井上久子）○山口の川上草子さん先日は繪葉書をありがたう。何れ妾も繪葉書御送り申ますが一寸誌友倶樂部なかりておれい申上ておきます（群馬縣磯部村登城雪學館吉田きみ子）○何卒御交際を願ひます尙又繪葉書交換を成して下さい（千葉縣長生郡西治村上太田千八百二十四番地關屋管子）○本誌愛讀の諸姉樣何卒繪端書の御交換を願ひます私も天橋の繪端書で御返し致します（丹後國與謝郡宮津町字中ノ丁竹村こま子）○妾も近來流行の繪葉書交換は大好きなのよ皆樣にも御送り下されば早速妾も御送り申ます富山の地崎ふさ子樣早速立派の繪葉書て御返事なありがとうござりました（山梨縣勝沼近藤すみ子）

○繪はがきを御送り下さいました諸姉へ深く御禮申上げます尙此後とも御交際下さいまし。又他の諸孃よ何卒繪はがきの交換を希望致します。（金澤市玄藩町一番丁三大地波子）○和製なり舶來なりどちらでも御交換しますから何卒御願ひ申します、きつと御返ししますからね（大阪市北區信保町二丁目一一○越村方越田嘉美子）○妾に繪葉書を上げますから皆さんもすぐ返事して下さいよ妾よ（千葉縣長生郡帆丘町本納鶴田高山靜子）○諸姉よ肉筆の繪葉書かスケッチや印刷等の物を望む換を乞よ横濱市尾上一ノ十五山崎紫雁）○同じ好の誌友の君たち、何卒繪はがき交換をして下さいませんかきつと御返し致します先着の方九名には御望により女學世界を上げます（下野田沼町小見久保やを子）文だん諸姉さまよ本誌に繪はがきを添附するようになりましたからこれからは繪はがきを是非交換して下さいよ返書はすぐ差上げますよ○千葉縣長生郡西治村上太田一、三、八、三、ばんち森玉方森久子靜緒子）。○繪葉書で交際を願ひます俳句を書いて下されば殊にうれしいです（淡路洲本中學校前水村店内三宅しん子）、○北海道の梶水仙子樣お葉書どうも難有う誌友孃樣方寫眞や肉筆繪葉書の交換いたしませう、妾も拙ございますが直お返事いたします（岩手和賀郡征間村蟲毛利子）

○文事百般

○皆樣の内に本誌の第九號御持合せの方はませんか有ましたら讓つて下さいませんか御禮は何でもいたしますから御れがひ申ます私の手許に青海波春草秋草女學生の栞女學生訓自然と人生などが有ますから御望の方は中越て下さい御讓りいたしますから（但馬國城崎郡加陽村小西八百子）○私折り惡しく十一號を求めはずしましたの諸姉ゝ中誰方か口給とも其のまゝおゆづり下さる方はありませんか相當の禮は致しますから（明石大明石村西中之町三九ノ三津村方白旗清子）○私は文藝倶樂部、文藝界、其他數種の文學的雜誌を所持して居ますが、お望みの御方へ安價に讓り申したいから、御照會なさいませ、（越後中蒲原郡兩川村五十嵐美波）○先著

石川常子様竹内富子様外十人の方にそれ〴〵御送り申しました殘る人達へはいかんながら御送りする事が出來ません惡しからず又紅葉全集第一卷をもつて居ます故第五カ三カ二カ何れにても交換して下さる方は有りませんでしようか有りますれば葉書にても御知らせ下さい（岡山縣英田郡福本村國司秀芳女）○誌友諸姉私は女學世界定期増刊女學校生活、婦人壯烈譚、社會百生活、小天地其他三四冊所持して居りますから他の雜誌と御入用の方は交換致しても宜敷ありますす又女子文壇一號より九號迄御持の方は御讓り下さいませんか（東京牛込區辨天町六林あつし）○私は露伴先生作の小秋草を持つて居りますから御望の方は下名へ（茨城縣石岡町栗栖信子）○満天下の愛讀諸孃よ御地方の雜誌又は新聞を御贈り下さい私は當地にて發行する雜誌「小學」及び「備後時事新報」「尾道新聞」御贈り致します御快諾の御方は次號紙上に姓名を御知らせ下さい（尾道市愛讀姫）○妾は不用の書物、雜誌が多く御座りますから皆さんのうちで不用書の目録を送つて下さい妾しも送りますそして交換して讀まうと思ふて居ます（香川縣大川郡三本松向松永あやめ子）○私は小杉天外の新學士其他様々の本を所持してゐますが御不用の本と交換しませんか御望みの御方は繪葉書で御通知下さい（岩手縣稗貫郡花巻川口町照井美佐子）○諸姉様方に女學世界の増刊で不用なのが多くございますからお望みの方は其増刊の名を記して繪葉書て御早速お申越し下さい（大阪南區御蔵跡町十五吹本きく子）○皆様の方で育成會發行の畑日記御入用の人はお申越し下さい相當な圖書と交換致します（尾道市役所前永田こと）○私は明治三十六七年の女學世界を所持致して居りますが皆さんの中に必用の家庭書類又は雜誌と交かんなさつて下さる方はありませんか御思召しの方は下の名へ（長崎縣南高來郡山田村吉田繁子）○四種郵便とはどんなものか圈點とはどんなものか何卒委しく教へて下さい（すゞ子）記者曰、四種郵便とは書籍や原稿の類を云ふので目方三十匁迄は切手二銭でよろしい、圈點とは詩や文の佳なる處へ選者が打つ●や、、や○を云ひます）

○私は女子の本分、女子處生論、家庭の鏡、修身一夕話、女大學評論新女大學、譯文やどり木、を持つて居ますが何か小說、詩集類と交換して下さる方はありますまいか若しありましたら下名へ御通知を願ひます（茨城縣水戸市上市風露ノ下山田千代子）○本誌壹號弐號御不用の方か御座いましたら下名迄て御惠贈下さい第一番の方には文藝俱樂部増刊新撰落語大全（十月十五日發行）一部、二番の方には新古文林一部差し上げます。其れとも相當の代價で御讓り下さいましても宜ろしう御座います（北海道小樽區稻穗町十四番地小堀乾三方梶水仙子）○十一號の女子文壇不用の御方ありますならば御惠み下され相當の御禮致します（淡路國洲本町森七郎方日田春子）○諸姉様の中本誌一號より五號迄八號九號の七冊御不用の方は有りませんか御座いますれば當地名所寫眞又は今繪葉書と交換致して下さい（伊豫温泉郡道後湯之町得能湯月女）○拾壹號の文事百般の中御座いました崎玉の伊東香子様私の手元に俳句獨習ではない俳諧獨學と申すのがあります、もう御入用ならば差上げます、それから諸姉様の中で、國語漢文中辭林、芭蕉以前俳諧集及び理科辭典が御入用の方はありませんか他の書と交換したう御座いますからどうぞ紙上にてお答を（下野松山舍）○本誌一卷一號より九號迄の內何號にても宜し不用の方は相當代價又は近刊雜誌と交換を乞ふ交換者には矢の根石美花一種を禮に呈す（越後見附町三〇三宮島春江）○皆さんの中に本誌四號と妾の秀才文壇、卷拾三號、同拾四號（二冊）と交換して下さる方はありませんか若しありましたら端書で御一報下さいな（常陸國新治郡高濱町東大橋酒葉貞子）○女子文壇四號がもし御不用であづたら送つて下さい送つて下さつたら女學世界お望の號を二册送ります女子文壇の四號の事（美濃國相生町加藤裁縫舍內臨島美遊喜）○塔影」「悲狀戀狀」「夏姬」「戀衣」「不如歸乃歌」「金帆」「行く春」「白玉姬」「藤村全集」の內何れにても宜し送附の方には小詩图又は銀鈴近刊の雜誌を送る（越後見附町三〇三宮島蕭子）

編輯だより

○本年の終。 今日とくれ昨日とくらしあすか川流れて早き月日なりけり實に月日の立つのは早いもので本年もはや十二月となりました、讀者諸君が同情ある愛顧に依り本誌の基礎も此處に確立して目出度く三十八年の終りの號を出しました、一年を顧みて本誌が月毎に讀者の増加したことを思ひ深く感謝に堪へません、記者一同謹んで愛讀者諸君の健康を祈り更に光榮ある新年を迎へられんことを祈ります。

○新年の附錄。 新年第二卷第一號の本誌は其卷の改まると共に面目を一新し內容は益々豐富に躰裁は愈よ優美に優に雜誌界に雄飛するは勿論、特に新年附錄としては山中古洞畵伯の揮毫にかゝる『晴小袖』と題する極彩色十度刷、本誌二倍大の繪畵を添へます其艶麗なることは一見人をして恍惚たらしむるもので如何に鮮美なるかは發行の上、讀者の賞玩にお任せ申しませう。

○新年の內容。 新年號は大附錄の外、內容も大いに精選し卷頭には名家の有益なる評釋、談話の類を掲げ表紙をは金摺の美麗なるものとします猶ほ諸嬢の投稿に對しては本誌が唯一の主張とする親切を旨として錦心繡腸の傑作を紹介いたします。

Never I hope! At Chuzenji, I simply gasped to see the blue lake, bluer sky and the maple-clad mountains below and above the calm water. We would have stayed willingly for some days were it not for our work in Tokyo. We took another rnadin coming back to the village, and do you know what time we were back to the station? It was half-past one. By the 2 o'clock train, we started for Tokyo. Are we not good pedestrians? If you wish to go to Nikko, please let me be your guide.

With best wishes, I am,

Your loving neice,

Aki-ko.

Nov. 12, 1905.

寺湖に至りては，蒼々たる湖水，尚一層蒼々たる秋天，錦つけたる山嶽の波立てぬ水の上と下に見ゆる等目に映じ候時は何も云はず喘ぎ申候．東京に於ての職務との思慮なくば數日間は喜びて其處に逗留せしものを殘念に存候．扨て歸途は別の途を取りて村里に出で候が，何時に停車場に着しと思召候や．一時半にて有之候．然れば二時の汽車にて東京へ出立いたし候．仲々の健脚に御座候はずや．若し，日光御見物被成候事あらば，何卒私を案内者に御雇ひ被下度候。

御幸福を祈りつゝ

姪なる

秋子.

十一月十二日.

Maxims.

All that glitters is not gold.

Haste not; rest not.

Necessity is the mother of invention.

Be humble, or you'll stumble.

Auxdety is the poison of human life.

金言

光輝あるもの皆黄金に非ず。

躁急する勿れ，然ど休止する勿れ。

窮困は發明の母なり。

謙遜なれ，然らずば汝躓かん。

憂慮は人生の毒藥なり。

labor to tell you about the exquite beauty of the temples. I ask you to go and witness it for yourself. Are you not ashamed to be ignorant about Nikko at your fortieth year? My dear uncle, please take some of your busy days for recreation and visit this famous place.

On the following morning at five o'clock, we left the hotel for Chuzenji. How could I ever describe the glorious dawn of that morning! The pale moon was still in the sky, casting its light upon the rushing, foaming Daiya River. Dark outlines of the surrounding mountains gradually added several different hues as the sun slowly rose from the horizon and we sawd istinctly a purplish range screening the valley, while nearer mountains robed in scarlet were dotted with green and yellow. We walked singing and shouting, and felt as happy as little birds among the trees. On the way, we passed a party of soldiers who were also going to Chuzenji. They seemed to be greatly surprivsed at our light and rapid gait.

By eight o'clock, we were admiring the splendor and sublimity of the Fall of Kegon. Could I ever forget the sight?

身にて御實見被遊度候，四十歳にもなられて未だ日光を知らずとは御恥かしく思召さずや呉々も御繁忙なる御時間を割きて御保養方々此有名なる土地を御尋ね被下度願申上候。

翌朝五時に旅館を出て中禪寺へ向ひ候. 其朝の壯觀の曉景は何とも言語に盡し難く存候. 殘月薄々として其光を泡立ちたる急流大谷川に浴せたる，或は周圍の山々の墨色したるが地平線上より朝日の昇るに從ひ樣々の色と變ずる處，或は紫色の山脈谷を包めば近きに有る山嶽は緋の地質に青黄の模樣の衣服を着したらん如く，實にえも云はれず，歌につ，叫びつ，恰も樹上の小鳥の如く嬉しく樂しく感じ候. 途中同じく中禪寺へ參る兵卒の一行に逢ひ申候處，彼等は私共の身輕き，疾速なる足並に驚き候樣に見受られ候.

八時には既に華嚴瀧の秀麗壯宏なるを賞讃致し居候. かゝる景色を忘るゝ事のあるべきや，決してなしと望み居り候. 中禪

He was a friend to me.
Old year, you shall not die;
We did so laugh and cry with you,
I've half a mind to die with you,
Old year, if you must die.

Tennyson.

我にぞ彼は　友なりし。
逝行く年よ　逝きなすな
喜憂をば汝と　せしものを，
我は汝が身と　死せまほし
汝を引止む　術なくば。

An Excursion to Nikko.

No. 12 Nishiki Cho,
Yotsuya, Tokyo.

My dear Uncle Maki,

You will be surprised to hear that I had an excursion to Nikko last week. Our school had an unxpected holiday, and so I decided to spend it just as profitably as I could. Miss Brown, our music teacher, was also planning to go and we were very glad for each other's company.

The 6. 30 train from Uyeno Station took us to Nikko a litte after noon. As soon as we arrived at a hotel right by the Sacred Bridge, we started to visit the temples, taking a guide. We hurried the guide as we wished to see as much as possible during the after-noon. It is only wasting my time and

日光遠足

東京，四谷，錦町十二.

敬愛する牧叔父樣，

先週私事日光へ出遊致し候と申上なば嘸かし驚かる事と存候. 當校突然思ひがけなき休暇有之候まゝ，可成上手に其日を利用せんと存じ出掛け候次第に御座候. 當校の音樂教師なるブラオン孃も同じ御計畫に被爲在候が爲御互に好伴者を得しを喜び申候。

上野停車塲より六時卅分の滊車にて出發致し正午少しく過ぎに日光へ到着致候. 神橋乃間際の旅館に投づるや直ちに案內者を伴ひ諸廟參詣に出かけ申し. 其午後中に出其得る限りを觀んと存じ隨分案內者を急がせ申候. 諸廟の秀美を書き送るは只時間と骨折とを費し勞して益なきを覺え候間，叔父樣には御自

英文

津田梅子閲　河井道子述

The Death of the Old Year.

Full knee-deep lies the winter snow,
And the winter winds are wearily sighing:
Toll ye the church-bell sad and slow,
And tread softly and speak low,
For the old year lies a-dying.
Old year, you must not die;
You came to us so readily,
You lived with us so steadily,
Old year, you shall not die.

He froth'd his bumpers to the brim;
A jollier year we shall not see.
But tho' his eyes are waxing dim,
And tho' his foes speak ill of him,

一年之死

膝埋むまで　雪積り
寒風哭げく　物憂げに。
つけよ鐘をば　静寂(サビシ)げく，
歩めよ話れ　音立てず，
老たる年の　臨終なれば。
凄行く年よ　逝きなすな，
汝は勇みて　我等に來り
堪えず我等と　住居にき，
死にまし給ふな　逝く年よ。

彼は祝盃　溢らせり，
かく樂しげの　年ありや。
彼の眼既に　眠ひとも，
仇は彼をば　誹るとも

每號懸賞募集項目

每號精讀を要す

選評大家（文學士鹽井日本女子大學教授、巖谷小波君、佐々木信綱君 文學士尾上女子高等師範校教授、廣津柳浪君、山中古洞君）

○論文　○抒情文　○叙事文（各半紙廿四字詰三十行以内）

○消息文（半紙廿四字詰二十行以内）　○はがき文（端書かな付廿四字四行）

○短編小説（半紙總かな付廿四字六十行内）　○新躰詩（半紙一枚十句以内）

○短歌（半紙二ッ切一枚一首）　○圖畫（風俗景色一寸の二寸判）

○新派俳句（はがき判紙一枚一句）

但着色無用可成鳥皮紙を用ゆ

▲此外家庭教育に關する事項並に讀者の通信等何ても寄稿あれ　▲各欄とも一人佳作一章宛投稿の事

賞品規定

左記の相當價格品選定の上贈與すべし

○論文○抒情文○叙事文○消息文○小説○圖畫、當選者へは

▲天賞　金壹圓五拾錢　▲地賞　金壹圓　▲人賞　金五拾錢

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金三圓、二等金貳圓、三等金壹圓五拾錢

○新體詩○はがき文○短歌○俳句、當選者へ贈與品左の如し

▲天賞本誌三ヶ月分　▲地賞同二ヶ月分　▲人賞同一ヶ月分

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金壹圓、二等金七拾錢、三等金五拾錢

每回の本誌により當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ヶ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽褒狀を添へ贈呈すべし

（投稿〆切＝每月十五日）

▲嚴守すべき投稿規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に涉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『女子文壇原稿』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圈點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし○投書丈け取纏郵送するときは開封にして差出せば卅匁迄二錢にて事足れり

(最寄書店になくば直接發兌元へ注文を乞ふ)

定價

女子文壇（每號水彩畫繪葉書寫眞口繪數葉挿入）每月一日發行（第二卷より增刊年四回）

一册（大判百二十頁）	前金拾錢
六册（半ヶ年分）	前金五拾七錢
十二册（一ヶ年分）	前金壹圓八錢

本號より直接注文に限り郵税全廢無料とす

外國行郵税共拾四錢

讀者心得

○本誌は前金の外送本不致候○代金過不足のなき樣注意被下度候○領收書は一切差出さず候○御注文每に何號より何册及御住所氏名等は詳細に御認め可被下候○郵劵代用は必ず定價の壹割增に願上候○御問合は返信料付に願上候▲御申越の號數賣切の時は近刊の分を以て送本可仕候▲缺本にならぬ法▼…前金拂込むに限る

廣告

六號ヨリ取正

種別	普通	特別（表紙四面口繪對面）
一頁（二十四字六十行内）	金拾五圓	金貳拾圓
半頁（二十四字三十二行）	金八圓	半頁以下御斷申上候
一行（五號字二十四字）	金參拾錢	○

〆切 發行前十五日

▲廣告大取次

京橋區南佐柄木町二番地　日本廣告株式會社

神田區千代田町二番地　博報堂

神田區花房町九番地　富士原秀穗

明治三十八年十一月廿八日印刷
明治三十八年十二月一日發行

不許轉載

定價金拾錢　郵税不要

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎

印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發兌元　東京京橋區大鋸町十一番地　電話＝本局六〇七番　女子文壇社

特約發賣元

東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店

東京市京橋區尾張町二丁目廿六　東海堂

東京市日本橋區呉服町六番地　北隆館合資會社

東京市神田區表神保町一番地　上田屋書店

東京市京橋區鎗屋町九番地　巨明堂

明治三十七年□□第三種郵便物認可



パール定價
大瓶金四拾錢
小瓶金貳拾五錢
（女子文壇の廣告により御注文の節は其旨書添へ願上候）

（東京秀英舍印刷）